水上瀧太郎全集

七卷

昭和十四年四月十六日撮影

小説 七

目次

順風……一
畫布……一四七
遺産……一八七
夏期實習……二一九
銀座復興……二九五
停年……四〇七
二代目……四四一

樹齢……五〇一
世繼……五七一
後記……一

順風

一

窓際の机の上に、林檎と柿と葡萄がある。外光を浴びて、靜物の肌は艶めかしい柔かさを見せて、水々しく輝いてゐた。人が見てゐない時は、互に抱きあつて生命の喜びをさゝやきかはしさうな色彩だ。

矢部は水繪の筆を投捨てゝ嘆息した。

「駄目だ。どうしても、まるみと、つやが出ない。此の具合よくふくらんだ立體感が、わかつてゐて描けない。」

友達の寫生の邪魔にならないやうに、隅つこで厚ぼつたい本を讀んでゐる三輪の方に顏をふりむけて同情を求めた。

「手法を變へたのがいけないのぢやあないのか。」

年長の友達は、難解の字句に出あつて字引を引いてゐたが、本を閉ぢて立つて來た。

「僕は悪いとは思はない。以前のやうに纖弱な色の諧調に溺れてゐた時代よりは一進歩だぜ。」
完成に近づいてゐる靜物畫に、二人は批評の視線を集めた。
「そりや意識的に變らうとしてゐるんだから、多少面目はあらためたさ。それに、僕は今迄は概念で物を見てゐた事に氣がついた。林檎なら林檎を描く場合に、頭の中の林檎が筆のさきにこびりついてゐて、ほんとの林檎はどうしても描けないんだ。見たまへ。ほんものは素晴しい元氣で光つてゐるだらう。それなのに、僕の畫のやつは生きてゐない。水分も無ければ重量も無い。駄目だよ。」
矢部は、自分の畫に不滿足なのだが、その不滿足の點をはつきりつかんでゐる自覺で昂奮してゐた。自分の畫のまづさを殘りなく知つたのはつい此の頃の事だつた。
「レインボオ倶樂部の奴等は、僕の畫の變つたのをよくないといふんだ。だけれども、僕には、もう以前のやうな畫を描く氣持は無い。第一、僕は水繪では駄目だと思ふ。どうしても油でなくては駄目だと思ふ。みんなは材料にはよらない、水繪だつてあらゆるものゝ生命を描き出せるといふんだけれど、僕は水繪は文學なら隨筆だと思ふなあ。」
立上つて室（へや）の中を歩き廻りながら續けた。

矢部は、年齢こそ若かつたが、學生仲間の繪の倶樂部で、最も傑出した一人だつた。學校内で催す春秋の展覽會には、色調の美しい彼の風景畫や靜物畫が、何時も人氣を集めた。中學部を卒業して、引續いて學校に籍は置いてゐるが、自分では思ひ切つて畫家にならうかと迷つてゐた。

三輪は友達の廣い額――病的に靑白い額や、薄く一文字に結んだ唇に、力強い感激のあふれてゐるのを見てとつた。

「同感だなあ。水繪だつて油繪だつて同じだなんて議論は、議論としての面白さ丈だ。水繪には水繪としての面白さがある。油繪には油繪の面白さがある。さうして僕達は、水繪の面白さに安んじてゐられなくなつて來たんだよ。趣だとか味だとかいふものよりも、もつと實體感をつかみ度いんだ。僕自身、もう歌なんか捨てようと思つてゐる。歌は、たつた三十一字で、人の心の深さまでもよく現はし得る事は事實だ。しかし、此の極まりなく廣い人生の諸相は盛り切れない。僕は小説を書かうと思ふ。それも眞正面から描寫で押通す本格の小説を書き度いんだ。」

彼は友達の畫を批評するよりも、自分の感激に醉つてゐた。讀みかけの英譯本を手にとつて拳骨で叩いた。

「トルストイつて奴には參つちやつた。どんな場面でも、どんな人間でも、眞正面からもろに描

いてしまふ。此の力強い描寫力つてものは日本人には無い。」
「無いといひ切られては口惜いなあ。どうして毛唐は自分の感傷に溺れないで、物の本質をつかむ力を惠まれてゐるんだらう。」
「癪だね。」
二人とも笑ふ積りでゐて笑へなかつた。しばらく、二人とも默つて、矢部の描いた畫面に視線がとゞまつてゐた。
晴れた日の寄宿の晝は靜かだつた。中庭でボオルを投合つてゐる音が冴えて聞えるばかりだつた。
「僕、散歩して來る。行かない。」
突然矢部は、自分の畫を見捨てゝ云つた。
「僕はもう少し勉強する。」
「あんまりいゝ天氣だ。」
矢部は窓をあけて眞靑な空を仰いだ。
「秋だ、秋だ。」

嘆息するやうにつぶやきながら、壁にかゝつてゐる帽子をとつて出て行つた。

廊下を遠ざかつて行くスリツパアの音を聞終つて、三輪は又「戰爭と平和」を開いたが、讀む事に注意が集らなかつた。此の頃、いつも思ふのだ。どうしても小説を書く。明治から大正へかけて幾多のすぐれた作家が出たが、それよりも規模の大きい小説を書く。形式の新奇を求めたり、字句の新しさに凝つたりするので無く、先人の求めて行きつかなかつた處迄乘越して行く。さう思ふ丈で、全身に力瘤の隆起する感があつた。殊に、矢部も素人のなぐさみ程度の水彩畫にあきたりなくなつたといふ事實が、彼の心を打つた。矢部がレインボオ倶樂部の花形なら、こつちは丘陵歌會の第一人者だ。それが、歌の形式では、既におもひが盛り切れなくなつた。豫々好んで讀んだ外國小説の、人生そのものを直寫した力強さに、一人よがりの頭をどやしつけられた。同時に、藝術をなぐさんだり、あげつらふ心が消えて、死身になつて制作し度い欲求が深くなつた。家庭に於る四圍の關係から、經濟學部に入つた事をつくづく後悔した。年少の矢部が何時の間にか大人になつて、學校なんかやめてほんものゝゑかきにならうと云ふ心を起した事も刺戟となつた。三輪も、明治文壇の巨匠の踏んだ道を擇んで、學校を去つてもいゝといふ考を持つた。

矢部の描きかけの靜物を見ると、一層感慨が深かつた。年齡の違ふ二人の間で、三輪は萬事指

導者の地位にゐた。藝術觀賞の眼を開いてやつたのも、水彩畫の手ほどきをしたのも三輪だ。しかし、何時の間にか矢部は矢部の才能を延ばし、その才能を自覺して來た。手本を眞似したり、手探りでやつてゐた時代はわけもなく面白がつてゐたが、段々面白さ丈では濟まなくなつて來た。東京の下町の大商家の息子らしく、纖細な趣味はいちはやく、芽を吹いたが、次第にうはつつらの甘美な喜びに空虛を感じて來た矢部だ。容易には把握出來ない欲求が、畫面に不統一をもたらした。林檎と柿には努めて立體感を現はさうとしながら、葡萄の露つぽい肌の美しさに誘惑されて、それ丈はむかしながらの纖弱な色の諧調に泥んでゐる。だが、その畫全體として、何か未來には大きくなる力を約束してゐるやうに認められた。三輪は自分の心持に引つけて、感激した。

　　そんなにお前はなぜ歎く。
　　草の褥に寢轉んで、
　　わしが言ふこと、お聞きやれ。

何時も、うたふ歌をうたひながら、須賀は廊下の遠くからスリツパアを引擦つて、大きな體を運んで來た。

　　人の浮世の見えを棄て、

口笛吹いて、氣を安く、
現の夢を見てゐやれ、
草臥れ息めに山を見て、
　腹が減つたら又歩け。

三輪が一寸舌うちしてふりかへつた時、戸をあけて入つて來た。つい今迄運動場をかけ廻つてゐたまゝの姿だ。

「直ちやんは。」

「今迄畫を描いてゐたんだけれど、散歩に出て行つた。」

「又カフヱ・ロビンに行つたんだな。」

須賀は疲れた體を椅子にもたせかけて、健康なあくびをした。「二十世紀のおかめ」といふあだ名の通り、幅廣の、怒つても笑つてゐるやうな顔に、脂肪と埃が浮んでゐた。三輪は、須賀の言葉にどきんとした。

「君、知つてるだらう。直ちやん此の頃は毎日ロビン通ひなんだぜ。草の緑も萌え出るものか。」

くつたくの無い笑顔をしながら、いきなり卓の上に手を延ばすと、須賀は葡萄をちぎつて口に

入れた。又ひとつちぎつた。
三輪はいやな顔をした。不機嫌の時にあらはれる立皺が、眉間に深くなつた。草の緣といふのは彼の舊作の下の句だ。いかに幼稚であるかは誰よりも自分が知つてゐる。それを持出されたのもいやだつた。その上、矢部が一生懸命で描いてゐる果物を、たゞ食ふ爲めのものと同一視してゐる相手の態度がいやだつた。

「よしたまへ。折角直ちやんが描かうとしてゐるんだ。」

「いゝ葡萄だぜ。素敵にあまいや。」

たしなめられても、須賀はもう一つ口に入れた。激しい運動の後の渇いた咽喉に、柔かく厚い肉から滲み出るつゆが、爽かに冷めたかつた。彼は燐寸を擦つて、目を細くして煙草をふかした。

「兎に角直ちやん本氣らしいんだぜ。」

須賀は又話をもとへ戻した。學校の正門前の喫茶店にゐる娘に、矢部が心を寄せてゐるといふのだ。その家は、學生が晝飯を喰べに行つたり、お茶をのみに行くところだ。夫婦と、給仕が一人ゐる丈だつたのが、近頃、親類の者を養女にしたといつて、未だ肩揚のとれない娘が來た。快活にいきいきした表情の、家畜のやうな感じの娘だ。三輪は、その娘と矢部とを一緒に想ひ浮べ

て、自分の顏が紅くなつた。一切無經驗だ。學生仲間の傳統的精神から、女といへば、輕蔑しなければ幅がきかないのだ。實は極端に神聖視してゐるのだ。三輪は夙に、女のなつかしさに惱まされてゐた。

「初戀だ。きれいなもんだな。」

小說で覺えたやうな事を云つて、須賀はしきりに煙草をふかした。わざとらしい言葉だが、三輪には妙に心を打つ響をもつてゐた。不安と嫉妬を感じた。

須賀は手拭と石鹼箱(シャボンばこ)をひとつかみにして湯殿に出かけた。三輪は頭が重いので、それを一掃する爲めに散步に出た。寄宿舍の入口に立つ銀杏の梢から、風も無いのに黃葉が微かな音を立てゝ大地に散り敷いた。

「秋だ、秋だ。」

さうつぶやくと矢部の感懷が、三輪の心にも浮んだ。遙かに見はらす丘の下の町が、西日を浴びて海迄つゞいた。

三輪はあてもなく町を步いた。本屋の店頭にも立つた。草花屋の飾窓の硝子に顏を押つけて佇みもした。しかし、心はおちつかなかつた。彼は何時の頃からか、往來を步いてゐる間に見る女

に、その美しさを標準として第一第二第三と順位をつけて記憶する事をならはしとした。學校の近廻りでは、誰もが知つてゐる小間物屋の娘が第一の美貌だつた。何處とかの藝者だつたといふ下駄屋のおかみさんも、大概の日は第二位を保つた。その二人に勝る人にはなかなかゆきあはない。よく、近所の女學校の退出時間を擇んで、わざとその門前を歩いてみるが、並ぶ程のものは見當らなかつた。彼は、惱ましく不潔な妄想の中で、二人の女の、あらゆる姿態をほしいまゝにした。

第三位は其の日その日で變る事が多かつた。此の頃は、ひそかにカフェ・ロビンの娘をその順位に數へる事もあつた。須賀の話を思ひ出して、胸がわくわくした。

ロビンの前を三輪は二度三度通り過ぎた。小間物屋の娘も、下駄屋のおかみさんも、今日は店にゐなかつた。どうしてもロビンの娘の顔を見なければ何か不幸が身の上に來るといふやうな氣持もあつた。今日は、あの娘が第一の位につく――さう思ふ丈で氣臆がして、扉を押て入り兼るのであつた。日がかげつて町にはあかりがつき、てんでんに散歩してゐた學生も坂をのぼつて寄宿へ歸つて行く時刻になつた。幾度も、自分もその仲間にまじつて丘の上に歸らうと思ひながら、たうとう彼はロビンの扉の中へ吸ひ込まれた。

「いらつしやい。」
聲をかけたのは給仕だつた。娘は隅つこの椅子に腰かけて兩足をぶらぶらさせながら雜誌を讀んでゐた。ちよつと顏をあげたばかりで、立つて來ない。
「紅茶がおひとつ。」
給仕は大きな聲で通して、直にそれを運んで來た。
「君、矢部つていふの知らない。今日來てゐなかつたかしら。」
三輪は赤面しながら訊いた。何か急用でもあるやうな見せかけを示した。
「矢部さんですつて。運動部の人ですか。」
「さうぢやあない。豫科の生徒でね、此の頃よく來るだらう。」
「あゝ、あのオオル・バツクの。」
さう給仕がいふと、娘がひきとつて、
「芳さん、さつき來ていらした方よ。」
と云つた。三輪は胸を轟かしたが、娘は又雜誌に目をふせた。
「あの方もう二三十分前に御歸りになりました。」

給仕は何の心も無く答へた。三輪は紅茶を飲みながら、娘の足許に視線が引かれて爲方が無かつた。白足袋にも、紅い鼻緒の草履にも——何よりも着物の裾が彼の心持を憂鬱にした。

その晩、寄宿の一室では、須賀と三輪と矢部が、自習時間を無視して高聲で話合つた。

「僕はもう水繪はやめると決心した。どうしても油繪をやる。誰かの畫室に通つてデッサンからやり直す。玄人の修業を積むんだ。」

矢部はひどく感激して、八分迄完成しかゝつてゐた靜物畫の上に、滅茶滅茶に墨でいたづら描きをしてゐた。

「さうか。そんならその果物喰つちまはう。」

何の反應も無い態度で、須賀は持味の諧謔を弄した。

「何いつてんだい、人のゐないうちにつまんだくせに。」

矢部は葡萄の房のもぎとられたあとを指差して笑つた。三人は林檎も柿も葡萄もむさぼり喰つた。

「僕は人體を研究し度いんだ。風景や靜物よりも、何てつたつて人間が一番面白さうだ。」

矢部の昂奮は何時迄も續いた。彼も中學生並の自然讃美者だつた。少なくとも最初繪筆を持つ

た時から最近迄さうだつたが、何時の間にか本心ではなくなつた。急激なその推移を、何とか理窟で押して見ようといふ心はありながら、彼は筋立てる事を恥ぢた。何といつても、若い女の裸身をモデルとして描く場面が、強く感興をそゝのかすのであつた。
「贊成だなあ、僕も歌なんか詠んでゐた頃の心持は淺かつたと思ふ。僕も文字をもつて人間を描くんだ。」
三輪もおもはず引入れられて、矢部の心と自分の心と共通の熱情を感じた。誰だつて、いつ迄も山だの海をうたつてゐられるものかと心の底で自分を勵ました。

二

三輪は原稿紙をどつさり買込んで、長篇小說を書始めた。どうしても書くといふ堅い決心さへあれば、きつと立派な作品が生れるといふ自覺に似た心持があつた。それに刺戟されて、矢部は、或油繪の大家の主催してゐる研究所に通ひ始めた。
春寮二十番室は藝術村と呼ばれてゐた。勿論嘲笑の意味を含んでゐた。三輪の文學、矢部の繪畫の外に、運動家の須賀が芝居好で、寄宿舍の年中行事の記念祭には、きつと一幕出すのをひつ

くるめて、何時かしらさう呼ぶ事になつた。室長の津田が夏休の間に病氣になつて引續いて休んでゐるので、此の室の三人は一層怠けた。

須賀が此のシイズンの最後に優勝を爭ふ野球試合の日にも、三輪は室に引籠つて筆を執つた。彼も曾ては各種の運動に參加したものだつたが、一切他の事をかへりみずに、小說を書くといふ心持に醉つてゐた。何物をも犧牲にするといふ心から、無理にもスポオツに對する興味を拒んだ。

二校の對校競技は、傳統的に全國のファンを熱狂させるものであつた。學生は殆ど全部應援に出かけた。三輪は、さういふ熱狂裡に釀される感激のいかなるものかをよく知つてゐた。想像する丈でも心が躍るのであつた。それをさへ拒けて創作に努力する自分といふものは、一層の情熱をもつていつくしむ事が出來た。戰鬪の街にあつて、近く砲聲を聞きながら書を講じたといふ學者の態度に比べて見た。

夕方、矢部は眞先に歸つて來た。

「どうした。」

「負けた。」

泣出しさうな顏をして、帽子を床の上に叩きつけた。

「勝つてゐた勝負なんだ。二對零で九回迄押して來たのに、一擧に三點入られちやつた。それが須賀君のエラアなんだ。」

さう話してゐるうちに、應援に行つた學生は暴徒の如く歸つて來た。みんなやけになつて、荒つぽい口調で叫んでゐた。此の室の前といふ事を意識して、わざと須賀の惡口を高聲でいふものもあつた。

「須賀ん畜生、どうしやあがつたんだ。あいつのおかげだぞ。」

「二度と應援になんか行くもんか。」

さういふ言葉をきく度に、二人は自分達の肩身が狹かつた。

「二ダウンで滿壘なんだ。その時三壘に弱いゴロが行つた。そいつを、ハンブルして一壘に投げたのが、とつても高いんだ。一擧に二點入られちやつた。二對二さ。ところがその次に又同じやうなゴロをとんねるしちやつてね……」

矢部は全く泣聲になつて、幾度となく繰返して味方の不運をなげいた。三輪は胸が苦しくなつた。全校擧つて應援に行く可き時に、自分丈が殘つてゐたといふ事が苛責となつた。殊に、同室の須賀に對して心がすまなかつた。一人や二人の應援が何の足しにもならない事は承知してゐるな

から、それが自分の場合なのですまないのだ。

その晩の寄宿舍は嵐の引際のやうに騷然としてゐた。昂奮した學生の意氣がひとつになつて、何に對しても憤懣に耐へないのであつた。三輪と矢部は他の者に顏を合せるのを避けておもてに出てゐた。

「五郎さんどんな氣持だらうなあ。」

「ふだんは呑氣な顏をしてゐるけれど、今日は參つたらう。」

二人は遲く迄町を歩きながら、須賀の胸の中をおもひやつた。

須賀はその晩寄宿舍には歸つて來なかつた。

當分の間、學校の中は敗戰の口惜さを語る聲ばかりだつた。須賀は、その間完全に姿を見せなかつた。戰友にさへ、何處へ行くともいはなかつた。同室の者にもわからなかつた。恐らくは横濱の家にゐるのだらうと云ふ事だつたが、其處にもゐない事がわかつた。日がたつてから、三輪と矢部に宛て、簡單な葉書を寄越した。意外にも、津田のゐる病院の在る相模の海邊の宿屋にゐた。

津田の病氣はいゝ方だ。冬近い海岸の日向に、僕も病人のやうに終日寢てゐる。極く輕い病

氣になつて、一生かうしてゐ度い。土曜の午後から泊りがけで來ないか。繪もある。詩もある。

須賀らしい飄逸な文字が、須賀らしい諧謔をまじへて、こゝろよく二人の胸に觸れた。

三

矢部は繪の具箱を肩にかけ、三輪は「戰爭と平和」を懷にして寄宿を出た。土曜の午後から來いといふ須賀の誘ひではあつたが、二人とも學校を休むのは平氣だつたから、一日早く立つた。豫々津田の病氣見舞に行かうといひながら果さなかつたので、須賀の誘ひはいゝ機會だつた。

松林の中の宿屋をたづねたが、須賀はゐなかつた。病院の方に行つて見ると、津田は散步に出たと看護婦が答へた。小松の密生してゐる砂山を越ると、潮の香と共に海が眼に迫つて來た。幅の廣い海邊の砂原には、病人らしいのがあちらこちらに日向ぼつこしてゐた。

「おゝい。」

突然、遠くから呼ぶ聲があつた。枯色の草の中から大きな男が立上つた。須賀だ。二人はその方へ馳けて行つた。

津田は草の上に外套にくるまつて坐つてゐた。白い顔が日に焼けて、以前よりもかへつて丈夫さうに見えた。四人並んで、草の中に寢て話した。

「五郎さんが歸つて來ないので心配しちやつた。」

「自殺でもしたと思つたのかい。學校の名譽を汚した罪死に値すといふ投書が、俺に宛て來たさうだぜ。」

須賀は、無理に責任を背負はされる運動選手のみが知つてゐる敗戰の、しかも自分の失策がその敗戰を生んだ苦惱から、漸く切拔けようとするところだつた。自嘲の意氣込をまぜて、持前の高笑(たかわらひ)をした。

「勝つた時は、胴上げにし、負けた時はぶんなぐらうといふのが應援團だからね。たまつたものぢやあない。」

「運命だよ。」

呼吸の弱い津田が、何か深い考を内に藏するやうな態度で慰めた。

「運命にしてもひど過(すぎ)るなあ。」

須賀は又不愉快な話に落(おち)て行つたのを振捨(ふりすて)るやうに云つた。みんな、おもひやりの心から、再

びその話には觸れまいとする沈默だつた。
　そんなにお前はなぜ歎く。
　草の褥に寢轉んで、
　須賀は、自分のつくつた沈默を破るやうにうたひ出した。
　口笛吹いて、氣を安く、
　現の夢を見てゐやれ．
　……………
　三人もそれに合せてうたつた。
　空も海も眞靑に光り輝き、しかも枯草の中には蟲が啼いてゐた。四人が四人とも、うたひ止んだ後の心に、何ともとりとめた事のない若者に特有の寂しさを感じてゐた。
「おい、川の方迄散歩しよう。」
　突然、須賀は立上つて歩き出した。體についてゐた砂が、さらさら音を立てゝ落ちた。あまり突然だつたので、誰もつゞかなかつた。
「行かないのか。」

「僕はやめた。今日は少し歩き過ぎた。」
津田は靜に首を振つた。
「直ちやん、來いよ。」
「行かうか。」
矢部は素直に立上つて、三輪を振向いたが、三輪も默つて首を振つた。病氣の友達を一人殘して行く氣にならなかつた。
「いゝかい。向ふの川のとこ迄かけつこだよ。」
「よおし。」
少し行くと、須賀と矢部は一寸姿勢をとつて、スタアトを切つた。打上げる濤に濡れた砂を蹴つて先を爭つた。最初は矢部が先んじたが、須賀はゆとりを見せながら追隨して、見てゐるうちに二人の姿は、遠くちひさくなつた。
「元氣だなあ。」
嘆息するやうに津田はつぶやいた。
二人は、人の手でつくりあげたものゝやうにちひさい姿になつた。最後のヘビイをかけて須賀

が拔いたと思ふと、矢部は競爭を止めてしまつた。そして二人とも砂山の草地に行つてぶつ倒れた。津田と三輪は顏を見合せて笑つた。

「僕はねえ、時々あゝいふ威勢のいゝのを見ると、變に癪にさはる事がある。よくない根性だとは思ふが。」

己れの罪を懺悔するやうな眞面目な顏をして津田が云つた。細面の線のこまかい横顏を見て、三輪は慰める言葉が口に出なかつた。

「須賀が來て、涙を流して負けた話をした時は、僕も同情したが、先生例の呑氣だから、翌日からは病院に來て看護婦とは仲よしになる、外の患者とも口をきく、誰彼のみさかひなしに喋つたり、平氣で女の患者の室に遊びに行つたりする。づうづうしいといふのか、無邪氣といふのかわからないが、何事にも拘泥しずに事を運んで行くあの遣口を見てゐると、どう我慢してもむらむらと不愉快になるんだ。病人はひがみ強い。さうであつてはならないと自分をいましめても、どうも生存力の強い奴が癪にさはつてね……」

津田は力の無い聲で笑つた。

「かうやつて日向ぼつこばかりしてゐるのだから、一寸見ると呑氣らしいが、病人の心には健康

者の知らない悩みがある。それは不思議な奴がゐるぜ。」

物事を觀察する事を喜ぶ津田は、いつもその觀察の報告をするのが好きだつた。それには三輪が一番いゝ相手だつた。矢部は年が若く、稍對等以下だつたし、須賀は眞面目に聞いてくれない事があつた。小説でも書かうといふ三輪には、同じく觀察を喜ぶところがあつた。口數の多くない、重厚な性格の持主で、何を話してもはぐらかすといふ事が無かつた。

病院といつても半分々々に分れてゐて、一方はほんとの重病人がゐたが、津田などの病棟の方は極く輕微の連中で、保養旁々といふやうなのが多かつた。それ丈病院の日常生活は、溫泉宿の觀があつた。

みんな胸の病氣には違ひ無かつたが、別段寢てゐなければならないといふ程度では無かつた。激しい運動は禁じられて、からだは樂に、日光と海氣に惠まれてゐた。時間はあり過ぎて一日は長い。たいくつをまぎらす爲めに、病人の社交が賑はふ。此處では人間の持つあらゆる心が、世間の健康者の場合よりも遙かに露骨にあらはれる。戀愛の鬪爭もある。嫉妬もある。中傷もある。詐謀もある。ひがみ強い病人の苛立ち易い心の底には、常に命を脅かす死の豫感が伴ふ。津田はさう前提して病院の中のいろんな人の話をした。病人同志の戀、病人と看護婦の戀、醫者と病人

の戀、醫者と看護婦の戀——さういふ話題が三輪には一番興味があつた。
「先刻迄あそこに坐つてゐたが、女子大學を出たといふ令嬢がゐて、それが今のところ病院の社交界のクヰンなんだ。英文學專攻だといつてゐるが、毎日日記をつけて、それを誰にでも見せる。その日記の中に、誰それと散歩したとか、誰と詩歌について意見の交換をしたとか書かれるのが、取卷く男達のひとつの喜びなんだ。」
好奇心で眼を輝かしてゐる三輪の口許に微笑の浮んだのを見てとつて、津田も目を細くしたが、直に眞面目になつて續けた。
「さうきくと馬鹿々々しいと思ふだらう。最初は誰でも生意氣だとか、小癪だとか思ふのだが、何と云つても病院の狹い世界ではクヰンなんだし、又存外無邪氣なものだから、その得意を傷つけ度くなくなるんだね。立派な大人が、その日記の中にあらはれる度數を爭ふ心持になつて來るのだから面白い。」
觀察者としての自分を認めてゐて、あく迄も實行家では無いと心できめてゐる津田は、學者が新しい研究の報告をする態度で話すのであつた。
「見たまへ。あすこに凧が揚つてゐるだらう。」

須賀と矢部の馳けて行つた方角を指差した。眞白に光る川の上の空に、さういはれて始めて氣のつく位のちひさい奴凧が風にゆらいでゐた。

「あれが、教授は今日もひねもす凧をあげたまひぬ。彼の君は永久に凧をあげて遊びたまふにやといふ有名な奴なんだよ。」

それは令孃の日記に書かれた文句で、口から口に傳へられて、誰知らぬものもないといふのであつた。凧を揚げてゐるのは大學の法律の先生で、天氣さへよければ濱邊で糸を延ばしたり手ぐつたりしてゐるのだ。

津田と三輪は、その凧をあげる病氣の學者に對して親しさを感じながら笑つた。

三輪の想像は止度なく展開されつゝあつた。多勢の病人に取卷かれてゐるといふ若い女の姿を想像する興味でいつぱいだつた。その人が美しいか、どうか、第一にそれを確め度かつた。

「シャンかい。」

たつた一言さういへば、いゝのだが、云へなかつた。此の頃、異常に女性に對して心の動搖する自分のうちかぶとを忽ち此の觀察者に見透されさうでいやだつた。

日が西へ廻ると、濱邊は急に寒くなつた。日向ぼつこをしてゐた病人は、申合せたやうに立上

つて、背中をまるくして病棟の方へ歸つて行く。津田もあわてゝ立上つた。
「寒くなつた。歸らう。」
三輪も、矢部の置いて行つた繪の具箱を肩にかけて續いた。須賀と矢部の姿は見えなかつた。
奴凧は、風の強くなつた空から、めんくらひながら下りて來るところだつた。

四

夕燒は、病室の窓を通して、白い壁にもベッドにも映つた。段々にうすれてゆく外光にともなつて、何かはかない感慨が深かつた。
看護婦が來て、津田に食前の水藥を飲ませ、體溫をはかつた。血色のよくない人だつたが、津田の腋下に挾んだ檢溫器を高くあげて、うすあかりに水銀を透かしてみる靜脈の靑い腕を、三輪は心をときめかして見詰めた。彼は幼少の時から美しい女が好きだつた。誰しも同じ事だらうが、その度が人一倍強かつた。しかし、それはおほまかに美しさを感じる事だつたが、近頃は際立つて特殊の美しさを見るやうになつた。學校の前の小間物屋の娘は横顔がよく、下駄屋のおかみさんのうけ口に艶めかしさのある事も知つた。看護婦が水銀ののぼつた度盛を見定める爲めに、白

然と眉を寄せた時の、睫毛の長い眼のしほに、氣のついた自分をかへりみて顔が熱くなつた。女の肉體の或一部に、不思議な魅惑を感じるのが此の頃の難儀のひとつだつた。

「みんなどうしたんだらう。」

かへりみて他をいふ態度で、友達の行衛（ゆくへ）を求めた。

「あの方達、園さんの御室（おへや）にいらつしやいましたよ。」

廊下へ出て行きながら、看護婦が答へた。

「園さんといふのが英文學の令孃なんだ。」

津田があとを引とつて説明した。三輪は胸がどきんとした。見ず知らずの若い女の室に、自分の仲間がゐるといふ丈の事で、平靜を失ふ程の心狀であつた。

「須賀はあゝいふ性分だから、忽ち仲よしになつてしまつて、令孃の彈くピアノに合せて唱歌位はうたはうといふんだ。あゝいふのが世の中を渡る人なんだらうなあ。」

津田は又、自分の觀察に何か意味をつけて話す興味に引かれて行つた。

「思ひも及ばないなあ。」

三輪は、氣の重い自分とひきくらべて、躊躇を知らない友達を羨（うらや）しく思つた。野球試合に取返

しのつかない失策をして、校友に顏が合はされないと悄氣切つた心の底から、直に風來坊の氣持が浮び上つて來る氣安さは、輕蔑してやり度いのだが、自分のさばけない心持を忌々しく思ふ時には、いかにそれが幸福であらうかと考へるのだ。彼は、何とも知れない憤りを感じて、自分に鞭を加へ度かつた。

出て行つた看護婦が又歸つて來た。津田の夜食の膳を運んで來たのである。窓外の砂山もすつかり暮れて、電燈のかげに人の顏の隈が深くなつた。何處かで、細い女の聲が讚美歌をうたつてゐた。

「僕、さきに宿屋に行つて見よう。」

三輪は突然立上つた。

「待ちたまへ。みんなを呼んで來てやらう。」

「いや、それには及ばない。あとで、さきに歸つたと云つてくれたまへ。」

いひ捨てゝ、逃るやうに病室を出た。長い廊下に人影が無く、或室の內から男女の笑聲が聞えた。須賀と矢部か——ふと立止つたが違つた。

病棟の外は月夜だつた。夜氣でしめつぽくなつた砂地は重く下駄の齒にさはつた。砂丘の向ふ

に、規則正しく磯を打つ濤聲があつた。
松林の中の宿屋の暗い玄關に立つて、須賀の連だといふと、
「あゝ先程の御客さんですね。」
と帳場から應じた。女中に案內されて須賀の室に這つた。だらしの無いあるじの姿は、室內にはつきり殘つてゐた。新聞や雜誌が散亂してゐる。その上に南京豆や林檎の皮が汚ならしかつた。
「須賀さん、まだ病院ですか。」
銀杏返の田舍臭い女中は、いかにも須賀には馴切つてゐるやうな樣子だつた。
三輪は所在なさに、持つて來た小說を讀まうとしたが、ほんとに讀む氣にはなれなかつた。たてつけの惡い室の中に、はばかりの臭が通つて來た。
みんな何をしてゐるんだ。三輪は何時迄もむしやくしやしてゐた。襖一重隣の室には力の無い咳をする人が居た。
「須賀さんたち隨分遲いんですね。御飯がつめたくなつてしまふわ。」
火鉢に炭をつぎに來た女中が、むつつりしてゐる三輪の機嫌をとるやうに云つた。
「あんた御腹が空いたでしよ。先に持つて來てあげませうか。」

三輪はうなづいた。空腹には違ひ無かつたが、待切れない程の事は無かつた。けれども、勝手に遊びほうけてゐる二人を待つてやるのは馬鹿々々しかつた。

つめたくなつた燒魚と、御椀と、野菜の煮物ののつてゐる御膳を前にして、あぢきない夜食だつた。宿屋の女中といふものも、戀愛の對象として空想されるのであるが、目前の人はさういふ役どころで無かつた。それでも、むつちり肥つた胸や膝に、はちきれる若さの漲つてゐるのが三輪を壓迫した。どんな女でも、女ならば、差向ひでゐるのは苦痛だつた。

「あんたはおとなしいのね。須賀さんと來たら、とつても面白いわ。」

默々として喰つてゐるのにたいくつして、何か話材を持出さうとするのだが、相手は決して應じ無かつた。

須賀と矢部が歸つて來た。

「なんだい、もう飯を喰つちやつたのか。」

さんざん騷いだ後の疲れたさまを見せて、二人とも大地に坐る勢で腰を下した。

「だつて何時迄待つても歸つて來ないし、第一何處に行つてしまつたのかわからないんだもの。」

こつちこそ詰問してやる可きなんだと思つた。

「いやだ、いやだ。又お芋の煮たのと麩のおつゆか。おきんさん、玉子貰つて來てくれよ。」
「ぜいたくいふもんぢやないわよ。こちらなんか何もいはずにおとなしく召上つたわ。」
「拜むよ。」
須賀は大きな手を合せて頭をさげた。女中はげらげら笑ひながら立つて行つた。すべての事が三輪には不愉快だつた。なんだい月並なふざけ方をしてゐやあがら――さういつてやり度い心持だつた。彼は不機嫌になつて本の上の顏を暗くした。
そんな事には頓着なく、二人は生玉子を飯にかけてさかんに搔込んだ。
「あとで又病院に行かうと思ふんだが、君も行かない。トランプしようつていふんだ。」
食後の煙草をふかしながら、須賀は三輪のうしろから聲をかけた。
「門限があるだらう。」
「あつたつて構はないんだ。病人といつても病人でないといつても通用する連中だから、何時も遲く迄騷いでゐるんだ。」
さういつてから聲を低くした。
「この隣の室の人なんかより、餘程元氣だぜ。隣のはほんものだからね。」

宿屋といつても普通のとは趣が違つてゐた。病人の見舞に來る人か、病室の空いてゐない時に病院へ通ふ人のとまる家なのだ。隣室の人も、本來は病院へ入る可き筈なのだつた。
「氣の毒だなあ。そんなに惡いのなら、病院を宿屋だと心得て遊んだり騷いだりしてゐる人間といれかへればいゝんだ。」
三輪は自分でも冷々する程疳にさはつた聲で云つた。隣の人の耳に入れまいとして、強て聲を殺してゐるのに、力が籠つてどぎつく響いた。須賀と矢部は顔を見合せた。三人が三人とも不愉快になつてしまつた。
「直ちやん、行かうよ。」
長い間もぢもぢしてゐた須賀が、三輪の機嫌に氣兼しながら云つた。
「行かうか。三輪さんも行かない。」
矢部は一層立場の惡い地位にゐた。
「僕はやめる。」
一生懸命らしく本の上にふせてゐた顏をあげた。非難に等しい語調だつた。
「をかしいんだぜ。女子大學出の才媛がゐてね、それが病棟のクヰンなんだ。崇拜してるのかか

らかつてるのかわからないが、男の奴等が寄つてたかつて、その人を得意がらせてゐるんだ。」
何とかして三輪を納得させようとして、須賀は未練らしく話した。
「一寸シャンだぜ。ねえ直ちやん。」
「あゝ、僕ね、何處かで見たやうな人だと思つたら、ロセツチの繪の女さ。」
矢部は羞しがつて顔を染めて答へた。
「それぢやあ、僕達行つて來る。兎に角約束したんだから。」
返事をしない背中に言葉を浴せかけて、二人は立上つた。
何だつて自分は斯う氣むづかしい根性を起したのだらう――三輪は追かけて行つて、一緒にならうかとも思つたが、性格として許されなかつた。
廊下に出た二人は、遠ざかりながら何か高聲で笑つた。三輪は自分の事を笑はれたやうに耳が熱くなつた。
夜が更けても、二人はなかなか歸つて來なかつた。女中が床をとりに來たので、三輪は先に横になつた。消毒藥の匂の強い白布のかゝつた夜着の襟がつめたかつた。ロセツチの描いた特徴のある女の顔が、度々眼にうかんで來た。

遲く、二人が歸つて來た時、三輪はまだ眠つてはゐなかつたが、わざと目をつぶつて眠つたふりをしてゐた。
「もう寢たの。」
矢部が聲をかけたが、彼は返事をしなかつた。

五

いゝ凪の日がつゞいた。砂濱は暖かく、草は柔かだつた。病人は朝から其處に寢轉んで日光浴をほしいまゝにした。
津田と須賀は、外套を頭からかぶつて寢てゐた。ほんとに眠つてしまつた。矢部は三脚を据ゑて、松原の風景を描いてゐた。三輪は友達の足下に寢そべつて本を讀んでゐた。
「どうしても水繪はつまらない。」
矢部は同意を求める爲めにふりかへつた。
「殊に僕のやうな小手先の器用な奴にはいけない。畫面の調子を整へる爲めに繪具を滲ませたりぼかしたりして、ちよいと見を心がける根性を誘惑される。自分のいけないところを振捨る爲め

にも、手法のきまつた水彩をよして油繪の具を驅使して見度い。その材料をどうこなすかといふ丈でも、進歩の階梯になりさうな氣がする。」

此の頃、繪筆を持てばきつと昂奮するのがおきまりだつた。眼がうるんで光つてゐた。

「東京へ歸つたら直ぐ始める。人體專門にやつて見る。」

三輪は友達の言葉に耳を傾けたが、何もいはなかつた。自分が感傷的な歌にあきたりなくなつたのと全く同時に、此の年少の友達にも同じ不滿と希望と欲求と覺悟の到來した事が、意味深く考へられた。自分が矢部に影響されたか、自分が矢部に影響したか、恐らくは双方であらう。しかし他人の影響よりも、めいめいの內心から起つた要求と見度い。それが藝術家たらんとする者にとつての進歩であると同時に試練なのだ。三輪は口には出さなかつたが、自分の覺悟に一層の情熱を加へた。

けれども、矢部が水彩で風景や靜物を描く事に物足りなくなり、自分が感覺の戲弄や情緒の惑溺を事とした歌にあきたりなくなつて、油繪の具で人體を描き度くなつたり、複雜多岐な人事の交渉發展を小說の形式に盛らうとする氣になつたりしたのは、肉體の內部から精神をさいなむ慾情の力ではないのかとも思はれた。藝術と情慾とをいつしよに論じた西洋の學者の說を讀んだ事

があつたが、否定出來ない氣がした。繪の具によつて、文字によつて、滿たされない慾望を滿たさうとするのではないか――三輪は青空が暗くなるやうな憂鬱につゝまれた。
一疋の犬が、突然砂山のかげからあらはれて、まつしぐらに波打際迄かけて行つた。寄せて來る濤に驚いて、くるりと身をかへすと、訴へるやうに吠えた。うしろの砂丘の上に人の姿が立つたのである。
「須賀さ――ん。」
手をあげて女の人が呼んだ。日光をうけて、その手は際立つて細く、白く見えた。男が二人いつしよだつた。
矢部は繪筆を措いて、帽子をとつて振つた。女の人は小走にかけて來た。踏めば崩れる砂の斜面だ。重たい褄は下着と共に廣く開いた。
「あら、須賀さんぢやなかつたの。」
女は――ロセツチの描いた顏にいきいきした微笑をたゝへて眼前に立つた。
人の氣配で津田は直ぐに上半身を起したが、須賀は動かなかつた。
「いやな人。狸ッ。」

いきなり頭からかぶつてゐる外套に手をかけて、はいでしまつた。須賀はそれでも眼を開かなかつた。

「憎らしいのねえ。砂をぶつかけてやるわ。」

口ではさういひながら、もう須賀には頓着なく、矢部の後(うしろ)に廻つて繪をのぞき込んだ。

「あなたほんとに上手なのねえ。あたし、もつと素人なんだらうと思つてゐたのよ。」

おもふまゝの事をいふすがすがしさに、わざと子供らしく振舞はうといふところもまじつてゐた。ぺたんと砂の上に坐つて、何時迄も矢部の繪に見入つてゐた。

二人の男も砂山を下りて來た。どてらを着た中年の人と、ひと廻り若いのと、何れ(いづ)も商人風の人だつた。いつしよになつて矢部の手腕をほめた。繪畫の觀方に就いて全然訓練をうけてゐない人の言葉だつた。

「あゝ、あすこのところですね。全く實景そつくりだ。」

さういふ風な感心の爲方(しかた)だつた。

「ほんとに見たまゝを描いてゐるんですか。」

女の人は、すつかり親しさをもつて、子供あつかひにする風さへ多分に含んでゐた。

「見たまゝつて云つても、繪は寫眞では無いのですから……」

矢部は眞面目に自分の考を纏めようと努めた。

「いゝえ、さうむづかしく考へなくてもいゝのよ。たゞ、あなたには其處に描いてあるやうに空も海も見えるんですかと訊いたゞけなの。」

「見えるんです。かういふ風に。勿論單純化してはゐますけれど。」

「さう。だつて凧が描いてないぢやないの。」

勝ほこつて指さす向ふの空に、昨日と同じ奴凧があがつてゐた。みんなが一齊に笑つた。

「矢張單純化しちやつたのね。」

矢部はからかはれて眞赤になつてゐた。さういふ風に親しくからかはれてゐる友達に對して、三輪は少なからず嫉妬を感じた。

園さんは、矢部がいしくもいつたやうに、ダンテ・ガブリエル・ロセツチの描いた女性の面影があつた。すべての描線　殊に顎に特徴のいちじるしいものがあつた。横顏の寂しさや、耳朶のうすさに病身らしさが見えた。正面から見る時のいきいきした表情が、横を向くと消えてしまふ。その横顏がかへつて三輪の心を引いた。何といつても一人の若い女の存在は、身邊をあかる

くした。初冬の海邊の景色が、一變したやうにいろどりが豐かになつた。
水際を、何かあさつてゐた犬が飛んで來て甘つたれた。フォックス・テリヤの血の混つた、柄のちひさい頓狂な雜種だ。
「あゝ、寢た寢た。」
大きな欠伸をして須賀が起上つた。
「女史よ。私に喫煙は許されるでせうか。」
「いやな方。」
「だつてレディの前でゆるしもうけずに煙草をふかしてはいけないと昨夜叱られたものだから。」
「そりや病室でぷかぷかやるんですもの。御室がやに臭くなつていけないからですわ。こゝなら御隨意よ。」
「あゝ吾海邊を愛す。」
須賀は燐寸をすつて、深く吸つた煙を吹いた。
「矢部さん、その繪頂戴な。あたしの御室にかけて置くの。」
園は甲から乙へ、無雜作に話を移すといふ行き方だつた。そこに何の無理もとゞめなかつた。

「こんなの駄目です。もつといゝの描きます。」
「だつてあなた方明日歸つてしまふんでせう。」
「又來ますよ。今度は油繪を描きにやつて來ます。」
「矢部君は、油繪で人物を描かうといふ野心をもつてゐるのです。」
傍から津田が說明した。
「いゝわねえ。あたしモデルになつてあげませうか。」
あく迄も無邪氣に、澤山のたはむれをふくんでゐたが、矢部はどぎまぎして答へる事が出來なかつた。
自分丈がちかづきで無いといふ事から、三輪は繼子の地位に陷つた氣がした。須賀はいふ迄もなく、たつた一日の馴染に過ぎない矢部迄も、親しい口をきいてゐるのが羨しかつた。少し癪にもさはつた。若い女性と冗談口をきくといふ事が、何か神聖な空氣でないやうな憤りがあつた。
彼は海の方に視線をそむけて、心は寂しかつた。
みなさん、歩きませんか。」
園は旣に立上つてゐた。津田と三輪を除いて、みんなそれに倣つた。

「津田さん、いらつしやらない。」
「僕は動くのはいやゝ。」
「批評家は無精で駄目ね。」
一二間行つてからふり返つて、
「あなたいらつしやらない。」
始めて三輪に聲をかけた。三輪は逡巡した。いつしよに行つて見度かつた。けれども、おいそれとくつついて行くのはみつともないやうに思はれた。
「いらつしやいな。あなたも批評家。」
「三輪君は批評家ではありません。作家です。」
津田が、持前の切口上で樂屋落をいつた。
「さう。そんならいらつしやいよ。あたし批評家は嫌ひ。人が惡くて。」
三輪はみんなの笑聲をいゝ機會にして立上つた。
「いくら批評家でも一人ぼつちは可哀さうだな。」
「いゝのよ。津田さんはそれが好きなんですもの。」

津田は苦笑しながらうなづいた。

五人は波打際を歩いた。犬は誰よりも得意になつて先驅した。

二人の男は園の附人のやうに隨つたが、少しも相手にされなかつた。園にとつては、須賀が一番遠慮なく話せる相手たつた。何をいつても、輪廓のぼやけた返事をするのが、氣が措けなくていゝのだ。三輪は二人の後から默々としてついて行つた。人さまざまの性格を考へてゐた。何時でも己れを守つて、決しておだてに乘らない津田を羨しくも思つた。羨しくないとも思つた。たつた一人、砂山の上に海を眺めてゐる姿は、此の廣大もない世の中の最も寂しい景色のひとつに見えた。それよりも、現世のあらゆる事に興味を持ち、冷たい批評を加へる事なく、身をもつてそれに伴つて行く須賀の方が羨しかつた。兎もすれば、あゝでもない、かうでもないと、反省し又反省し、躊躇とこだはりにさいなまれる自分の性格を忌々しく思つた。

「まあ、さうなんですか。」

先に立つて歩いてゐた園が、須賀といつしよにふりかへつて、心持顏を傾けて訊いた。三輪は自分の事だと直感して、何を訊かれたのかは知らないのだが、赤面した。須賀は何か、自分の事を賣廣めたんだなと想像した。園は笑の印象を殘した丈で、又足早に歩き始めた。手編の毛絲の

肩かけ、長い袖、厚ぼつたい草履の踵に絡る裳裾、白い足袋――三輪の眼には總てがあざやかに、力強くいろどられた。

砂山のきれめに來ると、大きなカアブを描く川の流が、足下を洗つて海にそゝいでゐた。眞水と潮水と、どうしても融和しまいと爭ひながらひとつになつて渦を卷いてゐた。兩岸の砂は、相うつ水の壓力で絶間なく崩れてゐた。其處の砂山の上で、教授は凧をあげてゐた。

「はゝあ、教授は今日もひねもす凧をあげたまひぬか。」

須賀は大きな聲で叫んだ。

「知らない。」

園は子供のやうに頭をふつて、踵をしん棒にしてくるりと體をひと廻りさせたが、いつさんにかけて行つた。

「ハロオ、プロフエツサア。」

教授は四十恰好に見えた。小づくりの體に厚ぼつたいシヤツと着物を幾枚も重ねて着ぶくれてゐた。大きな房のついた赤い毛絲の帽子を耳の上までかぶつて、いつしんに凧をあげてゐるのだ。つとめて自分の病氣や煩悩を忘れる爲めに、子供らしい事の一切を喜ばうとする樣子だつた。

園はいきなり教授の手から絲をひつたくつて、自分でするすると風のまゝに延ばした。奴凧は左右に搖れながら、遠くに連る山々の上に限りなくひろがる中空に、おどけた姿で踊つた。

六

あくる日は風が強く、濱邊の日向ぼつこの日和では無かつた。強く渚を打つ濤聲は、宿の雨戸を震はせる程高かつた。みんなよりも早く目のさめた三輪は、海岸をひと廻して來た。打上る潮の力は砂濱の幅を半分に減らしてしまつた。佇めば、潮の香の強いしぶきが顏に吹きつけた。昨日終日寢てゐた草生の雜草の莖に干からびてくつついてゐた花は、先を爭つて飛散した。彼は、自分の頭の中を去來する妄念も、風と浪とに吹き散らされ、洗ひ去られる事を欲した。

宿屋のまづい飯を濟ませて、三人は病院へ行つた。我家の如く、方々の病室を遊び廻つた。須賀の人氣は素晴しいものだつた。得意の聲色をつかつてやんやといはせた。矢部はスケツチ・ブツクを出して手あたり次第に寫生した。園の後姿も、赤い毛絲の帽子をかぶつてゐる教授の横顏も、醫員も、看護婦も、自分の仲間のも、巧みに特徴を捉へて描いた。それを病室の壁に並べて鋲でとめた。

「いや、いや、そんなのいやよ。もつと丁寧に描いて頂戴。」

園は、自分の顔の、顎の特徴の著しく誇大に描かれてゐるのを破いて捨てゝ、寫眞をうつす時のやうな堅い姿勢をとつて椅子にかけた。矢部の鉛筆は敏捷に動いた。

三輪は描く人の後に立つて、描かれる人を注視してゐた。ポオズを崩すまいとしてゐるので、あらゆる顔面の特徴をむさぼる事が出來た。此の場合、繪を描く天分の惠まれてゐないのが殘念だつた。矢部のスケツチは誰の目にも女主人公をそのまゝに描き得たと認めさせた。しかし、それが若し自分なら、もつと深い心を盛る事が出來ると、三輪は思ふのであつた。人の特質は、決して單なる寫生では描けない——さういふ不滿があつた。そんならどういふ風にすればいゝのか。相手の心を感得する事だ。さういふ答を得ながら、三輪は平靜でない自分だと思つて赤面した。

夕方の汽車で、三人とも東京へ歸る積りだつた。晝飯を喰べると宿の勘定をして又病院へ出かけた。かへりともない心持が強かつた。

「いやあねえ、皆さん歸つてしまつては寂しいわ。」

何等の成心も無く、園はもう一晩泊れといふのだつた。

「朝、早い汽車に乘ればば同じだけれど。」
「いつそ、さうしようかな。」
矢部が正直に引きとめられる心を披瀝すると、須賀も忽ち同意した。自分に對して、決してころよく思つてゐない校友の前に再び顏を曝すのも忌々しかつた。一日でも逃れ度い氣持を消す事が出來なかつた。
「さうなさいよ。ね、ね。」
自分の意のまゝに動かす事の出來るのを知つて、園はすつかりはしやいで居た。
「歸つた方がよくはないか。又明日になると學校に出るのが一層億劫になるぜ。ふだんから休んで爲方の無い連中だから。殊に須賀君は一度は歸つて、綺麗に解決をつける責任があるよ。」
年長の津田は、心配と親切とを聲にも見せた。自分の失策から勝利を失つた責任を明かにする意味で、須賀は運動部を退く決心をしてゐたのだ。もう一度名譽回復の爲めに戰ふのが、いつそう責任感の強い者のする事だと津田はしきりに主張したけれど、思ひ切りの早い須賀は既に全く鬪志を失つてゐた。
「僕は歸る。」

須賀が默して答へないうちに、三輪ははつきり宣言した。
「さうしたまへ。その方がいゝ。又休暇になつたら來てくれるさ。」
津田は、自分の心持を一番早く受入れてくれた友達に、特に親しさを感じて言つた。
「つまんないのねえ。」
園は駄々兒のやうに體を搖つて、甘つたれたしなをして見せた。
「そんならもう一度骨牌しませう。みんなで。」
碁石を賭けて遊ぶ二十一だ。斯ういふ遊び事にも各々の個性がはつきりあらはれた。須賀は勝敗よりも座を賑かにする事を面白がつた。矢部はすつかり熱中して、運の強いか弱いかによつて決せられる遊びの中にも、こつを求めようとしてゐた。津田は面白いのか面白くないのか冷々として自分の立場を守つた。三輪は、さういふめいめいの態度に興味を感じてゐた。
何時迄も歸る氣持にはならなかつたが、津田に促されて、漸く別辭を述べた。
「又いらつしやい。きつとよ。」
送られて玄關を出る後から、園のかぼそい聲が追つかけて來た。三人とも、もう一度帽子をとつて振つた。

「おてんばだなあ。」

須賀は餘程たつてから、往來のまん中でつぶやいたが、誰も應じなかつた。身内の者の外には、年頃の女と親しく口をきいた事の無い三人の心に、各々異なる印象が深く殘つてゐた。

寄宿舍の三人へ宛て園から手紙が來た。須賀が朗讀した。病院の單調な生活にあきあきしてゐる時に、元氣のいゝ人の訪問をうけて自分の健康を取戻したやうに思ふ、今度の日曜にも是非遊びに來てくれといふ意味の事が、女に特有の感傷的な文字で書いてあつた。

「樂しかりし昨日にひきかへて今日は又ひとり病室に松風を聽く身に御座候か――女の手紙つて變なものだなあ。」

須賀は讀終つて、心の中の感動を打消すやうに云つた。

「純粹のセンチメンタリズムは女のものだよ。男は一生の中のほんの僅かの時代しか持合せないんだ。」

矢部は感激した態度で斷言した。

「直ちやん、繪葉書一枚描いてくれ。返事を出さうよ。」

須賀の發意で矢部が水繪を描いたのに、めいめい短い言葉を認(したゝ)めた。

園の手紙は頻々と來た。一人々々別々に寄越す事もあつた。毎日々記をつける事を樂みのひとつとしてゐる位だから、手紙を書くのも慰みに違ひ無かつた。わざと古めかしい候文の事もあつた。くだけた今時の言文一致體のものもあつた。感情を誇張しないではゐられない女性の用ゐる文字には魅力があつた。それに誘はれて、三人とも自分達の感傷性をもてあました。

須賀は自分に來た手紙をみんなの前で讀む事にしてゐた。かくすのは、內心を見透されるやうに考へられた。

「直ちやん、園さんから君にも手紙來たゞらう。」

須賀にさう云はれると、矢部は心持の動搖をかくしきれず、ひどくそはそはしながら机の抽出から出して見せた。繪の事や、海岸の景色についての感想などが多く書いてあつた。

三輪は、公開される手紙の內容と、自分に來たものを比較して、少なからず滿足した。文學にこゝろざす者と見られてゐる爲めか、彼が貰ふ手紙は遙かに意味の深いものがあつた。自分も一生を記念する作品を書き度いといふ感慨を述べて來たこともあつた。人生に對する疑惑を解かうとして解けない煩惱について同情を求める言葉もあつた。悠久とか、永遠とか、清淨とか、純眞とか、はつきりとは內容のつかめない文字の持つ感激が、ぴつたりと心に觸れるのであつた。

或日、三人申合せて再び津田を見舞つた。單調な毎日に、つくづく惱んでゐた園が、誰よりも一番喜んだ。意外にも、津田は不機嫌だつた。

夕方、歸るのを途中迄送つて來て、曲りくねつた道の角で、津田は足をとめて云つた。

「君達、來てくれるのはありがたいが、冬の休暇迄はよしてくれないか。それよりも學校の方を精出してやつてくれたまへ。」

須賀と三輪から見れば、たつた一歳の年長に過ぎないのだが、早くから大人ぶつた態度の身についてゐる秀才に對して、自然と尊敬の念があつた。その津田のはつきりした物言ひに、壓倒される感じをうけた。

「では僕は失敬する。」

夕暮の松林の中に津田の姿は消えて行つた。見送つて、三人は一言もいはなかつた。津田の言葉にも態度にも、何かを咎めるやうなところがあつた。

七

矢部は學校はそつちのけで、繪の研究所に通つてゐた。若い畫學生が集つて來るのだ。石膏像

を寫生する事もあつた。モデルの女が來る事もあつた。はじめてモデル臺の上に若い女の裸身を見た時は、矢部はすつかり緊張して、木炭を持つ手が自由に動かなかつた。
それ迄、彼のあたまの中には、想像の裸婦がさまざまの姿態をしてゐた。曾て見た繪畫や彫刻の生んだ幻想だつた。肉色の艶のいゝ肌、盛上つた肉づき、血行のさかんな、はち切れるやうな胸、腹、臀――あらゆるいきいきした命の美だ。
ところが、目前の生きた裸婦は、そんな力にみちた美を持つてゐなかつた。容貌も姿も着物をきてゐる時は相當に思はれたが、いざとなつて見ると貧弱だつた。うす黄色く乾いた皮膚は、靜物のやうに冷かだつた。帶をしめる爲めか、腹部が妙にどす黒く、皺が寄つてゐた。まるで無感覺だつた。
矢部は一緜もつけずに椅子にかけてゐる女を、眞正面から描く位置にゐた。彼は幾度となく自分の描いた線を消した。
「今日は人體だつた。」
寄宿に歸ると、直に三輪に報告した。
「どうだつた。」

「とてもいけないのさ。裸婦だぜ。」

矢部は顔を染めながら自分の習作を開いて壁にとめた。

「をかしいんだ。僕には此のモデルがまるで貧弱に見えるんだけれど、外の奴はルノアアルのやうな豐滿な肉體を描いたり、マチスのやうな強い筋肉をあらはしたりしてゐるんだ。年寄のやうにしなびたお腹なのに、みんなの描くのはふくれ上つた素晴しい腹さ。さう見えるのかつて訊いてやつたら、さう感じるんだといふんだ。めいめい頭の中に型をこしらへてゐて、その型に支配されてゐるんだよ。」

昂奮して話す矢部の言葉をよそにして、三輪は畫面に注視してゐた。彼はその繪を拙いと思つた。ふだんの矢部の手腕をもつてすれば、もう少しは何とかなる可きだと思つた。これではたゞ形體を寫したに過ぎない。人間に與へられた肉體のまるみも、あつたかみも、脂肪も、柔軟性も無い。だが、その木片に等しい裸婦の木炭畫さへ、描かれたる對象についての好奇心の爲めに、三輪は微細なる注視から己れを解放するのが困難だつた。

壁に貼られた繪はそのまゝ殘つた。何處からか歸つて來た須賀も直に目を引かれた。

「素敵々々。」

藝術觀賞の能力の無い彼は、單に人物だといふ意味で感心した。
「モデルは實物の女かい。平氣で素裸になるのか。」
無遠慮に、好奇心をかくさずに訊いた。
「平氣さ。まるで羽織を脫ぐやうに着物を捨てちやつた。こつちの方が羞しい位だつた。」
矢部は廣い額をうす紅く染めながら、熱心に話した。
「女の裸なんて榮養不良か月足らずの子供のやうな感じのするものだね。どこか發育しそこなつた風で、潑剌たるところが無いんだ。美しいとは思はなかつた。寧ろいぢけた感じがして醜惡だつた。だから見給へ、僕の繪なんて剝製の人間だ。」
「さうかしら。矢張り浮世繪の女のやうに、裾から白い脛を見せてゐる方がなまめかしいかなあ。」
女の肉體を、心の中で思ふとは反對に、さも取るに足り無いものゝやうに話しながら、二人とも變にその話題に執着を持つて居た。三輪は傍で、更に熱心に耳を傾けて居た。もつと突込んだ質問を須賀がすれば、いゝと思ひながら、さういふ自分を恥ぢた。
矢部の裸體の習作は段々數を重ねた。その繪は順々に室(へや)の壁に並べて貼られた。誰の目にも著

しい進歩を物語つた。

「僕は白狀するがね、人間の體つてものは、つくづく見てゐるうちに、素晴しく巧妙に出來てゐる事がわかつて來た。はじめは氣のつかなかつた事だが、柔かいやうな堅いやうな、力強いやうなぐにやぐにやみたいな肉の隆起や、あるかないかのやうな肌の陰影の面白さも見えて來た。內に潛んでゐる生命が、少しづゝのぞける氣がして來た。」

矢部は全く昂奮して、自分の習作をさし示しつゝ說明して倦きなかつた。最初、木偶(でく)か土器位にしか見られなかつた同一のモデルに、美しいといふよりももつと不思議な魅力を發見した。すくなくとも彼が今迄考へてゐた美とは違ふものだつた。人工ではどうしても作れない天然の底力の生んだものだ。それを紙の上に寫す事は至難だつた。ひとつの曲線を描いても、彼が心に感得してゐるものとは違ふものが紙の面に殘つた。しかし、日一日と、藝術の奧祕に到達し得る希望が輝いてゐた。

壁いつぱいに並んでゐる裸體畫は直ぐに人目を引いた。女性に對する思慕の情に惱まされ、之を抑壓する爲めには人知れず苦しんでゐる年配の者ばかりだ。見に來る者が多かつた。

「おい、これ一枚貰つて行くぜ。」

矢部が拒んでも、ひつたくつて持つて行つてしまふ者もあつた。寄宿舍の方々の室に、裸女の姿が壁間を飾るやうになつた。

矢部は、俄に人を見る目が開かれた。人間の姿態が、ほんとにわかるやうになつた。着物を着てゐても、それを裸にして完全に想像する事が出來るやうに思つた。なさけない事には、自分の記憶にある女を、一絲もつけない姿にして描いて樂む事もあつた。それを彼は藝術の冒瀆だと思つてゐながら、止むに止まれないいたづらだつた。屢々、カフヱ・ロビンの娘の姿も、人知れず描かれ、又直に破かれた。

ロビンには、矢部は足繁く行つた。或日、ストオブの側で編物をしてゐる娘の手に、生殘つた虻がとまつた。聲をあげて椅子から立上つた瞬間の姿が、矢部に親しさを感じさせた。處女の感じが強かつた。

「おゝ、いやだ。」

飛去つた蟲の行衞を見失つた視線を彼の方へうつして笑つた。又編棒を動かしてゐるのを、矢部は手近にあつた食箋の裏に鉛筆で寫生した。

「あら、それあたしですか。」

いつの間にか娘が後に來てのぞいてゐた。
「上手なんですねえ。頂戴。」
幼稚に手首のくびれた手を出してひつたくつてしまつた。
その繪は、安つぽい額ぶちに入つて、カフェ・ロビンの壁にかゝつた。一寸は氣羞しかつたが、矢部も強ゐて取りはづさせる程の事もしなかつた。輕い筆觸に面白い味の出てゐるのを惡くなく思つた位だつた。
矢部は娘を可愛らしいとは思つてゐた。戀ではない。戀などゝいふ深い心持ではない――自分で自分に釋明した。たゞ親しさを感じるのだ。もつと多くの人に、同じ程度の親しさなら感じる。たゞ機會が無い丈の事だ。さう思つて自分で納得してゐた。
矢部のスケッチは評判になつた。繪が評判になるよりも、學生の身分でカフェの娘の繪を描いたといふ事が注意を集めたのだ。定連の學生は、その繪がよく實物に似てゐる事をほめながら、描いた人間を憎んだ。學生特有の露骨な嫉妬だつた。殊に、娘や給仕に、矢部さん矢部さんともてはやされるのがいけなかつた。オール・バックの額の白く廣い、美術學生がつたみなりの彼の姿があらはれると、喧嘩を賣り度くなる心持が自ら起るのだつた。矢部もその氣勢をさとらない

わけでは無かつた。

寒い雨の晩だつた。矢部はこつそり寄宿を脱出して、ロビンへ行つた。客は誰もゐなかつた。娘と、若い者の芳さんと三人で、ストオブを圍んでゐた。

其處に學生が入つて來た。中學部の不良仲間だつた。何處かを荒して來た後で、みんな酒氣を帶びてゐた。いきなり割込んで、ストオブの周圍に圓を描いて陣取つた。

「麥酒(ビイル)だ、麥酒だ。」

何か符帳のやうな言葉を澤山はさんで、しきりに氣焰をあげてゐた。

「え、あゝさうさ。」

「へえ、さうかい。」

そんな風にいひながら、矢部と矢部の横手にかゝつてゐる彼の描いた娘の繪を見比べてゐた。

「似てるよ。ねえおふみちやん。」

一番年長らしいのがからかつた。

「知らないわよ。」

娘は矢部などと口をきく時とはまるつきり違ふ調子で、ふり切るやうに答へた。

「知らない奴があるかい。え、誰が描いたんだい。うめえなあ。とてもうめえや。」
「帝展物だなあ。」
「もちさ。」
いやがらせは誰にむかつていふのか、矢部にははつきりわかつた。それがわかつてゐる丈、先に歸るのは逃るやうでいやだつた。たゞ、立上る機會を待つてゐた。
「君ですか、これ描いたの。」
一人が、いきなり矢部の前に顔を差出した。
「あゝ、困つてるんだ。いたづらに書いたのを額縁なんかに入れるんだもの。」
半分は娘の方へ、矢部は當惑しながら答へた。
「困らなくたつていゝでせう。とてもうまいんだもの。」
「矢張り毎日通つて來るだけあらあ。研究が積んでるつてね。」
一齊に大口開いて笑つた。
「君、勘定してくれないか。」
矢部はむつとして立上つて、給仕の方へ聲をかけた。

「それから、此の繪破くぜ。いゝだらう。」
いきなり額を取下して、繪を引出して寸斷した。
「あら、いけません、いけません。」
娘がとめるひまは無かつた。ちぎられた紙片は矢部の指をはなれて床の上に散つた。
「おい、亂暴ぢやあないか。」
一番ひどく醉つてゐる奴が、よろけながら立上つて、矢部の肱をつかんだ。
「自分の描いた繪だつて、いつたん人にやつたものを、許しも得ずに破いていゝのか。」
醉眼が野獸のやうに光つた。矢部は先刻からの不快がこみあげて來た。
「いゝぢやないか、こんな紙きれに描いたいたづらがきだ。君達の關する事ではないでせう。」
「何だと、氣障な事をいやがると制裁を加へるぞ。」
「早いとこでくらはせろ。」
「面倒臭えや、やつちまへ。」
いちどきに立つた。室内が暗くなつたと思ふと、矢部は闘爭の緊張感で眞靑になつた。何をいふひまもなく亂打された。必死になつて抗爭した。一團の人間は雪崩をうつて置ストオブにぶつ

かつた。はげしい音響と共にストオブは倒れて、脆弱な煙突は眞二つに分れた。瞬間に、暴力團は身を引いた。床に倒れた矢部が起上つた時は、火焰と黒烟が渦を巻いて室内を這つた。

火は叩き消されて無事だつたが、事件は收まらなかつた。

次の晩、春寮二十番室の藝術村をストオムが襲つた。わつしよいわつしよいと、あたりを憚かるやうな、そのくせ同志を糾合するやうな聲を合せて、遠方から廊下を踏鳴らして來た。

右手に火傷した矢部は繃帯した手をもてあまして、浮かない顔をしてゐた。三輪も須賀もその心持に引込まれて、讀みもしない本にむかつてゐた。三人とも、たゞならぬ氣勢の身に迫るのを直感した。

大勢の足音は、既に扉の外に來てゐた。

「おい、矢部はゐないか。」

無理にどすをきかした聲が、はげしくノックしたがら訊いた。

「何か用か。」

内では須賀が應じた。

「一寸用があるんだ。新聞室迄來て貰ひ度いんだ。」

「用があるなら其處で言つたらいゝだらう。もう就寢時間だ、靜かにして貰はう。」
扉の外は急にひつそりとしたが、忽ち又騷然となつた。
「貴樣に用は無いんだ。矢部を出せ。」
「二十世紀のおかめ。」
「恥しらず。貴樣の爲めに野球試合は負けたんだぞ。」
「矢部を出せ。カフェ通ひの墮落生出て來い。」
「裸體畫を撤回しろ。寄宿舍の神聖を汚すな。」
罵聲が湧起つた。中學部の少年の黄色い聲が多かつた。それがひどく輕薄に聞えた。
「返事をしろ。」
「出て來い。」
突然、扉を蹴飛ばした奴があつた。須賀は猛然と立上ると、一隅に立てかけてあつたバツトをとつて、力任せにその扉をなぐりつけた。此の頃の鬱屈した不快が激發した。どうともなれ、幾人でも來い——柔和な彼の顏に決意が漲つた。身長も幅もある巨軀が、一層大きく見えた。二度三度、滿身の力を籠めてなぐりつけると、扉の板はばらばらに離れ、窓の硝子は碎けて落ちた。

廊下に群る彌次は息を呑んだ。あまりに眞劍な須賀の氣勢は、殺人すら辭さないものだつた。
彼はバツトを握つたまゝ敵に直面して立つた。
悽愴な時がしばらくたつた。彌次は捨ぜりふを殘して退散した。
須賀は固く唇を嚙んで一言もいはなかつた。捨身になつた亂鬪の覺悟に、極度迄昂奮してゐた。
殘つてゐる窓硝子も滅茶々々に叩き割つた。
矢部も三輪も、常に喜怒を色にあらはした事の無い友達のさかんな活躍を、感激の涙を溜めて見てゐた。もろともにあばれ放題にあばれ度い心持と、我が勇者の勝利を唱和し度い心持とで胸が迫つて來た。

八

須賀は寄宿舍から放逐された。

須　賀　五　郎

右之者自治寮の精神に背き

舍生にあるまじき所業有之

候に付退舍を命ず

舍監が自慢の達筆で書いた掲示が貼出された。

その日春寮二十番室は解散した。

矢部も三輪も、須賀の追放に殉じて退舍届を出したのだ。尤も、矢部も譴責を喰つた。學業怠慢と、カフェ通ひと、あげくの果がカフェで喧嘩をした數罪俱發で、十分譴責に値した。

「僕は學校もやめる。教場に出ない生徒がゐるのは風紀上よくたい。」

彼は自分を叱責する語調で決心を語つた。誰もとめなかつた。

三輪は須賀に對する寄宿舍の處置を憤つた。多勢を賴んで暴力をふるふ者こそ自治寮の精神に反するのだ、それに對して正當の防禦としてバツトを振ふのは止むを得ないでは無いか――彼は全校の學生の前で曲直を決し度い熱情を感じた。

三人とも手早く荷づくりをした。

「僕は此の室に足かけ九年ゐた。去るにのぞんで多少の感慨なきにしもあらずだ。」

須賀はうまさうに烟草をふかしながら、室內を步き廻つた。

「最後のいたづらだ。かきおきして行かう。」

いつもの柔和な顔つきになつて、筆と紙とを出した。

多數の亂暴は咎めず

一人の亂暴は罰す

これ自治寮の精神なり

飄逸な字體の爲めか、書いた人間の持味か、矢部も三輪もこゝろよい諧謔として受取つた。鬱憤の幾分が、おかげで消えた。その文句は須賀の頭に浮ぶよりも先に、三輪の脣から出たものだつた。しかし、須賀の手で文字となつた時、何等の惡意も皮肉も附帶してゐなかつた。それを室の入口の柱に貼つけると、明るい氣持が蘇生した。

三臺の荷車は、學校の門を出て三方に別れた。須賀は横濱に、矢部は日本橋に、三輪は赤坂に――めいめいの家に歸つた。

一部始終を一番早く津田にもたらしたのは三輪だつた。須賀と矢部とを誘つて行く可きだと思ひながら、一人だつた。心の底に、自分一人がよき機會を得ようとする密かなる期待があつた。性格として、それを恥ぢる氣持も充分あつた。

病室をたづねて、散歩に出た事を知つた。冬の海は靜かに、晴れた日の空を映して凪いだ。病

人は防寒の用意をして、矢張砂山にころがつてゐた。教授の凧は、風の無いのをかこつ風情だつた。
高いところから東西を物色してゐると、遥かに向ふで白い手をあげた人があつた。園だ。その側で、帽子を振つたのが津田だつた。他の人は居ないで、二人きりで海に面してゐた。三輪は不覺な動揺を感じた。
「あなた一人きりでいらつしやつたの。よく來て下さつたわねえ。歡迎してよ。」
自分の客として迎へてくれた。三輪はさしづされるまゝにならうとする、甘つたれ度い心持をいちはやく誘はれた。
「藝術村は解散しちやつた。痛快なる大詰だつたぜ。」
いきなり持つて行つた話を切出すと、自分ながらその時の昂奮した心狀になるのを知つた。
「どうしたつて。」
冷靜をほこる津田が、事の意外に聲を高くした。その手ごたへに一層張合を感じて、三輪は自分の主張をまぜて話した。
「須賀五郎一世一代だつた。」

「さうか。いきなり藝術村は解散したつていふから、仲間喧嘩でもやつたのかと思つた。しかし、皆が亂暴だつたなあ。」
　自分が居れば、そんな結末にはしないで濟ませたのに、といふ口吻だつた。
「須賀さん偉いのねえ。あの方がゐなかつたら、矢部さんひどいめにあはされたんでしよ。」
　男の學生の間に行はれる血氣に任せる言動の想像もつかない野蠻を、園は寧ろ好奇心をもつて知り度がつた。
「さういふ時は三輪さんでは心細いわねえ。」
「いゝえ、僕だつていざとなれば、その位の事はやりますよ。」
　此の人の前で、さういふ英雄の姿をあらはして見度かつた。話をしてゐながら、多分の芝居がかつた誇張の件ふ事に氣がついて、少なからず氣が咎めた。
「ねえ、そのカフヱの娘つていふ人を、矢部さんほんとに想つてゐるんでせうか。」
　園は恰も小說の筋を聞くやうに、無雜作に質問した。
「さうでは無いでせう。想つてゐるなんていふ程の事では無いと思ひます。」
「そんならたゞ好きなの。」

「なんていふのかなあ。」

三輪は不意と顔が紅くなつた。深入りして行くのが羞しい話題だつた。想ふとか好きとかいふ言葉を口にする事さへ、平氣ではゐられなかつた。顏色も動かさずに、何處迄も論じて行かれさうな相手の無邪氣な樣子を、ひどく高潔なものに思つた。

女といふものゝ存在は、頭の痛くなる事實だ。時には一切の美しさを備へてゐるもののやうに思はれ、又時には醜い穢らはしいもののやうに思はれる。極端に美化し、醜化する事しか出來なかつた。全く正體がわからなかつた。たが絶えず惱まされながら、常に心はその方へ引かれて行つた。それが特定の人である前に、全體の女が殆ど無差別に妄想の中に姿をあらはした。矢部だつて自分だつて同じ事だ。カフエの娘でなくたつていゝのだ。それが一番矢部にとつては手近にゐた女で、その外には口をきく人もなかつた丈の事だ。

そんなら園も同じか――自分に身を接して坐つてゐる人の事を密かに考へると動悸が高くなつた。違ふ、違ふ、違ふ――三輪は一生懸命で、肚の中で叫んだ。

「ねえ、その人いくつ位。」

園はなほ話を打切らうとはしなかつた。どうしても一人の女の姿を、完全に目の前に描く迄は

質問を止めさうも無かつた。
「十六か七でせうか、未だこどものやうな人なんです。」
「きれいな人。」
きれいといふよりも可愛らしいといふ方が當つてゐると思ふのだが、どつちも言葉として口にするのははゞかられた。
「さうですねえ、兎のやうな感じがするんです。」
「兎ですつて。」
園はいかにも面白さうだつた。
「おとなしさうで、活潑さうで……」
「わかるよ。わかるよ。」
津田は小娘の姿を想像してうなづいた。
此の日の日向ぼつこは、二輪には無上に樂しかつた。すまないとは思ひながら、須賀や矢部のゐない方がよかつた。津田もゐない方がいゝと思つて、更に心がすまなかつた。
無意識に枯草をむしりながら、海を見て小聲で歌をうたふ園の聲が、傷口に藥の沁みるやうに、

肉體に迄も響くのであつた。

日歸りのつもりで行きながら、三輪は愚圖々々に宿をとつてしまつた。藥品の匂の漂ふ室で、冷い夜着に寢つかれなかつた。彼は自分をどうしていゝのかわからない心持で、涙組んだ。

あくる日、病院へ行く前に、園が散歩に誘ひに來た。まさかに宿へ來てくれようとは思はなかつた。しかし、待つてゐた事のやうにも考へられた。

「あたし小說を書いたのよ。あなたに見て頂かうと思つて。」

松原の中の小徑を海の方へ向ふ時、園は懷から原稿を出した。

「津田さんにはないしよなのよ。あの方皮肉たから見せてあげないの。」

三輪は自分丈が信賴されてゐるのだと思つた。それが自分の甘い自惚だとも反省したが、矢張いろいろ都合のいゝ事を想像する方に心が走つた。

時間が早いので、海邊には人の姿が無かつた。自然の風除になつてゐる砂山の凹地に、二人は日光を浴びる位置を占めた。

「今讀んぢやあいや。東京へ持つて行つて讀んで頂戴。」

園はさういつて止めたけれど、三輪は構はずに讀み始めた。標題はつけて無かつた。和文脈の

勝つた明治初期か、少女雜誌式の文體だつた。たゞ書かうと思ふ筋を書いてゐる丈だ。描いてはゐない、さう思ひながら、三輪はその內容にひきつけられてしまつた。不治の病にかゝつた妙齡の女が、空想の戀愛以外には何も知らずに死んで行く自分だと自覺してから、人間と生れて、それでは甲斐が無い、健康で長命の人の味はふ一切の事を、短い生涯にも味はゝなければならないと思ふ。同病の患者の求むるがまゝに身を任せ、妊娠する。それを恥ぢて、たゞでも短い生涯を自分で斷つてしまふ。さういふ經過が、ところどころに感傷的な作者の感想をまぜて書いてあるのだ。三輪には、それが小說として成つてゐるとかゐないとかいふ事は問題では無かつた。何か怖る可き冒險が、目前に迫りつゝある事を、その內容が暗示した。

「どんな風に書いてい〻のかまるつきり見當がつかないんですもの。隨分幼稚でしよ。」

園はこどもこどもした無邪氣な視線を、眞正面から三輪に向けて訊いた。

「僕にはわかりませんけれど……」

三輪は小說の筋に壓迫されて胸苦しかつた。

「驚きました。かういふ內容の小說をあなたが書かうとは思はなかつたものだから。」

「想像よ。まつたく。」

園は忙しく唇を動かして打消した。それが自分の心の中で組立てられた事を否定するやうに。
津田の姿が遠くにあらはれた。
「ほんとに津田さんにいつちやあいやよ。あたし又次の小説を書くわ。出來たら御送りするから讀んで頂戴。」
三輪は自分の手にある原稿を懷に納めて、勢よく立上ると、津田に向つて高く口笛を吹いた。

九

三輪の日常生活は一變した。父が死んで、家は異腹の兄のものになつてゐた。兄とも嫂とも氣が合はなかつた。それが、彼を頼りにする母の側を離れて、久しく寄宿舍に起居させる事にもなつたのだ。我家に歸つても、彼は樂まなかつた。あてがはれた自分の室に閉籠つて机にむかつてゐるばかりだ。とりとめもなく物を想ふ事が多かつた。兎に角規則に縛られ、周圍の抑制に服してゐた寄宿生活とは趣が變つた。その變化は内部にも影響した。
須賀にも矢部にも、著しい變化の起つてゐる事を、三輪は自分の場合と共に認めた。
須賀はしばらく横濱から通つてゐたが、間も無く億劫になつて、芝浦の船宿の二階に間借した。

多年運動で鍛へた體が、俄にひまになつたのだ。何よりも所在なさに惱まされた。春先から秋の末迄、網打や釣の客もあるのだが、冬の間は漁師も仕事が無くて困つてゐた。此の界隈で若い時から鳴らした網勘は、御臺場へ飲料水を運ぶ權利を持つてゐて、どうにかかうにか暮らして居た。その家の二階の六疊に、須賀は机をかつぎ込んだのだ。

踏碎かれた貝殼が、コオクスにまじつてゐる濕つぽい河岸つぷちの、どぶ泥臭い水に臨んだ場所だ。柄にも無く芝居や音曲の好きな、江戸趣味などゝいふ方に心を傾ける事もある須賀は、泉鏡花の「辰巳巷談」の凄艶な描寫を想ひ合せて、自分をその主人公の位置に置いて見度かつた。悪い氣持はしないのだ。

體を動かさないではゐられない彼は、櫓を押す稽古を始めた。埋立の空地へ行つて、網を打つ事も始めた。あつたかくなつたら、友達を誘つて、ほんとに腕をためして見度いといふのが最大の望みだつた。

誰とでも、周圍の者と仲よしになれる須賀は、忽ち網勘一家の信頼を得た。近所の網打やかこ達とも友達づきあひになつた。當分の間こそ、自分丈二階で飯を喰つてゐたが、何時の間にか網勘のおやぢが晩酌の膳に並べて、自分も一銚子つける事になつた。別段酒が好きといふのでは

無く、運動選手としては特に愼んでもゐたのだが、めきめきと頭を持上げて來た趣味だ。十九になる娘が、二人の間に來て酌をする事もあつた。生れた家とも近所ともまるつきり不調和な好みで、娘は當世風の耳かくし、厚白粉に頰紅迄もさしてゐた。網打づれの女房になんか死んでもならないと公言してゐて、何とかしておやぢやおふくろを納得させて、丸ビルか三越あたりの事務員に出たがつてゐた。

「あの娘ねえ、とても不良なんだぜ。」

その容姿にはまるつきり傾倒してはゐないのだが、須賀は屢々娘の動靜を友達に報告した。活動の辯士、洋服着の月給取に對して特別の崇拜心を持つてゐるとか、かぢこで袖を引いた奴をこつぴどく張飛ばしたとか、さういふ類の話だ。須賀はさも面白さうに笑つてゐるのだが、矢張若い女の居る事を常に心に忘れなかつた。

下町の矢部の家は、三輪や須賀の足溜りとなつた。散歩のあげくとか、芝居の立見に行く時とか、其處で落合つたり腰を据ゑたりした。矢部の家はモスリン問屋だつた。父親は後見役に廻つて、當時は兄が店を指揮してゐた。母親は病弱で床についてゐる事が多く、父の世話は妾がしてゐた。老年の父をいたはる妾に對して、矢部は何等の不滿も惡意も持つてゐなかつた。三輪や須

賀が遊びに行くと、その妾が自分でお茶や菓子を運んで來た。

「おしづさん、今晩御馳走してね。」

矢部がさういふ言葉づかひをするのを、三輪は殊の外面白く思つた。矢部はおやぢの妾に甘つたれてゐる――さう思つて須賀にも話した。

三輪にとつて、下町の商家の內部は珍しいものだつた。今の世にも、未だ斯ういふしきたりが殘つてゐるのかと思ふやうな事が多かつた。さういふ周圍の影響は、何事にも敏感な矢部を易々と捉へてしまつた。汚ない洋服を着てゐたのが、何だか品物はわからないけれど、柔かい物を身につけるやうになつた。着物といへばかすりときまつてゐる三輪には、縞物を身につけた友達の姿が、いかにも一人前の大人らしく見えた。矢部は畫家へ通ふ時丈、その着物を脫いで、美術學生らしい服裝に變へた。

三輪から見ると、須賀でも矢部でも、周圍の推移と共に順應する事が巧みだつた。新しい境地に新しい樂みを求めて、容易にそれを我物とした。須賀は船宿の娘やその弟をつれて、活動に行つたり、緣日に出かけたりした。湯屋で近所のかぢこにでも逢ふと、歸りには濡手拭を肩にかけたまゝ、安値な洋食屋でいつしよに酒を飲むといふ風だつた。

近所の奴がねえ、網摲とこの書生さんていふんだぜ。」

書生さんといふ近頃はあまりきかない言葉で呼ばれるのも須賀の得意とする所だつた。氣さくな書生さんだとか、話のわかる書生さんだとかいはれるのが、彼の趣味に媚びるものだつた。大好な二番目狂言の味を、さういふ生活の間に求める好奇心が強かつた。

同じ傾向が矢部にもあつた。西洋畫に心醉し、殊に近頃は自分の日本的な纖弱な色彩感や、手法を、強ゐてもしりぞけようと努力してゐるくせに、器用で、感傷的な持前が、彼の意圖するのとは全く反對の方向に、新奇を喜ぶ心を誘惑するのであつた。生れた家の力、都會の中心に根を下した父祖傳來の好みか、過剩の感激性に悩む若者の上に容赦無く壓迫を加へて來た。つまらない事にも凝性があらはれた。何處其處にうまい喰物屋がある、鮨なら何處、天ぷらならあそこといふやうな事迄、矢部はひとつの興味とした。つい此間迄、學校附近の洋食屋で、飯つきの一品で滿足してゐたのとはまるつきり違つてしまつた。

散歩の時も、矢部は隅田川の情調や、築地河岸の風情を云々する事が多くなつた。油繪の立體的描法のむづかしさを征服しようとあせりながら、早くも其處に一脈の無理を感じ始めた。それよりも祖先傳來の淡彩の詩趣に溺れる事は容易で且自然だつた。

「矢張日本人は日本人だよ。ヴァイオリンよりは三味線、耳かくしや前分髮よりも島田や銀杏返の方がいゝからな。」

須賀は矢部の趣味の推移を、自分の年來の主張に追隨して來たものと思つた。

三輪は自分一人取殘される感があつた。須賀と矢部とが親しさを增すのと反對に、彼は段々孤獨になつた。己れを守る事が深く、他に動かされる事の少ない彼としては當然だつた。三輪自身、長い時間を經過して、自分の心のどん底から次第に移り變る事の外、內外共に變化の少ない自分なのだと思つてゐた。彼は矢部の日常生活にも、又趣味性の推移にも不服だつた。新藝術の創造をはゞむ一切の趣味はいさぎよく排斥しろ、熱情をもつて、執着をもつてまつしぐらに進め。後をふりかへるな。彼は友達の安價な回顧趣味を罵倒した。

「君のは議論だよ。」

須賀は三輪の一本調子を輕く受流したが、矢部には友達の非難が痛かつた。

「僕は自分でも意氣地が無いと思ふ。油繪の本道は趣では無い、物の實體感をそのまゝ畫布に盛上る事だと思ふ。それを自分でやつて見るといふ欲求は強いのだ。しかし、吾々の心の底に培はれた藝術觀賞のひとつの標準として、情緒を尊ぶといふ事が如何に根ざし深いものか、それも段

々わかつて來た。そいつは怖い、そいつに負かされるぞと思ふんだけれど、正直のところどうにもならない底力があるんだ。」

時には涙ぐむ程の感激をもつて、彼は自分のうつり易い性格を嘆く事もあつた。

さういふ風に議論めいた事は須賀の好まない事だつた。彼は持前の頓智で議論の腰を折る手を知つてゐた。

「駄目だよ、三輪君。直ちやんはビフテキも喰ひ度いが湯豆腐も惡くないといふんだ。君だつて純日本式の娘も綺麗だと思ふだらうし、當世式の令嬢も美しいと思ふだらう。それが自然で、一番正直なんだ。」

折角眞面目な話をしてゐるのに——と、三輪は呑氣な友達の言葉を忌々しくも思ふのだが、そんな無駄話にも引張られて、又その方に熱中して論じあふ事もあつた。

須賀はよく女の話をするやうになつたとは、此の頃三輪の屢々感づく事だつた。彼は女に就いて人と話をする勇氣が無かつた。自分に慾情の芽生のあらはれて來た頃、彼はそれを神聖を汚すものゝやうに憎んだ。その頃、女にはそんな不快な情慾は無いものと固く信じてゐた。世の中の男も、すべて女の如くきよかれと願つた。その夢は破れたが、今もなほ女を聖壇に置かうとする

心は殘つてゐた。だから、須賀が船乘から聞いて來たやうな話をすると不愉快だつた。その癖もつときはどいところ迄話の進む事に期待をかけるのだ。芝居、小說、繪畫——その他いろいろの事に藉りて、實は女の話をする事が珍しくなくなつた。
「直ちやん、君はロビンの娘をどう思つてゐたんだい。」
須賀はすべてつけつけと、切込んで訊くのであつた。
「何云つてんだい。」
矢部は眞赤になつて打消すのだ。
「だつて毎日通つてゐたぢやあないか。」
「お茶を飲みに行つたのさ。」
さう答へる矢部も、輕い冗談らしく話をあつかふ餘裕を見せるやうになつた。
或時は園の噂も出た。誰しも、女の話をする時は、自分達が著しく大人になつた事を意識した。

十

正月の休暇には、久振で須賀と矢部と三輪と三人揃つて津田を見舞つた。津田は段々健康を恢

復しつゝあつた。自分では退院しても差支無いと思つてゐるが、醫者の言葉に從つて春迄辛抱すると云つてゐた。日に燒けた頰の色は、三人よりも丈夫さうに見える位だつた。

試驗の時期が、あわたゞしく切迫して來た。平生學科以外の本ばかり讀んでゐる罰で、三輪は先づノオトから準備してかゝらなければならなかつた。

その不愉快な幾日間、彼にはひとつの慰めがあつた。園との文通である。文字は言葉よりも雄辯だ。勿論用事は無い。日々の感想の羅列に過ぎない。それが彼の排斥しようとする感傷的な字句でいつぱいだつた。しかも、自分の感想を述べるといふよりも、相手の感情を引きつけようとする意圖をもつものだつた。否めない事實だ。三輪は自分の心事をこころよく思はなかつた。

自分の境遇のまゝにならない事を誇張する事もひとつの手段だつた。父の死んだ事、異腹の兄が、自分と母とをないがしろにする事、自分の小說家たらんとする志望を、兄や母や親戚の者がはげしく拒否する事——それからそれと、一切の身邊の事をみじめなはかない色彩で塗りつぶした。

わたくしも父に死なれた身の上です。

園からの返事の中に、かういふ文字を見出した時の三輪の心の動搖はみつともない程強かつた。

自分の身の上話を、あまり手際よく小說化した事を恥入つた程だ。
さういふ手紙のやりとりの間に、園の境遇も物語られた。父親が死んでから、はで好きの母は、有名な政治家の後妻になつた。その母にとつての第二の良人を、園はあく迄も憎むといふのだ。圓滿な境遇の人で無いといふ事が、一層親しさを增した。
わたくしはあなたが好きなのです。好きといふのは變でせうか。かまはないでせう。あなたは須賀さんや矢部さんのやうに可愛らしい人ではないのです。一人で大人ぶつてゐる津田さんよりももつと氣むづかしやで、自分で自分を信用しない厄介な性質を持つてゐる人なのです。それでも、それがいゝのですわ。
面と向つてはいへない事も、手紙ははゞかり無く傳へた。この手紙を手にした時、彼は大きな危險に遭遇したやうな震撼と同時に、歡喜の淚で眼の中があつくなつた。一も二も無くその人物評を肯定した。何となく、自分は同輩の者に勝る思想家か何かのやうな自惚に醉つた。三輪はその時の手紙の全部を暗誦してしまつた。
試驗の間際だつた。園から、上京するといふしらせが來た。上京しても、母の家に一晚丈泊まる、あなたは試驗前だから御目にはかゝりません、と書いてありながら、何時何分の汽車に乘る

とはつきり斷つてあつた。

これが初めての經驗である。先方の家の人が出迎に來はしないかといふ懸念もあつたが、三輪は停車場で待つた。これ程人目を憚かる心持を曾て知らなかつた。同じ學校の生徒の徽章が、到るところに光つてゐた。

汽車が着いた。澤山の人の群の中に、さつさと一人で歩いて行く園がゐた。ちひさい手提と傘を持つて、上半身をうつむき加減にして歩を運ぶ特徴が、その人をはつきり刻み出した。誰も出迎の人はゐないと見て、三輪は直に後を追つた。

「まあ。」

あかるく誇張した表情を見せて、握手するやうに手を差出した。さういふ所作を、何のわだかまりもなく敢行する技能を持つてゐた。三輪は胸をときめかした丈で、その手と機會をつかむ事が出來なかつた。

「よく來て下すつてねえ。試驗は。」

「大丈夫ですよ。」

ほんとには心に觸れない言葉をかはしながら改札口を出た。驛前の廣場を、輕いほこりが白く

吹かれて過ぎた。
「東京は寒いわ。」
肩かけの端を鼻の上迄引上げて體を細くした。顔の下半部がかくれて、長い眉毛と黒い瞳が一層はつきりした。
三輪は一緒に歩く事を空想してゐたのだが、ほんとに寒むさうな姿を見て當惑した。
「どうしませう。何處かで御茶でも飲みませうか。」
先方が察して、口を切つてくれた。
「早く歸らなくてはいけないんでせう。僕は何となく來てみたくなつて來たんですけれど。」
「いゝのよ、いゝのよ。」
早口に打消しながら、さつさと先に立つて誘つた。驛の構内の食堂の一隅に、二人は安易な席を見出した。卓をはさんで腰かけて、園は無言で笑つた。その微笑が、三輪には、心の底を物語るものに思はれた。
「あたしねえ、もう直き退院しようかと思ふの。もう病人では無いのよ。ね、こんなに肥つたでせう。」

腕時計の絡む手をのぞかせた。靑い靜脈の走る滑かな皮膚を見た。手首から先は、海岸の日にさらされて、パンのやうに柔かく焦げてゐた。

三輪は適當な會話をひとつも持つてゐなかつた。園のいきいきした話振を見守る丈だつた。血色も著しくよくなつた。肉體の囘復が、精神を一層快活にした。唇は紅茶に濡れて紅かつた。

退院したら、鎌倉か逗子に家を借りて、其處で勉強する、創作をする――

「ねえ、あたしみたいなものだつて勉強さへすれば書けるやうになるでせう。あなたと競爭よ。」

何事も此の人にとつては樂しい遊びだつた。三輪とても、來年卒業しても月給取なんかにはならない、どうしても文壇に打つて出ようと思つてゐた。處女作の發表と同時に、作家としての地位を確立してやらうといふ野望をいだいて、期待に陶醉してゐるのだが、制作の苦しさは充分知悉してゐた。まゝ事のやうな園の考には、自分の精進しようとする道を安く値ぶみされたやうな不足も感じた。しかし、明るい希望ばかりを無邪氣に話す心持に誘はれる心も充分あつた。

「あたし行くわ。いゝでせう。」

小半時間の後に別れた。園を乘せた自動車は、廣場をつつきつて走り去つた。

とりとめも無い會談も、三輪にとつては重大な意味を持つてゐた。心の底にうごいてゐて、はつきりした方向を定める事を惧れながらもいつくしんでゐる心持に、俄に重壓の加はつた事を知つた。

試驗が濟むと、直に海邊の病院を見舞つた。不潔な、黴菌の巣のやうな宿屋に數日を送つた。藥品の香のぷんぷんする室も夜着も、まづい食事も、洗面所の汚なさも忍べた。日ましに元氣のよくなる津田と園と、晴れた日も雨の日も共に暮らした。

春だ。病室の中にも草花の鉢が新鮮な色彩を浮べてゐた。海岸の草生は淺い綠を敷いた。潮の上にも氣候の推移はあらはれてゐた。たゞ教授の爪があがつてゐなかつた。

「あの人は熱が出て、此の頃よくないんだ。自分の退院の日が近づいて來たのが、何時迄も直らない人達に對して申譯ないやうな氣がするぜ。」

津田はさういつて苦笑した。いつも首席を占めて來たのが、一年遲れてしまつたのを口惜がつてゐたが、病氣の點では他人よりも惠まれてゐた。彼は新學期の開始と同時に、寄宿舍に歸る事を樂んでゐた。

「あの教授ねえ。」

津田はしばらくして、途切れた話を蘇生させた。いつも休む砂山に、二人きりで並んで日光を浴びてゐた時だ。

「園さんに結婚を申込んだ事があるんだぜ。」

「ふうむ。」

三輪はさり氣なくうけたものゝ、動悸がたかく胸を打つた。

「斷られたさうだ。」

冷かな態度を失はずに津田がいつた。教授は數年前に夫人を失つた。此の病院で死に、向ふに見える山裾の火葬場で灰になつたのだ。良人に病氣を殘して行つた。しかし、病人といつても輕症なので、教授は回復を疑はなかつたに違ひ無い。津田の話を聞いて、三輪はいつも凧のあがつてゐた川べりの空を見て默した。求めた人を得ず、健康を失ひつゝある不幸な人を我身の事にして考へた。

「三輪君。」

不意に津田がこつちを向いた。何か決意を示すやうな意氣を含んでゐた。

「間違つたら失敬。」

はつきりと斷つて、澄んだ眼が險しくなつた。
「君、園さんを想つてゐるんぢやあないか。」
三輪は頭が燃えた。津田を直視する積りでゐながら、眼の前に靄がかゝつてしまつた。唇が乾いて、不自然な聲が出さうだつた。
「どうして。」
「どうしてといつて、さう思つた丈の事だ。間違つたら失敬。」
津田もそれつきり何もいはなかつた。不愉快な意地が何時迄も二人を默させた。ゆつたりと寄せて、渚を濡らして引く海に面して、苦行の僧の如く試練を受けた。

十一

三輪は心に重荷を負つて東京へ歸つた。それをまぎらす爲めに、直ぐに矢部をたづねた。何も知らない矢部は、最近の作品を出して彼の批判を求めた。二人は藝術論に長い時間を費して、すつかり疲れてしまつた。
「五郎さんにもちつとも逢はないが、休み中は横濱に歸つてゐるのだらうねえ。」

「いゝえ，芝浦にゐるよ。昨日遊びに行つて，一日船で暮らして來た。」
須賀が自慢の櫓を押して，羽田の方迄漕いで行つた話をした。
「今度は網を打つて見せるといつて居た。あの分だと，船頭か網打にでもなる氣かも知れない。」
「まさか。」
「いゝえ，なりかねないわけがあるんだ。」
矢部は急に嚴肅な顏になつて，一寸は信じ難い話をした。須賀が童貞を失つたといふのだ。試驗の濟んだ祝に，若い船乘達と酒を積んで沖に出た。臺場附近で網を打つて廻り，獲物を肴に飮んだあげく，須賀は胴の間に醉ひつぶされてしまつた。外の者の評議は一決した。かねて，女を知らない須賀を珍しがつて居たのだから，面白づくと親切心で船おろしをさせてしまへといふ事になつた。それが先達の任務のやうに考へてゐるのだ。潮に濡れた姿の儘で，船を棧橋につけた。搖起された須賀の頭の上に，靑樓の二階がおつかぶさつてゐた。みんなに手をとられて，そのまゝ未知の世界につれて行かれた。船の者の荒つぽい酒盛が又始つた。欄干を越えて海は黑く，夜になつた。
「あゝいふ連中にあつては，五郎さん手も足も出なかつたさうだ。」

矢部は話を切つて笑つた。三輪は呼吸をころして聞いてゐた。曾てさういふ場所の事は、小説や芝居や錦繪で知つてゐるばかりで、實際の經驗を持つてゐないのたから、好奇心は充分にあつた。しかし、自分の友達が、船頭達に強ゐられて、遊女によつて初めての經驗を得たといふ事は不愉快だつた。それを、心なく笑つてゐる矢部にも少なからず不平だつた。

「なんだか少し月並過ぎる場面だなあ。」

三輪はあまりに話に熱中するのを恥ぢて、わざとさり氣ない言葉を口にして見た。いかにも自分ながら内心とはそぐはない感があつた。

「ところがねえ、五郎さんは夜中に目をさまして、逃出して來たのださうだ。」

さう聞いて三輪は安心した。友達は未だ自分達と同樣に、重大なる經驗を經てゐないといふ心があつた。

氣が附いてみると、須賀は床の中に寢てゐた。白粉と香料と、人いきれが鼻をついた。彼は起上ると、引止められるのを振切つて歸つて來た。夜更の町を歩いた記憶も殘つてゐない程醉つてゐた。網扨の戸を叩くと、娘が起きて來て二階に助けあげてくれた。苦しがつて吐くのを、水を飮ませたり藥をのませたりしてくれた。須賀は夢の中に契つた。

矢部は沈鬱な様子で口を閉ぢた。三輪には何ともいへない震撼が來た。その中に、何か先んじられたやうな嫉妬があつた。不意に場景を想像して顔が紅くなつた。
「どうして君は知つてゐるんだ。須賀君が自分で話したわけでは無いだらう。」
「話した。昨日行くと、どうも娘の五郎さんに對する樣子が變なんだ。だから、からかつてやつたら、白狀した。驚いたよ。あの人は、何事もかくさないといふ平生の信條の手前、かくせないのだね。」
「ふうむ。」
三輪には、その心持は不可解だつた。常々須賀があけすけを主義とし、何事にも拘泥しない事をほこりとしてゐる事は知つてゐるが、此の事丈は別のやうに思はれた。
「どうせ一度は通る道だ――五郎さんはそんな事を言つてゐた。」
「しかし、あんな女だと後が面倒ぢやないかしら。」
「だから船頭になるんぢやあないかと思つてね。五郎さんはやりかねないからなあ。」
「驚いたなあ。」
三輪は、さまざまにその將來を考へてみた。小說の耽讀から、世の中の裏のうら迄知識として

は知つてゐても、實際は何から何迄無經驗だ。男女間の事なども、日常茶飯事のやうに考へるのが大人らしいのだといふ見榮に似た心持も充分にあるのだが、世間知らずの純情は、もつとロマンティックな戀愛を崇拜してゐた。自分や、自分の友達の場合は、熱情のあるものであり度かつた。いたづらや、氣まぐれでは安つぽくていけないのだ。學業を放擲し、將來の社會的野心も捨て、海を家とする船頭になるならなれ。しかし、不良少年と不良少女の關係であつてはいけない。

三輪は何かなしに昂奮し、頭はすつかり混亂してしまつた。

翌日、三輪は知らん面をして須賀の宿をたづねた。行かないではゐられない焦躁があつた。河に近い橫町を埋めて、蠣殼が白く日に光つてゐた。泥くさい潮の香は、むせるやうに濃く面を打つた。歩くと汗の出る日だつた。

「須賀君。」

往來から二階にむかつて呼んだ。障子をあけて顏を出したのは娘だつた。何時もは束髮なのが、銀杏返しに結つてゐた。眞白な顏が引込むと、しばらくして須賀の巨軀が窓にあらはれた。

あわてゝ下りて來る娘と入れ違ひに二階に上ると、須賀は須賀らしく亂雜な室にゐた。

「晝寢さ。ぽかぽかして來たもんだから。」

ころがつてゐる枕をつかむと、向ふの隅に放り投げた。此の頃たしなむ烟管から吸つた烟を吹く顔面に、何か以前とは違ふ表情があるやうに三輪はひがんだ。
「休みになつてもうちには歸らないのか。」
「歸つても爲方が無い。それよりも投網の稽古をしてゐる方が面白い。」
「昨日直ちやんにあつたら、君は網打になるのぢやあないかと言つてゐた。」
わざと始めた何でも無い話が、自然と心の底にこたはつてゐる事の方へ落ちて行つた。
「直ちやんに逢つた？」
何事にも驚かない事をほこる須賀の態度にも一瞬間動搖があつた。それを打消すには、一切をぶちまけるのが彼の遣口だ。
「きいたかい。しくじつちやつた。」
流石に顔が紅くなつた。何時も笑の表情ばかり示してゐる顔がゆかんで、泣くやうな影が過ぎた。三輪には言葉が無かつた。大きな不可抗力をもつて、背中をどやしつけられた感じだつた。
二人とも默つて、疊の一てんに視線を落してゐた。裏手の川を漕下る船の底を打つ水の音が、呑氣に聞えるばかりだつた。

「いゝ天氣だなあ。」

三輪は縁側から首を出して川の面を見た。沈默の逃場を見出さうと努めたのだ。

「船を出さう。」

須賀も友達の救ひに心が晴れて、いきなり立上ると裸になつた。手早く、網勘のお古を貰つた紺の股引を穿いて身支度した。

「おい、うちに麥酒あるかい。」

須賀は梯子の下に聲をかけた。

「麥酒？　どうすんの。」

「船に積むんだ。二三本買つて來てくれないか。」

上と下でいひかはすのが、ひどく親し氣に聞えた。つい此間うちとは全く調子の違ふものだつた。

河岸の棒杭にもやつてある船で二人は待つてゐた。娘は兩手に麥酒瓶をさげてかけて來た。袂からコツプと栓抜を出して渡しながら、

「行つてらつしやい。」

といつた。それは客を送る時の言葉なのだが、特別の意味を持つやうに聞えた。

三輪は胴の間に坐り、須賀はめつきり練習の積んだ櫓を押した。岸に立つてゐる娘を残して、芥をのせて澱む水の上を、船は眞直に海へ出た。

無風の日だ。晴れた空は重苦しく水に接してゐた。凪ぎわたつた沖の方で、網を打つ船が幾艘もあつた。その船の近く迄行くと、船の者は須賀を知つてゐて、互に聲をかけ合つた。

「あつたかい日だなあ、すつかり汗になつてしまつた。」

須賀は顔の汗を拭きながら、臺場と臺場の間の、比較的に水の綺麗なところに船をとゞめた。

「麥酒飲まうか。」

「飲まう。」

コツプに泡の吹上るのに口をつけた。二人とも直ぐに顔に出た。

「直ちやん此の頃遊び始めたつてねえ。」

突然須賀がいたづらつ子らしい笑を浮べていつた。

「遊ぶつて?」

「藝者遊びさ。」

「誰に聞いた。」
「本人がさう言つたよ。歌澤の稽古に通ふ氣も動いてゐるらしいぜ。僕がうんといへば一緒に始めようといふのさ。」
三輪は不愉快だつた。須賀と矢部とが、何でも打あけあつて話をし、自分を除外してゐるといふ不平もあつた。それよりも矢部の移氣が不平だつた。あれ程繪畫に熱情を持ち、一心不亂にその道を勵むと宣言したのが、忽ち頽廢期の音曲などに心を誘はれるとは如何したのだ。そんな奴にほんとの藝術上の作品なんか生めるものか　彼は自棄に似た心持で麥酒を飲み干した。
「直ちやんには直ちやんらしいロオマンスがあるんだぜ。」
須賀は相手の心持には頓着無く、面白さうに話すのであつた。矢部が近所の齒醫者で、小學時代の顏見知りの女にあつた。それが柳橋の藝者になつてゐる。昔馴染のなつかしさで、料理屋へ出かけて、呼んだ。一時的に熱中する彼の事だ。今はその外の事は二のつぎだといふのだ。三輪は、昨日逢つた時に何の話もしなかつた矢部の白々しさを憎んだ。麥酒の醉が一時に發して來た。
「世の中は變つたよ。」

須賀も眞赤な顏をして、嘆息するやうにつぶやいた。
「僕はしくじる。直ちやんもどうなるかわからない。實際むかし考へてゐた世の中では無くなつた。これが現實か。現實糞を喰らへだ。」
須賀は立上ると、シャツを脫ぎ、股引をとつて素裸になつた。
「泳がう。」
いふと同時に、美事なフォオムで飛込んだ。酒氣を帶びて水に入る事のよくないのは承知してゐる。汚れた體や根性を、冷たい水で洗つてやれといふ勢だ。須賀は眞一文字に沖に向つて拔手を切つた。
「おゝい、飛込まないか。」
船に殘つてゐる三輪に聲をかけた。
「寒いだらう」
「存外寒くないよう。いゝ氣持だ。」
三輪も何か鬱屈した不滿があつた。須賀も矢部も、意志の弱さから間違つた道に踏入つたのだとも考へたが、何だか自分よりも先に行つてしまつたやうな氣もした。自分丈か取殘された氣が

した。畜生──彼はいきなり着物を脱ぐと、須賀と同じ型を見せて、あふれるやうに盛上る潮の中に飛込んだ。勿論つめたかつた。きちがひじみてゐるぞとたしなめながら、平生の自分とは違ふ自分を痛快に思つた。須賀のあとを追つて水を蹴つた。

「俺はまだ純潔だ。」

彼は水の中に動く自分の四肢を見て、力強く思つた。

十二

葦の中につないだ端艇に、須賀と矢部と三輪は、青空を仰いで寝てゐた。下潮の淺瀨には毛深い脚を持つ蟹がはひ廻り、ぬるんだ水は目的も無く、つぶ〳〵泡を吹いてゐる。雲雀が葦をかぎりに啼きながら、草の中から飛立ち、又矢のやうに舞下る。舞下るところには、雛鳥のかぼそい聲が餌を待つてゐるのである。

適度の運動の後で、日光を浴びてゐる三人の顏面にも、むき出しの腕や太股にも、脂肪が浮いて滑かな光澤を加へてゐた。須賀は全く眠つてゐた。つい今迄「街の子」の唄をうたつてゐたのだが、輕い鼾を立て、盛上つて肉の厚い胸には健康な呼吸が大きく打つてゐた。

「ねえ、僕達の子供の時分、春が來た、何處に來た、山に來た、野に來た、里に來たつていふ唱歌があつたの知つてる？」

何を思つたのか、ふいに半身を起した矢部は、額や鼻の廻りの汗を拭きながら話しかけた。

「知つてる。しかし僕は忘れた。」

三輪は目を開いて、だるさうに答へた。

「僕は思ふ。水にこそ春の來た事が一番はつきりあらはれてゐやあしないかしら。水の色、盛上つたり、流れたりする重味のある線、さゞ波のたち方迄春だぜ。水はいゝなあ。」

感激性の過剰に悩む矢部は、舷を打つ水の行衞に遠く目をやつた。色彩感の豐富に惠まれた身の幸福が、全身の血に感じられた。

三輪は友達の横顏を見てゐた。白い額に午後の日がてりかへすばかり輝いてゐた。若々しい血色が、頰にも胸にも漲つてゐた。たつた今、矢部が口にした唱歌は、固く結んだ脣の邊にまで漂つてゐるのだ。幼稚な、單純な歌を、何の意味とも知らず力いつぱいの聲を張上げてうたつた幼年の日の自分達の姿が、眼前によみがへつて來た。それなのに、どうしたものか「ゆく川の流は絕えずして、しかももとの水にあらず」といふやうな、彼の感傷癖にぴつたりはまる心持がつゞ

いて來た。

年少の頃の、只管延びんとした自分達の心に、既に何かむしばんで來つゝある陰影のある事が惱ましかつた。矢部も須賀も、純潔を奪はれた人間のやうに見えて來た。自分と彼等との間に、明かに一線を劃した感があつた。否、キリストの眼を以て見れば、自分と雖も幾多の姦淫を犯したものに違ひ無いのだ。三輪は友達の額に光る日光に目を細くした。內心の恥と皮膚の燒ける暖かさで、首筋から胸へかけて汗が滲み出して來た。

「水はいゝ、實にいゝ。見てゐると飛込みたくなる。」

矢部は未だ恍惚として川水に見とれ、繰返して讃嘆した。

「飛込み度くなる。此間五郎さんと二人で、御臺場を一周した。」

三輪も誘はれてからだを起した。

「元氣だなあ。つめたかつたらう。」

「つめたかつた。そのつめたいのが素敵にいゝ氣持なんだ。滅茶々々に水の中であばれてやつた。」

その日の景色ははつきりと殘つてゐる。須賀が船宿の娘とたゞで無い關係に陷つた事をたしか

めた時の不快を、きちがひじみた行爲が一時的に救つてくれた。まだ三月の潮は、四肢の運動を自由にしなかつたが、須賀も三輪も亂暴なクロオルで競泳も試みた。臺場を一周して泳ぐ海獸のやうな自分達の姿を嘲りつゝ、鬱屈した胸のつかへを叩きつぶさうと欲したのだ。それは一時は痛快だつた。しかし、全く一時の痛快丈だつた。成熟した人間の上にのしかゝる悩ましさは、紛らし切れない根強さをもつてゐた。

時候外れの海水に全身をひたして、夢中になつて先頭を爭ふ二人の友達の心持が、矢部には充分わかるやうに思はれた。どうといつて説明は出來ないけれども、何だか自分自身がやらうとする事をやつてくれたやうな共感があつた。不思議に胸の迫る感じで、二人とも默した。

引きゝつた潮は又ゆたかに滿ちて來た。日輪の位置が遠くなると、葦原に風が出た。なま溫い南風だ。その風と浪にさからつて、端艇は川下へ漕下るのであつた。須賀と三輪がオオルを握り、矢部が舵を引いた。先刻上る時よりも、艇脚は遙かにのろく、船底を打つ重たい波の爲めにあふられて、漕手は一倍力を要した。努力が心を緊張させた。二人の櫂は水禽の翼のやうに開いては水を打つた。薄暮に、代地の貸船屋へ着いた。

「あゝくたびれた。」

三輪は顔中からぽと〳〵汗を垂らして岸へ上つた。
「湯に入らうぢやないか。」
須賀もシャツの袖で顔を横撫でにしながらはあはあ云つてゐた。
着物を着換へて、近所の錢湯に行つた。湯から上ると、空腹で氣が遠くなるやうだつた。
「何か、ううんと身になり血になる物を喰ひ度いな。」
須賀は往來の人が振返つて笑ふ程大きな聲を出した。
「身になり血になる物だつて？　矢張り牛肉か鳥だなあ。素敵にうまい間鴨を喰はせようか。」と
並んで歩いてゐる矢部も眞劍になつて相談に乘つてゐた。運動の後の健康な慾望が、力強く働いてゐた。三輪は二人の後から骨髓迄疲れ切つたからだを運んでゐた。運動場をかけ廻つたのは昔の事になつた。長い間の過度の讀書で、からだはなまになつてゐた。年中船頭にまじつて暮してゐる須賀と張合つて端艇を漕いだもの丶、すつかり參つてしまつた。あまりに疲れたゝめか、食慾さへも失つた。目的も無く希望も無い人間のやうに、たゞ連れの行くまゝについて行くばかりだつた。
不意に、先の二人が細い横町に曲つた。あわて丶追つく三輪の姿を待ちながら、矢部と須賀は

相談してゐた。
「いゝさ、構はないよ。僕に任せて置きたまへ。」
さういふ矢部の様子だつた。
「どうした。餘程弱つてるね。」
「すつかり參つちやつた。われながら文弱になつたよ。」
三輪はわざと力無く答へた。
「そんなに參つてるならもう歩かせないよ。」
矢部は鼻の上に皺を寄せて、須賀と顏を見合せて笑つたが、いきなり目の前の門構の家に入つて行つた。須賀も肩を並べて、打水をした敷石を踏んで行つたが、三輪は不意打を喰つて往來に殘された。粹ないきなつくりが、無經驗の彼を脅かした。
「おい。どうした。來いよ。」
矢部の姿は格子の中に消えてしまつた。須賀がふりかへつて促した。場所柄も考へずにふるまふのが彼のやり口だが、流石に聲を低くしてゐた。
三輪は赤面した。逃出す勇氣も無かつた。みつともないとは思ひながら甚だうじ／＼した態度

で、門内に足を踏入れた。石だゝみのかゝりに際立つて白い盛鹽の存在にさへ、歩調が亂れた。丸髷の女中に案内されて、長い廊下の奥の茶室めいた部屋に通ると、矢部は床柱に背をもたせて、我家のやうにくつろいでゐた。

「お腹が空いてゐるんだ。間鴨をどつさりさういつてくれないか。」

出て行く女中の後から、さういひながら、追かけて彼も廊下に出た。障子の向ふで親しい口をきいてゐるのを、三輪は堅くなつて耳をすました。

食卓の上に手際よく盃泉や箸を並べ、女中はみんなに酒を強ゐた。

「僕飲めないんです。」

「まあおひとつ位よろしいぢや御座いませんか。」

三輪はさういはれると盃を手にしないわけにはいかなくなつた。酒は強く、舌を刺し、はらわたに沁みた。須賀が酒を飲み馴れた事は知つてゐたが、矢部の器用に猪口を手にしたのには驚いた。

「こゝの家、待合か。料理屋か。」

「待合さ。」

勿論さうだらうとは思つてゐたのだが、はつきり辨別する力は無かつたのだ。女中がゐなくなると直ぐに訊いた。矢部の返事がいかにも輕蔑してゐるやうに邪推された。此の土俵では、とても角力にならないと思つて、三輪は一層堅くなつた。今に藝者が來る。それが矢部の幼馴染か。それと矢部と、どういふ仲なのだ——二つ三つ斷り切れないでうけた酒は、忽ち全身に廻つて、頭がぼんやりしてしまつた。

藝者があらはれた。二人、三人とつゞいて入つて來た。みんなが、矢部と完全に友達だつた。

「やあさん、先日は。」

「今日はどちらへ、やあさん。」

さういふ風にみんなが呼んだ。さういはれる奴は、ひどく惰弱な、ともに齢出來ない人間のやうに思はれた。三輪は心樂まなかつた。

殊に藝者でも女中でも、須賀や三輪の書生風を珍しさうに、見て見ないふりをしたり、見ないやうにして見たりするのがはつきりわかつた。

「こちら、とてもきちんとしてゐらつしやるのねえ。やあさんみたいな不良とは違ふんでしよ。」

「そりやあ違ふわよ。あたし學生さん大好き。いやみがなくていゝわねえ。」

年齢からいへば、たしかに自分よりも若いのが、人を人とも思はない口をきくので、一層こつちは意氣地が無くなるのだつた。彼は間鴨の鍋の中に救を求めて、しきりに箸を動かしてゐた。須賀は、如何なる場所でもめげたさまは見せまいとする平生の心がけから、一生懸命で藝者とも口をきゝ、つとめて盃のやりとりもしてゐたが、それはいかにもわざとらしく、周圍と調和しないものだつた。

おなかゞはつて來た上に、つい飲まされる酒の醉が出て、三輪は睡くなつた。晝間の疲勞が容赦なく嵩にかゝつて來た。

「あら、あちらおねむいんぢやないの。」

一番若い藝者が、甘く見た態度をはつきり示して指さして笑つた。三輪はみんなに笑はれたと思ふと、一時に醉が出て目が眩んでしまつた。到底自分の力では持堪へられない舞臺だと見極めをつけて、

「醉つた、醉つた。」

といひながら横になつてしまつた。下手な芝居だつたかなと思つたが、そんな事に拘る丈の力も無く睡くなつてしまつた。

「あなた、お枕。」

さういはれて頭を持上ると、座蒲團の二折にしたのをあてがつて呉れた。目の前に女の膝が迫つて、何か香料が強く鼻をついた。それがひどく忌々しく思はれたが、相手が立つてしまふと堅く目をつぶつて、記憶に殘る香をなつかしく思つた。

座にゐる女は、みんな若く美しかつた。一人々々の顔の特徴などは、はつきりと認めがつかなかつた。どれが矢部の幼馴染かしら——うつら／＼しながら想像してゐるうちに、ほんとに睡つてしまつた。

何か耳のそばでさゝやかれて目をさますと、先刻はゐなかつた女が、自分の肩に手をかけてゆすぶりながら、おつかぶさるやうにのぞき込んでゐた。

「お起きなさいなねえ、不景氣つたらないわよ。」

無理にも起し兼ない勢だつたが、三輪は體を上げなかつた。

「だらしがないのねえ。そんなならあたし一人で頂くわ。」

忽ち三輪にはあいそをつかして後を見せると盃に手を延ばした。

「飲むのかい。隨分醉つてるぢやないか。又からだをこはすぜ。」

矢部がいひつゝ酌をした。

「いやだわ、やあさん、おつや姐さんだとばかに親切ねえ。」

「そりやあ無理もないわよ。ふりわけがみのつていふ仲なんですものねえ。」

若い二人が一齊にはやしたてた。

「あゝ此の人か。」

須賀が大きな手に盃をとつてさしつけた。

「何が此の人です。」

「いゝえ、直ちやんからのべつにきかされてるものだから。」

「よせやい、五郎さん。」

矢部が型通りのせりふで受けた。一座は急に賑かになつた。おつや姐さんと呼ばれる女は、煮つまつた鍋の中から肉片をはさんで自分も喰べ、その箸で矢部にも喰べさせた。

三輪は又新しく醉が發して目をつぶつた。何か胸のふさがる、なさけなさだつた。瞼のうらに涙さへ感じた。

「僕、失敬する。」

しばらくたつて、三輪はむつくり起上つた。
「まだいゝだらう。」
「待ちたまへ、一緒に歸らう。」
矢部と須賀と、外にも女達の聲が一どきに止めたけれど、此の機をはづしてはといふやうな意氣込で部屋を出た。
「待たないか。」
もう一度須賀の聲が追かけて來たが、三輪は頓着しなかつた。玄關で帽子をうけとると、眞直に往來に出た。中空に霞んだ月がかゝつてゐた。夜の空氣が心地よく顏を打つた。すが〳〵しい心持を取返したやうに大きく呼吸した。
「おゝい、待てえ。」
後から須賀が追かけて來た。彼の大きな體は三輪よりも醉つてゐた。
「直ちやん、どうした。」
咎めるやうに三輪が訊いた。
「直ちやん？　直ちやんはおみこしを据ゑちやつた。あの分ぢやあ泊りさうだね。」

須賀は相手の不機嫌に反抗するやうに、わざとあくどく答へた。

十三

昨日迄、同じ道を歩いてゐた須賀と矢部が、お互にかたちづくつて居た型を脱して、三輪は一人取殘された姿になつた。鋭い刺戟だつた。殊に、友達が二人ながら、何等の悔も無く、無雜作に清純を失つた事が、生れながらに理想派の根ざしの深い彼にとつては痛手だつた。つい此間迄、同じ熱情を持つて美化した戀愛を空想し、憧憬し、崇拜し、肉慾の爲めの男女の結合を侮蔑したのが、俄に力を加へて來た本然の慾望にたやすくうちのめされてしまつたのか。それが當前(あたりまへ)なのだ、誰しも通る道だ、とは思へるけれど、信じるのはいやだつた。お前も欲しつゝ、たゞ怖しさに足を踏込まない丈なのだと囁くものがあつたが、三輪は強情に頭を横に振つた。此の廣い世の中で、互に擇んで結びつく人と人との關係に、超自然の神祕の色彩が欲しかつた。よしんばそれが空想であり、その慾情には打勝ち難いものだとしても、打勝ち難ければ尙更たゝかつて見度い。彼は自分自身を鞭打つ意志を培ふ事に努めた。だが、何のこだはりも無く、別の世界へ行つてしまつた友達の事を考へると心が亂れた。明白に、嫉妬深い自分を認めた。平顏の、目と目の間に

距離があつて、それがかへつて安つぽい色氣をもつてゐる矢部の幼馴染の女を想ひ出しては腹が立つた。

自分の立場、自分の理想を、はつきりとくみとつて吳れる人として、彼は津田と園にのぞむ事が多かつた。二人は、前後して病院を出た。かねての話の通り、園は鎌倉に家を借りて、その後の靜養につとめてゐた。三輪はその人を訪ひ、直に相手の心をつかみ、相手の全身を思ふがまゝにする情念にさいなまれる事が屢々あつた。

津田の日に燒けた顔は久々で學校にあらはれた。病氣の爲めに一年遲れた彼は、三輪と机を同じくした。二人の友達にそむかれたやうに思ふ三輪は、此の一人に一層賴らうとした。內心に燃る不滿に似た感情のはけ口を見出さうとした。何のきつかけも無く、ひどく昂奮して、須賀と矢部の近狀を語つた。

「今が人生の最初の危機なんだね。僕のやうな常識派は別だらうが。」

冷靜をほこる津田は、昂奮して話す相手の不純な心に釘を打つやうに、何時に變らない調子でいつた。

將來の計算無しに行爲する事を低級だと考へてゐる彼だ。彼は戀愛の否定者では無かつたが、

戀の出來ない人間だつた。あまりに後日の事を想察し過るからだ。近世社會問題の學徒をもつて任じながら、いかなる社會革命が實現するとも、それが爲めに人類が幸福になるとは考へない彼だ。右に對すると同じく、左に對しても觀察者であつた。三輪は友達のその性格を、尊敬する時と忌々しく思ふ時とあつた。いかなる事に出あつてもおのれを失はず、迷ふ事の無い彼を見る時尊敬した。いかなる事にも感激を示さない時、その冷靜が冷血と見えて、憎む可きものとなつた。此の場合、相手の冷々たる態度に比べて、あまりに他人の所爲に迄もやきもきする自分のおせつかいを恥ぢた。不愉快だつた。

しかし、何と云つても津田とは一番多く顏を合せた。矢部は學校をやめたばかりで無く、此の頃は彼一流の凝方で、止度なく情痴の遊戲に耽つてゐた。あれ程熱情をそゝいだ繪畫も、新しい感激の前には顧みられなくなりかゝつてゐた。須賀は須賀で、學校に顏を見せる事も稀になつた。一度踏越えた垣根は、元の高さをもつてゐない。矢部と行動をともにする事もあつた。船乘仲間のつきあひも拒むところでは無くなつた。無智な女の執拗な情慾が、須賀の手足に蜘蛛の巣を張つた。

「僕は、友達は生涯變らないものと思つてゐたが、あの二人はもう遠くへ行つてしまひさうな氣

がして來た。」

友情に生甲斐を感じ度がる三輪は、あきらめ切れない心持で、次第にはなれて行く友達を愚痴の種子にした。

「それは君の理想病さ。現實主義の作家はもつと強い心持の上に立たなくては駄目だ。」

津田は微笑を含んで揶揄した。

十四

友達が、恰も自分を捨てゝ遠くへ行つてしまつたやうに感じる一面には、その友達の到達したところへ自分も行き度いと思ふ心があつた。少なくとも、どんな世界か、見極め度い慾望は防げなかつた。

三輪は屡々須賀の宿をたづねた。はでづくりの船宿の娘は、一層はでづくりになつた。時には須賀の好みに媚る爲めに、町娘の風俗をしてゐる事もあつた。二人の關係は、網勘夫婦はいふ迄も無く、どぶ泥臭い近所界隈の認容するところとなつてゐた。流石に須賀は、友達の手前を憚かる様子を消す事が出來なかつたが、娘の方は何のひけ目も感じてゐなかつた。見せつけるやうに、

をとこにかしづくをんなの姿を見せた。
しかし、それよりも三輪の好奇心を強く引くのは矢部の此の頃だつた。芝居や小說でこそお馴染の藝者も、正のものはまるで見當のつかない存在だつた。言ふ事も、する事も、月並に思はれもするのだが、何といつても幾代かかゝつて作りあげた傳統の美は否定出來なかつた。日が經つにつれて、いつか隅田川で端艇を漕いだ日の歸りに矢部に引張られて行つた家の光景が、意外に強い魅力をもつて心をそゝのかす事を知つた。もう一度友達が連れて行つて吳れる事を期待しながら、おもてにはけぶりも見せずに、度々矢部を訪問した。
油繪や、西洋の畫集や、小說本などの雜然としてゐる矢部の部屋の壁に、三味線のかゝつてゐるのを見た。
「はじめたの？」
「はじめた。」
何にでも手を出す矢部の器用を非難する心持を充分持つてゐたが、相手は存外おちついてゐた。
「ゆく春やおもたき琵琶の抱きごゝろといふ句は誰のだつけ。樂器を膝の上にのせるといふ事には、何かひどく肉感的な氣持がありはしないかなあ。」

矢部は顔を紅くしながら三味線をとつて、爪彈で小唄を口吟んだ。勿論うまくは無かつたが、その小器用が三輪を充分不愉快がらせた。矢部はやうやく習ひ覺えた樂器に對する愛着から、何時迄も繰返してゐるうちに、心は遠くへ誘はれて行つた。止度も無く、我家を出て行き度いおもひがつのつた。

「散歩しない？」

いふと、相手の返事も待たずに立上つた。

その晩三輪は、再び代地の待合の門をくぐつた。

二人の藝者が來た。此の前の時に見た、矢部のお馴染の女と、その妹分になるもつと若いのとだ。その女を向ふに廻して、かしこい口をきゝ、器用な手つきで盃のやりとりをし、何かわかり兼る樂屋落を連發する矢部に對して、三輪は事毎にひけめを感じた。出がけにちやんとしたよそいきに着換へる事などは、彼等の仲間には無い事だつたが、今の矢部は、下町の若旦那らしいこしらへで、かうした場所にぴつたりはまつてゐた。何處から見ても、自分はひきたて役に過ぎなかつた。手持無沙汰をごまかす爲めに、勸められる盃をうけて、速かに醉つてしまつた。

「あら、こちら又およつてしまふの。寢ちまつちやあ駄目よ。」

口ではさういつたが別にとめもしなかつた。三輪はがんがんする程重たい頭を、自分の腕にのせて横になつた。
矢部は、廣い額丈がつやつやと白く光り、頰邊や耳迄紅くなつていゝ機嫌だつた。女の三味線で小唄をうたつてゐたが、何時か若い方のはゐなくなつてしまつた。酒の強い女は、三味線を下に置くと、湯吞で飲んだ。それを矢部にもさしつけて無理に飲ませてしまつた。
「あたしねえ、今晩あんたに話があるのよ。」
「どんな話さ。」
「だつて……」
女は三輪の方に身を扭向けて、邪魔がゐるぢやあないかといふ表情をした。三輪は、若い妓がゐなくなつてからの二人を眠つたふりをして見てゐた。
「いゝぢやあないか。」
「いけないのよ。二人つきりでなくちやあ。」
つけつけといはれて、三輪は一層ゐたゝまれない身の上になつた。
「何の話さ。」

「何の話つて、いろいろあんのよ。」
「いつてごらんな。」
「駄目よ。」
露骨に舌打ちして、やけだといふ所作を見せて又一息に湯呑を干した。
「もういけない、勘忍しとくれよ。」
「そんなら半分すけてあげるわ。」
又強ゐるのを拒む矢部の手首をつかんで、無理に唇を割つて飲ませようとしてゐるのだ。さういふ二人のはなしや、する事は、みんな微妙な色氣をふくんで、みだりがましく見えるのであつた。
そんな事には頓着無く、二人のたはむれは止度無く繰返された。女の方がはじめに醉つたやうたつたが、その實矢部の方が骨がとろけて來た。上半身がぐにやぐにやになつて、指で突いてもひつくりかへりさうだ。
「しつかりなさいな。」
「醉つたよ。ゆるしてくれ。」

「許さない。今夜はなんてつたつて歸さない。」
「そんな事をいつたつて……」
矢部は三輪の方を指さして見せた。
「構ふもんか。」
女は矢部の首に手を廻してかゝへ込みながら、
「ねえ、もし、あんた、歸るんでしよ。あたしやあさんにお話があんのよ。」
わざと憎まれ役を引うけましたといふ顏をして、三輪の方に聲をかけた。
「よせよ。」
「よくつてよ。」
いきなり、やぶれかぶれの意氣込で、相手の顏を引寄せると、頰邊に頰邊を擦つけようとしたが、醉つたからだはいふ事をきかないで、抱きあつたまゝ横倒しになつた。矢部は離れようとしてもがいてゐたが、女はおつぷせるやうな姿でしがみついてゐた。そのまゝ醉つた二人は、疊の上にころがつてゐた。
三輪はふいと立上つた。彼は脅怖に等しい心持で、すつかり酒氣を失つた。獵人の追擊を逃れ

る獸の如く、夢中でその場を去つた。

十五

三輪は、不愉快な昂奮に夜中熟睡出來なかつた。夢では無いのだが、醜悪な幻に苦められた。未だに兎角神聖視し度がる女の、慾情に燃えた姿態を現實に見せつけられて、あたまの平靜を失ふ位打擊をうけた。彼は救ひを園に求めようとした。

學校をすつぽかして鎌倉へ行つた。汽車を降りて改札口へ急ぐ後から呼止められた。思ひもかけない津田であつた。

「園さん訪問か。」

「君は。」

「僕も。僕は此の夏こつちで暮らさうと思つて、あの人に座敷を貸すうちを探して貰ふ事にした。」

三輪は不意に、此の友達に對して敵意を持つた。自分よりも少し脊も低く、瘦せた肩の弱々しい相手ではあるが、何か強い力をもつてゐるやうに見えた。堅く結んだ口元に、微笑の漂ふの迄

も惡意にとつた。

あかるい初夏の景色が眼前に展開された。潮か、松か、雜草か、何かの香が鼻をついた。新鮮な緊張感が胸を打つた。

「いゝなあ、東京とは違ふ。」

津田は長い間の海岸生活を思ひ返して深く呼吸した。三輪も思ひ切つて海氣を吸つた。それが自分に力をつけて吳れた。此の明色の景色の中に、一人の女性の姿を想ひうかべて、一層新鮮の感を深くした。

何かしらぬ感激が、二人を寡言にした。輕い埃のあがる街道を、先を爭ふやうに汗ばんで步いて行つた。

園の住居は漁師町を出はづれた砂山のかげにあつた。別莊風のつくりでは無く、横濱か横須賀へ通ふ勤人の住宅向に出來てゐた。格子の鈴が鳴ると、園が飛んで出て來た。

「よく來て下すつたわねえ。ウヱルカムよ、ほんとにウヱルカムよ。」

二人の前に、からかふやうに手を差出した。躊躇すると、おしつけがましく迫つた。三輪は負けて握手したが、津田はたゞ笑つてゐた。自分の方が弱い――さういふ感じがこみあげて來た。

學業をおろそかにしない津田が、日曜でも無いのにわざわざ來たといふ事が、何につけても三輪の疑惑を刺戟した。今迄にも多少の疑はあつた。しかし、直ぐに打消せる疑だつた。それが打消し難い疑となつたのだ。三輪の心の陰影は濃くなつた。

南に面した座敷からは、野芝ばかりの庭と、垣根の向ふの砂山と、砂山の上の靑空が見えるばかりだ。單純な風景が、かへつて海岸の特質を強くした。浪の音が微かに響いて來た。

疊の上に卓子と椅子を置き、花瓶に大輪の山百合がさしてあつたり、書棚に綺麗な背中を持つ本の並んでゐるのも女らしい好みだつた。三輪は、壁にかゝつてゐるロセツチの女の寫眞版を見逃さなかつた。ロセツチの女の面影があるといふのは矢部の發見だつたが、それを本人に話したのは三輪だつた。自分の言葉が如何に相手の心に媚びたかを想像して、羞しかつた。

二人の來た事を、園は無上に喜んだ。喜びを示す爲めには、強ゐてもはしやいで見せる方で、それが子供らしい姿態にぴつたりはまつてゐた。婆やと二人で暮らしてゐる呑氣、そのたいくつ、寂寞、海の話、山の話、雨の日の所在なさ、風の日の怖ろしさ――さういふ日常生活の平面描寫をたて續けに口にした。

「誰か來てくれゝばいゝと祈つてばかりゐるのよ。ありがたう、よく御揃ひで來て下すつたわね

え。」
「偶然です。お互に知らずにゐて、汽車を降りてから氣が附いたのです。」
津田は誤解を誤解のまゝにしては置けないといふやうな切口上で、直に說明を加へた。
「不思議ねえ。でも其の方がなほ嬉しいわ。二人とも忘れないでゐて下さつたんだから。」
年齡こそは上だけれど、津田も三輪も女性に對する無經驗から、甘んじて子供のやうに扱はれてゐた。それが園の喜びだつた。何をいつてもおとなしく聽き、何を命じても反抗しないしもべだつた。
海邊へ散步に行く事も園の發意だつた。淡紅色の日傘が眞先に砂山を上つた。海は眞靑に凪ぎ、磯の香がむせかへる程面を打つた。後の二人に手をあげて、園は一散に渚迄かけ下りた。三輪もつゞいた。津田は一人靜かな步度を保つてゐた。
「あれがいけないのよ、津田さんは。大人ぶつてゐたいのね。」
「羨しい性格です。寧ろ偉いと思ひますね。」
相手の惡口には邪氣が無いのに、自分のほめ言葉には含むところがあると思つた。彼は正直に津田を尊敬してゐるのだから、その言葉に噓は無かつた。噓では無いのに、噓と思はれた。

渚の砂は足のうらに柔かく、先に立つて行く園の草履のあとが、濡れて乾いた水際にくつきりと印されだ。それを踏んでこはすのを惜みながら、三輪はひどく肉感的な感じを受けた。津田は何の心も無く、それを踏んだ。

その無神經を憎んだ。或は、その人の肉體に接するおもひで、わざと足あとを求めて踏むのではないか――卑しい疑を自分で憤りつゝ、今迄惜んでゐた草履のあとを、三輪も進んで崩した。誰にも許さない、自分が先に踏んでやるといふきほつた意氣であつた。

ちひさい流があつた。女でも飛べば飛べる程の水量に過ぎなかつた。

「飛べるかしら。」

園は一二間さがつて身を構へたが、踏切がつかないで笑つてしまつた。

「飛べますよ。飛んで御覽なさい。」

津田は範を示して砂を蹴つて向側に立つた。もう一度園はスタアトをつけたが、矢張思ひ切りがつかなかつた。

「意氣地が無いなあ。」

「だつて落つこちるとみつともないわ。」

「そんなら僕がおんぶしてあげませう。」

三輪は自分が赤面しながら裸足になつて背を向けた。何の躊躇もなく、園は全身をゆだねた。女らしく、足を眞直にしてゐて、おぶひにくいのではあつたが、それでも柔かい重みがかゝつた、實際の肉體感よりも想像の方が強く三輪を惱ました。彼は太股迄濡らして流を渡つた。

「ありがたう。矢張三輪さんの方が親切ね。」

津田をかへりみて揶揄した。

「僕だつてその位の親切はあるけれど、三輪君の方が力もあるし、適任だと思つたものだから……」

「ずるい人。」

濡れた脚を拭きながら、三輪は又しても津田に負けたやうに思つた。些細な事だ、つまらない根性だと思ひながら事毎に邪推が出た。

長い間、砂の上にやすんだ。淡紅色の日傘のかげの映る皮膚は、水つぽい果物のやうになまめかしかつた。津田も三輪も、日光の直射に汗ばみ、むき出しの肌は、手首も襟首も焼けて紅くなつた。

遠く、靈山崎の下の方で、外國人が一組泳いでゐた。完全に發達した四肢を活潑に動かす男女の姿は見てゐても氣持がよかつた。
「今頃から海に入る人があるんですねえ。」
「西洋人丈では無いだらう。春四月、御臺場を一周した先生もあるんだから。」
津田が善意のすつぱぬきをやつた。
「どうしたの。あなたが？」
「三輪君と須賀と。」
津田は極めて冷かな描法で、冷い海で拔手を切つた二人の事を話した。須賀が船宿の娘と關係した事に迄話は及んだが、恰も科學者が自然現象を說くやうな態度だつた。それでも三輪は耳の根迄紅くなつた。あけすけなものいひをする園さへ、心の動搖に瞳をうるませた。それが處女の感じを深くした。
「男の人つてみんなそんなものなんでせうか。」
それは須賀ばかりで無く、矢部も昔の矢部ではないといふ話の出た時だつた。

「戀愛なしで、そこ迄行けるんでせうか。」
「それが戀愛ですよ。」
津田は持前の批評的態度を忘れずに答へた。
「あの連中にはあの連中の戀愛がある。外の者には外の行方の戀愛がある。めいめい違ふかたちをとる……」
「あなたは。」
「僕ですか。僕だつてどんな徑路を踏むかわかりませんよ。」
「津田さんにも戀が出來るかしら。」
「出來ますとも、たゞ僕は僕らしいやり口で。」
それは一時の會話に過ぎなかつたが、三輪には忘れにくい印銘を殘した。須賀は須賀の、矢部は矢部の、津田は津田の戀をする。そして自分は――自分は自分の戀をするのだと思ひながら、自分の心の眞實をつかむ事が出來なかつた。
日の沈む迄濱邊にゐて、勸められる夕飯を斷つて別れた。
「それでは津田さんと三輪さんと二人ともいらつしやるのね。いゝ御部屋を探してあげるわ。」

暑中休暇の計畫を、園は心から樂んでゐた。津田が部屋借の話をすると、三輪にも是非來いといつて、強ゐて指切り迄した。それを繰返して念を押たのである。
汽車の中の二人は默然と並んでゐた。刺戟の多い一日は、重い疲勞を殘して去つた。誰にもわづらはされ度くない心持を二人とも持つてゐた。途中の驛で買つたサンドウィッチを、あぢきなく喰べて又默々と肩を並べてゐた。
「三輪君。」
津田が突然呼びかけたのは、旣に東京近く來てからだつた。
「いつかも訊いた事があるんだが、君はほんとに園さんを想つてゐるのでは無いのか。」
三輪は不意打ちをうけて、立遲れの氣持があつた。未だ津田が病院に居た頃、あの海岸の砂丘の上で、同じ詰問にあつた事があつたが、今日はそれよりも事態が重大だつた。弱い心に鞭を加へる必要を痛感した。
「かくさずに云つてくれ給へ。君と僕のなかで、何もかくす事はないいんだ。」
たゝみかけて來る相手は、何處迄も追及しさうな意氣込だつた。
「僕にはわからない。」

もつと何かいはなくてはならないと思ひながら、それつきり何もいへなかつた。ほんとに自分でもわからないのだつた。想つてゐるといふのが、好きといふ程度なら、ずつと前から好きだつた。だが、のつぴきならないものとして戀してゐる自分だらうか――三輪には卑怯な逡巡があつた。誰かゞあの人を獨占してしまはうとしたら、自分はそれを叩きのめす勇氣があるか。そこ迄想ひつめて行けるか。どうしてもあの人でなければならないといふ心があるか。三輪は堅くなつて脣を嚙んだ。

「わからないつて、君自身の心だぜ。」

どんな問題でも、右か左かきめてしまはないではゐられないで、その上その判斷に充分自信を持つ津田は、他人にも同じ事を求めようとした。それがひどく意地惡く、執拗に響いた。三輪にはむらむらと敵對意志が動いた。

「そんなら君はどうなんだ。君自身は。」

思つたよりも高い聲の出てしまつたのを恥ぢて、顏が紅くなつた。

「僕か。僕は僕のやり口だ。無駄な戀愛はしない。たから君の心持を確め度い。その上で自分のゆく可き道をきめる。」

三輪が熱したのを抑へるやうに、津田は冷靜な態度を見せて云つた。

汽車は轟然と、停車場の構内へ入つた。

十六

津田と三輪の共同生活は、愉快なものでは無かつた。園が探してくれた家の一室に、互にうちとけない心を抱いて、強情に起居を共にして居た。二人揃つて來いといふ園の勸めに同意したのを、もろともに後悔して居た。毎日の生活は單純で、四圍の景色は明るかつたが、事毎にかへりみて疑ひ、迷ひ、邪推する事が多かつた。

その不愉快は、あらかじめ二人にはわかつて居た。わかつてゐながら意地が承知しなかつた。さも、今迄と變りの無いやうな態度を見せ合ひながら、はげしい競爭心は、安んじて相手の振舞ふが儘に振舞はせては置かなかつた。

そのくせ、今になつて見ると、三輪は不愉快極まる對立に年中惱まされてゐなければならなかつた。出來る丈邪念を打消して、表面丈でも仲よく暮らし度いと思ひながら、いざとなると事毎に津田のする事が意地惡く見えるのであつた。曾ては冷靜なる意志の所有者として尊敬してゐた

友達が、今は冷酷な意地悪となつた。不快を避ける爲めに、成る可く津田と顔をつき合せる事を避けた。それに反して、何事でも冷かに捌く事を立場とする津田は、強ゐても平氣を装つて、相手の面上に鋭い視線を注がうとした。

たとへば、三輪は津田が机にむかつてゐる時を見はからつて、一人で散歩に出ようとする。

「何處へ行く。散歩か。」

廊下へ出る後から、呼止めるのは津田だつた。

「少し歩いて來る。」

「待ちたまへ。一緒に行かう。」

わざととしか思はれないおちつきを示して、いつしよに戸外に出るのであつた。

午前と午後と、海へ行くのは日課だつた。三輪は水泳をほこる丈の練習を積んで居て、樂々と潮を蹴つて泳ぎ廻つた。津田は海に遠い土地に育つたので、子供の頃里川で遊んだ自己流の泳ぎ方しか知らなかつた。それに、ほんものでは無かつたにしろ、胸部の疾患を逃れて間の無い體だから、肉體に對する不安が強かつた。壓力の強い海水に身をひたす事には、多少の躊躇があつた。濱邊の砂の上に、大きな麥藁帽子をかぶつて、鹽氣の籠つた健康な空氣を呼吸する丈だつた。

「大丈夫よ。お入んなさいよ。」

同じ狀態にあつたにも拘らず、園は平氣で、派手な水着を身につけて、三輪と肩を並べて渚を歩き、又淺瀨の浪に全身を打たせた。皮膚の薄い四肢をむき出しにして、ぴつたり體に吸ひつく水着の姿は、三輪にとつての惱みだつた。水に入ると、屢々手をとつて戯れた。水中にひらめく手や足は、魚の腹よりも鋭くひらめいた。

大きな浪が來る。危く倒れさうになるかぼそい體を抱上げて支へる事もあつた。水中の二人の行動から、砂上の津田の眼は離れなかつた。海は限り無く廣く沖へひろがつてゐるけれど、人の群がる濱邊は都會のやうに息苦しく、目まぐるしく混雜した。その混雜の中にまじる園の水浴帽を、恐らく津田は見逃さなかつた。三輪がさう思つたのである。海の中にゐる限り、彼は完全な勇者だつた。自分達二人が手と手をつないで波に戯れる。津田は心を焦してそれを見てゐるのだ。みせびらかしてやれ——わざと親密を示す爲めに、人の群を離れて、二人きりで沖へ泳いで見せた。うまくない形をして、園は負けない氣でついて來る。汀に近い、薄濁つた水と分れて、紺碧に澄み透つた深みへかゝると、俄に潮は冷たくなり、その中に動く手足は一層なまめかしく見えた。

水から上つて、砂の上に津田といつしよになる。日に日に少しづゝ日光に焼けた園の四肢、なめらかに脂肪を含んだ皮膚が乾くと、牛酪（ベタ）色のうぶ毛がむつちりと盛上つた太股にいきいきと光る。

「あたし肥つたでしよ。海に入る方が體の爲めにいゝ樣だわ。」

自分の肉體をいつくしみ、しつつこく津田にも共に泳ぐ事を勸めるのであつた。

たうとう津田も着物を脱いだ。それは三輪の少しも欲しない事だつた。津田が砂上の監視者である限りは、彼の水中の世界は自由だつた。少時（ばら）でも津田に遠ざかつて、園を獨占する事が出來たのだ。

「たうとう御老體も勇氣を出したわねえ。大いに若返らしてあげるわ。」

園は瘦せた津田の背中を叩いて、我意の通つた事を喜んだ。運動で鍛錬した事の無い津田が、下手な形で泳ぐのを、三輪は優越感をもつて見た。わざとあざやかな拔手を切つて、うしろから追越して見る程の稚氣も發揮した。

園を中に置いて、何事も無かつたやうに振舞ふ時、津田も三輪も、むかしの友情を失つた事をかへりみていさぎよく思はなかつた。二人の間丈の衝突に原因するので無い事が、なほさらやま

しかつた、僅かに、園は未だ此の不和を知らないのだと思ふ事で、一時の安心を保つてゐた。
津田が風邪氣で家にとぢ籠つてゐる日があつた。三輪は解放された喜びを感じて、園を誘つて曉の海邊を歩いた。遠く岬の端の方迄濡れた砂を踏んで行つた。
「三輪さん、あなたあたしに何もかくさないで御話して下さる？」
突然歩を止めた園が、訊いた。
「ちがつたら御免なさい。あなたと津田さんと、どうかしたんぢやあないの。何だか變よ。」
三輪はどぎまぎして、あけすけに喋らうか、強情におしかくさうか、迷つた。
「かくしたつて駄目。隨分先からわかつてゐたんですもの。どうなすつたの、喧嘩？」
「喧嘩なんかするもんですか。」
「卑怯だわ。あたしの事でしよ。さうよ。わかつてるのよ。」
もつともつとたゝみかけて言はうとしながら、流石に言葉は澁つてしまつた。三輪は一言も無かつた。いさぎよくあやまつてしまひ度いやうな氣持が動いた。三輪の無言を、園は勿論肯定の意味にとつた。
「あたし、さういふ事嫌ひ。大嫌ひ。折角仲のいゝ御友達が、あたしの事で仲が惡くなつたりさ

れてはつまらないわ。誰も彼もみんな仲よしで無くては。」
子供らしい條理の立たないものいひをしてゐたが、そのたゞ事に熱情があつた。遠い海の一點を見詰めてゐる目の中に、濡れて輝くものを感じた。三輪は感動で胸がいつぱいになつた。何も彼も犧牲になつてしまひ度いやうな純情が胸をいつぱいにしたのだ。
そのくせ、園と別れて歸る道では、津田に對する敵意が前よりも強く燃えて來た。園の言葉は、何等の意味も持つてゐなかつた。一人を二人が爭ふ場合に、二人の間に平和がある可き筈が無い。いくら仲よしだつて爲方が無い。勝つ者が勝つのだ。勝たう、勝たう。彼は幾度となく繰返して心に誓つた。
間も無く、同じ事を園は津田にも試みた。津田は全く三輪とは違ふ態度を示した。彼はその事のあつた後で、直ぐに三輪と對坐して切出した。
「今日ね、園さんが君と僕との感情が融和してゐない、それは自分といふものがあるからだといふのだ。僕は否定しなかつた。さうすると、折角の友達が、自分の爲めにさうなるのはいやだといふのだ。」
津田は持前の、科學者が眞理を語るやうな態度であつた。一切の事を理性の判斷によつて滯り

無くさばく、決して感情に走る失敗はしないと彼は絶ず自分を戒め、努力してゐるのだ。
「僕もさういふ事はいやなのだ。僕は僕の道を行く。しかし友情は友情だ。それを傷つけ度くない。お互に冷靜に此の問題を處理しよう。僕は度々君の心持をきかうとしたのだが、眞意を諒解して貰へ無かつたやうだ。いゝ機會だから、玆で二人で解決しよう。長く不快を抱いてゐるのは面白くない。」
津田と雖も、緊張した態度をかくす事は出來なかつた。日に燒けた顏が稍蒼白に見えた。
「僕には盲目的の戀愛や、遊戲的の戀愛は出來ない。僕の戀愛の目的は結婚だ。」
津田は躊躇無く自分の論歩を進めた。はじめは、園に對して何等の心持も持たなかつた。戀愛は理性を失ふ事のやうに考へた。しかし、妻を迎へて家を營む事は生涯の計畫のひとつだつた。
「僕は戀愛の爲めに他の一切の事を忘れるのを恥る。だから、若し君が眞劍にあの人を得ようといふのなら、僕は多分甘んじて讓る。その位の抑制は出來る積りだ。しかし、君が單なる戀愛遊戲ならば、僕の爲めにやめて貰ひ度い。僕が眞劍といふのは、生涯を共にする事を意味するんだ。」
三輪は、冷靜をほこる津田の態度が慊りなかつた。戀愛を恰も商品のやうに取扱ひ、それをも理性の強さだとほこるのは許し難かつた。戀愛神聖論こそは、彼の純情主義にぴつたりはまつて

ゐるのだ。彼は相手の戀愛觀に侮辱を感じた。斯ういふ根性で園にのぞむのは許せなかつた。彼はすつかり昂奮してゐた。

「三輪君、僕は一切を君の意志に任せようといふのだ。君がのぞんでやまなければ僕は退く。君が其處迄行かないなら僕が進む。それ丈なんだ。君は結婚する覺悟はあるか。」

「僕は君のやうな理性派では無い。どうなるか先の事はわからない。たゞ僕は、あの人が好きだ、と、いふ事丈は斷言する。」

三輪の聲は震へた。そんな事では駄目だぞとたしなめても、おちついてはゐられなかつた。

「困るなあ。僕の言ふ事わかつてくれないかな。」

「わかつてる。しかし、僕には君のやうな取引は出來ないんだ。」

「取引？　取引でもいゝさ。」

「いや、君のいふ心はわかつてゐる。しかし君のいふ冷靜だね、一方が得て一方が失ひ、それで双方とも平氣でゐられるだらうか。僕には駄目だ。そんな事が……」

「それを行ふ。それが強い人間の心さ。君のやうにいつてしまへば、君と僕とは永久に融和出來ない事になる。」

「むろん出來ないさ。不幸だ。いやだと思ふ。しかし爲方が無い。どうにもならないんだ。」
曾て無い二人の爭は、何處迄行つても平行する二線だつた。
しばらくして、津田はわざと嘆息するやうにいつた。
「君がさういふ風にいひ出すと始末の悪い事は知つてる。だからもうよすが、萬一僕が園さんにすべてを求めても君は何とも思はないか。」
「僕がどう思はうと構はないぢやないか。君は君の道を行くさ。」
三輪は言下に答へた。

十七

二人の仲ははつきり悪くなつた。それでも双方の負惜みが、表面のつきあひをやめさせなかつた。不愉快だ。斷然別になるか、思ひ切つて東京へ歸るか――三輪は幾度さう思つたかわからなかつたが、止めた。敵に後を見せる事は今更出來なかつた。何時、津田が園に誓を求めるか、それが年中彼を苦めた。その癖自分が進んで先手を取る事は、萬一園の不快を招きはしないかといふ臆病の爲めに妨げられた。

愉快よりも不愉快の多い一夏だつた。それも終に近づくと、避暑地の景色は日に日に寂しくなつた。濱邊を埋めた人數もめつきり減つた。朝夕は涼しく、海の水もつめたくなつた。浪の荒い日が續いて、磯には海藻が打上げられ、潮の香を強くまき散らした。

二日つゞいた風雨の後の、晴渡つた日で、ぶりかへした蒸暑さだつた。園に誘はれて海へ出かけた。降こめられて鬱陶しく暮らしたあげくだから、青空の下に呼吸する丈でも胸がすいた。

風は凪いだが、名殘の浪は高かつた。海に入る人は殆どなかつた。

二人は前後して水に入つた。三輪は寄せて碎ける浪の白く泡立つ中に飛込むと、そのまゝ眞直に泳いだ。素晴しい速力が出る。冷たい水は肌に痛快に觸れた。勢に任せて水を蹴つたが、あまりに進みが早過ると思つて四肢の運動を止めた。砂をさらつて海底を流れる過激な潮流が感じられた。前の日のしけの名殘で、ふだんは無い瀨が出來たのだ。

ふりかへつてみると、自分の方へ泳いで來る二人の首が浪の間に見えた。雨後、川の水と海の水とまじり合ふところには怖ろしい潮流が出來ると豫て聞いてゐた。いやな豫感が全身に迫つた。それに反抗して、岸に向つてふん張つた。浪は後から追つて來るのだが、體はなかなか進まなかつた。

「あぶないぞ。來るな。」

彼は一生懸命に叫んだが、見る見るうちに二人は接近して來た。水の知識の淺い爲めか、何等の危險も感じないで、先を爭つて泳いで來た。

「あぶない。あぶない。」

彼は叫びつゞけた。三輪の聲がはつきりと、何を意味するかわかつた時、園は水を掻く手をゆるめた。その隙に、津田はさも追越すのが目的であつたやうに、自己流の泳ぎ方で傍を通りぬけた。

「あぶないぞ。よせ。歸らう。」

自分の言葉を信用しないのが忌々しく、三輪は怒鳴るやうに注意した。津田にはそれが、自分の泳ぎの拙なさを叱責されたやうに響いた。無言で、何をいつてるのだといふやうな微笑を浮べて、浪のうねりを越て進んだ。

「おゝい、氣をつけろ。」

三輪はもう一度高く叫んだが、直ぐに園を促して岸へ向つて泳ぎ出した。引潮の力の強さは凄いものだつた。園の力では進み兼ねた。うつちやつて置けば流されるばかりだ。三輪は、いくつ

かの浪頭の向ふに津田の顏が同じく岸に向つてゐるのを認めて安心した。いきなり園の腋の下を片手で支へて、懸命に水を蹴つた。

やつとの思ひで水底に足のとゞくところ迄泳ぎ着いたが、三輪も疲れた。しかし息をつくひまも無かつた。

「津田さん、どうして。津田さん。」

意外の出來事に蒼白になつた園は、いきぎれのする急迫した聲をふりちぎる樣に叫んだ。遠く、浪の間に、津田の頭が見えたりかくれたりした。岸に向つて泳いでゐるのではあるが、もがいて居るのと同じだつた。段々沖へ流されて行くのだつた。

「助けて、助けてあげて。」

園の聲はもう泣いてゐた。船を呼ぶ積りか、水に足をさらはれるやうな姿で、岸へ急いで行つた。

三輪は危險の身に迫つたのを知つた。彼は固い決心をもつて、いきなり沖へ向つて泳ぎ出した。

「おゝい。」

こゝろみに呼んで見たけれど、返事は無かつた。斯ういふ場合には、力を殘して置かなければ

ならないとは知つてゐたが、時々波頭にあらはれる津田の様子は、既に一瞬を爭ふもの丶様だつた。三輪は全力を盡して急いだ。

「しつかりしろ。大丈夫だ。」

間近に迫つて叫んでも、必死になつて水に逆らつてゐる津田には聞えなかつた。三輪は相手の後に廻つて、強ゐておちついた聲で言ひきかせた。

「どんな事があつても、僕につかまつてはいけないぞ。」

直ぐに津田の體を左手で支へて、力を合せて水を蹴つた。しかし、潮の力は壓倒的だつた。見る見るうちに岸は遠くなつた。長い砂濱を水着姿の園が漁師町の方へかけて行く。自分達の方をふりかへり、ふりかへりしながらかけて行くのが見えた。砂山がある。家々の屋根がある。松原がある。その松原の中のホテルの白い建物がある。源氏山、白旗山――山々がある。しかし、その陸地は遙かに遠くなつた。

幾度となく浪をかぶつた。その度に津田はあわて丶姿勢が崩れ、少なからず水を呑んだ。津田の體は次第に重くなつた。手を放せば、その儘沈んでしまふに違ひ無かつた。藻が、度々手足に絡んだ。不圖目の前に死魚の浮んだのを見た時は三輪も覺悟を迫られた感があつた。

彼も既に疲れてゐた。いくら努力しても駄目だ。津田を岸邊迄運ぶ事は到底不可能だつた。斯うしてもがいてゐるうちに力が盡れば、彼も自分も溺れて死ぬ。しかし、此の手を放せば、自分丈は助かる。水では死なゝい――三輪には堅い自信があつた。

ふと、津田の死は、豫てから、自分が願つてゐた事のやうに考へられた。嘘だ。そんな卑怯な自分では無いと打消したが打消し切れなかつた。若し、此の海で津田丈が死に、自分は助かつたとする。自分が津田を殺したと思ふものがあるに違ひ無い。津田はさう思ひつゝ死ぬだらう。園もさう思ふだらう。第一に、自分の心がさう思ひさうで爲方が無かつた。三輪は誰一人の姿も見えない砂濱を遙かにのぞんで、必死になつて水に抵抗しつゞけた。

手足が冷たくなつて來た。津田は不斷の努力に呼吸が苦しくなり、水を澤山飲んだ。彼はもう泳ぐ力はなかつた。たゞ生き延んが爲めにのべつに四肢を動かしてゐる丈だ。月も上ずつて、生色が無くなつた。死の手を背中に感じてゐるのだ。三輪もその氣配を感じた。悽愴な光景を、われと我身に見た。

大きなどろばうやんまが、たゞ一つ水の上の空を低く、岸の方へ滑走するやうに飛んで行つた。

突然、砂濱に人々の姿があらはれた。ちひさく、ちひさく、影繪のやうに動いた。その中に園

もゐる――と思つたが、辨別する事の出來ない程人の姿はちひさかつた。長い間冷たい水にひたり、無理な働きをした手足の知覺は鈍くなつた。救援にかけつけた人々が、砂山に引上げてある船にとりついたのを見ると、一層疲勞が加つた。その船が水の中に滑り込むのを見た時は氣が遠くなるやうだつた。

津田は何も知らなかつた。陸地迄見る餘裕は無いのだ。彼の體は朽木のやうに半分は沈んでゐた。口からも鼻からも水が入る。夢中になつてもがく體は、三輪の腕に一層の負擔となつた。共に頭から浪をかぶり、三輪もからい水に噎せた。もういけない――彼は又自分一人ならば助かるといふ考へに安心を求めようした。海に出た船は、浪のうねりにかくれて却つて目には見えなくなつた。彼にとつては長い時間だ。三輪は自分の呼吸も迫つて來て、氣力の衰へに脅えた。駄目だ。船は間に合はない。何を愚圖々々してゐるのだ。彼は腹が立つてたまらなかつた。駄目だ。自分も死ぬ――さう思つた瞬間だ。津田はのべつに水を呑む苦しさに吾を忘れて、三輪の體にしがみつかうとした。思はず三輪は手を振放した。津田の姿はひとたまりもなく、鉛のやうに沈んだ。

三輪は色を失つた。水中にある自分の足に、あく迄命に執着する津田の手が絡みつくに違ひ無

い。さう思ひつゝあたりを見た。その手が、ぽつかりと目の前の水面に出た。三輪は夢中でその手をつかんだ。必死の力が、もう一度津田を水面に浮べた。苦しさにもがく津田はきちがひのやうに三輪に縋らうとする。取り縋られゝば、一緒に沈むばかりだ。恰も格闘する海獣のやうに二人は浮んだり沈んだりして爭つた。

三輪もしたゝか水を呑んだ。沈まう沈まうとする津田の體を、僅かに支へながら、彼も棒のやうに首丈を水面に出してゐるのだつた。陸地を見るゆとりは無くなつた。たゞ浪ばかりが、幾重にもうねりうねつて居た。

不意に、大きな船のへさきが見えた。浪にかくれる。又出たと思ふと意外に近く、眞黑な船の腹がのしかゝるやうに目に迫つた。その時三輪は、津田と相抱いて沈んでしまつた。沈んで行く沈んで行く、さう思ひつゝ氣力を失つた。

十八

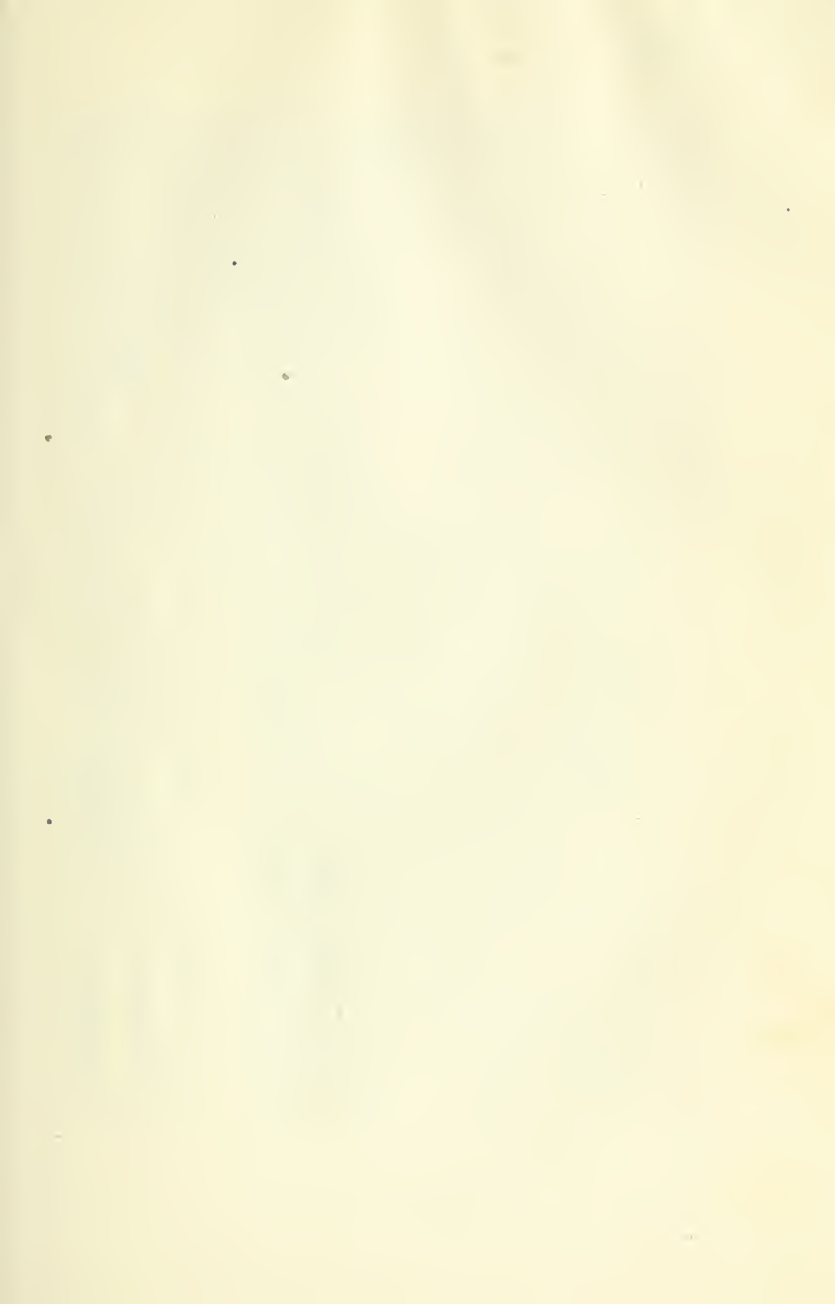
微かにあかりが射して來た——と感じながら、三輪は眼を開いた。まばゆい光だつた。體はすつかり疲れてゐて動けない、たゞ目ばかりいきかへつたやうな感じだ。しばらくして、それが日

光の漲る部屋の内だといふ事がわかつた。
側に人がゐる。向ふをむいてゐる。聲をかけてくれゝばいゝ。さう思ひながら靜かに目のとゞくところを見廻した。頭の上のあけ放した硝子窓の外の靑い空が見えた。雲も無い。何の陰影も無く澄みわたつてゐる。花瓶に草花がさしてある。百合，石竹，桔梗，女郎花その他名を知らない草花だ。花も葉もいきいきと輝いてゐる。三輪は自分が生きてゐる事を痛感した。救援の船に引上げられた事も，何處かで大勢に介抱された事も，病院へ運ばれた事も，みんな記憶にあるやうな氣もした。
「三輪さん，おめざめ。」
遠くに聲が聞えながら，實は目の前に園の顏があつた。並んで白衣の看護婦の顏があつた。三輪は一時に氣力を囘復した。幾日間か眠つた深い睡眠から覺めたやうな氣持だ。輕快に飛起きて見せ度いとも思つた。
園は三輪の手をとつて堅く握つた。兩の掌の感覺がいきいきと傳つた。その手を握つたまゝ身を開いて，園が目で知らせたところには，もう一つ寢臺があつた。自分と並んで，津田が寢てゐたのだ。死人のやうな眞靑な顏をしてゐたが，一心に三輪を見詰めてゐた。

津田も助かつたか――三輪は滿足して深く呼吸した。二人の視線が合つた。津田の顏に微かな表情が浮んだ。感謝の微笑だ――三輪はさう感得した。自分も微笑を酬いた。目の中が熱くなつて、涙があふれて來た。

園も感動の涙を流しながら、半巾で三輪の顏を拭つた。

生命に對する感激が潮のやうに胸に迫つて來た。三輪は、體こそ疲勞に負けて動かないが、曾てない新鮮な世界を見た。こんな清々しい心持は想像もしたかつた。その強い生命感の中に明日がある。長い人生がある。一生の仕事がある。戀愛がある――三輪は、何事にも打ちひしがれない自分をつくり上る事を想像して、刻々に回復する氣力を樂んだ。（昭和二年七月八日）

畫布

今日も亦郊外の土堤には、橙色の日輪が、惜氣も無く光を浴せかけてゐた。草は乾いて、點描派の畫面のやうに、青く、黄色く、白く、赤く、紫に、靜かに柔い感觸で、斜面の景色を青空の下に展開した。その草の中に、黄色い顏色の、小柄な日本人が、黒い外套にくるまつて寢轉んで居た。長髮を油氣無しで後に撫でつけたのが、風に吹かれて亂れて居た。低い鼻、ちひさい眼、割合に大きい口――さういふ造作を照らす時、日輪はいたづらつ兒らしく微笑むのだ。胴の割に短い足が二本、破れ靴を穿いて、無感覺に並んで居た。彼は疲れて居た。繪が描けない。いくらあがいても駄目だ。あせればあせる程いけなくなつた。心が腐つてしまつて、女達と口をきくのもうるさくなつた。多勢集まつて來たモデルも、扉口で追返し追返ししてゐるうちに寄つかなくなつた。友達とは、大概口論をして仲違ひになつた。毎日彼は畫室を出て、此の土堤に來て寢てゐた。

希望、憧憬、未來、空想、名聲、傑作、あらゆる心を浮立たせ、唆かすものは彼を捨てゝ遠くへ行つてしまつた。描きかけて行詰つた繪と、憂鬱と、焦躁と、自己嫌惡と、現實暴露と、疲勞

と、懷疑と、失望と、自棄と、不眠と、病的の熟睡とが伴侶だ。不健全な精神は、胃の活動迄鈍らせてしまつた。パンに牛酪を塗つて喰ふ丈だ。強烈な肉餌を要求する肉體では無かつた。宮殿があり、美術館があり、歌劇場があり、劇場があり、寺院があり、學校があり、音樂堂があり、踊場があり、百貨店があり、料理屋があり、カフヱがある大都會の陰影が、しめつぽく、重たく胸を壓して來る。マロニヱの並木の規則正しく整つた姿もわづらはしい。果物の皮と、煙草の吸殼と、酒の飲殘しが、落ちてこぼれて沁み込んだ歩道も、憂鬱を增すばかりだ。生甲斐の無い人間には、土堤の草が氣安い巢になつた。

土堤の上には松林があるばかりだ。草の中に寢てゐれば、それも見えない。見えるのは草と空丈である。松風とか、虫の音とか、日本らしい風情の微塵もない、しいんと靜まりかへつた景色だ。その癖、土の厚さと空の深さが、つれなく、力強く感じられた。

こつちの心の向くまゝに、どうにでも親しめる空や土に、胸をくつつけて久しくなると、厭人感は一層燃えた。路地の奥の行きどまりの、物置のやうな畫室々々に住む畫家や彫刻家、日本人もゐる、露西亞人もゐる、西班牙人もゐる、伊太利人もゐる、和蘭人もゐる、希臘人もゐる、猶太人もゐる。とりどりに國民的特徵を持つ面つき、言語、癖、訛、笑、歩きつき、體臭、なんと

いふうるさい存在だ。そんな奴等と同棲したり、友達になつたり、遊びに來たりする安モデル、家主、番人、洗濯婆、珈琲店のガルソン、彼の身邊にうようよしてゐる人間の、愛想笑、猫撫聲、いつもきまりきつた挨拶、お早う、今晩は、總てが彼の氣をくさらせた。たつた一杯の珈琲を前にして、終日入浸つてゐたカフヱのでぶでぶのおやぢ、縮毛、禿頭、赤鼻、跛——何にしても狡猾さうなガルソン共、又其處に客を引きに來る女、うるせえうるせえ、打消すやうに頭を振ると、入かはつて目に浮ぶのは故鄕の田舍で、地主といふのは名ばかりで、年中小作人にいぢめられ、おどおどして暮らしながら、息子のパンの代を送つて來る兩親の鈍い顏だ。醜い齒ぐきをむき出して、平べつたく笑つてゐる。忌々しい。いくら待つてゐたつて、此の息子は偉くなんかなりはしないぞ。偉くならないばかりでは無い。賣れるやうな繪の一枚を描く事さへ覺束ないのだ。錢を儲けるうでなんかあるものか。一生ごろごろして、あつてもなくてもいゝ人間で死んでしまふのだ。彼は相手もないのに憤つて、自分のざまを嘲つた。

小學校に通ふ頃から新聞や雜誌の繪を眞似して描くのがうまいと云はれた。小學校の先生も、無責任に、神童だ天才だとはやしたてた。ほめられ、おだてられ、夢を見て繪かきになつてしまつた。人の苦む展覽會にも易々と出品する事が出來た。惠まれた才能を愈々生かす爲めに、永年

憧れてゐた巴里へ來たのだが、何時の間にか不安が夢を喰ひ始めた。水平線には頭を出した。しかし、その上に浮び上る事がどうして出來る。レオナルド・グ・ヴインチだ、ラフアエルだ、ミケランヂエロだ、ヴエラスケスだ、ゴヤだ、レンブラントだ、ルウベンスだ、ヴアン・ダイクだ、ドラクロアだ、ミレだ、クウルベエだ、シヤヴアンヌだ、ホイツスラアだ、ドガだ、マネだ、モネだ、ピサロだ、セザンヌだ、ゴツホだ、ルノアアルだ、マチスだ、ピカソだ——何處に行つても頑張つて動かない大きな姿が邪魔をした。巴里は彼を甘やかさなかつた。最後の宣告を下してしまつたのか。繪は描けないで、深い疲勞がづつしりとのしかゝつて來た。

頭の上の太陽の段々西へ廻つて行くのを見ながら、彼は茫然と煙草を吹かしてゐた。月の始に來る送金を日銀で受取つて來たが、煙草を買つたばかりで、何に使はうといふあても無かつた。氣持が腐つてゐて、どんな享樂も誘ひかけて來なかつた。

濃い煙草の烟はゆるゆると外光の中に消えて行つた。うつかりしてゐる帽子の上に、草の花が落ちて來た。ふりかへると、土堤の上に女が立つてゐた。男のやうな帽子を深くかぶつた、貧しいみなりの娘だつた。いたづらつ兒らしく、草の葉をむしつて投げながら、笑ひかけた。

彼は手をあげた。相手の小柄な事、みすぼらしい事が遠慮を無視させた。娘は草の上を滑るや

うに下りて來た。小兒の感じがあつた。無教育なもの丶親しさが、異邦人を珍しがりはしたが、輕蔑はしなかつた。

「い丶お天氣ね。」

「い丶天氣だね。」

「此の土地はあつたかいわねえ。」

「あつたかい。」

そんな會話をしてゐるうちに、彼は久振で微笑の湧いて來る氣持にめぐりあつた。

娘は年齡よりも子供つぽく見えるたちだつた。女といふよりも、家畜の感じがした。まんまるい青い眼、ちひさく厚い唇が、顏の印象の大部分を占めてゐた。白粉氣が無くて、いきいきしてゐた。柔かい體のくせに、出來合の衣服のせゐで、不自然なぎごちなさがあつた。人馴れてはゐないのだが、人を怖れる事を知らなかつた。禮儀を缺いた人なつつこさだつた。

「あんた美術家。」

「どうして。」

「どうしてゞも。」

「君は。」

彼は自分の方が顔が赤くなつた。賣女にひとしい安モデルとばかりつきあつてゐた目には、自分と口をきく女は總てその階級に屬してゐるものとしか考へられなかつた。

「百貨店に勤めてゐたの。だけど、やめられちやつた。」

巣にゐる小鳥の雛の口つきで話した。誰が聞いてゐようと、誰も聞いてゐなからうと、たいくつをまぎらすはけ口を見つけて喋り出したのだ。細かい齒のきつしりと並んだ口が、白楊の葉のやうに素早く動いた。父親が戰爭で死んでから、母は方々の家の掃除婦に雇はれ、自分は百貨店の賣子になつたが、何の理由もいひきかされずに馘首（くび）になつてしまつた。それを母親に告（つげ）るのが辛いので、一昨日も、昨日も、今日も、此の土堤に來て日の暮を待つてゐるのだつた。

「今日はね、お金が無いものだから、おひるは何も喰べてゐないのよ。働かない一日つて長いものねえ。」

嘆息するやうな調子は少しも無く、親をだまかして遊んでゐるいたづらつ兒の樂しさが聲に響いた。彼は愉快になつて笑つた。娘も笑つた。

女は小鳥だ。獸だ。腹の白い魚だ。花だ。果物だ。彼は素晴らしい靜物畫を見るやうに娘の横

顔を見詰めた。生きてゐる事の喜びが、ほのかに蘇生して來た。彼は空腹を感じた。權高い女、氣取つた女、お洒落の女、理智の女、產兒制限論の女、參政權を求める女、禁酒運動の女、世界平和運動の女、廢娼運動の女、女美術家、安モデル、淫賣――あらゆる型と違つた此の娘に、たらふく喰はしてやらう。尊敬を求めたり、禮儀を強要したり、理想を說いたり、言葉づかひを咎めたりしない小娘に、溫い晚餐を供さう。可愛がつたつて、撫でたつて、もみくちやにしたつて怒らないに違ひ無い。

「おい、いつしよに飯を喰はないか。熱いポタアヂユとロスビフと。」

「それから、おいしいお菓子と珈琲と。」

娘はユトピアの話をするやうに、半分茶かして嬉々と笑つた。ほんとに誘はれてゐるのだと考へる迄も無く、ゆたかな晚餐の景色を想像する丈でも樂しかつた。

「さうだ。そしてシヤンパンを拔かう。」

彼はすつかり有頂天になつて、いきなり娘の兩手をつかんで引起した。小柄な娘は、目深くかぶつた帽子の中から、仰向いて笑つた。

長い一日も暮れかけて來た。遠方の森の向ふに、太陽はつめたくなつたビフテキのやうに力無

く沈んで行つた。空が水つぽく、無限の色を漂はし始めた。うつすりと靄のかゝつた草原は、此の世の中にあつても無くても構はない二人の外に、動くものも喋るものもゐなかつた。

二人は町へあらはれた。町中に、珈琲と、葡萄酒と、果物の香の漲る頃であつた。無數の燈火が、輕い冒險に浮々した足取で歩く二人のみすぼらしい姿を、はつきり照らし出した。漫畫のやうな後姿は、間もなく、學生町の小料理屋の扉の中に消えた。

あつたかいポタアヂュと、燒肉と馬鈴薯と、菓子と珈琲と、つぎつぎにあわたゞしく喰つた。彼は飲めない酒で眞赤になつた。娘は見榮も外聞もなく、口の廻りを汚して、子犬が物を喰べるやうに、皿に顔を近づけて喰べた。樂しい食事だつた。彼には、これ程有效に金をつかつた記憶が無い。戸外に出ても、もつと金がつかひ度かつた。

「おい、シャンパンを拔かう、シャンパンを。」

冗談にして笑はれると、愈々冗談にはして置けなかつた。二人はカフェのテラスに席を占めた。

「シャンパン。」

不思議さうに見てゐるガルソンに、叩きつける勢でいひつけた。素晴らしい音を立てゝ、シャンパンは泡を吹上げた。

「健康のために。」

かちりと合せて、ぐつと干した。頭がくらくらした。眼の前の往來を人が通る。男が通る。女が通る。自動車が通る。馬車が通る。みんな輕快に動いて行く。あかりが動く。並木が動く。星が動く。何處だ。遠くないところで、安手な管絃樂を奏してゐるのは。

醉つた。愉快で堪らなかつた。こんなに、怖れず、いたはらずに女とつきあへるのは愉快だ。手なれた繪筆の尖端で、新鮮な繪の具をつけてゆく樂しさだ。思ふが儘に描け。手の平に乘せて遊べ。ころがしても、はだかにしても、矢張笑つてゐるだらう。その無責任な喜びが、深い親しさを誘ひ出した。夜更の町を、娘の住む貧民街迄送つて行つた。暗い四階だての三階目の窓に、鎧戸が下りてゐて、あかりが洩れて來た。

「お母さんに叱られる。」

娘は水蜜桃のやうな舌を出して肩をすぼめた。

「おやすみ。」

「又あした。」

思ひ切りよく手を握つて、振つて別れた。

町角で、その家の窓から娘の顔が出はしないかと待つてみたが、無駄だつた。爽かに空は晴れ、都會の心臟は次第に休息しかけてゐた。

あくる日も亦快晴だ。彼は希望と日光に惠まれて、何時もの土堤に待つてゐた。娘は約束通りやつて來た。着物も帽子も昨日と同じだが、心持白粉が濃く、口紅を塗つてゐるのがをかしかつた。自分の爲めに化粧して來たのだと思ふと、安つぽい可愛さがあつた。晝は、彼が買つて來た菓子を喰べ、林檎を嚙つて過した。終日草の中で眠つた。夕方になると、又町へ出て一緒に飯を喰べた。

「シネマに行かうか。」

そのまゝ別れるのがいやさに、一番安い享樂を考へた。娘は勇んで感謝した。

町はづれの汚ない小屋で、亞米利加物の映畫を見た。をかしい場面に來ると、娘は聲を立てゝ笑つた。あたりには何の憚かるところが無かつた。異邦の美術學生と一緒にゐる事などは、些かも恥としなかつた。彼は赤面しながら感謝した。

次の日も亦土堤で逢つて、同じやうな日を暮らした。無邪氣か、無智か、足りないのか、やさしい獸に手をなめられてゐる快感が、彼の不安、焦躁、憂鬱を一掃した。娘は、とりとめもない

事を話して、ひとりで笑ふのである。自分は學校が嫌ひで行かなかつたとか、百貨店で勘定を間違へて叱られたとか、愚にもつかない事を面白がつた。自分を卑下したり、輕蔑したりして快とするのではない。それつきり經歴も無く、話材も無いのだ。

あつたかいポタアヂユと肉の一片をふるまふ彼に對して、何の戒心も持つてゐなかつた。のぞめばどうにでもなる相手に對して、たゞ手を握つて振つて別れるばかりだつた。

或朝、彼は床の中で雨を聽いた。つまらない。降つてゐては土堤に行かれない。起きたつて爲方が無い。又しても、ものうい、張合の無い心持がはびこつて來た。いちにち中寢てやらう。起きてパンを燒き、珈琲を煮るわづらはしさはいやだ。

あの娘はどうしたか。母親をだまかして、百貨店に勤めてゐるふりをする爲めには、此の雨にも外に出なくてはならないだらう。つまさきの破れた靴から水の滲み込む哀れな姿で、頭から濡れながら、何時もの土堤に佇む姿を想像したが、その時入口の扉を叩くものがあつた。

「お入り。」

仕事にあぶれた安モデルが、使つてくれとせがみに來たのだらうと思つたが、扉の外には土堤の娘が立つてゐた。

「あはあ、來たた。」
彼は俄かに浮立つて、濡れた外套の肱をつかんで內へ入れた。
「御免よ。こんな風でかんべんして貰はう。そのかはり今直ぐ珈琲を入れるから。」
はしやいで、火や湯の支度を始めた。
娘は、殺風景な畫室の內部を珍らしがつた。かきかけてやめてしまつた畫が、材木のやうに積んであつた。畫架にかゝつたまゝ、幾日かうつちやらかしてある裸婦の圖もあつた。
パンと珈琲の朝飯に、娘も喜んで參加した。自分のうちで濟ませて來たにもかゝはらず、驚く可き食慾だつた。
お腹がいつぱいになると、寢臺に並んで腰かけた。敷布は汚れてゐたが、二人の重味をはねかへさうとするばねの力が、こゝちよくはりきつてゐた。彼は構はず、娘の首つ玉に手を廻して、そのまゝうしろに引くりかへつた。きやつきやと身を揉んで擦りぬけようとしたが、彼ははなさなかつた。はなさないばかりでは無い。あばれる娘の額に接吻しようとした。娘は片手を上げて彼の頰を打つた。
「もつとぶて。もつとぶて。」

からかひながら、一層顔を近づけた。ぴしやぴしや、つゞけさまにぶつた。ぶたれながら、縮毛のわざと垂らしてあるおでこに口をつけてやつた。よくない白粉と髮の臭が、いつしよに唇に觸れた。何となく不潔な誘惑が鼻をついた。

「こいつ、お風呂に入れて洗つてやらう。」

不圖浮んだ考に思はず心から微笑して、手をはなした。娘は素早く起上るかと思つたが、寢ころんだまゝ笑つてゐた。彼は自分の方が立つて着物を換へた。

「おい、お湯に行かう。こんな日にはあつたまつて氣持がいゝぜ。何、御湯屋に行つた事なんか無いつて。よおし、きれいに洗つてやらう。すべつこい石鹼で。」

彼のたのしみは、此の娘を得て盡きなかつた。冗談にして笑つてゐるのを、無理に引起した。

「日本人はきれい好きだ。こゝいらの奴等のやうに、一生湯に入つた事が無いなんていふのとは違ふんだからなあ。」

小娘をつれて湯に行くといふ景色が素晴らしく面白かつた。

何事も拒まない娘は、笑ひながらついて來た。びしよびしよ降る雨の日の町を、行き馴れた湯屋に行つた。湯屋のおかみさんは、見知越の彼に、いたづらなまばたきをしてみせた。

「いつしよに入り度いなあ。」
さう思つたが、勿論許されない事に違ひ無かつた。ひとつひとつ鍵のかゝる浴室に別れて入つた。隣との境の板羽目の向ふに、裸身の女がゐるのだ。彼はその板羽目を、幾度も拳骨で叩いた。向ふからも應じた。
きめの細かい娘の肌は、すつかり洗はれて艶々と光つた。身内の血が旺んに流れて、いきいきした動作が一層敏活になつた。彼は晝の食事の爲めに、腸詰や林檎や葡萄酒を買つた。
「繪をかかしてくれないか。素敵だ。久しぶりで描けるぞ。」
彼はものぐさの幾日かにあきあきしてゐた。強ゐても活動が欲しかつた。娘が返事も與へないのに、今迄かゝつてゐた畫板をはふり出して、畫架を適當の位置に据ゑた。
「あたし、どうしていゝかわからないわ。モデルなんかになつた事ないんだもの。」
「いゝよ。そこの長椅子に腰かけてゐればいゝ。無智の美か。」
半分は自分にいひきかせながら、直に木炭を手にした。一氣にしていきいきした、しかし質素で可憐な美が、畫布の上に盛上(あが)る事を期した。
「駄目だ。着物が邪魔だ。裸になつてくれ。」

つかつか寄つて、娘の上着に手をかけた。
「いや。裸になんかなるんならいや。」
娘はその手を拂つて立上つた。
「いゝぢやあないか。みんな此處に來るものは裸になる。ぼろ着物なんか捨てゝしまへ。人間が着物を着るのは、裸になつた時の美しさを引たゝせる爲めなんだ。」
「あたしモデルぢやあないんだもの。」
「モデルになればいゝぢやあないか。百貨店の賣子だつて、モデルだつて同じだ。立派な職業なんだ。御禮はするよ。」
彼は夢中になつて、男性の暴虐と情熱との融合に燃えて來た。
「着物なんか着てゐればこそ、流行の衣裳をつけた金持の娘にかなはないのだ。裸になつてしまへば同じだ。負けるもんか。」
一人で昂奮して、不便な言葉に難澁しながら、唾を飛ばして叫んだ。繪を描く。此の娘を裸にして繪を描くといふ事以外に、彼の考は何も無かつた。立すくんで、返事もしない相手を、納得して柔順になつたと見た。彼は自分の胸の中に娘を抱いて、背中の留金をはづした。上着をとる

と、白い下着のレエスが、湯上りのしつとりとうるんだ肌に吸ひついてゐた。彼は果物の皮をむくやうに、手早く、無雑作にはいでしまつた。

「さ、そこの椅子に寝るんだ。」

逃場を失つた兎のやうに、おどおどして、両手で顔をかくしたまゝ、長椅子に腰かけた。

「駄目だ。足を延ばして。手を顔からはなして。」

彼は熱中して、相手をいたはる心持なんか失ひ切つてゐた。その権幕に怖れて、娘は羞恥のまじつた複雑な微笑を浮べ、いはれるまゝのポオズをとつた。

雨があがつてあかるくなつた畫室の中で、つやゝかな裸身は、圓満な光線を浴びて柔かく浮び上つた。人間の邪智によつてゆがめられない素裸の美しさ。何といふ神祕。一切の慾情を忘れた恍惚が、繪筆を持つ手を震はせた。

彼は、ぐつすり寝た。健全な仕事をした後のゆたかな疲勞が四肢にゆきわたり、からだは疲れてゐて、あたまははつきりして居た。斯ういふ朗かな朝を、久しぶりで取返した喜びで、思切り

よく寢床をはなれた。雨あがりの日光が、畫室を蒸すやうに明るくした。畫架の上にかけた黑い布をとると、昨日一日かゝつて、きちがひのやうに描いた半出來の繪が、彼の喜悅に深い媚を送るのであつた。ゆつくりと烟管を樂みながら、自分の繪にうつゝをぬかした。

曾て、これ程夢中になつて描いた事は無い。本職のモデルさへ辛抱しないのを、無經驗の女を強ゐて長時間姿勢をとらせたのだ。娘は失神したやうに疲れた。解放されて半分衣服を身につけると、又長椅子の上に仰向に倒れてしまつた。彼が飲ませる葡萄酒を嚥下すると、そのまゝ眠つた。

それを無理に引起し、又葡萄酒を飲ませ、自分も飲んだ。なんでもいゝ、此の感謝すべき娘を、自分の側に置き度いのだ。眠つてしまつてはいけない。

「おい、お禮はするよ。何でも欲い物を買つてやる。そのかはり又明日來ておくれ。天氣でも雨でも、きつと來るんだよ。此の繪を御覽。素敵だらう。こいつが明日はもつと生きて來るんだ。ね、ね。」

彼は酒と感激とで眞赤になり、一人で喋つた。娘は默つて聽いてゐた。

「どうしたんだ。くたぶれたのかい。」

「お腹が減つたの。」

訴へるやうな微笑を浮かべて答へた。無邪氣に、生一本に空腹に惱んでゐるので、彼は又悅喜した。

「すまない、すまない。僕だつて腹はぺこぺこだ。よおし、今晚は豪遊だぞ。」

行きつけの安料理屋で、彼等にとつての贅澤をした。嬉しまぎれに醉つた。自分には制作慾がよみがへつて來た。前よりもはつきりと、美を明かにする感激が來た。この上潮に乘つて、自分の藝術は飛躍する。さういふ喜びが、彼の乏しい思慮をそつくり奪つてしまつた。感謝の情をあらはす爲めに、何でも欲い物を買へといつて、勘定もしずに札をつかんで渡した。

其處迄が前夜の記憶だつた。思ひ返して見ても、大して苦にはならなかつた。金なんか足りなければ足りないでどうにかなる。此の繪さへしあげればいゝのだ。いゝ事をした。貧しい母子が當分暮らせるだらう。

さう思ひながら、何時迄も自分の繪から眼をはなさなかつた。何といふ無邪氣の美しさだ。だまつて物を見てゐる時でも、目尻には微笑がある。すべつこい頰邊、紅い脣、笑靨、むつちりと盛上る處女の肉づき、首や手に比べて稍重味のある股の柔かい隆起――どこにも威嚴とか、崇高

とか、高尙とかいふ道德感を伴はない美しさ。
「この素直な美しさは俺が見出したのだ。あの娘をほかの奴等に見せたつて、これ程の美しさは發見出來ないだらう。」
藝術家としての深い喜びが、身心を醉はせた。
だが、待つても、待つても娘は來ない。幾度も扉をあけて、戶外の光に首を出して見たが、內庭は靜まりかへつて、長閑に水蒸氣が立昇るばかりだつた。
いらだたしく、畫室の床を踏んで步き、長椅子にぶつ倒れ、寢臺に橫になり、絕えずからだの位置をかへて待つた。正午も過ぎ、腹も減つた。彼は神經を疲らせ、すつかり不機嫌になつた。
突然扉の外に靴の音を聞いた時、彼は自分が呼吸(いき)をきらして馳けて來たやうな勢で扉を開けた。
娘はいきなり飛びついて、兩腕を彼の首に廻し、
「これ見て、これ見て。」
と甘つたれかゝる。
ぐわんと張飛ばされたやうにゆがんだ顏をして、彼は眼をみはつた。どうしたのだ。昨日とは全く違ふ女になつて來た。男のやうに飾りの無い帽子は、刺繡や造花で動きのとれないものに變

り、褪せて、ほころびのきれた服は、はでな絹地のものに變つた。そればかりでは無い。街頭の女のやうに、白粉を濃く、眼のふちにも繪の具をさし、唇を臙脂に染め、引眉毛をしてゐた。そして、得意になつて、袴の裾を親指とひとさし指でつまみ、活動寫眞で覺えた夜會の晩の貴婦人の様子で畫室を一周した。

「馬鹿。」

思はず自分の國の言葉で怒鳴つて、彼は床を踵で蹴つた。何といつていゝか、自分の心持をまるつきり理解しないしわざが、歯がゆくて涙が浮んだ。無智は美徳では無い――彼は苦りきつて、物も言へなかつた。

「どうしたの。あたしに似合はない。」

何の爲めの不機嫌か、心をわづらはせながら、娘は顔を寄せて來た。昨日と違ふ香料が、鼻と眼に沁みる。

「遲くなつたので怒つてるの。そんなら、あやまるわ。悪かつたわ。だけど服屋と帽子屋と、雨方に寄つて來たんだから爲方がないでしよ。そのかはり、こんなに綺麗になつた。ね、これならどんな料理屋に行つても、芝居に行つても羞しくないわ。ね、この着物を着てゐるあたしを繪に

描かない。」
「馬鹿。裸になれ。」
彼は長椅子を指さして怒鳴つた。
「遅くなつたのはほんとに濟まないわ。だけど、あたしどんなに感謝してるだらう。あんたは親切。」
さういつて、又兩手を彼の首に廻さうとしたが、彼は野獸のやうな力で突飛ばした。
「裸になるんだ。直ぐに。」
もう一度怒鳴つて、畫架にむかつて繪の具を揃へた。
娘はあつけにとられてゐたが、矢張自分の遲く來たのがいけないのだとばかり解釋してゐた。帽子をとつて大事に卓にのせ、叮嚀に衣服を脫いだ。厚い白粉は乳の上近くつきりと塗られてゐた。
「これでいゝの。違ふ。」
昨日と同じ姿勢をとつたが、彼は首を横に振つた。
「顏を洗つてくれ。駄目だ。」

娘は素直に立上り、つまさきで歩いて臺所に行つた。

「これでいゝ。」

いひなりになつて、早く不機嫌を直させようと努め、一生懸命で笑顔を見せた。彼は矢張駄目だと思ひながら、爲方無しにうなづいた。娘はいそいそと長椅子に行つて姿勢をとつた。

いらだつ心を押靜め、筆を持つた。素直な姿態、底に無意識の情熱を湛へながら表面は滑かな肌、あらゆる曲線、日光の與へる光とかげの諧調、そこに歡喜を見出さうとしながら、最初の不快が何處迄もつきまとつて、どうしても繪の具をつける勇氣が無い。長い間、自分に背く心持を征服しようと努力したが、結局彼には打勝つ力が無かつた。

「駄目だ。」

繪筆を床の上に叩きつけてやめた。

「どうしたのさ。」

不思議な相手の態度に手のつけやうが無く、娘は姿勢をとつたまゝ聲をかけたが、彼は憤怒に青くなつて、突立つてゐて返事をしない。

「どうしたつていふの。」

こはごは體を起し、長椅子を下りると、眞直に來て、いきなり首つたまに兩腕をかけた。すべつこい肉體がむき出しのまゝ、油繪の具臭い彼の胸にあつた。

「何がいけないの。どんなにでもするから機嫌を直してね。」

母親に甘つたれる樣子で、ぢいつと彼の眼の中に瞳を投込んだ。化粧料の香が、體溫とまじつて、むうつと迫つて來た。

彼は顏をそらし、娘はあく迄もぴつたりと寄せて來る。きめの細かい肌に柔かに附着した白粉の名殘が、彼の頰邊にも、服の胸にもついた。

「はなせ、はなしてくれ。」

吸ひつくやうに密着して來る裸身を、力まかせにもぎはなした。自分に藝術的感激を與へた人に對して、慾情の萌しの燃る事を避けようとする努力もあつた。折角よみがへつた制作熱を根だやしにしてしまふおそれがあつたのだ。

「どうして。どうして。」

なほも娘は飛ついて來る。彼は一層亂暴になつた。抱上げて、長椅子の上に横倒しにした。うつちやるやうな氣組みだつた。娘は兩手で顏を覆つて泣き出した。丸燒の雛鳥のやうに柔軟な曲

線を描く背中に嗚咽が傳はり、よぢれた脇腹は柔かくふくらみ、又へこんだ。ぢいつと見てゐる彼の眼に、惡の兆の輝くのを、吾と我身に感じたが、はげしく頭を振ると、いきなり扉の外の春光の中に、救ひの道を求めて馳出した。

あくる朝、服を着た儘、靴を穿いたまゝ寢てゐる自分を發見した。水道の栓を扭つて頭を冷し、全身をごしごし拭いたが、未だ朗かな氣分はよみがへらない。パンも珈琲も欲くない。形のあるものは咽喉を通し度くなかつた。柔いパンの一片さへ拒み度かつた。

窓はあけ放したが、腐つた空氣は鼻をついて來る。おもてに椅子を引出して、入口の石段の日向に出た。今日も亦晴渡つた空が、附近の屋根の上に、まばゆく光り輝いてゐた。その澄んだ空氣に一層辱しめられ、内輪に烟管を口にくはへた。

内庭の向ふの家主の家にからむ蔓薔薇の花が、眞紅に咲き始めた。その家の角を曲つて、娘は今日も輕快な足取であらはれるだらうか。それが唯一の願ひだつた。あやまる。來たらたゞあやまるばかりだ。どんな事をしても、あの繪を完成させて貰ふ——自分の失態を悔む心持の強い丈、相手を咎める氣はなかつた。

あつたかい日光を滿身に浴びてゐるうちに、椅子の背にもたれて眠つてしまつた。烟管は手か

ら滑つて足下に落ちた。長閑な風景畫だ。貧乏書生の住む町にも、春は小鳥が來て啼いた。

終日待つたが娘は來なかつた。描きかけの繪を未練に眺めながら、焦躁と心配にさいなまれた。日の暮るのを待つて街上に出た。自分が惡いのだ。根本に於て、いつも描く馬鈴薯や、林檎や、玉葱と同じものだと思つてゐたのがいけないのだ。たかだか、撫子か、薔薇か、菫位にしか考へてゐなかつたのがいけないのだ。彼女は家畜かもしれない。家畜にしても、常に愛撫の手が必要だ。不得手な論理を辿つてゐるうちに何が何だかわからなくなつた。要するに俺が惡いのだ。感激の後にはきれぎれの悔が連續して來た。

人工的につくりあげた路は何處迄もつめ度い。車道も、歩道も、家も石だ。靴の底が反撥して、彼の焦躁を嘲つた。

裏町の汚ない酒場で、パンと葡萄酒をとつた。唾と酒のしみついた土間の一隅に、ぐつたりとうなだれてしまつた。どうしても自分の氣力を失つてはならない。折角張合の出て來た制作をやりとげよう。それには、あの娘をつかまへなければならない。酒氣の出た顏をあげて、自分自身に決心を示した。

たつた一度の記憶は、あいまいだつたが、彼は娘の家をこゝろざした。大通から不規則に曲る

貧乏町に入つてゆくと、夜食の支度をする家々のあぶらつこい烟が濃く重く漲つてゐる。幾度も迷ひ、同じ町角に出たが、たうとう見出した。四階建の三階目の窓に下りてゐる鎧戸がめじるしだつた。しばらく、遠方からその窓を見てゐた。人通は少ない。不良少年じみた若者が、口笛を吹きながら通りかゝつて、うさんくさゝうに見て行つた。その男の通り過ぎた後から、當の建物の扉口をよろけ出た人影がある。年とつた女だ。腕に籠をさげ、買物に行く姿だつた。僂痲質斯の足取で、のろのろ歩いて行くのを見送りながら、それが娘の母親かと思つた。彼は勇氣をふるつて、暗い建物の中に踏込んだ。すゝけた電燈の照らす曲りくねつた階段を上つた。母親は買物に出て、娘が一人留守をしてゐると、勝手な事をきめながら、いきなり扉を叩いた。

「お入り。」

年とつた女の聲が答へた。別段出迎はしなかつたが、娘はゐないと直感すると、急に臆病になつて、あたふた階段を馳下りた。うしろから、母親の首が、いつ迄も見下ろしてゐた。

次の日の期待は大きかつた。娘は母親から話を聞かされ、逃出した訪問者が自分である事を察したであらう。今にも快活な笑顔が、此の畫室を明るくするに違ひ無い。

しかし、その日も遂に來なかつた。彼は全くおちつきを失つて、街をさまよひ、はじめてあつ

た郊外の土堤にも行つて見た。夜は又醉をかりて、娘の家の前をゆきゝしたが、結局空しく疲れたばかりだ。

日がたつにつれて、描きかけの繪は段々缺點を暴露し始めた。それでも、あの娘さへ見出すならば、忽ちもりかへし、たしかに生かす事が出來ると信じてゐた。

外には方法が無く、ふたゝび四階建の家の三階の一室の扉を叩いた。直に母親があらはれた。

「僕は畫工ですが、あなたんとこの娘さんにあひ度いので……」

唇が乾いて、滑かには話せなかつた。

「何ですつて。うちの娘がどうかしたんですか。あのこは何處にゐるんです。」

彼はすつかり驚かされた。母親は耳が遠いらしかつた。縋りつくやうに近々と顏を持つて來て、逆に訊き出した。

「どうぞ教へて下さい。たつた一人の娘なんですもの。此の年とつた母親を可哀さうだと思つてやつて下さい。御生ですからどうぞ……」

あぶらと煤で汚れた臺所着の、胸から膝に前かけをした姿で、その前かけに顏を埋め、忽ち涙を流して掻口說くのであつた。

「あなたは、此間も此處に來た方でせう。知つてゐますとも。そんな事はどうでもいゝのですから、どうかあれに逢はせて下さい。あの子が何處にゐるか、それ丈教へて下されぱいゝのです。」

半白の、ひつつめた束髮を頭にのせた年寄が、酸つぱいものを喰べた幼兒のやうな泣顏には、柔かい皺があらはれた。人生の苦勞をなめつくしながら、一切が呪詛にならず、忍苦の優しさを培つた表情だ。彼は、咎められ、罵られ、嘲けられ、叩き出される事を覺悟して來たのだが、縋られ、親しまれ、なつかれ、ねんごろにされようとは思はなかつた。

「僕は畫工なんです。」

先づ自分の立場を明かにしないでは申譯が無いと思つた。

「それで、あの人をモデルに賴んで、素晴らしい繪を描きかけてゐたのに、中途で突然來なくなつてしまつたもんだから、弱つちまつて、此間も此處迄來た事は來たんだけれど……」

話してゐるうちに、默つてうなづく善良な相手に對して、我儘勝手なへつぽこ繪かきの自分を恥入る心持が強くなるばかりだつた。何といふ柔和な婆さんだらう。鳩か、羊か、雌牛か、かんがるか——何かしら人間よりもやさしい動物の表情が漲つてゐる。

郊外の土堤であつた事、畫室へ遊びに來たのでモデルになつて貰つた事、突然來なくなつた事

を話すと、母親は一々意外に思はれる樣子で、聞き終ると胸に十字を描いて目をつぶつた。
「うちには、前の週の月曜日から歸つて參りません。百貨店をやめられたとは知りませんもので
すから、お店に行つて聞いてみますと、とつくにやめられた事がわかりましてねえ、それでは若
しや、惡者にでもかどわかされたのではあるまいかと……」
母親は又むせかへつて泣き出した。たつた一人の母と子なのに、あれ程可愛がつて育てたのに、
誰が何處に盜んで行つたのかと、かこつのであつた。
彼は、すつかりなどんだ心持で戶外に出た。何時迄も愚痴を言つては涙をこぼす母親をなぐさ
め、屹度自分が探し出して、連れ戾るから安心しろと、繰返して誓つた。晝室には彼を嘲るやう
に、かきかけの繪が待つてゐた。どうしても、あの娘をとつつかまへる、とつつかまへないでお
くものかと決心した。
どんより曇つた日であつた。彼は又あてども無く町を步き廻つた末、大通の珈琲店のテラスに
おちついた。目の前の往來を通る人の中に、あの娘を見出す期待を捨てなかつた。
夜が更けると、珈琲店から珈琲店へ客をあさる街上の女の、あわたゞしく通る姿がしげくなつ
た。街燈と並木とがつくる光の影の中を、網に驚く魚の形で、白い橫顏を見せて通る。

彼は不快な懸念に惱んでゐた。貧しい娘が、やがて陷る運命で、あの娘も街上に客をあさる雌鷄の群の中に見出されるのではないか。無智で無邪氣で世間知らずであればある程、容易にその道は擇ばれる。パンと馬鈴薯ばかり喰べてゐた娘に、中流階級の食事をさせ、シャンパンをぬいて見せたのは誰だ。面白づくで風呂に入れたり、むざんに裸にむいてモデルあつかひしたのは誰だ。相手の貧しさと無智識を利用したのは誰だ。昂奮し、醉拂つて、身分不相應な金を捨てるやうに與へたのは誰だ。いゝ着物を着、いゝ帽子をかぶり、金持の女のやうに化粧をする事は、女の望みの全部に近いのでは無いか。それをはづかしめ、のゝしり、つきとばし、叱りつけたのは誰だ。彼は自分のした一切の事が、家も心も貧しい娘を驅つて、街上に走らせたのに違ひ無いと思つた。

苦い反省の一方に、彼の心の中に潛在してゐた慾情の芽がつのぐみはじめた。抱きかゝへても、裸にしても、それによつて自分の制作慾を燃やす事ばかり考へてゐたのが、しばらく逢はず、しかも多分街上でうろうろしてゐるのであらうと想像すると、むざむざ他人に渡し度くなかつた。あのすべつこいからだに、他人の手を觸れさせて堪るものか。

「鳩のやうな、羊のやうな、かんがるのやうなお母さん、あなたの娘は僕が探し出して連れて歸

つてあげます。」

葡萄酒の醉に力をかりて、再び路上に飛出した。いかに都會が廣くとも、いかに人間の數が多くとも、必ず逢へるに違ひ無いと信じた。

何處かの芝居がはねたと見えて、俄かに人通がしげくなつたが、見る間に辻々で四方八方に散つて、その後には、取殘された街上の女が、血眼になつてうろついてゐる。馴々しく聲をかけるのもある。ながしめや微笑を投げてゆくのもある。「今晩は」などゝ日本語でからかふしたゝか者もあつた。

醉眼を打つて雨が落ちて來た。いゝ氣持たと思ふ間も無く、さあつと並木の梢に音をたてゝ、忽ち本降になつた。

彼も上着の襟を立て、地下鐵道の停車場へ急いだが、町角の出あひがしらに、ひとつの傘に女が二人、兩方から手をかけて、踵の高い靴の足並を揃へて來るのにつきあたつた。脊の高い大柄の女の方が、職業的な笑顏を向けたが、貧乏書生と見てとつて、さつさと行き過ぎた。

彼は一時に醉を發した。かけ寄つて、もう一人の女の腕をつかんだ。あの娘だ。

「どうした。僕だよ。僕は每日探してゐたんだぜ。君のお母さんだつて探してゐる……」

重苦しい感激が、唇に迫つて來て聲が震へた。つかまへた、つかまへたと思ふ事の外には思慮が無かつた。

すつかりしやうばい人らしくなつてゐた。夜目にも、描いた眉や、こしらへた唇がはつきりわかつた。人工的な、みだりがましい香料が強く匂つた。

娘は全く參つてしまつて、身をくねらせて腕を振切らうとした。

「おい、いつしよに來てくれ。君のうち迄行かう。そして、ゆつくり話をする。ね、お母さんが心配してるんだ。僕は、僕のやり口の惡かつた事を認めてゐる。そんな事も、何から何迄、みんな君のうちへ行つてから話す。お願ひだ。いつしよに歸つてくれ給へ。僕の爲めに賴むんぢやあないんだ。君のお母さんの爲めにだよ。」

いくら云つても返事をしないで、愈々力強く振切つて逃げようともがくばかりた。

傍につきそつて、傘をさしかけてゐる女は、腹立たしさうに舌打ちして二人の間に割つて入らうとしたが、その時近所の地下鐵道の出口から列をつくつて人が吐き出された。何か、女をつかまへて、他鄉の者が下手な言葉で喋つてゐるのを見ると、はじめから疑をもつて足をとゞめた。

五人、六人立ちどまつたと見ると、彼は愈々あせつた。

「ね、御生だ。歸つてくれ。折角此處でめつけて、このまゝにしては僕がお母さんにすまない。」

「はなして。はなして。」

人だちに勇氣を得たのか、人だちを恥ぢたのか、相手は全力を盡して體を自由にした。追迫る。又振切つて逃げようとする拍子に、足が滑つた。滑走するやうにのめるのを、彼は馳寄つて危く抱きとめたが、それでもがつくりと片膝を雨に濡れた路上についた。彼の與へた金で求めた一帳羅は彼の手につかまれて、鋭い絹の響を立てゝほころびた。

「逃げなくたつていゝ。お母さんの事を考へて……」

場面の轉換の愈々不味なのにあわてあせり、抱き起さうとする後から、力強い男の腕が、いきなり彼の首を扼した。

「何をするんだ。」

彼は思はず自國語で叫んで、その手を振拂つたが、とたんに目の前に眞黑く大男の姿が迫つた。危いと思ふひまもなかつた。力任せに突出した拳骨を横面に受け、くらくらして倒れさうになつた。あやふく踏み止るには踏み止つたが、もう目がくらんでわからなかつた。たゞ女の方へ、執着の力にかられて迫らうとする心持丈が働いた。だが、第二の拳は、彼を平べつたく路上に打ち

倒した。
冷い雨が顏を打つて、降りまさつた。彼が氣の附いた時、附近には誰もゐなかつた。顏面にうけた痛みは、づきんづきん頭に響き、腫れて重たく、血の停滯した局部に、雨のかゝるのが、せめても氣持がよかつた。妙に白々とさめた心持で、水の入つた靴を引擦つて歩き出した。
畫室に歸る氣は無かつた。それよりもあの善良な母親に、娘が生きてゐて街上にうろついてゐる事を知らせなければならないと思つた。
暗い四階建の家の扉口を入り、一段々々拾つて三階迄辿つた。
「まあ、どうしたといふのです。この夜更に、そんな風をして……」
よなべをしてゐた母親は、抱きかゝへて部屋の中に導いた。
「逢ひましたよ、逢ひましたよ。」
口をきくと、顏から胸が痛んだが、彼は今夜の光景を、母親の眼の前に描いて聞かせた。
「おゝまあ、何といふ……」
力無く舌うちしたが、自分の娘の事よりも、目の前のみじめな男の爲めに氣が顚倒して、何をどうすればいゝか判斷を持たないのであつた。それでも親切に、水びたしの上着を脱がせ、靴を

ぬがせ、肌着をぬがせ、乾いた手拭で全身を拭いてくれた上に、女物の寝衣を着せて、一隅に二つ並んでゐる寝臺のひとつに寝かしてくれた。その溫いとりあつかひに涙組み、何もかも任せ度い心持の外には何も無く、彼は少しも拒まずに横になつた。

寝臺は娘のものであらう。枕に女の匂が殘つてゐた。彼は、母親が祈るやうにつぶやきながら、飲ませてくれる水を飲むと、づうんと痛む感覺の中で、靜かに涙を流した。

次の朝彼が目を覺ました時は、隣の寝臺に寝て居た母親は夙に起きて、又内職の帽子を編んでゐた。窓からさす朝日のあたる半面が、柔和な皺につゝまれてゐた。古風な眼鏡をかけ、背中をまるくして、一心に手を働かせてゐる。娘のゐなくなつた事も、見ず知らずの男が來て寝てゐる事も、すべてが悲しい出來事である。それよりも、此の手を働かすのをよせば、喰べる事が出來なくなる心配があるのだ。寝臺と椅子と卓子があるばかりの部屋の壁に、耶蘇の繪が額になつてゐた。神はまだ貧しい家に丈は在る――不意と、そんな考が浮んだ。誰かゞそんな事を書いたかしら、自分が考へついたのかしら、彼自身わからなかつた。何となく心を慰める考へだつた。こはばつた顔をそうつと枕から浮かせて見た。體の重味が加つて、寝臺の脚がきしんだ。

「おゝ、目がさめましたか。いかゞです。もう痛くはありませんですか。まあ、まあ紫色に腫れ

て。世の中には、ほんとにひどい事をする奴がゐますからねえ。」
母親は仕事を卓上に捨てゝ、立上つた。
「まあ、そのまゝ寢ておいでなさいまし。今珈琲をいれてあげますから。」
かたこと木靴を鳴らして臺所へ行つた。
彼は半身起して見たが、顏面のひきつれる痛みの外には何の障りも無かつた。たゞ全身が疲れて、活動する氣力は少しも無かつた。
「さ、クレエムもどつさり入れて來ました。お砂糖も三つはいつてゐますよ。」
子供をあやすやさしさで、珈琲を運んで來た。寢臺に近く椅子を寄せ、それに腰かけた膝の上に盆を置き、大きな珈琲茶碗を彼の手に與へた。
彼は鼻の詰まるのを感じながら、涙といつしよに飮んだ。
何といふ善良な人間だらう、だからこそあの娘もあんなに無邪氣に育つたのだ。それなのに、それなのに――彼は、娘をやくざにしたのは自分だといふ苛責に胸がつかへた。
「何も心配する事はありませんよ。氣分のよくなる迄こゝに寢ておいでなさい。」
うかない顏をしてゐるのを、彼自身の肉體の痛手の爲めに惱んでゐるのだと思つて、肩に手を

かけて慰めるのであつた。

その手をとつて強く握つた。

「難有う、難有う。元氣が出たら、今度はあなたの繪を描かせてくれませんか。ね。」

彼は眞實、新しい畫布を枠に張り、自分の力のあらん限り仕事に沒頭する期待をかけて、柔和に微笑する老女の顏を仰ぎ見た。（昭和三年三月三日）

遺産

おもひもかけない大地震は、さゝやかな彼の借家と、堂々たる隣の家との境界を取拂つてしまつた。
いゝ家だけれど、あの塀があんまり高くて、陰氣で、しめつぽくていけないと、引越して來た日から舌うちしてゐた忌々しい煉瓦塀は、土臺から崩れて、彼の借家の狹い庭に倒れ込み、その半分をふさいでしまつた。先住の手植らしい緣日物の植木や、素人の手でつくられたに違ひ無い瓢簞池は、古びた煉瓦の下敷になつてしまつた。胴の長い和金が五六尾泳いで居たが、それも土の中にめり込んでしまつたに違ひ無い。
金貸をして、一代で身上をつくつたといふ隣の家の先代は、名前の上に鬼といふ餘計な字をくつつけて呼ばれた人間だつた。高く廻らした煉瓦塀も、人の怨を遮斷するものであつた。そのてつぺんには、硝子の破片が隙間無く植ゑつけてあつた。仰いで見る高い所で、無數の硝子はちかちかと日光を反射してゐたが、今目の前に倒れたのを見ると、何の爲の硝子なのか、少しも威嚇する力を持つてゐなかつた。それは實力不相應に買かぶられてゐたものが、眞の力量を暴露した

やうな姿だつた。
日光を遮つた高い塀が倒れてしまつたので、隣の家の廣い庭が彼の客間兼書齋の机の位置から、ひろびろと見渡せるやうになつた。植込の向ふに芝生があり、芝生の眞中に池があつて、晩夏の日を照りかへす水は、樹々の枝の間に強く光つた。
「お隣はうちなんかと違つて、隨分ひどくやられたやうね。」
妻は未見の世界を發見したもの珍しさで、突然目の前に展開された庭を幾度となく眺めてあきないのであつた。それは自分の手の屆かないものに對する明かなる羨望であつた。
「あら、石燈籠が倒れてゐるわ。」
「何處に。え、ママ、何處だつたらさ。」
「あすこんとこよ。築山があつて、大きな松の木があるでしよ。」
「あゝわかつた。やあい、石燈籠が倒れてら。」
子供を相手に、妻が裏口で話してゐる聲が、近々と聞える。
「賢ちやん、いけない事よ。お隣に行つたりなんかして。叱られてよ。」
妻のたしなめる聲の下をくゞつて、子供は倒れた煉瓦の上にかけ上り、ともすると子供一流の

好奇心から、一歩でも隣の土を踏み度がるのであつた。

殊に、時折隣の庭の芝生で遊んでゐるちひさい女の子の姿を見ると、仲間を求める欲求から、賢一は何とかして、自分の方へ女の子の注意を引かうとつとめるのである。

「あら、お隣にはあんな可愛らしい子がゐたんですかねえ。つひぞ見かけた事も無かつたのに。」妻もその女の子のメリンスのきものを、木の間を透かして見る時は、特別の興味で活氣づくのであつた。

町内のつきあひも無く、高い煉瓦塀の中にかくれて住んでゐるやうな隣人について、引越して來て間の無い彼等は多くの知識を持つてゐなかつた。

馬鹿々々しく高い塀の冷い感じが、最初から反感をそゝつたのは事實だつた。だから、その塀の崩壞したのを見た時は、大地震の脅威の中でありながら、痛快に思つた位だ。塀の中の人間は、自分達とは緣の無い別世界の人として考へてゐた。それが今、境界の主たるものが取拂はれ、見透しにのぞく事になつたのだから、何となく親しみの出て來た事は否めなかつた。

子供には子供の誘惑が働いて、何時の間にか境界は自由に踏越えられてゐた。

「おい、どけよ、そこは箱根山なんだよ。地震が來ると谷底におつこつちやうんだから、女たん

て行くとこぢやあないんだよ。」
「いゝのよ。こゝあたしんちなのよ。」
「駄目だい。君んちは此處だよ。そんな山の上にうちなんてあるもんか。」
のぞいて見ると、賢一が兄貴ぶつて指圖してゐるのに、從がつたり、半分從がはなかつたりして、隣の女の子が、崩れた塀を山に見たてたり、谷底に見たてたりして遊んでゐた。おかつぱの髪をふはりふはりさせながら、女の子は女らしく、裾の亂れを氣にしながら、賢一のするまゝに、高い所から下へ飛び下りたり、又のぼつたりしてゐるのであつた。呼吸器の弱さうな首の細い、色の白い、眼ばかり大きなこどもだつた。
「お隣の子ねえ、學校に行かないんですつて。」
「だつて未だちひさいぢやあないか。」
「いゝえ、あれで賢一と一歳(ひとつ)違ひですとさ。」
「へえ、七歳(なゝつ)かい。ちひさいぢやあないか。おそ生れなんだらう。」
「ところがさうぢやあないんですつて。お父さんが學校なんか行かなくたつていゝつて云ふんですとさ。」

「どうしてだい。」

「どうしてゞすかねえ。なんだかお隣は氣味の惡いうちぢやありませんか。」

「お母さんはゐないのか。」

「なくなつたらしいんですよ。可愛さうだから訊いても見ないけれど。」

「さういへば奉公人らしい者も見かけないなあ。」

「婆やが一人ゐるつきりですとさ、あんな廣いうちなのに。掃除だけでも大變でせうねえ。」

呑氣者の妻も、多分の好奇心を持つてゐた。彼はもとより小説家に特有の觀察好きから、もつと詳しい事を知り度く、想像をたくましくしてゐたが、一面甚しい不精から、積極的に他人の身邊の事を探る態度はとらなかつた。それでも、二人の間には何彼につけて隣の噂が繰返された。

「此の頃賢一が毎日遊びに行くんですよ。いゝんでせうか、うつちやつといて。」

「ひとのうちへ無闇に入つて行くのはいゝ事ぢやあないが、子供同志の事だから構はないだらう。」

「でも、なんだか氣味が惡いのよ。あの女の子のお父さんていふのが、恐い顏して、一言も口をきかずに見てゐるんですつて。」

「餘程變なうちだなあ。」
「變ですとも。第一こんなにひとのうちに塀が倒れ込んでゐるのに、挨拶にも來ないぢやないの。まさか何時迄も放つて置く氣では無いでせうけどね。」
「いゝぢやあないか。目の前に高い塀がつつ立つてゐるよりも、廣々として此の儘の方がいゝぜ。」
「だつて不用心だわ。」
「用心の惡いのはお隣さ。こつちは泥棒が入つたつて盜まれる物もありやあしないや。」
さうは云ひながら、彼とてもその崩れた煉瓦塀が何時迄も其の儘で、やがて秋めいて來た景色の、段々わびしくなるのを見て、時折氣にする事もなくはたかつた。

彼は新聞と雜誌に續物を引受けてゐて、毎日机の側をはなれる事の出來ないからだだつた。夜は遲く迄起きてゐる爲、晝間は机にむかひながら、ついぼんやりしてゐる事が多かつた。
「ごめん下さい。」
耳馴れない男の聲が庭先に聞えた。障子をあけると、隣家との境界の煉瓦塀の崩れた向ふに男が立つてゐた。

「私は井原です。宅の塀が倒れた儘になつてゐるので、大變御困りだと承りましたが、申譯ありません。早速とりかたづけさせるつもりですが、東京中やられてしまつたので、職人の手が足りず、ついその儘になつてゐるのです。決してわざとうつちやつて置くわけではありませんです。」
瘦せた、骨立つた體を、わざとのやうに直立させ、嗄れた聲で、切口上で云ふのであつた。蒼白い顏にまばらに髯の延びた陰影の多い表情の中に、人に親しまない皺があつた。
「いや、私共の方は、どうせ庭らしい庭でもありませんから、此の儘でも構ひませんが、とんだ御災難でしたなあ。しかしお互に命拾ひをしたのは儲けものでした。」
相手が人に壓迫感を與へる程緊張した樣子を示してゐるので、彼はわざと碎けた調子で答へたが、先方は自分のいふ事丈をいへばいゝと云ふ風であつた。
「今朝早くでした。お宅の家主だといふ方が見えまして、ひどく叱られました。あなたが大層御立腹だといふ事で。」
「へえ、家主がうかゞひましたか、あの老人は向ふいきの強い先生ですから、さぞかし一人でまくしたてたでせうが、私自身は此の儘でも決して差支ありません。正直にいふと、あんまり高い塀だつたので、目ざはりで、あれが無ければいゝがと多少呪つてもゐましたが。」

「倒れゝばいゝとですか。」
隣人は思ひがけなく破顔した。
「まさかさうでもありませんが、しかしかうなつて見ると、お宅の廣々としたお庭が見渡せて、非常に結構です。實際、垣根だとか塀だとかいふものは、お互が侵入さへしなければ不必要なものかと思ひますが。」
「さう、さういふ考へ方もありますでせう。ですが、隣同志他人の生活を脅かさずに住めるものでせうか。」
隣人は嘲けるやうな語氣で云つた。或る特定の人か事かを嘲けるのでは無く、自分自身をもひつくるめた社會全體を嘲けるやうなものであつた。
「いかゞです、こちらへおかけになりませんか。」
彼は多分の好奇心をもつて、縁側へ座浦團をすゝめた。どうせやつて來はしないだらう、此の男は人とつきあふ事は一切しないと云ふ噂だから　さう思ひながら、試してやる氣が充分あつた。
ところが隣人は、

「失禮します。」

といひながら、躊躇無く崩れた塀を踏越えて來た。

「あなたは昨今こちらへお引越になつたやうですから、御存じないかもしれませんが、此の煉瓦塀は、私の父の遺産のひとつです。」

腰かけるとすぐに、挑戰するやうな語氣でいふのであつた。

「私の父といふのは田舍者で、極貧の家に生れたのです。一年中朝から晩迄働いても、滿足には喰へないのが定められた運命でした。貧乏人にとつては、それを甘受するのがいゝ人間と呼ばる可きでせうが、私の父は運命の前に頭を下げる事を拒みました。東京に出て來て、幾年間か、奴隷に等しい生活をしたあげく、父は世の中を憎み、金を愛する人間になつてしまひました。金だ。金さへあればといふ考へは、親譲りの財産があつたり、地位とか名譽とかいふものに手の屆く人間には、さほど強くは起らないかもしれませんが、貧乏の悲慘をしみじみ嚙みしめた無學で粗野な人間には、何より力強いよりどころを與へたに違ひありません。少しの金をもとでにして、金貸を一生の業としたのです。あなたは小說をおかきになる方だと承知してゐますが、私の父の場合の如きは、小說的色彩のある原因は何も無かつたと思ひます。失戀の結果世を呪つたとかいふ

やうな都合のいゝいひわけは見つかりません。たゞ貧乏が、さうさせたと申す外なさゝうです。金をためる事以外に、何の考も無かつたらしいのです。ざんにんこくはく、因業は勿論です。おきゝになつて御承知でせうが、井原五郎右衞門といふのが戸籍面の名前でしたが、誰一人として井原などゝ呼ぶ者はありませんでした。鬼五郎々々々といつて罵りました。そんな事に頓着なく、何の道樂も特別のぜいたくもしず、たゞ金をためたのです。その一方には、私の父に金を借りたばかりに、娘を女郎に賣つた奴もあれば、首をくゝつて死んだ奴もあります。いゝえ、ほんとですとも。冬の寒い曉方でした。うす汚ないぢゞいが、宅の玄關先に棒鱈のやうにぶら下つてゐるのを、五歳になつたばかりの私も、人々のうしろからのぞいて見ました。どうした事情かよくはわからなかつたけれど、我家へ面あてに死んだ人間だと直感して、ひどく面憎く思ひました。だが、私の知らない犧牲者が幾人あつたか、恐らく私の父とても知らなかつたでせう。父は、世間から惡くいはれ、人まじはりが出來なくなると、一層金を大事にし、その結果がどうあらうと顧みる事はしなかつたのです。たつた一人兒の私さへ、父のためた金の犧牲として、一生を埒の中で暮らす事になりました。私は子供の時から、家の外の人間はすべて自分を憎んでゐる敵だと思つてゐました。門前で遊んでゐると、町の子が石をぶつける。學校へ通ふやうになると、私に與

へられたあだ名は小鬼といふのでした。鬼ごつこをしても、目かくしをしても、陣取をしても、すべての子供が私の敵でした。私をいぢめる爲の遊戯のやうに、こづき廻し、突飛ばし、唾を吐きかけるのです。私は學校へ通ふ事を拒み、家庭教師から變則な教育をうけて育ちました。したがつて、私には生れてから今日迄、友達といふものは一人もありません。私は自分の身の安全を願ふ心持からも、父がきづいた塀の外には、足を踏出す氣がなくなりました。恐らく父も、金がたまればたまる程一身の危險を感じ、あゝ迄思ひ切つて高い塀をこしらへたのに違ひありません。私はその中に閉籠り、世の中との交渉を絶つ事によつて、やうやく嘲罵の聲を耳にしず、石をぶつけられ、横面を張飛ばされる事を免かれました。お恥しい話ですが、私の結婚も塀の中で相手を見つけたのです。此の頃こちらへお邪魔にあがる女の子の母親ですが、宅の奉公人でした。え、死んだのかと仰るのですか。いゝえ、その女は塀の中に閉籠つてはゐられなくなり、あの子を捨てゝ、出入の御用聞といつしよに逃げてしまつたのです。私は子供にも浮世の風はあてまいと決心して、學校にもやらず、おもてにも連れて出ず、全く家の中で育てました。それが何時迄つゞくか、大人になつたら自分の考へで、塀の外の世の中に憧れ出るかもしれないのですが、その時はその時で、本人の自由にさせる外ありますまい。たゞ私としては、あの子も塀の外に出て、決し

て幸福ではないと信じてゐるのです。ところでどうでせう。地震といふ奴は、私が頼みにしてゐた塀を土臺から崩してしまひました。私が危險だ危險だと思つてゐた塀の外に、親子手をつないでかけ出さなければならなかつたのです。」

隣人はひどく興奮し、聲がつゞかなくなる迄一氣に話した。

「あゝ、久しぶりで喋つた。こんなに口數をきいたのは生れてはじめてゞす。これも地震のしわざでせう。」

と云つて苦笑した。

彼は胸が迫つて、何と相槌を打つ事も出來ずに、たゞ相手の顔を見守つた。

天變によつて取除かれた煉瓦塀の崩れから、井原富吉氏と彼との交通は自然に開けた。自分の家の者以外はすべて敵だと堅く信じて來た隣人は、本と新聞によつて養はれた知識に一切の判斷を托してゐた。都下の新聞はすべて讀み、その報道の噓もまことも、そのまゝ暗んじてゐた。彼のつくる小説も勿論知つてゐた。小説家といふものが意外にも物知らずなのには、寧ろ驚いた風があつた。

「さうして見ると、小説なんてものは、全然想像で書くものなのですか。そんなら高塀の中に閉籠つてゐる人間でも、書いて書けない事はないのですなあ。」

大きな發見をしたやうに云つて、彼を微笑させた。

塀の外の廣い世間を敵と見てゐたにも拘らず、いつたん氣を許した彼に對しては、子供の心を持つて接して來るやうに思はれた。塀の外へ足踏みしなかつた爲、片意地ではあつても、一面には人擦れてゐない美點があるのかもしれなかつた。

「お隣の御主人いゝ方ぢやありませんか、世間では鬼だとか何だとかいつてるけれど。」

「さうさ。悪口をいふ奴だつて、一人々々あの人を知つてるわけではないんだ。因業なおやぢのおかげで、不當ないぢめ方をされてるのさ。それだつて金さへ持つてゐなければ、あゝ迄憎まれもしないのだらうが、金があるからいけないんだよ。だからうちなんかゞ一番平和でいゝんだ。」

「何いつてるの。少し位憎まれたつてお金のある方がいゝわ。ほしいものも買へないくらしなんか鬼に喰はれてしまへだ。」

妻は、この間ねだつた子供の洋服を、震災後の流行言葉で、「此の際」ぜいたくをいふなと拒まれたのを根にもつて、つんとして見せたが、自分でも子供らしい怨言だと氣がついて、忽ち口邊

に微笑を浮べ、彼の方にながしめを送つた。

だんだん寒くなると泥棒が横行するから、戸毎に一人づゝ夜番を出し、町内の安全をはからうといふ議が起つた。町内の口きゝの、肉屋と米屋と車宿の親方と床屋が、他所行の羽織を引かけて、一軒々々說いて廻つた。

妻と子供の外に奉公人もなく、自分は晝でも夜でも根氣の續く限り机に向つて原稿をかゝなければならない彼は、最初から此の提議に對して不服だつた。夜が更けて、世間も家の內も靜かになり、頭腦がすみ、目が冴えて來ると、筆の進みも早くなり、曉方迄一氣に書いてしまふのがよくある事なので、夜中は大事な時間なのだ。それを、夜番なんかに引出されるのは、衣食の道を塞がれるに等しいのだ。

「皆さんとこみたやうに若い衆はゐないし、私の外には屈強の者はゐないのだから、たとへ每晩ではないにしても、徹夜の警戒は困りますなあ。そんな事をするよりも、みんなで應分の寄附をして、專門の夜番を雇ふ方が利口ぢやありませんか。」

「それは一應御尤もです。御尤もではござんすが、手前共でも若い者まかせにはしないで、吾々

自身出ばるつもりなんで、何しろ此の際の事ですから……」

「つまり町内の共存共榮の爲にですなあ……」

賭博常習犯で度々あげられた事のある床屋は叮嚀な口をきいても脅かす力を示し、區會議員の候補者に立つた事もある肉屋のあるじは、得意とする辯舌を振ひ、どうしてもいやとは云はせないのであつた。人心が荒くなり、うつかりするとどんな私刑にあはされるかわからない「此の際」であつた。彼ははつきりした返事も出來ずに當惑してゐると、いつの間にか承諾した形になつてしまつた。

「では、何分宜敷願ひます。」

「ですが、お隣の井原さんなんかもお困りではないでせうか。」

口きゝ連が辭去しようとするのを呼止めて、未だ決心のつかない自分のいひわけに、隣人の名を借りたのであつた。

「え、お隣の鬼富ですかい。あんなわけのわからねえ奴ありませんや。吾々が顏を揃へて行つたのに、めいめい自分んち丈守ればよくはないかとぬかしやあがつてね、あつしやあ氣が短けえから、みなさんがとめて下さらなけりやあ、横ずつ頰を張飛ばしてやつたんだが……」

「あの人には社會奉仕つて精神がわからないんだ。自分さへよければいゝつていふんぢやあ國家は立つて行きませんや。みなさんとごいつしよに、理解のいくやうに話をしてやつて、結局明日迄回答留保といふ事になつたんです。尤も回答留保つたつて、先方がいふんぢやあないんで、こつちが胸をさすつて、それ迄猶豫してやらうといふ意味あひなんですが。」

「なあに、あつしやああんな鬼畜に等しい奴等に、理窟を聞かせたつてはじまらねえつていふんだけれど、いゝ年をして手荒な眞似をする事もねえと我慢してやつたのさ。萬一いやだとでもぬかしやあがつたら、鬼の住家を燒拂つても、おもひ知らせてやるつもりでさあ。」

町内の口きゝは、めいめい自分の存在を明かにして歸つて行つた。

「困つた事になつたなあ。自分達は頭を使はない商賣だし、翌日晝寢でもしてゐればいゝんだらうが、夜どほし拍子木を叩いて歩き廻るのはかなはないぞ。」

後に控へてゐた妻を顧みて頭を搔いた。

「なんなら誰か人を頼んで、代つて貰つたらいゝぢやありませんか。」

「だつて誰もそんな役を引受けはしないぜ。」

「そりやあたゞ頼んだつて引受けやしないけれど、車屋の若衆でも雇つたらいゝぢやありません

か。」
「車屋か。いくら位やつたらいゝものかしら。」
「いくらもくれとはいはないでしよ。」
「さうでないよ。此の頃は二三丁かけた丈でも五十錢はくれといふからね。それに外の家では主人が出るといふのに、大きな屋敷かなんかならまだしもだけれど、俺んとこで代理を出したたんていふと、近所の口がうるさいぞ。」
夫婦は面白くない會話をやりとりした。
彼にはどうしてもその企てが悉く不合理に思はれた。家を所有し、財產のある者こそ、組合をつくつて夜廻でもなんでもするがいゝが、借家住居で、泥棒が入つたつて驚かない連中が、稼ぎに差支へる勞働に從ふ必要は無い。それよりも金を出しあつて、番人を雇ふ方がいゝ、守る可き財產の多い者は多く、少ない者は少し出金するがいゝのだ。彼は強力な相手の立去つた後で、勿論自說に同意するに極まつてゐる妻を相手に、不滿のはけ口を見出した。
その午後、隣人は又しても倒れた塀のあとかたづけの遲れたいひわけに來た。愈々數日のうち

には人夫が來て、きれいにする事になつた。その後には、こちらとの境界に限つて簡單な垣根にしようかと考へてゐると語つた。
「地震のおかげで、私も父の遺産の塀の外に出て來ました。御迷惑でも時々寄せて頂き度いと思ひまして。」
「どうです、思ひ切つてもう一歩天下の大道に踏み出しては。」
　彼は隣人の世にも珍しい片意地と、その數奇な生活に興味と同情を持つてゐたが、同時に廣い世の中の人と、悲喜哀樂を共にする事が、しあはせを持來すのではないかと考へてゐた。だが、その心持は當の隣人には勿論通じなかつた。天下の大道に踏み出せとは何を意味するのか、隣人はいぶかつたのである。
「手近い話が、町内の申合せだといふ夜番にも參加するんですねえ。實は私もあんな事は不賛成です。不賛成といふよりも大切な夜の時間を奪はれるので閉口しますが、これも人間の世の中の面白い所だと考へれば我慢出來ますよ。第一地震このかた、社會の秩序が亂れて、人間が亂暴になつてゐますから、うつかり拒絶すると何をするかわかりません。罪もなく人間を斬つたり突いたりした位だから、ぶちこはしでも火つけでも敢て辭さないでせう。それよりも奴等の先手を打

つて、こつちから出向いてやらうぢやありませんか。私といつしよに拍子木を叩いて町内を廻りませうや。」
妻を相手にこぼしてゐたのとはうつて變つて、此の頑なゝ隣人の心を柔げる興味の爲に、自分の心持をすつかり取かへてしまつた。
隣人は、町内の者が何をしでかすかわからないといふ暴力の脅迫に對しては、かへつて反抗の氣勢を示し兼ねなかつたが、彼と共に拍子木を打つて夜廻をするといふ事は、微笑をもつて聞いたのである。
「若し又あなた自身出て行くのがいやな時は、人を雇つて代らせたつて構はないのです。」
「いや、人を雇ふなんて事はしません。さういふ仲間に加はるなら、勿論自分でやりますよ。」
「そんならいつしよに出て行きませう。あなたが提灯を持つて先に立つ、後から私が拍子木を叩いて歩く。いゝぢやありませんか。」
彼の調子が浮々したのに合せて、隣人も笑を聲に出したのであつた。
夜番の番が廻つて來た。或る大名華族の屋敷の門長屋が詰所にあてられた。外套を着、襟巻を

した彼は、和服に二重廻の隣人を引張つて出かけた。

「今晩は。」

と入つて行くと、

「御苦勞さま。」

と受けてくれた。彼と隣人の外に、仕立屋と駄菓子屋が當番だつた。だが、詰所にはもつと多勢集つてゐた。町内の口きゝ連から、用の無いてあひが、將棋盤や碁盤を持込んで、しきりに無駄話をしてゐた。彼等の目は一齊に隣人の一身にそゝがれた。

その意地の惡い、衆を賴むまなざしを、隣人は直ぐに感じてしまつた。帽子をとつた丈で、頭も下げずに、一隅に坐して默した。

前の晩の連中のしわざであらう、そこいらには酒德利や湯呑茶碗がころがり、何と辨別も出來ない臭氣がいつぱい漂つてゐた。

當番の四人は二人づゝに分れて、交代で町内を廻つた。彼と隣人の組も、交互に提灯を持ち、拍子木を叩いて廻つた。彼は、内心馬鹿々々しく思ひながらも、隣人の心を引立てる爲に、無駄口をきいたり、はしやいで見せたりしたが、隣人は恰も彼の煉瓦の高塀の中に閉籠つてゐた精神

そのものゝやうに頑固に沈默を守り、明白に此の往還へ出て來た事を悔んでゐるのであつた。
夜が更けるにつれて、彌次馬は一人へり二人へつて、詰所には當番の四人丈が殘つた。大名華族の臺所から、すゐとんが運ばれ、駄菓子屋自身の家からは、商賣物を盆にのせてかみさんが持つて來た。
「さあ、頂かうぢやありませんか。」
「いかゞです。」
「毎晩かういふ風に何か御届物があるんですか。」
「こちらの御屋敷では、此の御長屋を無代で貸して下さつた上に、お茶だのお菓子だの下さるんです。」
「もつとも此處のうちが一番夜廻の恩惠に浴すわけだな。貸家は澤山持つてゐるし、斯うしてゐれば何より安全だから、少し位御馳走したつていゝわけか。」
「なあにこの御屋敷ばかりぢやあないんですよ。外にも方々から、いれんなものを持つて來ますがね。昨夜なんざあ床屋さんだの魚定の親方の組で、町内の顔役揃ひだつたから、刺身が出る、酒が出る、まるでお祭でしたよ。」

駄菓子屋も仕立屋も、昨夜の御馳走には及ばない事を深く感じながら、しかし感謝してすゐとんの箸を取上げた。

「さあいかゞです。あつたかいうちに頂かうぢやありませんか。」

彼は何となく不快に感じはしたが、異をたて、氣取つてゐると云はれさうなので、相手の心持を惧れて手を出した。

「いかゞ。」

何かしら氣の毒な感じをいだきながらさゝやいて見たが、隣人は首を振つて拒んだ。

「お前さんは頂かないんですかい。もつたいない。折角下さつたもんだ。半分つにして頂いちまひませうや。」

駄菓子屋は隣人の分を、仕立屋と分けて片づけてしまつた。

二度目の番が廻つて來た。彼は又隣人と組んで忠實に役目をつとめた。大名華族からは又うどんかけの振舞ひがあり、駄菓子屋と仕立屋と彼は喰べたが、隣人は固く拒み、結局駄菓子屋と仕立屋がそれを半分づゝ分けて平らげた。

更けるとめつきり寒くなつた。火鉢を圍んで話す者には何のかゝはりも無く、隣人は暗く默してゐた。彼の勸說にしたがつて、この夜廻に加つた事を、益々悔んでゐる樣に見えた。

彼と隣人とが、幾度目かの提灯をさげ、拍子木を叩いて一巡して來ると、詰所の中から多勢の高聲が往來へあふれてゐた。

「御苦勞さま。」

「お疲れでせう。」

あいそのいゝ聲をかける者もあつた。駄菓子屋と仕立屋の外に、數人彌次馬が集つてゐた。みんな酒氣を帶びてゐた。

一恰度いゝとこでしたぜ。今も話してたんですが、かうやつて每晚御屋敷の御長屋を拜借してゐるのも、隨分こちらさまには御迷惑な話で、吾々としても心苦しい次第だから、町內で金を集めて別に番小屋を建てようつていふんだがね。つまり何時迄も人さまを頼らずに、吾々町內の者が自治體を組織して、夜警の設備をしようといふ趣意なんで。」

「それから、こいつもついでに話して置かなくちやあならないんだが、昨日あつしが御屋敷によばれてね、殿樣の御顏を當りに上つたんだが、そん時ぢきぢきの御話で、町內の人が夜警にあた

つてくれるのは結構な事だから、少しだが何かのたしにしてくれつてんで、大枚の御金を頂いたんだ。頂いたつていふとをかしいが、あつしが町内のみんなに代つて預つてゐるのさ。それで早速重立つた方に相談してね。半分は番小屋の建築費にあて、半分はめいめい斷うだらしのねえ風をしてゐちやあみつともねえから、夜警の番に當る者が着るやうに、合羽と帽子を二揃づゝ買つて來た。これだがね、こいつを斷うかぶつて、これを着てさ、ね、身なりがきまるときりつとして、見ても惡くねえや、ね。仕立屋さん、おい、ちよいとかぶつてごらんよ。へ、似合ふぢやあねえか。閣下、はつはつ、左樣であります、終りつてやつたぜ。威勢がいゝやな。」

床屋の親方は風呂敷包を解いて、中から靑年團式の雨外套と、カアキイ色の白線の入つた兵隊式の帽子を取出し、いきなり仕立屋の頭へかぶせた。

「こいつあいゝや。」

「似合ふぜ。」

口々に何か氣の利いた事を云はうとする彌次馬に取圍まれ、當の仕立屋は他意なくげらげら笑ふのであつた。

「ありがてえぢやあねえか。あつしなんざあ學が無(ね)えから、面倒臭(くさ)え理窟はわからねえけれど、

身分のある方が先に立つて、お金を出してくれてこそ、世の中はをさまるんだ。社會主義なんざあ芽を吹く隙が無えつていつたわけなんだ。ね、さう云つた理窟でせう。あつしにやあ面倒臭え事あわからねえけどさ。」

親方は自分の取計に對して、誰一人異論を唱へる者の無いのを見てとつて、すつかり醉が發して、づうつと一座を見渡したが、片隅に腕を組んで、暗く默してゐる隣人に今更きびしい目ざしを止めると、わざと額に立皺を刻んだ。

「え、ありがてえぢやあねえか。こつちからくれつたつてくれねえのが當節なのにさ、さきさまからふんだんに下さらうつて心持がありがてえぢやあねえか。え、途方も無え高利の金を貸しやあがつてさ、土百姓から一代のうちに、何十萬とか何百萬とかの金をつくつたくせに、氏神さまの祭だ、町内のつきあひだつて、幾度頭を下げて頼んでも、鐚一文も出さねえわからずやもありやあ、斯うしたもの丶わかつた方もゐらつしやるつてんだ。ね、かういふ人間が五六人ゐてみねえな、町内はあかるくなるぜ。」

一座には、親方のおきまりのしつつこさに多少閉口してゐる者もあつたが、それよりも隣人に對する平素の不滿が強くゆきわたつてゐた。意地の惡い視線は、その人の上に直射した。

「さあ、もう一廻して來ようか。」

彼は自分達の順番では無いと承知の上で、隣人の立場のあやふさを救ふ爲に、みづから拍子木を持つて立上つた。

「今度は私共の番ですよ。」

「いゝえ、よござんす。いゝ月夜だから、もう一廻して來ませう。」

彼は隣人を促して立上つた。

「あ、一寸待つとくんなさい。先刻申上げた番小屋建築の件は御異議はありませんた。」

肉屋は二人を呼止めた。

「えゝ、みなさん御賛成なら、應分の事は致します。」

彼は隣人をかばつて、二人分答へた積りだつた。

「井原さんも御賛成下さるんですね。」

肉屋は皮肉に念を押した。隣人は冷かな態度で敢て答へなかつた。

「さうです。」

彼はとつさに身替になるやうな心持で引とつて答へて、つかつか往來に出た。

「お、一寸待つとくんなさい。」

又うしろから床屋が聲をかけた。

「こゝの御屋敷の殿樣が下さつたんだ。今晩から夜警の者は、こいつを着て、こいつをかぶつて貰ひてえんだ。」

靑年團式の外套と兵隊式の帽子を持つて追かけて來た。

「それには及ばないでせう。」

彼は一應斷つて見た。

「いけねえ、いけねえ。しつこしのねえなりをしてゐちやあ威勢が惡くて爲樣が無えや。こいつをかぶつて、日本男兒らしくやつて貰はなくちやあ。」

みさかひもなく兵隊式の帽子を彼の頭にのせ、彼の着てゐた外套を無理に脱がせ、靑年團式の雨合羽を着せた。彼は自分の心に逆らひながら、力づくの反抗を敢てする丈の氣力が無かつた。

「さ、お前さんもお揃にして貰はうぢやあねえか。」

親方の態度は、彼に對するよりも隣人に對して遙かに壓制的であり、喧嘩腰だつた。

いけない――何か切迫した危險を感じて、彼が身をもつて割つて入らうとした時、既に隣人は

自分の頭の上にのせられた兵隊式の帽子を大地に叩きつけてゐた。
「何をしやがんでえ。」
「たゝんじまへ。」
「やつつけろ。」
「高利貸。」
「社會の敵。」
「鬼。」
「畜生。」
口々に何か罵りながら、連中が立上る前に、床屋の親方は素早く身を躍らせて、隣人の面上に一撃を加へた。
格鬪は一瞬間にして終つた。虚弱な、曾て遊び友達も無かつたから、從つて喧嘩の修練も積んでゐない「社會の敵」は、忽ち地べたにへたばつてしまつた。
「よせ、よせ、手むかひしないものに亂暴するな。」
彼の言葉は、言葉としては立派だつたが、その調子は、全く平あやまりにあやまるのと同じだ

つた。彼は隣人をかばひ、無理にかぶらせられてゐた兵隊式の帽子をとつてみんなの方にひよこひよこ頭を下げた。

やうやく勘辨して貰つて、何時迄も地べたにへたばつてゐる隣人を助け起した。隣人は青ざめ、何一言もいはなかつた。彼もたゞ心の中で謝罪する外に途も無く、とぼとぼと歩を運んだ。井原と書いたちひさい表札の出てゐる門柱の中に、傷ついたあるじを送り込んだ。

翌日隣家へ見舞に行つたが、顔面筋肉のちつとも動かない雇人の老婆が出て來て、主人は寢てゐて御目にかゝれませんと斷ると、直ぐに障子をしめて引込んでしまつた。例の女の子が廊下でつく毬の音が、完全な韻律を保つて聞える外には何の物音もしなかつた。

どうもすみません。下らない往來なんかに引張出したのは私の間違ひでした　彼はさう心の中で詫びながら、誰も目の前にはゐないのだが、叮嚀に頭を下げて引とつた。

數日後、人足が來て、崩れた塀の煉瓦をとりかたづけたが、間も無く、井原富吉氏が先代五郎右衞門氏の遺産として幾十萬圓だか幾百萬圓だかの財産と共に讓られた煉瓦の高塀は、以前にも増して頑丈に、以前にも増して高々と、てつぺんに硝子の破片を光らせて、建設された。（昭和四

年十二月一日）

夏期實習

二

帝都生命保險相互會社の鰐鮫の口のやうな暗い入口から、角帽や中折や、かんかん帽子をかぶつた雜魚が、ひとかたまりづゝ吸ひ込まれて行つた。長い廊下の突當りに廣間がある。其處に彼等は群を成した。

集つた百數十人は、お互に顏を知らない者が多かつた。少しは、同じ學校から來た者同志で、ひそひそ話合つてゐるのもあつたが、大概は互に敵狀を偵察するやうに、眼を光らせてゐた。はつきりした形はとつてゐないが、競爭心と嫉妬心の芽生が、みんなの胸にぐんぐん延びてゐるのであつた。

「あゝあ。」

この場合不謹愼にもあくびをした者があつたが、周圍の者が忽ち輕蔑の色を示して、その男の顏を睨んだので、誰にともなく微笑を見せ、てれて、悄氣て、うなだれてしまつた。みんなが行

儀よくしなければならないといふ共同感が、室内を領してゐたのだ。
會社が指定した時間は夙に過ぎ、應募者は退屈し切つて、不滿と不安と倦怠と焦躁に負けて來た。みんなにとつて、正面の演壇のうしろの壁にかゝつてゐる禿頭白髯のぢいさんの寫眞が、たつたひとつの牽引であつた。その顏を、新聞や雜誌で見知つてゐる者もあつた。顏は知つてゐても名は知らない者もあつた。顏も名もまるつきり知らない者もあつた。それらの世間知らずの若者に對して、ぴかぴか光る金の額緣の中から、禿頭白髯のぢいさんは、嚴然たる威容を保つて見下してゐた。叱るやうな、睨むやうな、あはれむやうな、嘲るやうなその表情は、見る者の心々でどうにでも解釋された。
長い間待たされた後で、みなりのとゝのつた若い社員があらはれた。
「大變お待たせしました。只今庶務課長が御目にかゝりますが、その前に皆さんの名前を呼びますから、返事をして下さい。」
報告的にいひ切ると、直ぐに積み重ねてある履歷書を、一枚々々めくつて、姓名を讀あげた。呼ばれたものは一齊に行儀を正した。自分自身の不行儀をたしなめるやうな咳拂ひが起つた。
みんなの視線が一度に一點に集中された時、其處に短軀肥大の課長が悠然とあらはれた。たし

かに彼は悠然とあらはれる自分を、立派につくり上る事に苦心してゐた。彼は壇上の人となる前に、社長の額にむかつて一禮した。

「諸君。」

聲は體格に似ず細かつた、こはれた管樂器のやうな微震音を伴ふ聲だつた。

「わたくしは矢田であります。」

さう云つて、二重顎の短い首を稍上に向け、滿堂の若者に矢田鉦吉である事を確實に認識させようと努めた。だが、社長の顏を知つてゐる者は幾人かあつたが、課長の顏を知つてゐるものは一人も無かつた。それにも拘らず課長は幸福だつた。

「この度我帝都生命保險相互會社に於きまして、夏期實習を行ふ事になり、各學校に志望者を募りましたるところ、斯く多數の應募者に接しましたのは、不肖欣快の至に堪へざるところであります。御承知の如く、我國に於ける生命保險事業は、未た僅に半世紀の經驗を積んだに過ぎないのでありますが、既に世界第三位の保險國となり、現在契約高八拾億を超え、しかもその一割強は實に我社の保有するところであります。いかに我社が天下の信頼を博し、國家社會の爲に貢獻しつゝあるかは敢て我輩の喋々するを要せざるところと信ずるのであります。」

課長は、たしかに自己研鑽の雄辯術に陶酔して、聽者の評價が如何であるかを推測する餘裕を失つてゐた。彼の微震音を帶びた聲は、時に咽喉笛の破滅に歸するかを危ぶませるのであつたが、彼自身は決してひるまなかつた。

いかに生命保險事業が人間社會にとつて必要不可缺のものであるか、いかに帝都生命保險會社が名實兼備の優良なる會社であるか、重複を厭はず、冗長を恥る事なく言葉を盡した。

「就中我社の誇る可きは、その組織であります。諸君。御承知の如く我社は相互組織であります。利益を壟斷する株主といふ怪しからぬものが存在しない。自分は遊んでゐながら事業の收益を搾取する株主が存在しない。保險の效果を知つて、喜んで我社と契約する人は總て我社の社員である。諸君と雖も、只今我社の保險に加入するならば、たちどころに帝都生命の社員となり、その經營に參畫し、その利益を受る事が出來る。それが相互組織の特徴であります。卽ち株式會社ならば會社の營業の利益は株主の懷にたくしこまれるのであるが、相互組織ではさういふ不合理な事は無く、之を加入者全員に分配するのであります。すべてが民衆本位になりつゝある今日、相互組織が株式組織にまさるものたる事は疑ふ餘地の無いものと確信致します。」

さういふよき事業を、よき組織の會社を根據として行ふ事の幸ひを、課長は力說するのであつ

た。

「而して、この度我社が他社に率先して、學生諸君の夏期休暇を利用し、尊い體驗を得る機會をつくりました事は、生命保險事業の一新紀元を劃する事ともならうかと、多大の期待をかけてゐるのであります。」

元來細い聲を張上げ、額から汗を流し、自分の辯舌に泥醉したかたちだつた。いかに現在の學生が將來の日本を背負つて立つ可き使命を帶びてゐるか、いかに此の尊き事業が活動的人物を待ち受けてゐるか、いかにそれらの新人によつて斯界が目覺まされ廓清され、品位を高めるか、あらゆる無形の稱讃とおだてを惜氣も無く撒き散らし、浴せかけた。彼は雄辯術が充分學生を魅了した事を疑はなかつた。しかし學生にとつては自分達の無力ははつきりわかつてゐるので、いかにほめられても自分達の事だといふ實感が無く、誰か外の世界の人間の噂を聞かされてゐるやうに思はれるのであつた。彼等は手ごたへの無いゞ沈默を守りつゞけた。勿論中には、ひそかにあくびを嚙殺したり、輕いいびきを立てゝゐねむりをして居る者もあつた。

「しかし、人間はいかに高尙なる仕事に從事するとしても、全然無報酬では働かない、否、報酬無しでは百パアセントの能率を發揮する事は出來ない。其處で、諸君に對しても、その働きに應

げて相當の御禮をするのが當然と考へます。恐らく諸君は父兄から學資を貰つて勉強してゐるのでありませうが、自分で働いて得る金の尊さを知るのも決して無益ではありません。寧ろ甚だ愉快な事であります。さてその報酬は……」
千圓の契約を締結したらいくらの手當をやる、五千圓ならばいくら、一萬圓ならばいくら、二萬圓ならばいくら、三萬圓ならばいくら、五萬圓ならばいくら、十萬圓ならばいくら、十五萬圓ならばいくらと、大きければ大きい程率の増進する數字をあげて細かく說明した。高遠なる理想を說く時とは自ら異なる氣分が、課長の滿身に自然の表情となつてあらはれた。彼は金錢について語る時、それが自分の儲でゞもあるかのやうに相好を崩した。
「どうです。無資本でこれ丈の收入がある。いゝ商賣ではありませんか。」
親しさを示して、腹をゆすつて笑つた。
これで課長の長い挨拶はその本旨を盡したのであつた。彼はもう一度激勵の言葉を繰返し、明日はノオトを携へて來るやうに、又その節は社長も親しく面接するであらうとつけ加へた。
「では、今日はこれでお別れ致します。」
多年の習練によつて學び得た笑顏を見せながら降壇し、短軀肥大のからだを悠然と運んで去つ

た。

學生は一時に立上り、のびをし、あくびをし、何かくすぐつたい笑を浮べ、又ひどく緊張し、おもひおもひの所作と表情で、雜然と席を離れ、やがて鰐鮫の口のやうな暗い玄關から、夏の日の街路へ吐き出された。

二

往來に吐き出されて、四方へちりぢりに別れて行く中の一人に小曾根堅太がゐた。彼は私立大學を來年卒業する筈で、何よりも心配な卒業後の就職口に思ひ惱む時代の兒であつた。大學校さへ卒業すれば立派に喰へると思つてゐたのが、何時の間にか時勢は變つて、大學出である爲にかへつて職にありつけない時代が來てしまつた。彼は別段學問好きでも無く、又人にすぐれた秀才でも無かつた。寧ろ平凡な人間である爲に、無理をしても大學を出て、月給にありつかうとする大多數の一人に過ぎなかつた。夏の休暇には國に歸り、學校生活最後の夏休みを充分享樂しようと考へてゐたのだが、小遣を使ひ過ぎ、月謝も拂へなくなり、あやふく受驗資格を失ひさうになり、あわてゝ友達に融通して貰つて試驗丈はすませたものゝ、遠い故郷へ歸る旅費もなかつた。

折柄二三の保險會社が申合せでもしたやうに、夏休の學生の爲の講習を開き、兼て外交の體驗を與へるといふので、勇を振つて應募したのであつた。そんな事でもして置いたなら、それが緣になつて、來年卒業と同時に職につけるのではあるまいかとも考へた。うまく行けばいくらかになるといふ事は勿論彼を誘引した。彼は保險の理論にも實際にも完全に無智だつた。どの會社がいゝのかも知らなかつた。たゞ何となく、相互會社の方が株式會社よりも牽引力が强かつた。それは封建主義と民主主義といつたやうな差別があるやうに想像されたのである。

果して課長の說明によつても、相互組織は遙かにすぐれたものに違ひ無く思はれた。遊んで暮らしてゐる株主に搾取されない。契約者が卽ち社員で、會社は契約者のものだから、營業利益も契約者に分配される　何といふ素晴らしい話であらう。自分も一口契約しよう。さうすれば自分は帝都生命の社員だから、來年卒業と同時に其處に一つの椅子が待受けてくれるであらう。彼はあく迄も都合よく考へた。そればかりでは無い、契約者以外の誰人にも利益を奪はれず、すべてが契約者に分配されるとすれば、やがては自分もその配當で金持になれるかもしれないのだ。彼は街上の暑さも忘れて將來を空想した。卒業する。帝都生命の社員になる。月給をとる。利益の分配にあづかる。課長になる。支配人になる。社長になる。あの額緣の中にいかめしい禿頭が

將來の自分なのだ。思はず知らず、彼は白日の下で微笑した。

「おい。」

「よう。」

うしろから肩を叩かれて振かへると、同級の相原欣吾の大きなからだが目の前に迫つてゐた。

「どうした。まだくにへ歸らないのか。」

「うむ、歸つても爲樣がないからなあ。それよりも君はどうしたんだ。」

「俺か、俺はこの夏保險屋の見習をやつて見ようかと思つてゐるんだ。」

小曾根はいきなりどやしつけられた程吃驚した。二の句がつげなかつた。額から汗が玉になつて落て來た。自分の祕密を知られたやうに狼狽した。

「お前も知つてるだろ、學校の掲示板に出てゐたから。今日が面會日なんだ。」

ふうん、こいつ先刻帝都生命の廣間で、課長の長講を傾聽してゐたのか、それにしてはよく見つからなかつた。まあよかつたと思つたが、汗は矢張とめどなく流れて來た。

「どうだい、お前も行つて見ないか。一人よりも二人の方が氣が強いからなあ。」

非常に愉快な冒險を敢てするやうに、相原ははずむ心をまざまざと見せた。

面とむかつて小曾根は氣の引ける立場に在つた。彼は急場のしのぎを相原にも助けて貰ひ、月末迄には返す約束だつた。

「行くつて、何處へ行くんだ。」

「皇國生命さ。これから出掛けると恰度いゝ時間なんだ。」

小曾根は多少安心した。友達は彼とは別の會社の催しに應募してゐるのだつた。

「皇國生命。ふうむ、外にも何とかいふのがあつたらう。」

「あつた。帝都生命と共榮生命さ。」

「皇國つていふのが一番いゝのか。」

「一番いゝかどうか知らないが、兎に角古い信用のある會社ださうだ。ほら、創立は古く施設は新らしつていふ廣告を新聞に出してゐるやつだよ。」

相原は生來の熱情のはけ口を見つけて、自分の活動を悲壯化し、相手の思惑には頓着なく、一人で喋りながら、目的の方角に引張つて行つた。

小曾根はたつた今、帝都生命の廣間に課長の雄辯を聽いて來た自分を語らなかつた。保險屋といふと、あらゆる惡德を身につけ、世間から嫌はれるものゝやうに感じられる。その見習をする

といふ事が、おほつぴらに他人に話せない心持をいだかせた。そんな筈はない、立派な仕事なのだと自分自身に辯解しても、矢張心が承知しなかつた。さういふ自分の卑屈に比べて、友達のあけつ放しの態度はいさぎよく思はれ、その爲にも一層相手に壓迫を感じた。

「え、おい、いつしよに行けよ。くにへ歸るなら爲方が無いが、東京で下宿にくすぶつてゐるのなら、寧ろ暑さと鬪ふ積りで働く方がいゝぢやあないか。うまく行けば小遣稼ぎになるらしいぞ。」

さういはれると、小曾根は愈々參つてしまつた。相原とても樂で無い懷から貸してくれたのだ。早く返してやらなくてはならないと思ひながら愚圖々々になつてゐる今、貸した方が稼いで、借りた方が遊んでゐては顏がむけられない。小遣位は稼げるといふ相原の何氣ない言葉さへ、小曾根の耳には痛かつた。

「ね、贊成しろよ、俺だつて一人ぢや心細いよ。共同してやればきつとうまく行くぞ。」

「でも、保險の保の字も知らないで大丈夫か。勸誘つてやつはとてもむづかしいさうだぞ。」

「なあに他人がやる事だ。やつてやれない事はないさ。」

彼は熱心に共同勸誘を說いた。それには小曾根も心が動いた。自分だつて一人で見ず知らずの

家に押かけて行く勇氣は無い。二人なら餘程氣が強いだらう。取消せるものなら帝都生命の方を取消して、こいつといつしよに皇國の方にした方がいゝかな……

「あれだよ。あの古い石造のうちさ。お、もう時間だぞ。」

腕首の時計を見て、足を早めた友達の氣勢に抵抗する力は無く、小曾根も引擦られて階段を上つた。

受附に案內されて通つた廣い室には、既に澤山の學生が集つてゐて總ての光景が帝都生命の場合と似たものだつたが、こゝには社長の寫眞のかはりに會社の建物の寫眞がかゝつてゐた。

二人か一隅の空席を見つけて腰かけると、間もなく少し背中の曲つた胡麻鹽の老人と、赤い襟飾を結んだ社員が連立つて來た。老人は叮嚀に一禮して、極めて低い聲でくどくどいひ出した。

「今日は暑いところを、みなさんお揃で御見えになり、甚だ感謝に堪へません。ところが折悪く東京支部長は據所ない用事で地方へ出張致しましたので、私か代理で御挨拶申上る次第でありますが、私は甚だ口不調法でありまするで、こゝに居られます社員野村亮一君にかはつて頂く事に致します。同君は會社から選ばれて歐米に留學せられ、最近歸朝した秀才であられますで、さぞかし有益な御話がある事と存じます。」

老人はたしかに演説とか卓上挨拶とかいつた事の經驗に乏しい人に相違なかつた。喋る事にひけめを感じてゐる樣子があまりに明かで、忽ち學生達の輕蔑を招き、殊に低聲で聞えないので、うしろの方に陣どつた者は、しきりにざわついてゐるのであつた。

「では野村さん、お願ひします。」

老人は一座が傾聽してゐないと知ると、一層參つてしまつて、恥しさうに頭を下げさつさと窓際の風の通る所へ椅子を持つて行つて扇子を使ひはじめた。

赤い襟飾の社員は細長いからだに特殊のしたをもたせ、教師が學生に教へ、牧師が信者に說教するやうな一種の型で話し出した。

「只今豐留副長から御紹介をうけました野村であります。私は約三年間米國に於て生命保險の學理と實際とを研究し、つい此間歐羅巴を經て歸朝したものでありますが、歸朝以來今日程嬉しく思つた事は無い、何がそんなに私を喜ばせたかと云ふと、それは斯く迄多數の若い活動力の旺盛な知識慾に燃ゆる諸君と一堂に會する事を得た事であります。」

絕えず微笑を含み、充分の親しさを見せ、又極めて朗かな音聲をみづから享樂するものゝやうであつた。彼にとつて、自分の豐富な知識を多勢の人間に認めさせる機會の到來は樂しい事に違

ひなかつた。

「實は、この度諸君の尊い夏休みをさいて頂いて、我社が講習を開くといふ計畫は、私が立案した事なのであります。立案はした。しかし私は內心その成功を危ぶんでゐました。何故でせうか。私共が諸君の如く學窓に在つた頃は、我國では生命保險といふと甚しく毛嫌(けぎらひ)したものでした。現に私の如きも、あいつは保險屋になつたさうだと級友から冷嘲されたものでありました。當時若し何處かの會社で、學生を集めて保險の講習をしようとしたと假定して下さい。恐らくは只の一人も應募する者は無かつたでせう。然るに今日の日本は世界第三の保險國となり、保險がいかに人生に必要なる施設であるかは常識となつた。おかげで諸君の如き學徒にして、將來社會に活動せんとする人材壹百餘人をこの一堂に見るに至つた。豈(あに)喜ばざらんとするも得べけんやではありませんか。私の如き若輩の者さへ隔世の感を抱くのであります。まして況や斯業に從事する事三十有餘年に及ばるゝ豐留副長の如きは、この光景を何と見らるゝでありませうか。」

さういひながら上役の方へ愛嬌笑を湛へた顏を向けたが、扇子を使つて居た老人の手はいつかだらりと垂れ、子供のやうに口をあけて居ねむりをして居るのであつた。さういふ上役のていたらくに、多數の學生の視線を差向けたのは自分の落度(おちど)だと思つた樣子で、彼はあわてゝあとを續

けた。
學生は一瞬間浮べた笑を無理に呑込んで、再び謹聽した。殊に小曾根は深い興味を感じた。彼は帝都生命の場合と一々對照して心に刻み込んだ。あつちでも課長が我專のやうに得意がつた世界第三の保險國を、こゝでも若い新歸朝者の口から聞いた。さうか、日本はそんなに保險好きなのか、彼は全くはじめて得た知識なのでひどく感心してしまつた。
「保險思想は津々浦々迄普及されました。しかし、私の見る所によればあちらに比して日本では、未だ生命保險の價値を充分認識して居ないといふ意味は、生命保險といふと葬式の費用だとか、遺族の爲の用意だとか考へるのでありますが、既にあちらでは、生命保險はひとつの財產蓄積手段であり、又最も有利なる投資の方法として認められて居るのであります。今茲で諸君がめいめい壹萬圓の保險をつけたとする、諸君は忽ち壹萬圓の財產をつくつたと同じである。たゞ此の財產は勝手に使ふ事が出來ない。それではつまらないと云ふ人があるかもしれないが、勝手に使へないといふところに此の財產の特徵がある。決して無駄に費消されない強味があるのであります、葬式費用の生命保險を不吉だ、緣起が惡いと嫌ふ人はありませう。しかし、それが最も安全確實な利殖の道であるとわかつたならば、誰が反對するでせうか。保險募集はむづかしいと云ふ。そ

れは說明が下手だからであります、緣故募集、泣落し募集、強迫募集、詐欺募集の時代は夙に過去となり、今後の募集は學理と實用の結合によつてなされねばなりませぬ。經濟知識が必要である。法律知識が必要である。心理學の應用が必要である。殊に保險外交員は、一家の財政計畫に參與するのであるから、何よりも先づゼントルマンである事が必要である。斯ういふ風に、資格條件を數へて參りますと、將來の保險外交員は、最高學府を出た智德兼備の人物でなければならない。將來諸君が學窓を出られ職を求めらるゝに當つて、進んで保險外交員たらんとする時代は旣に目の前に來て居るのであります。御承知の通り亞米利加合衆國の大統領カルヴイン・クーリツヂ氏は、大統領の任期滿つると同時に生命保險會社の重役となつて、今やこの天職の爲に勉勵して居るのであります。」

卓子を叩いて見えを切りさうな語氣であつた。この天職の見習生に對し、會社は五日間保險理論の講義を與へ、その終了を待つて募集の實際にあたらせる。それに對して報酬を拂ふ事は勿論で、千圓の契約が出來ればいくら、壹萬圓ならばいくら、十萬圓ならばいくら、十五萬圓ならばいくらと、細かい數字をあげて說明した。

「おわかりになりましたか。なかなかいゝ收入でせう。なほその上に、毎日市内を馳驅するには、

足代と辨當代が入用ですから、契約が出來ようと出來まいとに拘らず、五日間の講義終了と同時に、一人金貳拾圓づゝを差上げます。」

一人あたり金貳拾圓を支給するといふのは、出す方は充分そろばんを弾いてゐるのであるが、學生にとつては意外の事だつた。何かしら感動を受けた動搖が、此の一室に漲つた。

「なほ終りに一言申添へ度いのは、この種の催しは我國では最初のものと考へてゐましたところ、聞けば同業帝都生命でも行ふといふ事でありまして、あちらではどういふ方法をとるか知りませんが、いづれがよりよき成績を擧るかは、極めて興味深き事であります。私は德義上他社の批評をする事は好みませんが、たゞ諸君はよくも皇國生命を御選びになつたと申上げ度い。何故か。それは此の會社の歴史が古く、經驗は豐富であり、契約高は多く、資產の確實無比なる事、並に保險種類が澤山ありまして、各人夫々の需要に應ずる事が出來、加之保險料は極めて低廉であるといふ強味を持つてゐるのであります。この背景があるのですから諸君の成功と否とは、たゞ努力の如何によつて分るゝものと斷言しても差支ありません。」

明日から五日間、營業時間終了後ノオトと印形を忘れず持參する事、ノオトは講義の要領を書留る爲に必要であり、印形は出勤簿に捺印する爲に必要であると、細々した事迄注意して、一禮

して壇を下つた。あくびを嚙み殺し、ゐねむりを我慢して聽いてゐた學生は、解放された家畜のやうに一時に緊張感を失つて、騷然として立上つた。

涼しく南風の吹いて來る窓際の椅子に、こゝちよく夢を見てゐた三十年勤續の東京支部副長豐留隆之進氏は、吃驚して眼をさまし、はたはたと扇子を鳴らしながら、さも謹聽してゐるやうに、下役の方へ顏をむけたが、その時旣に話終つた新歸朝社員は、長い雄辯に疲れた脣邊に輕い皮肉な微笑を浮べて、室外へ立去らんとするところであつた。副長は身を起し、學生の方へ中途半端なおじぎをして、下役のあとを追つたが、廊下へ出ると堪へきれなくなつて、大きなあくびをした。

「どうだい、流石に大どこ丈あつて鷹揚なものぢやないか。」

おもてに出ると直ぐ、相原は今出て來たばかりの古い建物を振仰いで云つた。

「え、契約が出來るか出來ないかわからないのに、前金で貳拾圓くれるといふんだぜ。今日集つた奴が先づ百人、もつとゐたかしら、まあかりに百人として、二千圓だからね。少なくないよ。萬一それで契約が出來ないとなると、二十圓たゞ貰ひになるぢやあないか。ちやくいゝ奴になると、そいつをつかんで何處かに旅行しちまふかもしれないぞ。」

相原は心の底から感心した様子で、興奮のけしきをかくさなかつた。

小曾根は妙に憂鬱な氣持に捉はれた。帝都生命の課長の示した手數料の計算と、皇國生命のとを比較して、どつちがいゝか馴れない頭には明確につかめなかつたが、少なくとも後者の、出來ても出來なくても前金で二十圓くれる、といふのは力強い誘引だつた。その二十圓があれば、相原から借りた金を返し新しい夏帽子を買ひ、それから――彼は忽ち口腹の慾に思ひ迷つた。

「なあ、おい、ひとつ頑張つて見ようぢやあないか、もともと生命保險てやつは、誰にだつて結構なものなんだから、勸め方さへうまければ、案外出來るかもしれんぞ。俺あ、今晩下宿のおやぢを口說いてやる。」

自分の活動とその效果を想像し、相原は都合のいゝ夢を描いてゐた。

三

小曾根堅太は終日樂まなかつた。夏休みだといふのに、夜も机にむかつて六法全書を開き、生命保險に關する條文を拾つて讀んだ。株式會社と相互會社の優劣はその條文からはつきり、つかむ事は出來なかつた。しかし、契約者全部が社員で、重役もその社員が選擧するのだといふとこ

ろが、ひどく新味を感じさせた。皇國生命の方の前渡金二十圓の魅力も充分きいたけれど、兎に角最初に履歴書を出した方に行くのが本當だと考へた。相原には何か胡麻かしを云つて、帝都生命の方へ行かうと思つてゐた。

ところが、翌朝起きて見ると、皇國生命から葉書が來てゐた。

拜啓貴下當會社夏期保險實習生希望の旨御申込相成候に付諸般の準備相整へ御待致居候間此狀持參明日午後三時シヤアプに御來社相成度此段申進候

堅苦しい候文の中にシヤアプといふ片假名をまぜたのが、いかにもあの赤い襟飾の新歸朝者の仕事らしかつた。小曾根は舌うちして自分を叱つた。昨日その會社の出口で、萬一未だ履歴書を出してゐない人があるなら、住所氏名丈書いて行つてくれといはれ、うつかり紙片に名を殘したうくわつさが悔まれたのだ。

彼は又迷はざるを得なかつた。帝都生命には夙に申込をしてゐるのだから、これをすつぽかしたら、會社から愚圖々々云つて來るかもしれない。それも自分に對して抗議を申込んで來るのなら、あやまつても事は濟むが、萬一學校の方へ談じ込まれたら信用をなくしてしまつて、來年の就職の妨にならないとも限らない。彼は皇國生命からの葉書を懷に祕めて、帝都生命へ出かけて

行つた。

昨日の廣間に、課長と助手が机を並べ、來た者には出勤簿に判を押させて、氏名と本物とを見比べた。小曾根は、どうにも逃げやうのない自分を感じた。

「どうだい、何人集つた。」

課長は時計を見ながら助手にきいた。

「ひい、ふう、みい――助手は鉛筆で一人々々の氏名の上を叩きながら勘定した。

「どうしたんだ。昨日よりも餘程少ないぢやあないか。」

「いざとなると尻込みをするんですな。」

「意氣地なしめ。」

昨日とはうつて變つて課長は不機嫌だつた。上着を脫ぎ、椅子の背にそつくりかへり、机の上に靴のまゝの兩足をのせて、扇子をやけに使つた。

定刻を餘程廻つてから、課長は大儀さうに身を起して壇に上つた。矢張、社長の額にむかつて禮をする事は忘れなかつた。

「ごらんの通り、昨日よりも人數の少ないのは殘念ですが、今日お出の方々は極めて決心の堅い、

一人當千の人々に違ひありません。雜兵葉武者はあつてなきにひとしい。我が帝都生命は最良の會社たるを理想とし、又實際最良の會社である。諸君の如き一人當千の士こそ、吾々の歡迎するところである。」

課長の咽喉笛は細く高い音を出し、暑い室内に波動を送つた。

「さて、短時日に實習の效果を收める爲には、長々と理窟を述べてゐるひまが無い。殊に諸君は學校に於て、保險の何たるかは研究された筈である。私は保險論を長々と喋る愚を避けて、直に保險募集の實際を御教授申上げ度いと思ふのだが、それに先達て、特に今朝葉山の別莊から、諸君に御目にかゝる爲に出京されました社長大川爲三郎氏を御紹介致します。」

助手に目くばせすると、若い社員はあわてゝ室外へ去つた。課長も椅子の背にゆだねてあつた上着をとつて身につけた。學生は緊張し、禿頭白髯の寫眞を仰ぎ見ながら、その實物の出現を待つた。

間もなく、社長の素顏は威嚴を保ち、しかもその威嚴を崩さない程度の溫容をつくる事に苦心しながら、慢性僂痲質斯の足を引擦つて演壇に上つた。

「私は當會社の社長大川であります。元氣のいゝみなさんに御目にかゝる事は私の最も悅ぶとこ

ろである。きけば諸君は今日より保險勸誘の實習をせられるさうであるが、これは甚だよい事である。働かざるものは喰ふ可らず、誰か西洋人が云つたさうであるが、私は大賛成だ。不肖大川もごらんの如く頭上一毛を止めざるに至る迄働きつゞけ、曾て一日も働かずして喰つた事は無い。働く事、それ自身が悦びである。日本國民全體が、この覺悟を持つてゐるならば、不景氣も無い。失業も無い。私は先日も總理大臣にあつて云つてやつた。今日の日本の經濟國難は、平生働かないで喰はんとする人間が多過るから起つたのだ。不肖大川の如く全國民が働くならば、かゝる事態には立至らないのであると。總理大臣も至極同感ぢやと申して居ました。さて、我が帝都生命は相互組織の會社である。株主などゝいふ働かずして喰ふ人間は一人も居ない。生命保險といふは人類社會の最も尊い事業に賛成し、帝都生命と云ふ優良な會社に加入した人は卽ち我社の社員であつて、此の一億數千萬圓の資産を有する會社は卽ちその全社員のもので、決して一部の資本家の有では無い。こゝに吾々のほこりがある。これ程合理的な、これ程公平な組織がありませうか。不肖選ばれて社長の任にある事既に久しきにわたりますが、私は決して此の會社に資本を提供したものでは無い。私は一介の無産者であつて、たゞ社員諸君に選ばれて職を汚してゐるに過ぎない。菲才よく重責を果すを得るや否やを常に懸念するのであるが、しかし微力なりと雖も全力を

傾けて社業の發展に盡してゐる事丈は公言して憚らない。私は鈍才であるが人一倍働く。私と共にこの會社に勤める一千餘人いづれも働く事を以て天職と心得てゐる。したがつて會社は、年々好成績で多大の利益を擧げて居るのであるが、その利益をわたくしする者は一人もゐない。みんな社員卽ち契約者に分配してしまふのである。これが我社のたてまへであつて、他の多くの會社と趣を異にするところである。吾々は全契約者の爲に働く。社會奉仕である。私は自慢では無いが貧乏である。貧乏ではあるが、心は常に滿ち足りてゐる。それは何故か。利己の爲に働くのでなく、共存共榮の爲に働く事を深く自覺してゐるからである。願はくば諸君も吾々のこゝろざしをこゝろざしとし、大に働かれん事を希望します。なほ申上げ度い事は山々あるが、今日はこれから大藏大臣を訪問して、失業救濟、不景氣打開策につき意見を述べて來たいと思ひますので、あとは課長に任せる事に致します。」

老社長は凸凹のはげしい禿頭の天邊(てつぺん)を見せて禮をし、又傴僂質斯の足を引擦つて退場した。

うやうやしく見送つた課長は、見送り果てゝ又上着を脫いだ。

「では、これから愈々實習に移ります。きくところによれば、同業皇國生命に於ても、こちらの眞似をしたのかどうか、同じやうな事をやつてゐるさうであるが、之は頗る興味のある事である。

彼社は我國に於ても古い歴史を有し、契約高も資産も我社に匹敵する大會社であるが、兩者は根本に於て全然たて前が違ふ。卽ち彼は株式組織であり、こちらは相互組織である。又我社は所謂高率配當主義であり、彼は低率保險料主義を唱へてゐる。あらゆる意味に於て對立してゐるのであるが、此の度亦期せずして社外の諸君の實習に於て、兩者の實力を競ふ機會を得た事は、吾々の愉快とする所である。何故か。必ず我社の勝つ事を確信するからである。そこで、此の兩社の對抗戰を實習の第一課の教材に供し度い。諸君ノオトを出して要領を書留て下さい。」

課長は眼前に敵を控へたやうに敵意を籠めて、自社と他社とを比較して、自社の有利を確說したから、かゝる比較が契約募集に最も有力なる武器である事を教へた。

相互組織は株式組織と違つて、株主に利益をとられず、すべて社員に分配される事、彼は營利的でありこれは非營利的である事、帝都生命の契約者配當は皇國生命のそれよりも遙かに多い事、したがつて、たとへ最初の保險料は彼より高くとも年を重ねるに從つて配當と差引になり結局正味掛金は彼より少ない事、その他約款にもかういふ優劣があるとか、後から出來た會社が前からあるものと殆んど同じ契約を保有するに至つたのは卽ち彼に勝る實證であるとか、何から何迄段違ひたといふ事を、寧ろ口汚なく述べ立てた。課長の熱心は屢々假想敵をやつつける事に急で、

かへつて反感を起させる程であつた。大人はおとなしいものといふ先入觀念にとらはれてゐる學生は、かく迄熱狂的な競爭意識を持たなくてはならないのか、とすくなからず膽をびくつかせた。

課長は言葉をつゞけ、一人の新規の契約希望者を二社以上で爭ふ場合、又旣に他社に契約してゐる人を勸誘する場合、他の會社の契約を解約させて、こちらへ乘替させる場合の戰術を、一々例をあげて說明した。

「これを世間では掠奪募集など丶云つて、近頃では保險協會でも商工省でも一寸うるさい問題になつてゐる。成程、他人の契約をぶちこはして、こつちに奪つて來るのだから、德義上どうかといふ問題は一應尤もである。しかし一面から見れば、惡いものをいゝものに取替へるのが何故いけないか。たとへば友達が五十圓で一軒の家を借りてゐる。日あたりが惡い、根太が腐つてゐる、近所が騷々しいといふ場合に、外に四十五圓で、南向で、靜かで、新らしい家があつたとしたら、勸めて其處へ引越させるのが親切である。不德でもなんでも無い。又友達が下手で高い洋服屋と馴染みで、いつも不格好な風をしてゐるのを見兼て、もつと安くて、上手な洋服屋を紹介してやるとする。それが何故不道德か、これを非難するのは、不當な値段をとつてゐる橫着な家主や洋服屋の外には無い。假に帝都生命が他の會社と契約してゐる人を、こつちへ乘替させたとする。

恐らく、とられた會社は帝都は不道徳だ、怪しからんと恨み罵るであらう。だが、こつちの方が會社の內容がよく、約款が有利で、配當が多く、正味掛金が少ないとしたら、契約者にとつてはどの位とくだかわからない。不德どころか、救ひの神だと云つてもいゝ。つまり、いゝ會社の契約を悪い會社に乘替させてこそ不德義であるが、惡い會社からいゝ會社に乘替させるのは、好意であり、親切であり、いゝ事である。事實、帝都生命程いゝ會社は無いのだから、何處の會社の契約を奪つても、かすめても、ちつとも差支ない。これが正論であると私は信じてゐる。しかし世の中には弱者の方が多い。彼等は團結してすぐれたるものを誹謗する。役所も多數の弱蟲を庇護して餘計なおせつかいをし、強者を強盜の如く目するに違ひ無い。だから、此の點はよく注意して、實戰に於て敵と正面衝突をする場合にぶつかつたら、一應私に相談して頂き度い。乍憚秘策はこゝにしまつてある。」

課長の意氣はあがつて、肉の厚い胸を叩いて見せた。

兵を進めるには迅速を第一とする。いたづらに机上の空論をなす事は本實習の目的でない。諸君は今から直に目的の爲に突貫しなければならたい。」

保險の講義などは全然無意味で、それは本を一冊讀めば充分だ。そんな時間つぶしの事をやめ

にして、只管契約の獲得に盡せ。但し一日に一度は出社して各自の行動を報告しなければならない。應援を必要と認める場合には應援する。契約申込書の書方、診査の請求手續、第一回保險料の取扱方――とひと通りの手順を話し終つて、さも心地よさゝうに扇子の風を二重顎の邊に送るのであつた。

質問のある者は質問しろといはれても、學生側には質問する丈の知識も無かつた。彼等としては、もう少し講義がつゞき、多少の自信がついてから野戰に出るものと思つてゐたところ、忽ち契約に必要な書類を渡され、直ぐさま勝手な方角に突進しろと言はれたので、手も足も出なくなり、互に助を求め度いにも求める手段も無く、弱り切つた體であつた。一人か二人かんたんに手續上の質問をしたものはあつたが、あとは誰も口をきくたねを持たなかつた。

「では又明日御目にかゝります。諸君の奮勵努力を祈ります。」

てつとり早くかたをつけて、課長は悠然と室の外へ消えた。

「あゝあ。」

わざと人に聞えるやうに嘆息した者があつたが、誰も取合はなかつた。

四

實習舞臺の東京には夏の日が烈々と燃え、交通機關の音響は四方八方に反響し、その堪へ難さ、やかましさが、一層靑空を高く思はせるのであつた。
小會根堅太は月末の支拂と、友達に返さなければならない借金の爲に、どうしても保險に入つてくれる人間を探さうと思つた。だが、自分はいつたい帝都生命の實習生なのか、皇國生命の實習生なのか、どつちの會社の契約人を探してゐるのか、どつちつかずの身の處置には迷はざるを得なかつた。
募集は相手方と募集員との關係から見る時、これを大別して緣故募集と飛込募集とに分つ事が出來る。―課長の說明の中にさう云ふ言葉があつた。飛込みならば何時だつていゝ筈だ――さう思つて大通の東側と西側を見比べたが、堂々たる構の商店の、あけひろげた店つきが、到底彼を飛込ませはしなかつた。それは、今日迄氣の付かなかつた威嚴をもつて冷酷に並んでゐるのであつた。
緣故だ緣故だ、緣故の方が樂だと心にきめて、下宿近くへ引上げて來た。彼には、今や往來が

一種の怖ろしさをもつて迫つて來た。何處も彼處も彼の來るのを待ちうけ、しかもやつて來たら侮辱し、嘲弄し、蹴飛ばしてやらうと待構へてゐるやうに見えた。その反對に、今日程に宿の四疊半のなつかしく思はれた事も無い。そこには多年倚り馴れた机がある。窓の外の隣家の朴の木の落葉迄、明かに目に見るやうに想ひ描く事が出來た。

それでものめのめと下宿へ歸る不甲斐なさは許せない氣がした。彼は行きつけの烟草屋のめつかちの、おやぢに親しさを感じた。いつも店頭で新聞を讀むか、舊式なラディオの聽取器を耳にしてゐる好人物は、きつと同情してくれるに違ひ無いと思つた。

おやぢはひとつしかない眼にふたつ玉のある眼鏡をかけ、叮嚀に新聞を讀んでゐた。

「いらつしやい。」

習慣的に客を迎へ、新聞の中から目を出したが、馴染の顏と認めたので、直ぐにバツトの箱をひとつ、硝子蓋の中から取出した。

「暑いね。」

小曾根はそれをとつて、一本拔出して火をつけた。

「お暑うございますね。」

なんといふ無口な奴だらう――おやぢは客が直ぐ立去るものときめ込んで、又新聞の中に顔を埋めてしまつた。

「君は保險に入つてゐるかい。」と聞くつもりでゐたのだが、切出しかねてしまつた。彼は紫の烟を吐きながら、力なくその店を出た。

下宿の帳場にはかみさんが、年下の亭主と差向ひでお茶を飲んでゐた。

「小曾根さん、夏休みだつていふのに、毎日早くから何處へ出かけるんです。」

へぼ將棋の好敵手は、善良な聲をかけた。二階へ一二段上りかけた小曾根は、いゝきつかけとばかり、戻つて來た。

「實はね、面白い事をはじめたんだよ。」

彼は勸められる蒲團を貰つて、保險會社の實習に參加した事を、さもスポオツを樂むやうなゆとりを見せて話した。

「へえ、保險の實習つていふと、どんな事をするんです。まさか外交ぢやあないでしよ。」

「ところがその外交なんだ、大將ひとつ入つてくれないか。」

「何處の會社です。」

「帝都相互さ。」

「帝都か。あれはなかなかいゝ會社だ。で、一口出來るといくら位になるんです。」

「それはね、えゝといくらになるんだつたかな」

小曾根は少してれて、對千圓の手當さへ知らないと云ふ素人ぶりのかげにかくれ、わざとノオトを開いて見せた。

「こりやあいゝ仕事だ。山や海に行つてぶらぶら遊んでゐるよりは餘程氣がきいてら。」

「全くねえ、小曾根さん、あんた儲けたらおごつて頂戴。」

かみさんは、滯り勝な下宿料が、この不時の收入ですつかり順調になる事を、すぐさま考へた。

「おごるとも、だから大將、一口入つてくれよ。」

「あたし達は駄目よ。とつくに二人ともつけてんだから。」

こゝだ、こゝで增契約をさせるのが、全くの新規の契約者に勸めるよりも樂なのだ。

「へえ、二人とも入つてんのか、いくらつけてる。」

「二千圓づゝでした。合せて四千圓だからね、隨分掛金が多いので弱つてまさあ。」

亭主の方が得意さうに答へた。

「無論帝都相互？」
「いゝえ、あたしとこは皇國でさあ、日本一堅いつて評判の會社だからね。」
さも自分の會社のやうにいふ側から、かみさんも心を合せるのであつた。
「何しろあんた、五拾圓の株が千圓とか千五百圓とかするつていふんですからね。大したもんぢやありませんか。」
小曾根には株の値段など初耳だつた。どうしてそんな馬鹿高いねうちがあるものなのだらう。矢張いゝ會社なのかな――だが待てよ、こゝで例の乘替つてやつを用ゐなくてはいけないんだと思つた。
「それがねえ、もうせんうちに長くゐた方で、安井さんて人があつたんですよ。その方が皇國生命の外交をやつてゝ、うまく勸められて入つちやつたんです。千圓づゝで澤山だつて云つたんですけど、とうとう二千圓づゝつけさせられてしまひましたの。」
「外交つてものは全く腕次第だからなあ。」
夫婦は互に信賴し合ひ、皇國生命と契約してゐる事で滿足し切つてゐた。
「だけどね、僕のきいたところでは、皇國生命もいゝにはいゝさうだけれど、帝都の方がそれ以

上だつていふぢやないか。第一組織が違ふからねえ。」
　小曾根は勇氣をふるひ起し、淺い知識の賴りなさを感じながらも、一生懸命で夫婦の信仰を動かさうとした。
「組織？　組織たあ何です。」
「組織は組織さ。つまり一方は株式會社で、片方は相互會社なんだ。」
「そんな事あどつちだつて同じさ。いゝ會社がいゝんで、惡い會社が惡いのさ。」
「ところがさうぢやあないんだよ、一口にいへば株式會社つてものは株主の會社で、相互會社つてものは加入者全部の共有なんだ。だから、株式會社では儲けるのは株主ばかりで、相互會社の方は加入者全部で利益を分けるんだ。」
「あたしやあ理窟はわからないけれど、つまり利益分配つてやつでせう。そんなら皇國の方にだつてありますぜ。年々掛金が減つて行くんでさ。」
「それはあるかもしれないが、しかしだね、假に二つの會社が同じだけ儲けたとするんだ。いゝかい。その中から兎に角株主配當つてものをいくらかでも差引くとすれば、差引いた方の加入者には利益分配が少ないわけだらう。」

「そりやあ理窟さ。だがね、加入者の共有だなんて云つたところでかりにあたしが一萬圓契約したつて、社長にも支配人にもしてくれないぢやあないか。」
「しかしだね……」
小曾根は、新しく注入された知識の乏しさを感じるよりも、脱線してるやうで脱線してゐないやうな亭主の論理に閉口してしまつた。
「小曾根さん、駄目よ。もつと修業して來なくては。」
かみさんはあつさり片づけて、
「あんた、そろそろ出かけないと遲くなりやあしない？」
と亭主の方へ、いゝ加減にしてといふ目まぜをした。
「今日は一寸寄合がありましてね。」
亭主は直ぐに立上つてしまつた。
小曾根はとりつき場がなくなり、まぬけな自分を二階の四疊半へ運んだ。
「いけねえ、いけねえ。」
部屋へ入ると上着を脱ぎ、大の字に寢ころんで、自嘲するやうにつぶやいた。

下宿の亭主との問答で、結局要領は得なかつたにしろ、自分の立場丈は明かになつた。こゝの夫婦にむかつて、帝都生命の實習生だと名乘つたからは、皇國の方はすつぽかしてしまはう。相原にあつたら、とても自分には保險の外交は出來ないからやめたと云つてしまへばいゝ——肚のきまつた安心で、午後も晝寢を樂んだ。

だが、その安心も長くは續かなかつた。

「おい、ゐるかい。」

と云つて相原の巨軀があらはれたのである。

「どうしたい。いつしよに出かけようぢやあないか。」

「何處へ。」

「保險會社さ。俺、昨夜保險の本嚙つたよ。なかなかむづかしいもんだなあ。」

「むづかしいさ。殊に募集と來たひには、とても僕達の手には合はないぞ、僕はごめんかうむらうかと思つてゐるんだ。」

「そんな弱音を吐くなよ。兎に角講義さへ聽いてゐれば二十圓にはなるんだからな。」

「だけど、みすみす出來ないとわかつてゐるのに二十圓貰ふのは氣が咎めるよ。」

「やつて見なければ、出來るか出來ないかわかるものか。俺は三口や四口は出來ると思ふんだ。まあ、いつしよに來いよ。共同戰線を張つて、儲は全部山分にしようぢやあないか。」

相原の熱心と、自分に借金のある弱味から、小曾根には友達の勸說をしりぞける丈の力が出て來なかつた。

五

小曾根堅太は心に重い負擔を負ひながら、朝は帝都生命に、午後は皇國生命に通つた。ふたつの會社をあざむいて居ると云ふ事が彼の苦痛であつたけれど、實習の效果は一段と深かつた。このふたつの會社が——恐らくは保險會社のすべてが——はげしい競爭から嫉視反目をつゞけ、あらゆる手段をもつて他をおとしいれ、罵り、きずつける事に努力してゐる事を知つた。

帝都生命の庶務課長は、口を開けば皇國生命の惡口を云つた。其處には何等の紳士的態度が無く、なんでもかんでも相手をやつつけてやらうとする外には何の目的も無かつた。自社が他社に比して有利であるといふ事を示すさまざまの印刷物があつたが、その多くは皇國生命と比較對照するものであつた　それればかりでは滿足しない。保險關係の新聞雜誌に金をやり、材料をやつて

こつちをほめ、あつちをけなす記事を書かせた。それが庶務課長の仕事の最も重要なるもののやうに見えた。

上役が既にさうなのだから、それに教育された專門の外交員は、口を開けば他社の弱點を衝く事に熱中した。小會根の發見したところによると、保險募集といふものは、他の會社の契約の奪ひあひであつた。斯う迄うばひかすめる事をお互にやつてゐて、どうして八拾億なんて契約高にのぼつたのか、殆んど了解出來なかつた。

それに對抗する皇國生命も、決して默つて攻撃されては居なかつた。社風の相違か、幹部の人となりの相違か、この方は片方程露骨では無かつた。或はその相違は株式と相互の組織の相違に因るものかとも考へられた。株式會社の背後には更に大きい資本閥が控へてゐる。その睨がきく爲に、みんながおとなしく、遠慮深く、時には意氣地がなくなるのかもしれない。相互の方は、誰も恐いものが無い。後日の事は考へず、思ふさま振舞つたつて、直に咎められる事は無い。これは小會根の直感で、はつきりしたかたちは取らなかつたが、兩社の遣口のひとつひとつに、思ひ當る事が多かつた。一方はあく迄も實行本位當面主義であるのに對して、片方は少なからず理想主義に據つてゐた。片方がいきなり他社の攻撃を教へ込み、直ぐに募集の實際にあたらせる時、

他方は兎も角も五日間の講義をつゞけた。その講義の五日目も今や終りとなつたのである。

「これで學科の講習はおしまひにしまして、これからは皆さんの腕比べに移ります。しかし、若し質問があるならば、遠慮無く訊いて下さい。」

赤い襟飾の新歸朝者は、さあどこからでもかゝつて來いといふ態度で、充分の自信を微笑の中に示してゐた。

言下に一人の學生が手をあげた。

「僕は、實は二三日前に勸誘を試みてみたんです。ところが、その相手の人つていふのが相互會社の信者で、株式會社は株主ばかりが甘い汁を吸ふしくみで、契約者は馬鹿を見るものだと云つて、こんでうけつけてくれないんです。」

「それで、あなたは何と云つたのです。」

「僕、この間きいた通り、株式會社も契約者に利益分配をするから同じだと云つてみたんですけれど、この會社の配當は帝都相互や九重相互よりも少ない。それは株主が暴利をむさぼつてゐるからだと云ふのです。」

「わかりました。」

何の雜作も無いといふやうになづいた。

「それはあなたの募集能力を試すのに絕好の機會です。今日これから直ぐに行つて、もう一度勸めてごらんなさい。先づ第一に先方は株式組織よりも相互組織の方がいゝと思つてゐるのですから、株式が決して相互に劣らない、否かへつて勝るものであるといふ事を說明しなくてはいけません。成程、相互組織では株主配當といふものはない。しかし、その利益の全部が契約者のものになるのではない。誰よりも先に、重役が莫大もない賞與金をとつてしまふ。よござんすか、これに帝都相互の定款がありますから讀んでみませう。第三十六條「決算ニ於テ剩餘金ヲ生ジタル時ハ二十分ノ一ヲ法定準備金トシ二十分ノ一ヲ役員賞與金トシ殘額ヲ社員ニ配當ス」と明記してある。よござんすか。相互會社は株式會社を攻擊して、株主が利益を壟斷するに反し、相互會社では之を加入者に分配すると云ふ。ところがその定款には、先づ利益は重役がとつてあとの殘りを加入者に分る^わけ^ときめてゐる。勿論これは、一面重役がとり過ぎないやうに制限を置いたものとも見られますが、しかし如何に重役が多額の金を懷に入れるかは想像に難くありますまい。株式會社の重役は株主の選んだものである。株主は利害關係が密接だから、常にその監視を怠らない。ところが、相互會社では、重役が何をしようとも、實際上之を監視する人が無い。彼等は社員の

選擧したものだといふ。然し事實上社員全員が參政權を行使するなどゝ云ふ事は不可能である。重役の選んだ代表が又重役を選ぶに過ぎない。だから、怖いものなしの相互會社では、重役が一人で二十萬三十萬と云ふ金をとつても、誰一人文句を云ふものは無いのです。よござんすか、ところが、萬一會社が損をした場合にはどうなるかと云ふと、一般加入者はすべて社員であるから、その損失を負擔しなければならないのです。株式會社なら株主が損をするところを、相互會社では加入者が損をする。例へば平生自分達の賞與を多く取る爲に、無理な儲けをしようとして株を買つて損をしたとする。近頃のやうに株の値下りのはげしい時、損をしないものは殆んどないと云つていゝ。そこで缺損になつた場合、數十萬人の加入者は、その損を負擔しなければならないのです。株主のやうに金錢出資もせず、平生莫大もない報酬をうけてゐる重役は、自分達の經營のやりそこなひを、契約者にしよはせてしまふのであります。實に結構な組織ではありませんか。言葉をかへていへば、契約をして保險證劵を手にすると同時に、會社の損失はいつでも負擔しますと云ふ約束をしてしまつたのです。」

新歸朝者の顏面には熱情の血が上り明かに自分の所說に昂奮してゐた。

「おわかりになりましたか。」

「わかりました。ですが、何故相互會社の方が契約者にやる利益分配が多くて、株式會社の方が少ないのですか。矢張株主が利益をとるからではないのですか。」

質問者は何とかして、二者の優劣をはつきりさせ度いと云ふ、若者特有の心の動きを示してゐた。

「そんな事が。」

そんな馬鹿な事があるものかと、強くはねつけ度いのをこらへた様子で、新歸朝者は緊張した顔に笑を浮べた。

「相互會社だから配當が多い、株式會社だから少ないと云ふ理窟はありません。或相互會社の配當が、或株式會社の配當よりも高いといふ實例はあります。たとへば、帝都相互の配當は我社の配當よりも多い。何故多いか。向ふが相互でこつちが株式だからではありません。向ふは高い保險料をとつてそれを割戻すに過ぎないのです。よござんすか。所謂高配會社の保險料は必ず高いときまつてゐます。我社は保險の合理化を唱へてゐる立場から、低率保險料主義です。高い保險料と安い保險料との差額は、とりもなほさず利益分配に等しいのですから、この點を考へると、我社の配當必ずしも彼に劣るとはいへないのであります。しかし、彼等は常に利益配當比較表と

いふものを作つて、持廻つてゐます。これは主務省から使用を嚴禁されてゐるにも拘らず、未だ、に跡を絶たないもので、業界謂ふ所の不正印刷物であり、魔表であります。何故魔表といふかと申しますと、遠い將來の配當などは全然豫測出來ないのに、これを確定配當のやうに欺瞞したり、八十歳迄生きればこの通りの配當になるなど〻、途方も無い非常識な事を云つて說明するのであります。成る程、八十迄も生きれば配當は多いにきまつてゐる。だが、萬人の中幾人が八十迄生きられるか。斯う考へてみると、遠い將來のあるか無いかもわからない配當などよりも、契約した時から保險料の安いしくみの方が、どの位合理的であるかは說明を要さない事と思ひます。たから、高配主義によれば、比較的早く死ぬ最も不幸な人、卽ち一番保險の恩惠を受く可き人が損をして、極めて少數の長壽者がとくをするといふ事になるのであります。こんな不合理な事がありませうか。

恰も義憤を發するもの丶やうに、いつの間にか熱烈な語調で論じるのであつた。

誰よりも興味深く感じたのは小曾根堅太に違ひ無かつた。帝都生命では株式會社の惡口をいひ皇國生命では相互組織のからくりを指摘する。彼の課長の人を喰つた株式排擊の猛烈なのにも驚いたが、この若い社員の相互攻擊の熱情にも打たれた。だが、どつちにも理窟はあるんだ。と考

へるよりも、どつちもよくないのだと考へ度い氣の方が強かつた。世間といふものは、かう迄あくどく闘爭的なのかと、世間しらずの彼は、手も足も出ない心持に襲はれたのであつた。

「なほ明日からも日に一度は必ず會社に來て頂き度いのですが、講義は今日で終りとしまして、これからはみなさんの腕だめしです。では、最初御約束致しました通り、甚だ輕少ではありますが、電車賃として金貳拾圓宛差上ますから……」

彼は壇を下つて、一度室の外へ去つたが、直に東京支部副長豐留隆之進を伴つて戻つて來た。毎日會社でゐねむりばかりしてゐる三十餘年勤續の老人は、たゞにこにこして、めいめいに、紙袋に入れた金貳拾圓を渡した。

渡された學生は、或者は羞しがり、或者は面喰つた。はじめからきかされては居たものゝ、現在紙包を貰つてみると、かなりの負擔を感じるのであつた。

「おい、銀座に進出しようよ。」

「豪遊々々。」

「俺、こいつを持つて、鎌倉山のキャンプへ行かうつと。」

「ありがてえ、ありがてえ、下宿代の半分稼いぢやつた。」

友達同志話合つたり、漠然とした同志感で、身近の仲間にうけて貰ひ度い爲、輕口を叩く者もあつたが、それとても、貰ふ可からざるものを貰つたやうな氣持の惡さをごまかす聲に過ぎなかつた。

「え、流石に大きいところを見せたぢやあないか。ほんとに二十圓くれやがつたからなあ。」

相原は頗る上機嫌で、小曾根の肩を叩いた。

「どうだい、今晩はビフテキの血の出るやつを喰はうぢやあないか。大に英氣を養つて、明日から斷然尖端を切つてやるぞ。」

長い間下宿の飯で我慢してゐた小曾根も、脂肪を含んだ獸肉の切れば血の出るやつと、むせるばかり白い粉を吹いた馬鈴薯と、和蘭芹(パセリ)の眞靑なのが載つてゐる大皿を、忽ち眼の前に想ひ描き、その誘惑には完全に抵抗力を失つてしまつた。

六

帝都生命保險相互會社でも、皇國生命保險株式會社でも、實習の學生達は、吹込まれた丈の知識を持つて、或者は勇敢に、或者はびくびくしながら、おもひおもひの募集を始めた。

小曾根堅太も自分の力量を示し度い心持もあり、相當な收入も欲いし、又皇國生命に對しては二十圓に對する義理も感じて、どうかして一口でもいゝから契約し度いと思つた。だが、彼の活動を內部から邪魔するものがあつた。それは、ふとした弱氣から、つい二つの會社に關係してしまつた自分を咎める良心である。

日が經つと、どつちの會社でも、ぽつぽつ落伍する學生があらはれて來た。毎日の出勤簿に、判を押す數が少なくなつた。二十圓貰ひつ放しで、海水浴へ出かけた者もあるらしかつた。

「どうも怪しからん。學生にあるまじき事だ。

――よおし、横着な眞似をする奴は學校へ報告してやるぞ。」

どちらの會社も、出て來ない學生に對してはひどく憤慨した。さうきくと、他人事ならず思はれて、逃出す機會は愈々少なくなつた。

一方には、少しづゝでも契約をとつて來る學生もあつた。すると、その所屬校名と氏名と契約金高とが、大きく書き出され、多數の正社員――內勤も外交も女の事務員も、それを見に來た。帝都では課長が、皇國では赤い襟飾の社員が、その優績者を口を極めて稱讚した。

「おい、俺達も愚圖々々してはゐられないぞ。明日から戸別訪問をやらうぢやあないか。」

相原は競爭心に燃え、二人共力してやらうとしきりにいふのであつたが、小曾根は友達と連立つて、頭を下げて歩く事をいやがつた。さう云ふのつぴきならない立場に自分を持つて行くよりも、いつか來るらしい機會を、自分一人で自由に待つ方を希望した。

しかし、そんな都合のいゝ運は廻つて來なかつた。毎日見たり聞いたりするのは、どつちの會社でも他社の惡口をいひ、手段を盡して相手を傷つける事ばかりだ。

いやだ、いやだ。何といふ商賣だらう。生命保險程尊い事業は無いといふけれど、その尊い職業の實際は、何たる醜い遣口なんだらう――小曾根は世間で保險會社、保險會社員、引いては保險そのもの迄いやがるのが、決して無理で無いと思つた。彼は屢々實習を遁走する機會を待つた。

相原も元氣な口はきくものゝ、想像以上に困難な仕事には辟易してゐた。

一兎に角こいつは根氣仕事だよ。あく迄も押が強くなくては駄目だね。それにはどうしたつて單獨では押切れない。二人で頑張つて見ようぢやあないか。

逢ふ度に執拗く口說かれて、小曾根もとうとう同意してしまつた。

どの方面がいゝ、あつちは駄目だと相談の末、結局學校附近の顏見知の商店を、先づ第一に訪問する事になつた。

暑い日であつた。折角貰つた二十圓も、いゝ氣になつて飲み喰ひにつかつてしまつて、殘り少なくなつてゐた。二人は、學校の門前の蕎麥屋で天井を喰つた。

「おい、こゝの亭主勸めて見ようか。」

「駄目だらう。あいつ變に氣むづかしさうな面をしてゐるから。」

「面なんかどうだつて構ふもんか。」

相原は小曾根の氣のすゝまないのをおつぷせて、帳場で帳あひをして居る亭主の方へ聲をかけた。

「おやぢさん。」

「ありがたう。御勘定ですか。」

「あゝ、勘定も勘定だけれど、君保險つけてるかい。」

「保險ですか。少しやあつけてますよ。」

「何といふ會社。」

「會社ですか。何てゝいつたつけなあ、極東つていつたかしら。」

「そいつあ、火災保險だらう。」

「えゝさうなんです。もう餘程前だつたが、近所に火事のあつた時すゝめられてね」

亭主は突然思ひもかけない話を持出されたので、ふしぎさうにこつちをすかして見てゐたが、何の利害關係も無しと見定めた樣子で、首をうしろへ廻すと、奥で働いてゐる若い者に怒鳴るやうにきいた。

「相模屋さんの冷麥二ツ、もう三ツは出たかい。」

ぷつつりと話をたちきられて、相原は小曾根と顏を見合せた。畜生、相手にしないなと思ふと、しつつこくやつてやれと考へ直した。

「あのねえ、僕達體驗の爲にやつてるんだが、少しでいゝから生命保險に入つてくれないか。」

亭主は、學生客からそんな事を持出されたのが不思議さうに、疑深い眼でじいつと見つめたが、至極簡單に突放した。

「あゝ、生命保險ですか。あいつあ嫌ひだ。死んでから金を貰つたつて爲樣が無いや。」

「生きてるうちに貰へる養老保險ていふのもあるぜ。」

「かんべんして下さい、蟲が好かないんだから。」

とたんに壁の上の電話が鳴つた。

「え、え、ざるが四枚、うどん臺で天ぷらがひとつ。かしこまりました。御湯屋の裏の山木さんですね。わかつてます。毎度ありがたうございます。」

受話機をかけると、見向きもしずに、のれんの向ふへ消えてしまつた。

「ちえつ、よく出來てやがら。」

相原は舌うちして、やけに銀貨を二枚放り出した。

おもてに出ると、二人は聲を出して笑つた。

「ふり出しが惡かつたなあ。

「だからよせつて云つたんだ。」

「今度は君に賴むぜ。あそこの唐物屋のおやぢにあたつて見よう。」

「困つたなあ、僕全く自信がないんだ。」

小曾根は、いつも店さきで懷手をし、往來を睨んでゐる亭主が留守である事を祈つた。そこでは、つい此間靴下を一足買つたのだ。

「弱つたなあ。」

「勇氣を出せよ。」

ちよつと手前で氣が挫けて、思はず立どまつてしまつたが、相原に促されて、二人は洋品店に入つて行つた。店には十一二の女の子が、少女雜誌を讀んでゐたが、いきなり、
「お父さん。お客さまあ。」
と甲高く、語尾を引いて呼んだ。
「いらつしやい。」
聲に應じて亭主が出て來た。
「お暑うございます。何を差上げます。」
揉手をして、本來無表情な顔なのに、習練で覺えた笑を湛へ、ひよこひよこ頭をさげた。
「僕、手巾も欲いんだけれど、それよりも……」
しまつたと自分でも思つたが、既に遲かつた。
「へえ、手巾を。」
亭主は直に手近の商品を一つ二つ客の前に並べて見せた。
「ダアスならばお安く願つて置きますが……」
「いや、一枚でいゝんだ。」

すつかり押され氣味になつて、小曾根は懷の蟇口を出した。
「君、君は生命保險に入つてゐますか。」
頼甲斐なしと見てとつて、うしろから相原が口をきつた。
「生命保險？　へえ、少々ですが……」
「何處の會社。」
「會社ぢやあないんで、簡易保險です。おかみでやつてる。」
「さうか、そんなら僕達の爲に一口入つてくれませんか。皇國生命ですがね。夏期實習つていふんで、僕達も勸誘してゐるんだけれど、實はまだ一件も出來ないので、弱つてるんです。」
喋つてゐる相原も、側ではらはらしてゐる小曾根も、額から汗がしとゞに流れた。
「そいつあ物好きですなあ。」
亭主はやつと呑込めたと云ふ樣子で、忽ち顏面からは笑が消え、揉手をしてゐた手を開いて橫に振つた。
「もう保險は澤山です。いろんな會社が來てうるさくて弱つてるんだから。」
「だけど僕達の爲に……」

「駄目ですよ。保險は。一つの會社に入ると、外の會社が默つて居ないんだから……」
亭主はもう一度手を振つていやだといふしかめつ面をして、小曾根の置いた錢を手の平にのせ、奥へ引込む氣勢を見せた。
「なんだい、一口位つきあつてくれたつていゝぢやあないか。君んとこだつて、學校があるからこそ商賣になつてゐるんだぜ。」
相原はむかつ腹を立てゝ、書生流のたんかを切りはじめた。
「よせよ。わからない奴にはわからないんだから。」
小曾根も中腹(ちゆうつぱら)だつたが、友達をなだめておもてへ連れ出した。
「なんでえ、生意氣な口をききやあがつて、保險の保の字をきくと、直ぐさま態度を變へたぢやあないか。よおし、あいつんとこ非買同盟をやつてやるぞ。」
炎天の路上で相原は行人のかへりみるのも構はずに憤慨した。小曾根はすつかり參つてしまつて、今買つたばかりの雪白の半巾で、顔中の汗をしきりに拭いた。
相原は不機嫌になつて、何も云はず、大またに歩いた。小曾根はその後から、引擦られる形でついて行つた。

「今日は。」
相原は突然本屋の前に足をとめた。
「お久しぶりですね。お國にはお歸りにならないんですか。」
「あゝ、保險會社の夏期講習をやつてゐるんだ。それでお願に來たんだが、僕達の爲に一口入つてくれないか。」
「そりやあ入らないものでもないが、いつたい何處の會社です。」
「皇國生命さ。」
「そいつあ駄目ですよ。先月だつたかな、賓は檢査を受けたんだが、血壓とかゞ高いから御免かうむるつていやあがるんです。なんだい、こつちからお願して入らうつて云つたわけぢやあない、向ふが幾度もしつつこくやつて來て、無理やりうんと云はせといて、いざとなるとそれなんですぜ。その上いひぐさがいゝや。うちの會社は診査が嚴重だつて、ぬかすんです。嚴重もくそもあるものか、へつぽこ醫者に何がわかるもんですか。あたしつてえ人間は、生れてから今日迄、藥つてものは見た事もないんですぜ。それをさ、血壓が高いからいけないつていふんだ。馬鹿にしてるぢやありませんか。」

亭主は肥つたからだを半分むき出しで、大きな團扇で胸毛を煽ぎながら、一氣にまくしたてた。

「さうか、そいつは弱つたなあ。」

流石の相原もうけ答へをする勇氣も無く、頭を掻いて引さがつた。

「では又。」

二人は力の抜けた顔を見合せて、又みちばたで評定をはじめた。

「いけねえ、いけねえ。とても吾々紳士のやるべき仕事ぢやあないよ。なんだいあのぢゞい、あんなにぶくぶくしてゐりやあ血壓だつて高いだらうぢやあないか。腦溢血でくたばるとも知らないで、藥つてものは見た事もないたあなんだ。」

何處に行つてもうまく行かない。もう手の屆くところにはあても無いといつた心狀で、無責任な惡口をいふのであつた。

「よさう、よさう。一日でも早くやめるのが一番利巧(りかう)だ。」

弱氣では小曾根の方がうはてだつた。

「二十圓貰つてゐるのが癪だなあ。あいつを使はずにとつといて、叩きかへしてやればよかつたんだが……」

相原の言葉が、小會根には一層深い實感である。二人とも共同感に捉はれて、その上口をきかないでも、相手の心持がよくわかつた。

俄かに重たい足を引摺りながら、このまゝ電車の停留場へ行く、電車に乘る、別れ別れに下宿に歸る。その外には何の目標も無かつた。馬鹿々々しさと、氣疲れと、隙間の出來た心持は、肉體に迄もあらはれて、暑氣もきびしく堪へて來た。

だが、小會根の心の中には、此の頃の惱みだつた實習を、御免かうむる時機が愈々到來したのだと思ふ安堵もあつた。ふたつの會社にかゝりあつてしまつた心苦しさもなくなるのだ。ちつとも働かないでやめるのなら申譯が無いが、兎に角やつて見るには見たのだから、それで出來ないのは自分の運が惡いのだ。力量が足りないのだ。爲方が無いぢやあないかと自分を慰めた。

「おい、どうだらう。」

相原が不意に立どまつた。

「もう一度丈やつて見ようぢやあないか。」

「駄目だよ。」

「駄目かもしれないが、あんまり癪だから、最後にひとつ大物にぶつかつて見よう。それがいけ

なかつたら斷然やめる。俺達に一番勝手のわかつてゐる學校附近で一口も出來ないとなりやあ外の土地へ行つて出來るわけはないや。だから絶對にこれつきりときめて、ぶつかつて見ようぢやあないか。」

「ぶつかるつて、何處にぶつかるんだ。」

「あれさ。」

相原の指は、向側の鞄屋を差した。

「駄目だ。あすこのおやぢと來たらとても凄いさうだぜ。祭の寄附もした事が無いつていふんだから。」

「だから金はうんとあるんだ。この界隈では實力第一だつていふんぢやあないか。」

「だらうとも。鞄屋はおもてむきで、本業は高利貸ださうだから。」

「さういふ奴がかへつてわかりが早くていゝんだ。あした死んでも十五萬圓とれるときいたら、喜んで保險に入るさ。」

「入るものか、自分の死んだ後で十五萬圓貰つたつて爲方が無いと思ふたらう。」

「さうぢやあないよ。あいつが死身になつて金をためてるのは、自分が道樂をし度いからぢやあ

ない。たゞためるのが樂みなんだ。命と金とどつちがいゝと云つたら、きつと金の方をとる奴だよ。こいつあ存外いゝ鴨かもしれないぞ。」

「鴨ならいゝが、禿鷹だからな。」

店頭にいつも苦い面をして坐つてゐるおやぢの風貌を適切に表現した滿足で、二人は朗かに笑つた。

「最後の一戰だ。行かうぜ。」

相原は力づける爲に友達の肩を叩いた。

「今日は。」

無理に元氣のいゝ聲をかけて、鞄屋の店に入つて行つた。

「いらつしやい。」

血色のよくない娘が、いつもはおやぢのゐる所に坐つてゐた。

「大將ゐますか。」

「はあ。」

品物を買つてくれる客では無いと見てとつて、用心深く身を構へた。

「ゐるんだつたら、一寸御目にかゝり度いんだが。」
娘は、何と答へていゝか迷つて、怖いものにつかまつたやうに立上らうとして立てない姿だつた。
「おたみ、おたみ。」
奥から最低音で呼びながら、當の主人が出て來た。
「なんだ、お客さまか。」
商賣馴た眼で、これがどういふ客か大概はわかつたらしかつた。
「お前奥に行つて、お母さんを見てゐてくれ。」
いふと娘は逃るやうに立つて行つた。
「病人があるものですから。」
それつきり、じいつと二人の顔に眼を据ゑた。用があるならさつさと云へといふ態度だつた。
凸字形の頭の天邊は禿げてゐるが、それも赤々と光つたのでは無く、妙にくすんだ禿だ。廻りには少ない割に濃い毛が殘つてゐた。凹んだ眼、出齒の口が肉食鳥を想はせるのであつた。
「僕達學校のものですが、この夏休を無駄に過し度くないと思つて、保險の實習をやつてるんで

す。何しろ各學校から來てゐるので、僕達も出來ないと學校の名譽にかゝはりますから、特に學校附近の方に加入して頂き度いと思つて來たのです。」

相原は小曾根をかへりみて、力を貸せとめくばせした。

「あなた方に保險の必要を說くのは生意氣ですけれど、現在の社會に於て、殊に家族主義の日本では……」

「わかりました。昨日もそいつをさんざんきかされましたよ。」

一生懸命で喋らうとする小曾根の舌を引拔くやうに、おやぢは手を振つて遮つた。

「此間から保險の人がしきりに來るんです。あなた方みたいな素人ではなくて、髭の生えた人達ですがね。昨日なんざあ、どういふ日柄だつたか、二人かち合ひましてね。」

その二人と眼の前の二人をいつしよにして嘲るやうに、黃色い不規則な齒を見せて笑つた。

「さうですか、本職の人が來るんですか。何といふ會社でした。」

「昨日來たのは帝都つていふのと皇國つていふのでしたかね。」

「へえ、皇國の人が來たんですか。實は僕達その會社の實習生なんです。」

「それで、どつちの會社に入る事になつたんです。」

二人は詰寄るやうに興味を持つた。
「私も保險は惡いものではないと思つてゐた。若い時に入るのは損だけれど、もう直き保險のつけられない年になつたら、入つて置く方がいゝと思つてゐたので、どつちでも安い方、割引の多い方に入らうつて云つてやりました。」
「そんなら皇國の方がいゝのぢやないかな。ほかよりも保險料が安いさうですよ。割引つて事は僕達知らないけれど、出來る事なら會社に行つて話してみます。未だ昨日の人に約束しないのなら僕達の手で入つてくれませんか。」
「こつちは誰の手でも同じだ。一番とくのいくやうにしてくれゝば。」
相原は小曾根をかへりみて云つた。
「つまり僕達が會社から貰ふ手數料を全部あげればいゝんぢやあないかしら。」
「さうだなあ、一度歸つて會社で訊いて來ようか。」
「そんな事してゐると、外の人にとられちまやあしないか。」
いゝ智惠の無いのに當惑して、たゞ顏を見合せてゐるばかりだつた。
そこに一人の人物があらはれた。白洋袴（ズボン）、アルパカの上着、折鞄を抱へ、扇子を使ひながら入

つて來た。

「いよう、これは、お客さまですか。」

帽子をとると、膝の下迄手をさげて、二三度おじぎをした。髮をきちんと分け、チヤプリン髭をはやした紳士は、頗る表情に富んでゐて、眼鏡の奥の細い眼は、始終微笑を漂はせた。

「昨日はどうもとんだ御邪魔を致しました。又伺ふのもどうかと思ひましたが、せめて熱心丈でも買つて頂かうと存じましてな、はゝゝゝ。」

口をちひさくして笑ふのが、ほほほほと聞えるやうでもあつた。絶えず二人の學生の方にさぐりの視線をそゝぎながら、椅子にかけて、洋服の袖口から扇子の風を入れた。

「さ、どうぞ御用談をおすませ下すつて……」

あるじも學生も何もいはないので、突然侵入した事を詫るやうに、双方へ愛想笑を見せた。

「この人達も保険を勸めに見えたのですよ。」

あるじは紹介して、にたりと笑つた。

「へえ、保険を。あゝうちの會社で此の頃やつてる學生さんのお稽古ですな。この暑いのに御苦勞ですな。いかゞです、成績は。よなみが悪いから、なか／＼むづかしう御座んせう。はゝゝゝ。

しかしこちらさんに目をつけたところは中々玄人ですぜ。油斷も隙もあつたもんぢやあない。ねえ、旦那。はゝゝゝ」
「あなたは皇國生命の方なんですか。」
相原は正にそれに違ひ無いと思つて訊いた。
「え、皇國？　あゝ、あなた方は皇國の方ですか。さうでしたか。驚いたねえ、これは。」
又しても笑ふのだつたが、忽ち表情が變つて、明かに敵意と輕蔑の色を濃くした。
「昨日もこちらで御社の方とたちあひましたがね、今日は學生さんを差向けるたあ、楠孔明はだしだね。成程、學校が御近所だ。理窟で爭ふよりも義理人情で行かうといふんだ。偉い。敵ながら天晴々々。」
冗談めかしくいひながら、露骨に挑戰の態度を執つた。
「僕達會社から差向けられたんぢやあないんです。自分で勝手にやつて來たんです。」
相原は正直に釋明したが、相手はあく迄も飜弄するやうに、
「さう、いかにもさうでせう。ですがね。今日のところは御引取を願ひ度いものですな。こちらさまは私の方がさきに伺つてるんだ。ね、いはゞ私の繩張でさあ。素人衆に繩張を荒されたとあ

つちやあ、私の立場がないや。第一あなた方のやうに親御さんから學資を貰つて、學問をしてる方が遊半分になさるのと、これで親子六人が喰つて行かうつてのとは違ひますあね。こちらさまに御願ひしようつていふ契約を、あなた方にとられて御らんなさい、親子心中のほかありませんぜ。由々しき社會問題ですよ。ねえ、旦那。さう云つた理窟ぢやありませんか。」

學生達はまくしたてられて、口を狹む隙も與へられなかつた。

「あたしの方はそんな事はどうでもいゝんです。何處の保險會社でも、一番利得のいくところにへはひつて云ふんだから。」

あるじは相變らず苦り切つた顔つきで、うるさゝうに云ひ切つた。

「御存じ。つまり一番とくのいく保險でいふんだから、いかにも合理的ですな。それには憚りながら帝都生命だ。相互組織で、契約者配當がたんまりあつて、保險金の支拂には一度だつてこだはつた事が無い。」

「ですが、保險料は富國の方が安いんぢやあないんですか。」

口惜しさうに相原が口を挾んだ。

「え、保險料が安い？ よさうよ。はゞかりながら帝都生命の監督勝俣三次郎をつかまへて、保

險の講義はないでせう。はゝゝゝ」

「いゝえ、講義をするなんてそんなつもりぢやあないんですが、こちらの御主人は安い會社に入るつて云つて居るんだから……」

「困るねえ、學生さんは生一本だ。保險料が安くたつて、配當が少なけりやあ結局高いものについちまふでしよ。皇國さんでは、どんな事を教へ込んだか知らないが、百聞一見にしかずだ。旦那に御目にかける積で持つて來た比較表があるから見せて上げよう。」

いかにも貴重品を取出すやうに、折鞄からいろ／＼の印刷物を取出した。

「よござんすか。これは六大會社の保險料と配當の比較表ですよ。假に年齡二十歳の人が各社夫々一萬圓宛契約したとしますね……」

帝都生命の監督は、口では學生達を相手に喋つてゐるものゝ、印刷物は彼が旦那と呼ぶ禿鷹の方へ展(ひろ)げて見せて説明をはじめたのである。

小曾根は膽を冷してしまつた。こゝにあらはれた人物か、帝都生命の社員だとわかつた時、自己の犯した罪科をあばかれたやうに參つてしまつた。自分の方では知らなくても、先方では自分がその會社の實習生の一人だと云ふ事を知つてゐさうな心配があつた。口をきいてゐるうちに、

見抜かれはしないだらうかと云ふ恐怖があつた。
「今日は。」
突然聲をかけながら、勢よく入つて來た男があつた。白地の服に白靴で、左に折鞄右に扇子を持つた姿は、矢張保險會社員型であつた。
「やあ、帝都さんに先を越されてしまつたな。つい、二三軒廻つて來たもんだから。」
むかういきの強さうな中年の社員で、かんたんにあるじに挨拶し、二人の學生を無遠慮に見ながら、帝都生命の社員と並んで腰かけた。
この男が入つて來ると、今迄得意になつて自社の有利な事を說明してゐた帝都生命の監督は、あわてゝ印刷物を折疊まうとしたが、新來の客は見逃さなかつた。
「なんです、それは。例の魔表ですか。」
「魔表？　そんなものぢやありませんよ。はゝゝ。實はあなたの方の實習生だつて方が見えてゐましてね、こちらの旦那の契約をとらうとしてゐるもんだから、一寸私の方の立場を說明してゐたわけなんで。」
「へえ、あなた方はうちの會社の實習をやつてるんですか。およしなさいよ、學生は學生らしく

勉強してゐればいゝんだ。月給無しで働かせようといふ會社の蟲のいゝ肚なんですぜ。帝都さんの方でもたしか同じやうな事をやつてるんでしたな。」
「全くつまらない事ですよ。吾々の商賣の妨害になりまさあね。」
「やり切れないなあ。吾々お互に競爭してゐるそばから、づぶ素人の書生さん迄地盤を荒しに來るんだから。」
相原も小曾根も、一人と二人でも太刀打の出來ない相手に、共同で對抗されては口をきく事も出來なかつた。さりとて退去するきつかけも惠まれないので、間の惡さを頭を掻いたり、にやにや笑つたりして胡魔化した。
「時に大將、いかゞでせう。今日は是非ともはつきりした御返事を頂かないぢやあ、お店からつき出される迄動きませんぜ。」
皇國生命の社員が先づあるじに肉薄して行つた。
「私はどつちでもいゝんですよ。とくのいく方に入らうといふだけなんだ。」
あるじは低く太い聲ではつきり云ひ切つた。
「いつたいこちらは私の方が先口(せんくち)なんだから、そこはちつと遠慮して頂かなくちやあ。」

帝都生命の社員が、顔丈は笑ひながら、どうしたつて讓歩するものかといふけしきで云つた。
「それはいけませんよ。成程あなたは私より先口かもしれないが、うちの會社の牧口つて男が、もうせんから度々うかゞつてゐるんです。その男が地方駐在になる時、私に地盤を讓つて行つたんだから、どつちかといへば私の方が先口なんだ。」
「そんな昔の事を云つたつて爲方がない。第一その頃は、こちらの旦那保險嫌でゐらつしやつたんですからね。ねえ旦那さうでしたねえ。」
「どつちが先どつちが後なんて事はどうでもいゝのですよ。手取早く、どつちがとくだと云ふ事がわかれば三萬や五萬はお願ひしてもいゝと思つてゐます。」
あるじはあまりの長丁場に、段々辛抱しきれなくなつて來てゐた。
「どつちがとくと云つてこいつは一寸むづかしい問題なんですが、いかゞでせう、私も一歩讓り皇國さんにも讓歩して頂いて兩社平等に入つては頂けますまいか。こちらさまなんざあ、十萬でも二十萬でもお入りにならうと思へばなれるんだから。いかゞでせう、皇國さん。」
「私の方も別段異存はありませんがね。」
「それは私がいやだ。」

あるじは叉はつきりと云ひ切つた。

「どつちも同じものなら平分してもいゝ理窟だけれど、互に違ふ組立てゞやつてゐるとすれば、どつちかゞよくて、どつちかゞ惡い筈だからね。ちつとでも損するのは商人として冥利のつきた話です。」

「御尤で。ですから、私共としては、まあ帝都さんの方にも夫々御立場はあらうとは存じますが、何と云つても保險料の安いと云ふ事が一番お客様に親切なんぢやあないかと思ひますので……」

「ですがね、保險料は安いとしても、配當つてものを考へなくちやあ。」

「配當々々つて二言目には仰るが、いつたいその配當つてもの程あてにならないものはないぢやありませんか。四分だ四分五厘だといふけれど、確定配當つていふわけではなし、第一此の頃のやうな不景氣がもう二三年も續いてごらんなさいな、有價證券の値下りで、配當どころか保險金の削減なんていふいたいめを見ないとも限りませんぜ。それよりは最初から保險料の安いといふのが間違のない利益ぢやありませんか。」

「そんな事は斷じてありませんです。理窟の上であるかもしれない位の事を想像してみたつてはじまりませんや。何しろ過去數十年間、配當をつゞけて來て、その率が段々よくなつてるんだか

ら間違ひ無しでさあ。私共の方は皇國さんとは違つて、年々累加配當ですから、失禮ながら長い間には大分の開きが出來る勘定です。」

二人は言葉丈は叮嚀だが、全く喧嘩面になり、顏と顏とをつき合せて、鬪犬のやうに爭ふのであつた。

「どうもそんな形の無い事を云つたところで、どつちがいゝのかわからない。それよりも、先刻あなたの出して見せた比較表つてものをもう一度見せて下さい。あれだと帝都の方が割がいゝやうだつた。」

あるじが早い結末を希望して證據の提示を求めた。

「冗談いつちやあいけません。あんな表があてになるもんですか。自分の方の都合のいゝやうに、馬鹿々々しいつくりごとをしてゐるんだから。」

皇國生命の社員の語氣は荒くなつた。

「何がつくりごとです。各社の料表をその儘寫したので、それに間違があれば間違つた會社が惡いんだ。」

相手も釣込まれて、技巧的な言辭をかなぐり捨てた。

「つくりごとさ。八十歳の時にはこれこれの配當だなんて、人を馬鹿にした話ぢやあないか。八十迄生きる人間はいつたい幾人あるんだ。」

「それは便宜上八十歳で說明してゐる丈で、六十にしたつて七十にしたつていゝんだ。保險料が安い安いといひながら、六年目か八年目から、しみつたれた配當をする會社とは違ひますからね。」

「何。しみつたれだ。しみつたれとは何です。保險料の安いと云ふ事は一番合理的なんだ。それが學者の定說だ。あてにもならない配當を、あてになるやうに見せかけて賣込まうとするのは詐欺だ。」

「詐欺だつて。ちつと言葉を愼んで貰ひませう。」

段々いひつのる聲が高くなつて來たので、往來の人が足をとめて、店の中をのぞきはじめた。奧からも、先刻の血色のよくない娘が心配さうに顏を出し、使ひさきから歸つて來た小僧は、面白さうに立はだかつて見守つてゐた。

「いつたい君の會社は怪しからん。殆んど眞面目な募集はやらないで、そんな魔表をつくつて他社を中傷して歩いてゐるんぢやあないか。」

「そんな事はお互さまだ。君の方たつて保險雜誌を買收して、他社の中傷をやるし、でたらめな配當表をつくつて持廻つてゐるぢやあないか。」
「そんな事は斷じてない。あるといふなら證據を出したまへ。」
「證據はいくらでもある。吾々の會社に來ればいつでも見せて上げよう。いつたい掠奪々々と騷ぐけれど、それは弱蟲の泣言だ。掠奪されるのは、そつちの保險が劣るからだ。斷然いゝものなら奪はれる筈がない。優勝劣敗さ。」
「馬鹿な事をいつちやあいかん。掠奪はあく迄も不正だ。そんな魔表をつくつて、素人を欺くんぢやあないか。勿論御承知だらうが、配當豫想表つてものは商工省で嚴禁してゐるんだぜ。見せたまへ。そいつを持つて、いつしよに商工省へ行つて見ようぢやあないか。」
「何を子供らしい事をいつてるんだ。役所は役所でやかましい事を云ふだらう。しかしお互は商賣なんだ。何處の會社だつて、みんな豫想表はつくつてゐる。」
「何。子供らしい事をいふなと。」
「子供らしい事ぢやあないか。」
「何が子供らしいんだ。」

並んで腰かけてゐたのが、何時の間にか向合つて、支離滅裂な口爭ひにおちいつてしまつた。あるじの禿鷹は默つて二人を睨んでゐたが、苦々しげに舌うちすると何もいはずに席を立つて奥へ引込んでしまつた。

相原と小曾根は、店にいつぱいに人立ちがして、內部にゐる自分達はすべて一味と思はれてゐるらしい景色に氣がつくとぎよつとした。

「かうなればうでづくでも負けはしない。斷じてきさま達にひけをとるものか。」

「はははは、理窟ではかなはないから暴力で來るか。」

「口でいつてわかる相手ならいくらでも說得してやる。わからん奴はなぐるより外に方法がないぢやあないか。」

どこ迄行くか、今にも雙方立上りさうな氣勢を露骨に見せて、互に口汚なく罵りつゞけた。

「おい、行かう。」

小曾根は相原の肱を突いて、そつと立上つた。あとからあとから彌次馬が殖え、川口の上潮時のやうに、店內にあふれさうに見えた。

二人はその人立ちを搔分けておもてに出た。ほつとして明るい往來を見渡した時、つい目の前

に向ふからかけて來る巡査の白服が見えた。

「ひでえもんだなあ。」

二人は互に顔を見合せて苦笑した。その醜狀を我身の事のやうに感じながら、俄に湧上る汗を拭き拭き、ぐつたり疲れた體と、反撥力を失つた心を重荷にして歩き出した。（昭和五年八月二十四日）

銀座復興

一

地震と火事で燒野原となつた東京の姿は、この大都に愛着を持つ人間にとつて無量の感慨を催す風景であつた。目路（めぢ）を遮るものゝなくなつた下町の燒土の果に、昔の景色さながらの、品川の海が見えた。

燒殘つた電車は生き殘つた人間を滅茶々々に詰込んで、幹線だけをのろのろ走り、正當には乘れなかつた人間は、眼を血走らせ、殺氣立ち、窓の外にぶら下つて、燒跡の灰をならしに出かけた。正當にも不正當にも電車に乘りかねた老人や、女や、子供や、荷物を持つた人間は、朝鮮牛の曳く荷車に乘つて、品川から上野迄かたこと搖られて行つた。

その牛車は、つい此間迄、虛榮と出鱈目と茶目と自棄（やけ）と贅澤と嫉妬と必用と爲樣（しやう）事なしと――さまざまの境遇といろいろの心狀を重荷にしながら、しかも一樣に、男も女もひとつの氣取つた型を見せて步いてゐた銀座を、さも輕蔑するやうに尻目にかけ、よだれを垂らし、糞をたれなが

ら通つて行つた。
明治初年から半世紀かゝつて建設した大東京の心臓が丸の內なら、銀座は胃の腑に違ひ無い。強健無比な胃袋だ。もろもろの多忙と退屈と繁昌と不景氣と文化とごまかしと惡德と——雜多なものを平氣で呑込んで、消化して、排泄した。それは東京人の誇りであり、田舍者の憧憬であつた。ところが今は燒土と灰だ。女の盜心をそゝり、萬引の下心を培ふ陳列窓はあとかたも無くなつた。石と煉瓦と鐵の構成に僅ながらも風情を添へた街路樹も、つつ立つたまゝ燒けてしまつた。
凡そ近代的な外觀とその頽廢的な魅力とは、一夜の夢に等しかつた。
それにも拘らず、此の一筋の道を、目的があるのか無いのか、無數の人間が、蟻のやうに油蟲のやうに步いて行つた。
「牟田君ぢやあないか。」
「おゝ。」
二人は思はず知らず雙方から手を差出して固く握手した。秩序を失つた都會の眞中で、頭を下げるおじぎの形式は、かへつて不自然に思はれたのである。
「どうした。」

一命だけは助かつた。しかし、もういけない。もう東京は駄目だ。殊に銀座は永久になくなつたよ。ひどい、實にひどい。こんな事があらうとは誰だつて想やあしなかつた。」

銀座で古い贅澤な裝身具を商ふ店の二代目は、今も未だ身に迫る天災が襲ひかゝつてゐるやうに、呼吸の切迫したものいひで、東京は再び立上る事の出來ない痛手をうけたのだと力說した。

「罰だよ。罰があたつたんだ。われながらいゝ氣なものだつたからなあ。」

學校時代から絹物を身につけ、早くから遊びを覺え、稍古い時代の若旦那型をもつて自任してゐた山岸が、灰だらけの中折をお釜帽子のやうにかぶり、その上から手拭で頰かぶりをし、たしかに古着に違ひ無い獵服型のカアキイ服を着、長靴を穿いた姿は、それだけでも如何に天變か人事に及ぼした打擊の絕大であつたかを語るものがあつた。いゝ男前といふよりも、傳統と注意深い手入で磨のかゝつた優男が、今は無精髯をまばらにはやし、煤けた顏に近眼の眼を病的に鋭く光らせてゐた。銀座が近代文化の外形を亡ぼし盡したと同じやうに、此の男は其の姿體から都雅風流を失ひ盡した。

「もう二度とあんな銀座は見られないよ。贅澤と浮氣は叩きつぶされた。これからはほんとに腕節の強い人間が勝んだ。僕も建築材料でも賣らうかと考へて居るんだ。」

其處で生れ、其處で育つた生粹の銀座兒は、火と烟に追はれて郊外に逃れたが、再び銀座には戻らない、戻つたところで自分の店のやうな贅澤屋は、これからの世の中には不必要になる、店の者も夫々宿許へ歸し、店は完全に解散してしまつたと云ふのであつた。

二

無自覺に無反省に、銀座兒である事を誇りとして、遊興に日を送つてゐた山岸が、突然の天變に根底から生活を覆され、どうしていゝかわからない昂奮に緊張してゐる顏を、牟田は咎めるやうに見守つた。

「そんな事は無いさ。僕は全然別の意見だ。成程、銀座は現在灰と土さ。しかし、地震の災害なんか直に忘れてしまふだらう。外科手術の痛さをいつ迄も記憶してゐる者は無い。社會は一度進んで來た道を、決してあと戻りはしない。それが間違つてゐようが、損だらうが、破滅に轉落しようが、いつたんスタアトを切つた以上は、ひたむきに馳足だ。見給へ、東京は前よりも遙かに立派なものになる。僕に云はせれば、これ程東京を建直すのに都合のいゝ事は無い。無秩序に亂雜に膨脹した東京を、今度は目的を定め、計畫を立て、幾何學的に建直すのだ。どんなに美しい

都でも思ひの儘に出現させる事が出來るんだぜ。しかもその中心は銀座さ。」

牟田は友達の腑甲斐なさを鞭打つやうに自説を述べた。中學時代に學校を同じくし、一方はそれつきり商賣に入つてしまひ、片方は大學へ進んだのだが、つきあひは絶えなかつた。おやぢが死んで早くから金の自由になつた山岸は、下町の若旦那の定石通り、花柳界を泳ぎ廻り、まだ學校の制服を着てゐた牟田に待合の酒を飲ませもした。淡白な浮氣が、いつかのつぴきならない關係に陷つて、あつちこつちで女出入を起し、後見役の伯父と一人息子の可愛さに愚痴つぽくなつた母親に攻め立てられる自棄と鬱憤のなだめ役も牟田がつとめた。全く違ふ世界に住む二人は、互に持つてゐない知識を取替す事が多かつた。感じの早い、そのくせ感じばかりで思考力の乏しい山岸にとつて、牟田は屢々兄分であり、同時に又世間の狹い會社員として、牟田は屢々弟分でもあつた。

「たしかに東京は建直る。そして銀座は一層賑やかに復活する。若も銀座といふものが贅澤な所なら、復活後の銀座はもつと贅澤になる。若も銀座といふものが輕佻浮華の街なら、もつともつと輕佻になり浮華になる。いづれにしても、無目的に動く社會の力は、たつた一度の地震位で阻止する事は出來ない。それは火災よりも強力だ。」

牟田は、山岸の底力の無いあきらめのよさを思ひ返させようと努めた。
「駄目だよ、それは机上の空論さ。君は山の手に住んでゐて、うちは焼け無い。勤め先は丸の内でこれも無事だから、呑氣な事を云つてゐられるのだ。いくら社會が進むからつて、金が無くて何が出來るんだ。もとでが無くて立直るわけはないぢやあないか。三十年四十年かゝつて作り上げた東京が、たつた一晩で灰になつてしまつたんだぜ。日本は怖ろしい國だよ。いつなん時、今度のよりもひどい地震がやつて來るかわかりやあしない。斯ういふ國には斯ういふ國の生活を考へなくては駄目だ。西洋まがひのビルディングなんか建てたつて駄目だ。日本には日本の家屋が一番適してゐる。僕は生活を一變して、すつかりやり直すつもりだよ。」
山岸は齒切れのいゝ調子で、いかに外國模倣の文化が此の國土に適さないか、いかに多くの無益なる努力が灰となつたかを力說して、昔の簡易な生活様式に歸らなければ、更に悲慘な運命を招來するに違ひ無いと云ひ張つた。
「僕はさうは思はない。商人は現在金を持つてゐないかもしれない。しかし、今の世の中は金が無くても商賣は出來る。殊にかういふ非常時に、東京を建直すとなれば、資金の融通はきつと出來る。ビルディングだつて續々建つ。煉瓦積の模造品はつぶれたが、今度はあの位の地震では潰

れない、鐵骨の建物がづらりと並ぶよ。見給へ、あのビルディングだつて、鐵骨はびくともしてゐないぢやあないか。」

指さす方に、やうやく骨組だけ出來た百貨店の鐵骨が、晴た空に整然とした線を描いて立つてゐるのであつた。

三

「まあ、暫く見てゐたまへ。みるみるうちに銀座は新しいていさいをつくるから。」

牟田はその鐵骨がやがて混凝土をもつて覆はれ、石をもつて飾られる美しさを想像した。

「駄目だ。地震後旣に日が經つてゐる。しかも一軒の家も無いぢやあないか。いかに銀座人がいたでをうけたかはこれでもわかる。あの鐵骨だつていつ迄も骨ばかりで、しまひには錆て立腐れになるだらう。兎に角僕は商賣替だ。」

山岸は意外に眞劍に強情を張つて、友達の言葉をしりぞけた。

「それは議論よりも事實が證明するだらう。まあお互に暫く待たう。」

牟田は友達の一本氣をあはれみ、懸念しつゝなだめた。

「どうだらう、何處か麥酒を飲ませるうちは無いだらうか。」
「あるものか。第一僕はもう酒なんか飲まない。そんな事を云つてる時ぢやない。東京市民は酒も煙草も、一切の贅澤を捨てゝかゝらなければならないんだ。銀座にはもうカフェなんかなくなるだらう。」
「どうもひどく悟つたものだなあ。僕はどんな世の中にならうとも、必ず人間の求めるのは享樂だと思ふ。その意味で飲食店と劇場は忽ち復活すると考へる。銀座は恐らくカフェで埋まりはしないかと心配してゐる。この天災の後で、吾々はかへつて享樂的の氣分を追求するのでは無いだらうか。」
二人は全く違つた思想を追ひながら、しばらくはお互の肚の中を理解し兼る姿で向きあつてゐた。何ともいへない氣まづさは、ありありと山岸の面上にあらはれた。彼はいたでを負つた人間の一人だ。何故友達はその自分の立場に同情をもつてゐないで反對の事ばかりいひ張るのか、少なからず腹立たしかつた。家も焼けず、勤めは失は無い、何一つ損害をうけてゐない氣樂な位置に在つて、人の不幸を冷かに眺め、涼しい面をしてゐやあがる――さう云つたひがみさへ起した。
「では失敬する。」

彼は自分でも氣が咎める程ぶつきら棒に、別れを告げた。
「一度おたづねしたいが、お母さんも細君もみんな無事かい。」
牟田は友達の肚の中を察して帽子に手をかけた。
「無事だ。ちいつぽけな家にごたごたして居るんだが、女房なんか寧ろ喜んでゐる。亭主が遊びに出かける心配がなくなつたから。」
自分自身の昨日迄のだらしの無かつた生活を嘲るやうに、山岸は笑つた。それつきりで、彼は輕く挨拶の形を見せて、さつさと歩き出した。
身につかないカアキイ色の洋服は、見てゐる中に人ごみにまぎれて行く。追つかけて行つて、何處迄もいつしよに歩いて行き度い心持で、牟田がのび上つて見送るうしろから、人間を滿載した牛車が、のつそりとあらはれて、飴色の牛の腹は彼の脇腹とすれ〳〵に通り過ぎ、完全に山岸の姿を遠く遮つて了つた。
不圖、牛車の最後部に、萌黄唐草の風呂敷包を抱くやうにして、横坐りに坐り、ふきながしにした手拭の端から、うつけたやうな、しかも素晴しく美しい横顔を見せた女がゐた。あゝ、あの女も生きてゐたか――さう思ふとたんに、つうんと鼻をついて感動が眼頭を刺た。それが何處の、

何といふ女かは知らないのだが、麥酒會社の宣傳ビラに描かれた藝者に相違無かつた。二重瞼の目尻に微笑を浮べ、粒の揃つた齒を見せて笑ひながら、手にしてゐるコップから、白い泡がふきこぼれてゐる廣告繪は到る所で見た。彼が行き馴れたカフェの壁にもかゝつてゐた。あの繪も、あれと同じ何萬枚かの繪も灰になつたであらうと考へると、咽喉の乾きを痛感した。

四

牟田は水を求めて西側から東側へ渡つた。その邊は始終歩き廻つたところだが、どの邊にどの家があつたのか、見當もつかなかつた。燒け落ちた家々の殘骸が、うづ高く積んであるばかりだつた。

たゞひとところ、燒け焦げの煉瓦の下から、ちよろちよろ水の流れ出るのを見つけた。綠草の中から湧く泉よりもきれいに大道に流れて流れやまないのである。彼は崩れた煉瓦や石材の城壁のやうに高くなつてゐる上に登つて見た。意外にも、眼の下に、たつた一軒、亞鉛と葦簾で組立てた小屋があつた。その小屋の前の水道線の管の破裂したところから滾々とほとばしる水で、洗濯をしてる女があつた。まあるい、お尻をこつちに向け、襷がけで、大きな盥をかかへ込み、一

心ふらんに洗濯板の上に石鹼の泡を盛上げてゐた。
それは震災後第一番に發見した銀座の住民だつた。牟田は夢のやうに、洗濯をする女の後姿を見てゐたが、いきなり勢ひよく向ふへ飛び下りた。
とたんに、葦簾の中から、いが栗頭に鉢巻をした裸體の男が出て來た。牟田の方に氣が附いたのか附かないのか、極めて無頓着な態度で、小屋の横腹にあたる亜鉛板に紙片を貼りつけて、又葦簾の中にかくれて了つた。
牟田は近寄つて貼紙を見た。髯題目のやうな字が書いてあつた。

> 復興の魁は料理にあり
> 滋養第一の料理ははち巻にある

久しく忘れてゐた諧謔が、牟田の心に蘇つて來た。すつかり燒拂はれた帝都の眞ん中に小屋を建て、褌ひとつにはち巻をした男が住んでゐようとは、思ひもかけない事であつた。殊にそれがたべもの屋だ。たくまないをかしさが、震災後の不景氣な心の中にひそかに忍び込んで來た。
「何か喰べさせて貰へますか。」

牟田は葦簾の中に聲をかけた。
「折角ですが、明日からはじめるんです。」
土間に、手製らしい食卓を据ゑ、その兩側に緣臺を置いた狹い小屋の中で、はち卷の亭主はぶつきら棒な返事をした。卓の上に大工道具を並べ、しきりに店構へを整へてゐるところだつた。
「すまないが水を飮ませてくれないか。」
「おひやですか。」
面倒臭さうに金槌の手をやすめ、棚の上の茶碗をとつてくれた。
「そこんとこに水道がふんだんに出てますから……」
それつきりで、又土間にしやがんで、不揃ひな板羽目に、せはしく釘を打込むのであつた。
「あ、失禮。」
茶碗を借りておもてに出ようとした牟田と出あひがしらに、のつそり入つて來た男があつた。
「お、稻村さん。」
亭主はむつくり起き上ると牟田を押のけて新來の客を迎へた。
「生きてゐたかい。」

「おかげさまで。」

それつきりで、しばらく二人は顔を見合せてゐた。思ひもかけない天災を、身をもつて逃れた時の怖ろしさと、やつと拾つた命の尊さを痛感して、今にも泣出しさうな、その癖妙に無表情な沈黙が續いた。

「よかつた、よかつた。お互に命さへありやあ結構だ。」

「えゝ、そのかはり命の外には何にも彼もなくなつちまひました。」

「おかみさんは。」

「無事です。」

「さうかい、二人ともやられたんぢやあないかと思つてね。」

亭主の指さす所で、かみさんは何も知らずに、きびしい殘暑の照りつける太陽の下で、金色の水をはねかしながら、せつせと洗濯をしてゐるのである。

五

「まあこつちに入つておくんなさい。この頃はまるで大工さんだ。」

道をふさがれて、土間にぼんやりしてゐる牟田には頓着なく、亭主は客を中へ誘つた。
「ごらんの通り、まだ銀座には一軒もうちが無いでしよ。いつ迄もみんなが手を出さないんぢやあ、復興つて事あ出來ない理窟だから、うちが一番さきがけではじめてやらうと思つてね、明日が店開きなんです。どうせおでんかすゐとんでなけりやあ賣れやしまいけれど。」
「そいつあ偉いや。だが酒はあるのかい。」
「ありますよ。壜詰だけれど、一寸飲めるやつを探して來ました。」
いひながら、亭主は物のかげから酒の壜を取出して、自慢さうに高くかざして見せた。
「ちつと甘口の方だけれど、この際贅澤はいへないからね。」
手近の茶碗をとつて、とくとく音をさせて酌いだのを、客の鼻の先につき出した。
「ためして見て下さい。口にあふか。あはないか。」
客は澄んだ黄色い液體の中に溺れてしまひさうな様子で、うつとりと見入つたが、ちよつと口をつけると、二三度舌うちした。
「うゝ、こいつは悪くないや。」
さう云つてから、ぐつとひと息に飲み干した。

「どうです、存外惡くないでせう。」
亭主は眼尻を下げて、我事成れりといふ様子を見せた。
客は飲み干た茶碗をもう一度仰向いて口に持つて行つた。一滴も殘してはすまないといふ心がけに違ひ無かつた。
「ありがたいぢやあないか。幾萬て人が死んだつていふのに、こちらは命拾ひをした上に、かうしてお酒が頂けるんだ。」
鼻をつまらせ、眼には涙を浮べてゐた。
「全くだ。人間て奴あ、いつ死ぬかわからないつて事が、今度つて今度はじめてわかつた。あたしやあいくさにも行つたんだけれど、御國の爲に死ぬんならあきらめもつくが、地震や火事で死んだんぢやあなんにもならないや。だから、ふだんうまいお酒でも飲んどかなくちやあ損でさあ。」
相手のしんみりした様子に感動して、亭主も生來重たい口を、出來るだけ滑らかに働かさうと努めた。
「ねえ、そんなもんでせう、理窟がさ。あなたも命拾ひのお仲間なんだ。さ、いつぱいいきませう。」

水を所望した時の茶碗を手にしたまゝ、その場の景色をじつと見守つてゐた牟田の方に、亭主は酒の壜を傾けた。

「なあにね、明日からこいつが賣物なんだから、澤山はあげませんよ。」

いきなり茶碗のなかば迄酌いだ。

「こつちもひとつ頂かうか。默つて見てはゐられないや。」

自分も茶碗をとつて、なみなみと滿たした。

「稻村さん、もうひとつどうです。」

その客も辭退しなかつた。結局三人は緣臺に腰を下して、乾杯する樣に一齊に口をつけた。

「あゝうまい。酒つてえものは、どうしてかういゝ味を持つてるんだらう。」

客は、蒼黑く疲れた顏に一脈の情熱を湛へて、重ねて舌うちした。

「地震で飛び出す、うちは燒ける。親子六人着のみ着のまゝで、二重橋前迄逃げ出した時は、たゞ助かつたありがたさで、命さへあれば結構だ、酒も煙草ももう飮めまい、よしんば飮めても飮むまいと思つたけれど、一日經ち二日經ちするうちに、矢張煙管と盃が戀しくなつた。お前さんとこはどうしてるだらう、灘やはどうしてるだらうと、馴染のうちのことばかり考へるのさ。」

五十がらみの、人の世にも疲れたやうな骨だつた顔が稍紅くなり、酒にありついた満足と、有爲轉變の怖ろしさを、かたみがはりにつぶやいた。

六

「うちぢやあね、簞笥や着物は燒いても構はないけれど、天子樣から頂戴した勳章を灰にしちまつちやあすまないと思つてね、あれと勳章だけ持つて逃げましたよ。こいつだけは錢かねづくで買へる物たあ違ふんだから。」

亭主が太い首を廻して見上げる、頭の上の神棚の隣に、額がかゝつてゐた。

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル日本帝國皇帝ハ野口文吉ヲ明治勳章ノ勳八等ニ敍シ瑞寶章ヲ授與ス卽チ此位ニ屬スル禮遇及ビ特權ヲ有セシム

神武天皇卽位紀元二千五百七十五年大正四年十一月七日京都皇宮ニ於テ璽ヲ鈐セシム

大正四年十一月七日

賞勳局總裁從二位勳三等伯爵　正親町實正

此證ヲ勘査シ第四十四萬五千七百二十五號ヲ以テ勳等簿冊ニ記入ス

賞勳局書記官正五位勳四等　藤井善言

あるじも客も嚴肅な表情をして額を見上げ、感慨無量の態であつた。

「日獨戰爭の時だね。」

「えゝ、これが家の寶物でさ。」

「さうともさ、それでこそ日本人だ。その意氣で今度は復興の魁か。今に銀座からも勳章がさがるぜ。」

「まさかさうでもないだらう。」

客の冗談を打消したものゝ、亭主はほんとに銀座から金鵄勳章を貰つてもいゝやうな顏色で、茶碗酒をぐつとあふり、又しても嚴肅な表情で、神棚の隣の額を仰ぎ見るのであつた。

「あら、稻村さんですか。」

裾を高く端折り、襷をかけ、まるまる肥つた手と足を子供のやうにむき出しに、日に曝して、おかみさんが葦簾の外から聲をかけた。聲をかけてからあわてゝ裾を下し、襷をはづし、頭の手拭をとると、上氣した顏がつやつや光り、勞働の後の爽かな血が滑らかに頰を染た。

「よくそれでも御無事で。」

女らしくあらたまつたおじぎをして、馴染の客をなつかしさうに、近々と寄つて來た。

「お互によく助かつたものさ。」
「全くで御座いますねえ。稲村さんはどうなすつたらう、大須賀先生は御無事かしら――あの晩東京の焼ける火の手で眞赤な空を見ながら、ふだん御贔屓にして下さるお客さまの事ばかり御案じ申上げてゐたんでございますよ。」
「こつちもさうさ。あつちこつち馴染の飲屋（のみや）がある。それがみんなまるやけはわかつてゐるが、命だけは無事でゐてくれとそればかり念じてゐたのさ。」
「ありがたう御座います。皆さんがさういつて下さるおかげで、斯うして無事におてんとさまが拜めたんで御座いませうよ。」
むつつりやの亭主の不足を補ふやうに、かみさんの言葉は肌理（きめ）が細（こま）かゝつた。家具家財はすつかり灰になつてしまつたが、生きてゐるありがたさを、言葉の末に迄たつぷりあらはして、客もあるじもひとつの心を感じてゐた。
「あゝうまい、ほんとに結構だよ。」
客は二度目の底を切つて、多分の未練をあらはしながら、茶碗を食卓の上に置いた。
「そんなに氣に入りましたか。それで安心した。いくらおでん茶飯でも、酒だけはいゝのを賣ら

なくちやあ、先からのお客様に申譯がないからね。」
亭主もほめられてすつかり滿足し、又壜を取上ると、默つてみんなの茶碗についた。それを飮むと又つぐ。結局一升壜を空にして、小屋の中は陶然とした。

七

「あゝ、とうとう飮んぢやつた。明日の店開きにつかはうと思つてゐたんだが、まあいゝや、前祝だ。」
亭主はふだんから赤い顏を眞赤にして、かみさんの方に氣兼しながら、一滴も殘らない壜の中を悔むやうにのぞいた。
「駄目ですよ、あんたは。頂きはじめるときりがないんだから。」
おかみさんは一層眞劍に、空になつた壜を憎んだ。さうはつきりたしなめられてみると、亭主は亭主の威嚴を保ち度い氣になつて、
「いゝぢやあねえか、ちつと位飮んだつて。兎に角命拾ひをしてさ、たとへバラックはバラックでも、斯うやつて銀座の眞中でさ、何處のうちよりも早く店開きをするんだぜ。こんな目出度い

事はありやしないや。けちけちするない。」

重たい舌を不器用なまき舌で、冗談だか眞劍だかわからない佛頂面で云ふのであつた。

「いや、御馳走になりました。」

客は立上るとたんに一寸ふらついたが、首から紐でさげた財布を懐(ふところ)から引出して、札を一枚卓の上に置いた

「開業祝ひには少な過ぎるけれど、この際どうにも爲様(しよう)が無いから、これで勘辨しておくんなさい。」

「なんです、稲村さん。そりやあいけねえや。これは頂きませんよ。開業祝ひなんて他人行儀はよしにして、こつちの方に足が向いたら、時々飲みに來てやつて下さい。」

亭主はその札を、無理に相手の手に握らせて、どうしても受取らないと云ふ意思を、額の横皺を一段深くして見せた。

「おやあ、今日は御馳走になりつぱなしだ。」

「さうして下さい。」

ひよいと帽子を頭にのせると、客は影法師のやうにおもてに出た。

「稲村さん、あなた今どちらなんです。」
亭主の聲が追かけたので、又ふらふら戻つて來て、
「荻窪だよ、なつちやあゐないやね。」
「早く銀座に歸つておいでなさい。」
「來るよ、來るよ。俺ももう二度と銀座には住めないと思つたが、お前さん達が斯うしてゐるのを見たら、矢張故郷はなつかしいや。もう一度働くよ。働くともさ。」
それつきりで、洗ひざらしたゆかたの肩の寒さうな後姿は、西に廻つた日ざしに照らされて、とぼ／＼歩いて行つた。
「あれで昔はたいした方だつたんですがねえ、何しろこれだから。」
亭主は盃を持つ手の形をして、口のそば迄持つて行つた。
「お酒がきれると元氣がなくなるつておつしやるんですよ。」
かみさんも側から說明した。
「荻窪だと云つたねえ、僕の友達も荻窪に逃げたさうだが、知らないかなあ、山岸つていふ。」
「山岸さん？　知つてますとも。銀座ぢやお古いお店だ。うちにもちよいちよい御見えになりま

したよ。」
「さうか。先刻そこであつたよ。もう銀座は復興しない。煉瓦造りのうちなんか、建てたところで、又地震でやられてしまふ。二度と銀座には住まないと、ひどくきめ込んでゐたつけ。」
「山岸さんが？　へえ、さうですか。もう銀座は復興しないつてね。」
亭主は腕組をして、考へ深さうにはち巻の頭を傾けたが、明かに氣迷ひのかたちだつた。
「ほんとにさうなんでございませうか。銀座は復興しないんでせうか。」
かみさんも、些か遠く離れた地藏眉を寄せて心配さうに牟田に訊いた。
「そんな事があるものか。銀座は前よりも立派になる。もつともつと繁昌する。」
牟田は先刻山岸に話したと同じ事を、酒の機嫌で又繰返した。
「さうでせうねえ、復興しないつたつてさせてみせらあ。日本人ぢやあねえか。」
亭主は固い覺悟を示すやうに口をへの字に結んで、心配さうに女房に力んで見せた。

八

翌日、牟田は又銀座へ廻つた。昨日の日曜の散步に、はからず發見した飲屋で、水を所望して

酒を振舞はれたのに對し、默つてもゐられない、幸ひの店開きに飲みに行くのが一番いゝと思つたのだ。

燒け焦た煉瓦と石材の山積した一個所を、ゑぐり取つた形に道をつくり、その角に建札を立てゝ半紙が貼つてあつた。

| おでん酒あります |

むつつりした赤面の、額にやけに深い横皺のある、若いのか年とつてゐるのかわからないはち卷のおやぢの顏を想起して、牟田はおもはず微笑した。

銀座の燒跡にたつた一軒のバラツク建の飲屋には、先客があつた。

「いらつしやい。」

「昨日はありがたう。」

三人の客が圍んでゐる食卓の一隅に席を占めた。その食卓を見下す位置に大きなまないたを置き、亭主は豆絞の手拭を兎の耳のやうにおつたてたはち卷をし、わざと怖い顏をしてゐるのかと思はれる表情で立つてゐた。

客は昨日の稻村さんと、大兵肥滿の老人と、まだ若いロイド眼鏡の男だつた。
稻村さんは目の前に空になつた德利を三四本並べ、陶然として無我の境にあつた。牟田が挨拶しても、誰だか見極めがつかない様子で、默つてゐた。大兵肥滿の老人と若い男は、しきりに聲高に話合つてゐたが、兩方とも新來の客の何者であるかを疑ふやうに、ちらちら視線を投げて寄越した。
「おさしがおひとつ。」
「よしきた。」
かみさんの聲に應じて、亭主は威勢よく受けたが、生來の鈍重感が邪魔をして、甚だしく稚拙なものであつた。
「さしみ、あがつた。」
「お待遠さま。」
ぶつきら棒な亭主をかばふやうに、まるく滑らかな線で出來上つてゐるおかみさんは、もの柔かにうけついだ。
めじまぐろのぶあつに料つたやつに山葵と海髮を無雜作にそへた景色は、玄米するとん時代を

嘲るやうに潑剌とした。
先客の話題は矢張地震だつた。
「すると、先生はつまり天譴論者なんですな。」
若い男は盃をなめる形で樂みながら、相槌を打つ。
「さう、天が罰したのだよ。」
先生と呼ばれる大兵肥滿の老人は、袋のやうにだぶ／＼した洋服のまたを大きく開き、太い洋杖(ステツキ)に顎をのせ、これはコップで飲むやうな勢ひで盃を干した。
「えゝか、羅馬(ローマ)は何故亡びた。奢侈淫卑不道德の結果だ。卽ち天が人間の增長慢を罰したのだ。不幸にして我國の現在は羅馬の末期だ。政治家も腐敗しとる。實業家も腐つとる。あきんどは慾ばかりかわく。若い男は惰弱になり、女どもは洋妾(ラシヤメン)の眞似をして得々たるものがある。外來の惡思想にかぶれた青年は、髮を長く延ばして露西亞を謳歌する。亞米利加の役者の眞似をする。胸糞が惡くて見て居られん。強健質實の美風は地を拂つた。心ある者は常に憂ひてゐたが、天も見るに見兼(かね)たとみえて、はつはつはつは、遂にやりをつたよ。」
大きく體をゆすつて、老人は笑つた。西洋模倣の東京が灰になつたのを痛快がる色が明かだつ

た。しかも、その燒土の上に、更に根強い西洋模倣の文化がはびこらうとしてゐる事には氣がつかない。曾ては、新聞や雜誌に絶えず噂の出た、國粹主義の政治家だつた。豪放磊落小事に拘泥しないと云ふ型の流行つた明治初年に運よくぶつかつたおかげで、落第し、女郎買をし、びりから一番で大學を出て、官界へ身を浮べ、泳がないやうな風をして其實巧に泳ぎ廻り、常に忠君愛國を説き、現代の文化を罵り、酒をあふりつゝ、立身した人物だ。

九

「え、どうぢや。これをしも天譴と云はずして何をか云はんやさ。貴公どう思ふ。」

先生は林立する德利越に、向側の若い男に反問した。

「天譴といふ言葉は面白いが、要するに言葉の面白さで、吾々若い者にはぴんと來ませんな。」

「ぴんと來んか。」

「來ませんよ。だつて、日本ばかりが天譴を喰ふ理由が無いやうだし、殊に東京が何故被害地として懲罰されなければならないのか。先生のいふやうに、今の若い者が露西亞や亞米利加にかぶれてゐるのが怪しからないなら、本元の露西亞や亞米利加の方が先に、天譴を受けなければなら

ないわけでせう。」

「いかん、いかん。君のは理窟だ。理窟で物事を判断するのは小人の仕事だ。わしが天譴ぢやといふのは、此の天災を天譴と見て、我國民は反省せなければならんと云ふのだ。」

「それは方便だ。客觀的事實ではないのだから。」

「客觀的か。わつはつはつは。」

先生は全身を搖上げて、いかにも愉快さうに笑つた。

「客觀的に主觀的、抽象的に具象的、演繹的に歸納的、君等のは何でも的だ。その的が氣に入らんなう。」

「テキ一丁か。」

お互に何の事だかわからない事をいひあつて、一度に笑つた。

「大に愉快ぢや。どうです稲村さん。」

先生は隣で居睡(ゐねむり)してゐるのに聲をかけた。

「いゝえ、あたしには理窟はわかりませんよ。酒に理窟はありませんや。」

はつとして目を覺まし、手近の德利をさかさにしてみたが、一滴も落ちて來ないので、

「おい、もう一本おくれ。もう一本だよ。」
呂律があやしくなつてゐた。
「もうよした方がいゝでせう。」
亭主は無遠慮に客の註文を遮つた。
「だからさ、もう一本きりだつて云つてるんぢやないか。けちな事をいふなよ。」
「けちぢやあないけどね、お歸りが遠いんでしよ。銀座の眞中に追はぎが出るつていふんだから、あんまり醉拂つてると危ないや。」
「大丈夫だよ。追はがうつたつて、はぐものなんかありやあしないよ。」
「そんならもう一本きりですよ。おい、お銚子だ。」
亭主はやうやく納得して、どうしようかと迷つてゐるかみさんにいひつけた。だが、その時は、自分の要求の通つた滿足で、稻村さんは又ふねを漕いでゐた。
「こつちもおかはり。」
牟田も德利を振つて見せた。
「大分いけますね。さしみはどうです。」

「結構。こんないゝ刺身を喰はせるのに、何故おでんだけ書出したんだらう。さしみありと貼り出した方が景氣がいゝぢやあないか。」
地震以來充分酒にありつかなかつた牟田はいゝ氣持になつてゐた。
「でもねえ、東京中燒けちまつてさ、玄米を喰つてる人間がうぢや〳〵ゐる中で、さしみぢやあんまりおごりの沙汰だ。なぐられますぜ。」
亭主はさういひながら、自分がいきのいゝさしみを賣つてゐる嬉しさに、口では反對しながら目尻で笑つてゐた。
「さうぢやあないよ。東京は燒けてもへこたれない、二里四方だか四里四方だか燒土になり果てても、その眞中でさしみで飲ませるうちがあるといやあ、豪勢なものぢやあないか。復興のさきがけはさしみにありさ。」
牟田は自分でも氣のさす程舌が滑つた。
「贊成、贊成。」
大きな聲で先生が怒鳴つた。
「貴說甚だ我意を得た。やれやれ、大いにやれ。おでんなどは女子供の喰ふものだ。あく迄もさ

しみで行け。おい、おかみ、紙と筆を貸せ。我輩が書いてやる。」
食卓を拳固で叩いて、意氣さかんなるところを見せた。

十

かみさんが筆と紙を持つて來た。
「三四枚つないでくれ。」
だん袋のやうな洋服の袖をたくしあげ、墨汁に筆をひたし、

さしみ　ぎんざはち巻

と美事（みごと）な筆跡で書いた。
「先生、僕にも、一枚書いて下さい。かけものにしますから。」
若い男の御世辭には頓着なく、
「おい、これを往來に貼つて來い。」
「いや、僕が行つて來る。」

かみさんの行かうとするのを横から奪つて、若い男が立上つた。

腰かけてゐる時はしやんとしてゐたが、立つて行く後姿には、はつきり醉があらはれてゐた。

「大分廻つてらあ。」

舞臺監督のやうな態度で、亭主はじつと見送つた。

「だつて、あんた、もう五本目よ、又青くなられては困るわ。」

かみさんは同情を求めるやうに亭主を見上げた。

「驚いた、驚いた。もう銀座には人つ子一人ゐなくなつたぞ。」

頓狂な聲で叫びながら、若い男は歸つて來た。

「世が世ならば、銀座に血の通ふのはこれからだぜ。」

「さうですとも。それがね、昨夜なんざあ、いゝ月夜で、まるで海さ。」

「しいんとして、何の物音もしないんでしよ、凄くて寢られないんで御座いますよ。」

夫婦は、たそがれかけたおもての空を心細さうに見ながら相槌を打つた。

何處で探して來たのか、古風な洋燈を出して燐寸を擦つた。ほのかなあかりは、小屋の隅々迄は屆かず、居睡してゐる稻村さんの瘦た皺だらけの顏と、大兵肥滿の先生の偉大な鼻と、病的に

白けた若い男の額と、牟田の毛深い頬から顎へ光を投げた。何ともたとへやうの無い時代錯誤な景色だつた。

「君もなか／＼いきますなあ。ひとつどうです。」

若い男は突然牟田に盃をさした。

「あ、そいつはよして下さい。うちぢや盃のやりとりは嚴禁だ。」

亭主があわてゝ口を入れた。

「いゝぢやあないか。おちかづきのしるしだ。」

「いけないんですよ。そいつが始まると、つい喧嘩になつたり、お互にうるさい事が起るから。」

「馬鹿にするない。誰が喧嘩なんかするものか。」

「でもね、うちぢやあ法度（はつと）なんだ。」

「法度たあなんだい。客同志が盃のやりとりをするんだ。文句をいふ事は無いぢやあないか。」

「文句をいふわけぢやあないけどね……」

口の迅速に動く客は、唇の重たい亭主よりも言葉數が多く、忽ち沈黙させてしまつた。

「さ、ひとついきませう。」

向側からぐつと手を延ばして盃をさしつけた。
「私は新参で、こゝのうちの家憲は知らないのですが、矢張獻酬は無い方がいゝでせう。」
「いや、僕もこゝはそれ程馴染ぢやない。第一おやぢの面が氣に喰はん。何も年が年中はち巻をしてゐる必要は無いぢやありませんか。ね、こつちは錢を拂つて飮んでるんだ。のみやに家憲があつて堪まるもんか。」
「しかし、おやぢの言分にも一理ありますよ。斯う云ふうちの事だから、見ず知らずの人間同志が盃のやりとりをするとなると、うるさい事があるかも知れませんぜ。」
伞田は、相手が何時の間にか眼を据ゑ、青ざめた額にねつとりと汗をかいてゐるのを見てとつて、鋭鋒を避けようと努めながら、どうしてもその盃が受けられなかつた。
「見ず知らず？　見ず知らずは無いだらう。」
見ず知らずと云つた言葉が、ぐつと胸に來たらしく、相手は一層執拗になつた。

一一

「え、君。袖擦合ふも他生の緣だらう。ましてや大正十二年の秋九月、關東大震災の直後に於い

て、東京銀座の眞ン中で、共に酒を飲むんだ。見ず知らずとは言ひ切れないよ。すくなくとも僕は四海同胞の感を禁じ得ない。決して君を見ず知らずの人間だとは思はんよ。しかしだね、見ず知らずの人間がいけないいつて云ふのならお互に名のりあはうぢやないか。」

内かくしから名刺入を出して一枚拔いて渡した。(時代と經濟社理事島末哲男。)

牟田もやむを得ず名刺を出した。

「はゝあ、三葉商事か。」

記者は忽ち不機嫌の度を增して、

「いつたい君の所の常務からして怪しからん。」

突然語勢が強くなり、全く喧嘩面になつた。

「我輩が會見を申込むと、いつでも來ればあふと云ふから、こつちは、眞にうけて出かけて行く。すると如何だ。只今留守だ。今日は忙しい。やれ會議中だ。來客中だ。なんだかんだで埒があかん。小生意氣な祕書の小僧が手前が代理で承りますとぬかしやあがる。失敬ぢやあないか。生意氣だ。大に筆誅を加へてやらなければならんのだ。」

四海同胞感の盃をさす事はすつかり忘れ、かたきの片割れを見つけた憎惡に燃え上つた。

「それは無理ですよ。忙しい人間が、いちいち面會してゐたら、一日中仕事を見る暇はありやしない。」

身内の者が罵られてゐるやうな氣持で、ふだんはそれ程にも思つてゐない重役と共に、共同の敵に向ふやうな心持が湧いて來た。

「そんならはじめから、あはないと云つて斷ればいゝぢやあないか。こつちはあふと云ふからわざわざ出向くんだ。いやならいやと最初からさ。」

記者はその儘うたひ出しさうに聲を張あげた。

「しかし、どんな用件か知らないが、祕書役があつたら、それに用事を云へばいゝぢやありませんか。」

「冗談いふない。常務に用があるから行くんだ。あんな小僧を相手に話が出來るか。」

牟田はむつとして、口をきく氣がなくなつた。彼は冷めたくなつた德利の底の酒をしたんで飲んだ。

記者も相手の態度が少なからず癪に障つた。

「おい酒だ。」

「僕も。」

二人とも酒に鬱憤を晴らしてやらうと思つた。

「もうおよろしいんぢやないんですか。」

かみさんは先づ記者の方を思ひ止まらせようとした。

「いゝよ。もう一本だ。」

「ほんとにおよしになつた方が……」

「うるさい。」

叱りつけられて據所無く、かみさんは雙方に一本づゝあてがつた。二人ははつきりと敵意を感じながら、一人が酒をつぐと、一人も酌ぐ。一人が盃を口に運ぶと、一人も飲む。不快な空氣が醉を增した。

「呉越同舟ですよ、先生。」

記者は默つてゐるには堪へられなくなつて、活路を他に求めようとした。

「わつはつはつは。」

先生は全身を搖つて笑つた。

「小感情は水に流せ。酒がすべてを解決する。」
「さうだ。いさぎよく水に流さう。さ、うけてくれ。重役は氣に喰はんが、お互サラリイ・マン同志だ。フェア・プレイで行かう。」
何の事たかわからない事を云つて、記者は又牟田の鼻さきに盃を差しつけた。
「僕はこゝのうちの家憲を守り度い。てんでんに飲む事にしませう。」
「いかん、いつたんさした盃が引込められるか。是非とも飲んで貰ひ度いんだ。」
威丈高に叫ぶと、記者はいきなり立上つた。とたんに手許の徳利が倒れて、酒は卓上を走つて、向ふ側の牟田の膝の上に流れ落ちた。

一二

「おかみさん、勘定。」
牟田は形勢不穏と見て、素早く退却しようとした。
「待て。卑怯だ。この盃の解決のつかんうちは斷じて歸さん。」
「歸さないと云つても歸りますよ。」

牟田は、自分も醉つてはゐるが、まだしも相手よりは冷靜だといふ優越感で、錢を渡し、釣錢を受取つて、ゆつくり卓を離れた。

「逃げるのか、貴樣。生意氣だ。おもてへ出ろ。」

牟田は瞬間ぎよつとした。自分よりも先に、相手が出口を占領してしまつたのだ。

「さ、出て來い。さした盃をつつかへされては紳士の顏が立たん。決鬪だ。來い。」

足許も定まらず、醉つた身體の中心をとる事に努力しながら、空の德利を握りしめ、眞靑になつて立ちはだかつた。

大きないたを前にして、はち卷の角を立て、些細な事には動じないと云つた面構への亭主も、あわてゝ下駄をつつかけて、土間に下りた。

「よしとくんなさいよ。あの方は歸るつていふんだから歸したらいゝぢやないか。ね、お互に立派な方がさ、酒の上でどうしたからうしたと云はれちやあ恥だ。」

重たい口で、何かうまい事を云つてさばき度いと思ひながら、思ふに任せない態だつた。

「先生、どうしたらいゝんでせう。」

かみさんも泣聲になつて、客同志の身の上よりも、自分の亭主が側杖を喰つては大變だといふ

様子で救ひを求めた。
「ほつとけ、ほつとけ。」
先生は、あく迄も小事には拘泥しない主義を寧ろ賣物にして、平然と盃をあげた。
「さあ、三葉商事の下端社員、出て來い、重役の身替りだ。いさぎよく馬前で死ね。」
引止めようとする亭主を振拂つて、再び土間に侵入しようとする相手の勢ひに、牟田は危險を感じて逆襲しようとした。
「待て。」
鬪爭前一秒時、先生は大喝した。
「わしは止めんぞ。檢分してやる、男兒一度鬪はんと決心したら、あく迄もやれ。雙方とも卑怯な眞似はするな。」
怖ろしく芝居がかりで、づいと立つと、太い洋杖を突いて自分が先づおもてに出た。
「先生。」
「よろしい。まかせて置け。」
かみさんが心配して、ついて出るのを、大きな手を振つて押止めた。

「さ、廣場へ出ろ。雙方素手だ。得物は許さんぞ。」

猛り立つた記者もあつけにとられ、呆然として手を垂れた。その隙に、牟田は覺悟をきめて、先生の幅の廣いうしろについて燒土の原に出た。

「さ、此處だ。此處でやれ。一方がへたばる迄決して止めんぞ。」

先生は洋杖で大地を叩いて、力強く命令した。牟田も緊張した心持で、下腹に力を入れて待つた。

いゝ月夜だ。夜とはいひながら青い空に、煙のやうな光を漂はせ、夜毎に缺けて行く月が、冷やかに下界の馬鹿らしさを見下してゐた。何處かで野犬の遠吠がうわううわうと聞えた。

小屋の前にははち巻をしめた亭主と、かみさんの姿が、影繪のやうに見える。そつちから、燒跡の足場の惡さに一層ふらつく足を不必要に高くあげ、細い身體の記者が、あつちによろけこつちによろけながら、一歩々々大きくなつて近づいて來る。

牟田は鬪爭の愚かさと、さりとて逃げ出すわけにも行かない自分の立場を、はつきりと意識し、忌々しさに舌うちした。

一番いくか――さう思つて兩手の拳固に力を入れた時、既に一間とはへだたつてゐない敵手は

瓦か石か、何かにつまづいて大きくふらついたと思ふと、どつと前のめりにつんのめつた。

「どうした。」

先生が聲をかけたのをきつかけに、醉人はへどを吐きながら、冷たい土の上をのたうち廻つた。

一三

牟田の足は毎日のやうに、燒野原となつた銀座にたつた一軒の亞鉛(トタン)小屋に向つた。震災前から、妻は里の父親の老病をみとりに京都へ行つてゐるので、婆やと二人きりの寂しい家に歸り、あぢき無い食卓につく氣になれず、毎晩銀座をぶらついたあげく、手輕な晩飯を喰つてゐたが、地震は彼の散歩區域を、滅茶々々に破壞してしまつた。新橋から京橋迄の距離にすれば短い歩道を、毎日一度は歩かなければ氣が濟まないといふ人間の數は夥しかつた。何の目的もなく、人と人と人と人と、肩を觸れあひながらたゞ通り過ぎる、その無目的な、無駄な、出鱈目な銀座の散歩は、たしかに病氣に違ひ無かつた。自分自身患者の一人に外ならなかつた牟田は、地震で破壞され、火事で燒かれた後の銀座を見た時、寧ろ救濟されたやうな快感を覺えた。ざまあみろと嘲り度い心持さへあつた。その時彼は、天譴論者の愚かさを笑ひながら、自分も心持の上では、一脈相通

じるものを持つてゐる事を知つた。

だが、たとへ一時にしろ、銀座の亡びた事は寂しかつた。銀座は、銀座病の人々に取つて、我家の外の我家であり、東京の人間の共同の庭でもあつた。それが何時迄も燒土の原の儘では生活の一面に空隙が出來たに等しく、殊に夕方の心の寂しさはたとへるものがなかつた。人々よ、われらが銀座を建て直せ、一日も早く建て直せ、この災害をいゝ機會として、道路を擴げ、電車を追拂ひ、電柱を地下に葬り、堅牢にして美しい家を揃へ、並木を整へ、以前にまさる帝都の公園としろ、心をあはせて復興しろ――牟田はさういふ風に絶叫し度い心持をしつかり摑んだ。

その復興の芽生を、亞鉛小屋の飲屋に發見した。佛頂面をした亭主の、酒でやけ、酒でむくんだやうな面つきは、決して愛嬌のいゝものでは無かつた。年が年中豆絞の手拭ではち卷をしてゐるのなぞは、寧ろ氣障でもあつたが、愛嬌のないかはりに嘘も無く、そのはち卷を非難する客があると、赤い顏を一層赤くして羞しがつてゐる樣子に、存外人のよさがうかゞはれた。

おかみさんの方は亭主と違つて、口のきゝ方も、ものごしも角張らず、すべてまるみをもつたとりなしが、つれあひの無愛想をかばふやうに、かばふやうにと、心がけてゐるやうに見えた。あんまり亭主をかばひ過ぎるやうな樣子あひを見てとつて、何かにつけて冷やかす客も少なくな

かつた。
「親方、いざ戰爭に行くつて時はどんな氣持だつたい。此の世のおもひでにうんと酒でも飮んでやらうつていふ氣にはならなかつたかね。」
「酒も飮みましたねえ。だけど、あたし達はいきなり大阪へ連れて行かれちまつたんだが、愈々あしたは戰地へ行くつて時は、みんな松島に出かけましたよ。」
「親方も出かけたのかい。」
「出かけました。」
たゞさへ赤い顏を眞赤にしながら、兵隊のやうに勇ましく答へた。
「おかみさん、おやぢも松島へ突貫したさうだぜ。」
客は醉つて滑らかな脣をなめながら、からかひ面をつき出した。
「無理は御座いませんねえ、いくら御國の爲だからつて、命を捨てに行くんでござんすから。」
かみさんは、今眼の前で決死の心をさだめて出て行くのを見送るやうな、いとしらしい眼つきで、亭主の方をちらつと見た。
「いや、恐れ入りました。」

客は眞向から御面を打たれたやうな形で、脂肪の浮いた額を押へた。

きらびやかな飾窓を並べた商店街、着かざつた人間が渦を巻いてゐた銀座の頽廢的な風景の消滅した後に、簡單至極な小屋がけで、粉飾に乏しいおでんと、新鮮をほこるさしみで飲ませる家のあるじ夫婦が、互に信頼しあつてゐる情景は、又無く嬉しいものであつた。

一四

復興の魁は料理にありと書出したはち卷は、おでんとさしみで客を呼んだ。おでんとさしみで客を呼んだといふよりも、外に競爭者が無く、燒土の中にたゞ一軒たつてゐる意氣と珍しさで人を引きつけたのかもしれない。

月下に決闘を挑んだ記者は、次にあつた時はけろりとして牟田に握手を求め、醉が廻るにつれ、又しても地震は自然現象に過ぎないか、或はおごれる人間をひつぱたく目的を以て天のなせる行爲であるかを、はち卷のおやぢ、まるまる肥つたおかみさん、客の誰彼をつかまへて質問し、德利の數を重ねるに從つて顏色は靑ざめ、しつつこくあとねだりをし、亭主に拒まれ、かみさんにとめられながら、もう一本もう一本とせびり、見知らぬ客と見ると盃をさして置いて議論を吹か

け、前後忘却してはじめてやむのがおきまりだつた。

稲村さんは稲村さんで、毎日郊外から通つて來た。下町の大きな商店のあるじだつたのが、不運とだらしなさが祟つて失敗し、銀座裏で煙草店を開き、娘を會社の事務員にし、息子を役所の給仕にして暮す身の上になつてからも、自分は煙草の儲を酒にして飲み廻つてゐた酒精中毒た。

「いくらさがつても新宿ぢやあ飲めないよ。どうしても馴染のうちでなくちやあ、ほのぼのと醉つてくれないよ。」

きまつてさしみをあつらへ、それには殆んど箸をつけず、酒の色と香と味とをいち／＼心で讃へながら、少しもつれる口でいふのであつた。五十を越ていくつにもならないといふのに、多年の不謹愼で身體をこはし、一寸見には十歳位上に見え、不自然に小皺の寄つた顏は、どす黑く生氣を缺いてゐた。酒の氣の無い時は、いかにも人生に疲れ、一切の希望を失つた人の姿に見えるか、酒が身體にしみて來ると、皮膚の表面に脂肪が浮き、鈍い目の色も光りを加へ、脣は紅くいきいきして來る。さうなると無上に氣持がいゝのだが、その喜びを口には出さず、默つて一人で味はひながら、うつらうつら居睡をはじめるのである。直ぐ側で他の客が、高調子で喋べつても、議論しても頓着なく、たゞこゝちよく醉後の眠をむさぼるのであつた。

大須賀先生はいつもだん袋の洋服で、握太の洋杖(ステツキ)をつき、のつそりとやつて來る。相手構はず國事を談じ、國民精神の衰へを嘆き、近代青年の浮薄を罵り、モダン・ガアルの輕佻を嘲つて痛飮する。あらゆる點に於いて氣に入らない現代を罵倒する事が、先生にとつてはなくてならない酒の肴だつた。

牟田が最初におち合つた三人の外にも、次第に定連(ちやうれん)の顏が揃つた。地震前からの馴染が多く、銀座界隈の燒出され、丸の内邊の銀行會社員、亭主が買出しに行く魚河岸の問屋の連中――その多くが、長靴を穿き、泥まみれの洋服を着し、一種の震災風俗をつくつてゐた。

それは本來の銀座風景には極めて緣遠いものであつた。カフヱとバアと西洋料理と支那料理と活動寫眞と洋品店と吳服屋と貴金屬商と繪葉書屋と化粧品屋と藥屋と樂器屋を代表的の背景とし、頭髮の分け方、髭の刈り方、衣服の好み、パラソル、ハンド・バツグ、ステツキの末に至る迄、ひとつの銀座型を構成してゐたのが、今はあとなくかげを消して、土と埃と魚の鱗のこびりついた、どてらはんてん洋服が、列をつくつて歩くのだ。

その人々は各々の安逸をそれ相應にむさぼつてゐたのが、思ひもかけない天災に根こそぎもつて行かれたので、一種捨て鉢の氣持と、いつそ身輕になつて働き甲斐があるといふ心持といりま

じつた狀態にあつた。骨身を惜まず働いて、前にもまさる繁昌を招かうとする強氣と、どうせ働いたところで又地震にやられりやあ世話は無いさ、飲んでしまへといふ弱氣と、ちやんぽんにあらはれて、銀座にたつた一軒ののみやは、働く心持の活力素となり、安價な浪費の倶樂部となつた。

一五

うちが繁昌するにつれて、亭主は庖丁を振ひたくなつた。おでんが看板で、さしみで客を喜ばせたのが、酢の物、燒物、煮物と段々品數が殖え、鯛も海老も客の眼の前で好むがまゝに料られた。亞鉛と葦簾の雨のもる小屋ながら、喰はせるものは段々贅澤になつて行つた。

「最初はさしみを賣る丈でも、此際おごりの沙汰だと惡くいはれやしないかと思つたけれど、折角いゝ魚があるのに、使はないのももつたいないし、一日も早く震災前にかへらなくちやあならないんだから、こちとらあ何んでもうまい物を皆さんに差上るのが社會奉仕だと思つてね。」

口の重たい亭主も、いきのいゝ魚を大まな板の上にぴたりと置いて、じいつと見つめながら庖丁を手にする時、獲物を威服して滿足した猛禽の昂奮を彷彿させた。

「どうです、今日のさしみは。」

「うまいよ。」

「うまいでせう。うまい筈だ。全くいゝんだもの。」

亭主は自分の作品をほこる藝術家のやうに、はればつたくて表情のあらはれにくい顔ながら、嬉しさに眼を細くする。

「嬉しさうだねえ。」

「嬉しいね。お客さまがうまがつて下さる程嬉しい事はありませんや。」

「いゝ商賣だなあ、人にうまい物を喰はせて喜ばせ、そいつを見て自分も樂んでゐるんだから。」

「全くいゝ商賣ですよ。そのかはり折角こつちが一生懸命にやつても、まづいとか口にあはないとか云はれてごらんなさい、これ程辛い事もありませんぜ、お客様の口は正直だから。」

亭主はぽつりぽつりとぎれる鈍い話振で、時折自分の信念を語つた。

てんでんの商賣をはげむ事が國民の義務であるといふ此在鄕軍人の說は、簡單明瞭に強かつた。若しも世間の人がこぞつて、自分が現にやつてゐるやうに、バラックでも小屋がけでもいゝから、分相應な店を張つて、一生懸命に働けば、帝都の復興はまたゝくひまだと確信してゐた。彼は見

かけによらず器用なので、自分で小屋を建て、自分で造作をし、もともと大した資本はいらない飲屋の事だから、忽ち商賣になつたのである。おまけに現金商賣の強味で、客が來れば確實に錢が入るし、賣物は其の日仕入れて來ればすむし、近代商業の著しい特徴である大がかりな組織を必要としない丈苦も無く立直つた。彼が身にもつてゐるうちでも、體力と思ひきりが何よりのもとでゞ、しかも此のもとでは充分に效果を生んだ。

「親方はえらいよ。よく思ひ切つてはじめたね。流石に勳八等だ。軍人精神つてやつだね。」

さう云つておだてる客があると、

「なあにね、あたしやあ銀座の御世話になつてゐるんだから、復興の露拂ひ位つとめなくちやあ申譯がないや。金もありやあ智慧もある旦那方が、何故早く建直しにかゝらないのかと齒がゆくて爲方がないんですよ。」

亭主はむきになつて、銀座復興を促進しなければ駄目だといふ事を說いた。彼は自分が帝都復興の第一線の勇士である事を堅く信じてゐた。

だが、商賣が大きければ大きい程震災の打擊も大きく、多くの資本を必要とする大店程、建直しは困難の筈だ。十日たち二十日たつても、銀座は燒土の原の儘で、晝間のうちこそ見物かたが

たの人出があるが、日が暮ては砂漠の景色となり、たつた一軒の飲屋の葦簾を透してもれる洋燈のあかりの外に、あかるいものは月ばかりだ。
もう一本もう一本とあとねだりをした長尻の客が、足もとあやふく歸つてしまふと、夫婦は全くのさしむかひで、亭主はおしきせの德利を樂み、飯をすませ、亭主は女房に、女房は亭主に、御馳走さまと挨拶して、疊一枚の上に二人で寢た。

一六

九月の末に近い休日に、牟田は郊外の山岸をたづねた。震災後、たつた一度銀座で出あつたきりで、どう暮してゐるのか氣にもなり、又何の被害も受けなかつた自分が、ひどい打擊を受けた友達を見舞ひもしないといふ非難を自分自身に感じながら、省線の驛を出た。
殘暑のきびしい年で、歩くと汗になつた。踏切を越え、白い埃の舞ひ上る街道を、度々道をきゝながら行くと、一軒の煙草屋から、うまさうに烟を吹きながら、稻村さんが出て來た。
「おゝ。」
帽子をとつて行過ぎる牟田にやつと氣がついて、むかふも挨拶した。

「どちらへ。」
さう云つて見たけれど、稲村さんは會話を豫期してゐなかつたから、とぼんとした後姿を見せて、歩き出してゐた。
山岸の家は其處から近かつた。かなめの生垣のまばらに透いて見える縁側で、編物をしてゐる山岸の妻を見出した。
「あら、牟田さんぢやありませんか。」
聲をかけられてびつくりした山岸の妻は、向ふからは木の葉のかげになつてよく見えない往來にきゝかへした。
「あなた、牟田さんですよ。」
たしかめて置いて、良人を呼んだ。
呼ばれた山岸は、裏手の方から泥だらけの姿であらはれた。
「こりやあ珍客だ。よくわかつたね。今、畑を作らうと思つてね、土を馴らしてゐたんだ。まあこつちに入つてくれたまへ。」
牟田は靴を脱ぐ面倒を避けて、玄關の横の木戸から庭先へ廻つた。

「まあ、あなたさまも御無事で……」

昔風の下町の内儀を思はせる年とつた母親も奥から出て來て、忽ち地震の日の話が繰返された。

「こんな不便なところで、こんなちつぽけなうちでは御座いますけれど、いつそ氣樂でいゝなどと申しましてね。」

「それに子供達の爲には、かういふとこがかへつていゝのではないかと思ひますし、あるじも、もう銀座は昔話だ、夢になつたとあきらめてゐるもんですから……」

東京育ちの人のあきらめよさは驚くべきものがあつた。つい此間迄、銀座のあきんどである事をほこりとし、銀座以外の土地を内心輕蔑してゐた人達が、天命とあきらめ切つて早くも郊外住居におちつかうとするのは、くよくよ愚痴を聞かされるよりはましだが、あんまり張合ひが無さ過ぎて、牟田は相槌も打てなかつた。

「それで畑を作り、松杉を植ゑようといふのか。」

牟田は山岸をかへりみて笑つた。

「僕は君達とは違ふ考へを持つてゐる。此間も云つた通り、銀座の回復は存外早い。今度こそは以前にもまして立派な銀座になりかはる、地震で倒れず、火事で燒けない銀座が生れると思つて

ゐる。だから一日も早く君も銀座に歸つて、昔にまさる贅澤屋の店を張る事を希望するんだ。」
「そりやあ局外者の無責任な希望だ。あれ丈の資本を煙にしてしまつて、さう安々とたて直るものぢやあないよ。現に銀座は未だ瓦と灰の山で、人間一疋住んでゐやあしないぢやあないか。」
山岸は土いぢりをした後の晴々した氣持で、無算當な友達の言葉をきゝ流さうとした。
「ところが、人間は住んでゐるぜ。しかも、此間君と逢つたらう、あの日に僕は發見したんだ。」
「へえ、何處にそんな家があつた。」
「はち卷のおやぢのゐるうちさ。向ふでは君を知つてると云つてた。」
「ふうん、あいつやつてるかい、あのむつゝりした、口をきかない、おつそろしく愛嬌の無い……」
山岸はたゝみかけていひながら、眼の前に豆絞の手拭ではち卷をした亭主を想ひ描いて、多少の感動を顏にあらはした。

一七

「あいつは強情な奴でね、戰爭に行つて人一倍頑張つて、勳章を貰つたのが何より自慢なんだが、

あの勲章も燒いちまつたらう。」
「ところがその勲章と勲八等の賞狀丈は持つて出たんだ。バラツクながら神棚と、賞狀の額はちやんと飾つてある。あゝいふ信仰は單純だが強い。ほかの人も自分同樣店を張れば、忽ち銀座は復興すると信じてゐるやうだ。」
「そりやあ、あゝいふ商賣はたいしたもとでもかゝらないんだから、たてるも、つぶすも話は早いさ。それを手本にして、外の商賣をたて直さうといふのは書生論だ。第一、今度の地震は吾々に、根底から生活をたて直さなければならない事を教へた。もう昨日迄の銀座なんてものは、凡そ無意味なものだとわかつたよ。」
「だから原始生活に還れといふのか。自ら耕し、自ら喰はうといふのか。」
「それが出來れば何よりしあはせさ。」
牟田の口ぶりにかすかながら嘲笑を感じて、山岸は一層依怙地になつた。
いくら石を積み、煉瓦を積んでも、この地震國では枕を高く眠る事も出來ない。いくら資本を集め、手廣い商賣を始めても、もう一度地震が來れば素寒貧になつてしまふ。殊に平生おごりの限りを盡し、贅澤を云つてた人間のいざとなつた場合のみじめさは、今度といふ今度はつきりわ

かつた。ぺらぺらした着物はたとへ燒け殘つても、震災後の東京では着て歩く事も出來ない。衣は暖をとるに充分ならば足り、食は飢ざれば足り、住は雨露をしのげば足る――この心がけを失はなければ、人間はあくせくしないでも安らかに暮せる。見榮と、世間體と、虛飾と、欺瞞の象徵である銀座なんか、この非常時に何等の役に立たない。誰もが要求しない廢都に等しい。そんなものが復活するわけは無いと、山岸は側で聽いて居る妻や母が心配する程昂奮して喋つた。

―君はさういふけれど、今度の地震でひどくやられたのは、關東だけだぜ。箱根から向ふは何ともないのだ。東京は日本の中心だらう。しかし日本の一小部分に過ぎない。それが半分位燒けたからつて、國民全體の生活に、精神的にも物質的にも、革命的な影響を與へるわけが無いぢやあないか。今は未だ井戸に毒を入れる奴があるとか、品川沖に海賊がゐるとか、銀座に追剝が出るとか云つて騷いでゐるけれど、人心が安定し、金融機關が回復して來れば、忽ち先を爭つて元の商賣を始めるに違ひ無い。そして、銀座は銀座の面目にかへり、本所深川は本所深川本來の活動をやり出すよ。たつた一度の地震位で、根こそぎ打倒されてしまふ程近代都市は脆弱では無いさ。―

半田もまた相手を肯定させないでは承知出來ない氣持で、自說を繰返した。

「わかつた、わかつた。たぶん君のいふ通り、いつかは復興の時が來るかも知れない。しかし、それは明日や明後日の事ではないよ。うつかりすると、僕達の時代の事では無いかもしれないのだ。ましてや、はち巻たつた一軒が商賣を始めたからつて、さう直ぐ家並が揃ふ譯は無いよ。」

山岸は牟田の甘さを笑つて、話を打切らうとした。

「しかしねえ、かういふ時は誰か一人先頭に立つと、存外多勢がくつゝいて馳出すものだぜ。どうだい、兎に角銀座へ出かけて見ようぢやあないか。ねえ、山岸君を連れ出しても構はないでしよ。」

「えゝ、えゝ、構ひませんとも。」

「折角來て下すつても、この邊ではどうにも爲樣がありませんから……」

細君も母親も調子よくうけたので、あまり氣の進まない樣子の山岸も、強ては反對もしずに泥だらけの手を洗ひに行つた。

「牟田さん、ほんとに銀座はいぜんのやうになるんでございませうか。」

息子の姿が裏手へ消えると、母親は聲をひそめてきいた。二度と其處には歸れないとあきらめてゐたのが、かすかながらも希望を持つた樣子で、膝を進めたのである。

一八

氣乘のしない山岸と、氣乘のしない相手を引出した、心に張合のある牟田は間も無く銀座へあらはれた。傾きかけた日の色に、見る限りの燒土はあかあかと照かへし、たつた一つ鐵骨丈組上つた百貨店の骸骨が、澄みわたつた秋めく空の浮雲を色どりにして、高く聳えてゐるばかりだ。いづれは燒出されに違ひない異樣な風態の男女が、未練と好奇心に氣疲れを感じながら、ほつつき步き、步き疲れて、暮れ切らないうちに我家へ急ぐ時分だつた。

「これだ。まるで埋立地ぢやあないか。知らない奴をつれて來て見給へ、こゝが東京で一番繁昌の銀座の跡だと云つたつてほんとにしつこ無いぜ。」

それ見ろといはぬばかりに、山岸は遠く我家のあつた方角を見渡しながら、他人と自分とをあはせて嘲る調子だつた。

「さうだ。こゝ迄根本的に改造の素地を作る事は人間業では出來ないよ。埋立地同樣にしてくれたのが天の惠みだ。僕は先づ大通をもとの倍に擴げ、まん中に芝生と並木を作る事を提議し度い。」

牟田は費用と權利と傳統と因習とを無視して、美觀を第一とする大街路を想望してゐるのであつた。

「勝手に空想するさ、君は震災の悲慘事を深刻には經驗しないしあはせ者なんだから。先づ一種の特權階級だね。」

又しても氣まづい議論になりさうだつたが、既に二人は目的のはち卷の近く迄來てゐた。

「そこだよ、その石や煉瓦の殘骸の間を入つて行くんだ。」

「なんだい、さしみありますとは。」

いつぞや大須賀先生が大書した貼紙は、雨と風に吹き飛んでしまつたが、今は亭主が自分で書いたのが、積み上げた石に貼つけてあつた。

はち卷開店以來人々の踏みかためた道は、自然に一定の幅をとつて眞直ぐに導いてゆく。

「はゝあ、これが御贔屓の、銀座復興局か。」

山岸は牟田に對する反感を、目の前の亜鉛（トタン）と葦簾（よしず）の小屋に吐き出した。

「いらつしやいまし。」

かみさんの柔かい、まるみのある聲が迎へてくれた。

「お、山岸さんぢやありませんか。」

いつものやうに、大まないたを控へて、はち卷の角を立てた亭主も、なつかしさうに呼びかけた。

食卓には空になつた德利が並び、稻村さんが片隅の羽目板にもたれかゝつて眠つてゐた。

「ひどい目にあつたねえ。」

「お互さまで。でも御無事で結構でした。」

「お前さんとこで商賣をはじめた、銀座復興の魁だつて、この牟田さんが無闇に煽り立てるものだから、やつて來たんだが、親方は相變らず元氣だねえ。こんなさなかでもお客さまはあるかい。」

「おかげさまで、來て下さる方があるもんだから、どうにか商賣にはなつてます。」

山岸は、牟田と話をしてゐる時は書生流にやり、他の人には商人風の口のきゝ方をするならはしだつた。

「お銚子でございますか。」

かみさんはあたりまへの事にして、湯のたぎる銅壺に德利を入れながら、念の爲にきいた。牟田は默つてうなづいたが、山岸はあわてゝ取消した。

「あたしは頂かない。この際お酒でもなからうぢやあないか。」
「あがりませんのですか。」
かみさんは機嫌の悪い山岸の様子に壓されて、思はず德利を銅壺から取出した。
「いゝよ、僕が飲むから。」
牟田は笑つて、山岸の取消におつかぶせた。
「山岸君は飲まなくても僕は飲む。山岸君は銀座は全く亡びてしまつて、二度と昔にはかへらないといふし、僕は前よりも立派になるといふ。山岸君は、すつかり銀座を見捨てゝしまつて、郊外で百姓の眞似をしたいといふし、僕は山岸君に一日も早く銀座にかへれといふ。何から何迄反對なんだ。」

一九

牟田にとつては山岸の言葉が、態度が、一々理由の無い片意地に外ならなかつた。地震でひどいめにあつたからといつて、酒を飲まない、煙草を吸はないとは何の事だ、そんな消極的な禁慾生活で、どうして此の危機をきりぬける事が出來るものか、なんでも不景氣な眞似をするのがい

ゝのなら、素裸で歩け、煮炊をした物を喰ふな、四ッん這ひになつて歩け――酒が腸に沁ると、相手の身の構へが徹頭徹尾馬鹿々々しく、つい毒口になるのであつた。
「さういふ引込み思案ばかりしてゐてはよくないから、君んとこの景色を見せて、活を入れてやらうと思つたのさ。」
「ほんとでさ、うちみたいなものが、斯うやつて力んでゐるのも、つまりは社會奉仕なんだから、山岸さんとこみたいな大どこが出て來てくれなくちやあ噓ですよ。」
亭主も、たつた一軒さきがけて商賣を始めた得意の裏に、いつ迄も一軒丈ではどうなるのか心細く、時には、この儘銀座は腐つてしまふのでは無いか、自分のところも引ずられて立腐れになるのではないだらうかと考へる事もなくはないのだつたが、折角銀座を背負つた氣で鉢卷をしめ直した自分の意氣を、このまゝ挫けさせてはすまない氣の方が強かつた。だから、銀座の人の誰彼に逢ふ度毎に、同じ言葉を繰返してゐた。殊に、彼にとつては全く新しい「社會奉仕」といふ流行語は、御國の爲、天子樣の爲に命を捨てる氣で戰地へ行き、拔群の働きを賞された在鄕軍人の心にぴつたりと吸ひついた。儲ける爲に働くのだと考へるよりも、社會の爲に働くのだと考へる方が樂かつた。社會奉仕といふ善事をするからこそ、陽報があつて儲かるのだと感じてゐた。

「全く社會奉仕なんだから……」

亭主は、好きな言葉をもう一度云つてみた。

分厚に切つた蒟蒻、燒豆腐、雁もどきの山盛になつた皿を前にして、蛸の脚をくはへてゐた山岸は、傷口に觸られたやうな不快を色にあらはした。

「社會奉仕か。あたしみたいなぐうたらには、そいつが出來ないんだよ。ひとさまの御爲に働くなんて感心な心がけは、思ひも及ばないんだ。第一、自分自身どうしたら喰つて行けるか、見當がつかないで弱つてゐるんだから。」

「いえね、そんなわけぢやあないけどね、つまりなんだ、ひとさまの爲に働けば、こつちにも惡い事はあるまいと思ふんだけれど、そんな理窟ぢやないでせうか。」

けしきばんだ相手の樣子に、亭主は正直に困つた顏つきで、牟田の方に救ひを求めた。

「ねえ、牟田さん。あたし達には理窟はわからないけどさ、ものゝ道理がそんなもんぢやあないでせうか。」

「いくら云つても駄目だよ。山岸君は銀座は到底むかしのやうにはならないと云ふんだから。」

「そんなもんかしら。」

亭主は憮然として腕を組み、土間で働いてゐるかみさんと、互に顏を見合せた。

「うちに來るお客さんにも伺つてみるんだけれど、大須賀先生でも島末さんでも、銀座はきつともと通り復興するつていふんですがねえ。」

「ほんとに皆さん、さう仰しやるわねえ。」

かみさんは數人の客の言葉を百萬の味方のやうに想ひ出した。

「大須賀先生？　あのヤットウの先生かい。島末さんてえのは誰だい。」

そんな人間のいふ事があてになるものかと云ふやうに、山岸はきゝかへした。

「時代と經濟とかいふ新聞だか雜誌だかの先生さ。あの先生には決鬪を申込まれて、あやふく叩きのめされさうになつたよ。幸ひにして、酒はこつちの味方をして、彼の先生の兩足を取つてつんのめらせてくれたが。」

牟田は德利を並べて一人上機嫌だつた。

「あゝ、あゝいふのんだくれは駄目た。あゝいふ連中といふものは……」

山岸はふと傍で鼾をかいてゐる稻村さんを顧みて苦笑した。

二〇

「駄目だよ、のんだくれは。あの連中は飲みさへすればいゝのさ。いかにも世の中を背負つて立つてゐるやうな口はきくが、今日の社會にとつては邪魔者さ、邪魔でなくてなんだ。銀座の人ごみを、太い洋杖を振廻して歩いたり、カフェで詩吟や劍舞をやつて見せる老大人に何が出來る。經濟新聞と名告つて、脅迫がましい態度で廣告をとる以外に何の藝も無い新聞が、此世の中の邪魔でなくてなんだ。あの新聞の先生にとつては、銀座は第一のおとくいさまだ。銀座が復興しなければ、うまい酒にもありつけないから、復興々々とはやし立てはするだらうさ。しかし、あの連中の力で何か出來る。あんな舊時代の、時勢遲れの、ごくつぶしが……」

不意に山岸は口をつぐんで、一層不快な顏つきに變つた。

暗くなりかけたおもてから、のつそり入つて來たのは噂の中の大須賀先生で、その大兵肥滿の後には、ロイド眼鏡の經濟新聞記者がつきしたがつてゐた。

「いらつしやいまし。」

「おいでなさい。」

昴奮した山岸の毒舌に、自分達が叱られてゐる氣持で、すつかりてれてゐた夫婦は、救はれた喜びで迎へた。

「どうだ、儲かるか。」

先生はどつかり腰を下すと、先客には頓着無く、先づ亭主を見上げて太い息をついた。

「おかげさまでどうにかやつちやあゐますけれど、何分近所が此のていたらくだから、夜來て下さる方が少ないんですよ。」

「さう、いくら貴公が頑張つても、世間の奴等が意氣地なしで、ついて來なくてはどうにもならんからなあ。」

「われ笛吹けど君踊らずか。」

記者が引取つて云つた。

先生は初めて聞いた言葉の意味を捉へ兼る様子だつたが、やつとさとつて、

「貴公うまい事をいふ。われ笛吹けどか、わつはつはつはつは。」

全身を揺つて笑つたが、笑ひ止むとけろりとして、目の前の盃を取上げ、たてつゞけに飲んだ。

「だがなう、亭主。いかに世間の奴等が腑抜けでも、いつ迄も此の儘では居られんよ。やがて貴

公の勇氣に倣つて、帝都復興の大業に力をいたすに違ひ無いぞ。いやしくも日本人だ。上御一人の御いでになる東京を、この儘に放つて置かれるか。」
「そりやあ先生のいふ通りだ。銀座は東京の中心だ。利益を生む土地が何時迄も野原であるわけが無い。先生の精神論ももとより深い意味があるが商賣人は慾得づくで銀座をたて直すよ。」
それぞれ自說を主張する、酒客の聲は忽ち高くなつた。
「あたし達には理窟はわかんないけど、人間氣を揃へて、やらうと思つて、出來ない事は無い筈ですからね。いくさに行つて突貫する時みたいに、一致してやりやあわけなしだと思ふんだ。」
「偉い。その意氣た。それぢやよ。」
先生はすつかり嬉しくなつて大きな拳固で卓を叩き、又たてつゞけに飮んだ。
亭主はまつかうからほめられて、得意と羞しさのどつちに行つていゝのかわからなくなり、わざとむつとした顏つきで、はちまきの角を立てた顏に橫皺を刻み、太い腕を組んで力みかへつた。
「僕、さきに失敬する。」
突然山岸は席を立つた。
「どうして。まだ早いぢやあないか。」

「遠方だから、失敬する。」
牟田のとめるのを、何の躊躇も無く振切つた。
「おい待つてくれ、いつしよに歸らう。」
「君はいゝさ。吾々燒出されとは違ふんだ。大に復興を論じながら飮み給へ。」
苦り切つた言葉を殘して、夕暮の迫る燒野原に、さつさと出て行つてしまつた。

二一

「なんだ、あいつは。生意氣な。」
記者は憤然として立上つた。
「僕の友達です。もう行つてしまつたんだから、かんにんして下さい。」
牟田は手を振つてなだめ、記者を坐らせた。
「君の友達か。友達なら忠告してやれ。」
「おい、もう決鬪は御免かうむるぞ。わつはつはつはつは。」
先生は兵隊靴のやうに分厚な手で記者の肩を叩いた。

一可哀さうに、地震でひどいめにあつたものだから、銀座は亡びてしまつた、二度と昔にはかへらないと思ひ込んで、すつかりヒステリツクになつてゐるんですよ。」

忌々しさをかくし切れず、闘志を眼鏡の奥に光らせてゐる記者にむかつて、牟田はいひわけの心持で云つた。

「馬鹿な。男のヒステリイと來たひにやあ、しゆんはづれの鮹みたいなもんだ。喰へたものぢやあ無いぜ。」

「しゆんはづれの鮹か、貴公面白い事をいふ。わつはつはつは。」

先生は一人悦に入つて、しきりに盃を重ねた。

「面白くありませんよ。なんでえ、大に復興を論じながら飲み給へたあ。大きな御世話ぢやあないか、何をいつてやあがんでえ。」

記者は且罵り、且飲むうちに額に青い筋が際立つて來た。

「あれも矢張三葉商事の社員さんですかね。」

執念深く拘つて、とめ度がなくなつた。

「いゝえ、僕の竹馬の友です。」

「竹馬の友だ。竹馬の友ならもうちつとつきあひつてものを教へてやつたらいゝだらう。あいつ酒も飲めないくせにしやあがつて……」

牟田は、むつとして答へなかつた。面と向つてこそ山岸とも論じ爭ふが、他人に友達を罵られるのは不愉快だつた。

「あの方御酒は隨分召上つたんですよ。」

形勢非なりと見てとつて、亭主が話をうけついだ。

「なんだと、親方も知つてるのか。」

「山徳さんの旦那ですよ。もうせん、ちよいちよいうちにも見えた方なんです。」

「山徳。あのぜいたくやの。」

「え、銀座ぢやあ古いもんだ。先代つて方は此の土地の草分の一人でさあ。あの方なんぞが、さきがけになつて復興してくれなくちやあ、爲様が無いんだがなあ。」

亭主も、さつき山岸が、銀座滅亡說を唱へたのに對して、矢張反感をいだいてゐて、自然言葉に色が着いた。

「ほんとにどうなるんでござんせうねえ、うちぢやあ大丈夫復興するつて云ふんですけれど、い

まだにどちらでも普請を始めないんで、心細くて爲様がないんですよ。」
洋燈に燐寸を擦つたかみさんの顔には、心細さがかくさずあらはれた。
「すべて、みんなの心がけ次第だ。陽氣發する處金石亦透る、精神一到何事か成らざらん。」
先生は自分の胸を叩いて、力強く魂の存在を明確に示した。その場はしんとして、ぐつすり寝込んだ稲村さんの鼾が、かすかに音律を刻んだ。
殘暑の長い九月だが、夜は流石にひいやりと、海から來る風が通つて、暗いあかりはひとしきり明滅し、やがてをさまつて、人々の醉顔を照らした。
「あら、なんでせう。」
突然、かみさんは葦簾の外の闇を透しておびえた聲をたてた。
「何か來るわよ。提灯が、一つ二つ三つ。」
追剝が出る、井戸に毒藥を投込む一群がある、爆彈を以て燒殘りの區域を破壞しようとする一味があると、流言蜚語の盛んな折柄だ。みんなの手から盃が下に置かれ、緊張した心持が狹い小屋の中を領した。

二二

みんなの視線の集まつた遠くから、言葉を成さない人聲が聞え、凸凹の燒野原を、三つの提灯は高くなり低くなり、こつちを目がけて近づいて來た。

「今晚は。」

「こんばんは。」

違ふ聲が同じ挨拶をしながら葦簾の外に來て立つた。

「なんだい。光井さんぢやあないか。」

亭主が聲をかけるより先に、三人は提灯を持つたまゝ土間に入つて來た。

「まあ、みなさんお揃ひで……」

かみさんも安心して、嬉しさうに迎へた。

「ごめん下さい。」

先に立つた一人は、先客に挨拶して、

「どうも偉いよ親方は。かうやつてはじめて居るんだもの。驚きましたよ。よくやる氣になつた

ねえ。」

あるじ夫婦にむかつて云ふばかりで無く、客のみんなにも聞いて貰ひたさうに喋つた。でつぷり肥つた、頭の地の薄く禿た、年配の人が、

「いえね、お宅でやつてゐなさると聞いたには聞いたんだが、まさかこの燒跡で商賣になるものぢやあない、いくら親方が物好きだつて、人つ子一人住んでゐない原つぱで、儲かるも儲からないもあるもんぢやあないと、實は半信半疑でやつて來たのさ。驚いた。全く驚いたよ。」

「わたしもね、つい二三日前大通を通つたんだけれど、氣がつきませんでしたよ。誰がまた、今時こんな所で商賣をしてる人間があらうと思ふものかね。」

「いゝえ、うちだつて、多勢お客さまがあらうとは思ひませんでしたよ。だけどね、この際誰かゞ先だちになつて仕事を始めなけりやあ、復興つて事は出來ないわけだから、全く社會奉仕のつもりではじめたんでさ。ところが、ありがたいもんですねえ、かうやつて皆さんは來て下さる、晝間は河岸の連中が芝浦の歸りに寄つてくれまさあ。」

亭主は訥々としたロで、一生懸命になり、開店から今日に及ぶ話をした。

「偉いですよ。實際このおやぢ感心ですよ。」

話好きの記者は默つて人のいふ事を聞いてゐる性分で無いから、忽ち自分の方に話を引取つてしまつた。

「どうです、諸君、かけませんか。讓りあへばどうにかみんなをさまるでせう。もしもし、稻村さん、一寸起きて下さい。もう少しそつちへ寄つてくれないと困るんだ。」

いきなり手荒くゆり起した。起された稻村さんは、充血した眼を薄くあけたが、席を讓るより先に、冷くなつた盃に手を持つて行つた。

「さあ、おかけ。」

先生はづつしりと幅をとつて身動きもしなかつたが、たつた一言で新來の三人の腰を下させた。

「お邪魔さまで。」

「窮屈でせう。」

あいそのいゝ會釋をして、三人は割込んだ。

「お酒つけませうか。」

「頂きませう。」

どれもこれも燒出されの、肌寒い姿をしてゐたが、ひとかどの家のあるじと見えて、行儀よく

盃を取上げた。

「大將、實はね、今日みなさんと御相談したんだが、これで彼の日からざつと一月はたつ。吾々としても、何時迄もこの儘ではゐられない。一體銀座つてものが、この先どうなるのか誰にもわからないが、さりとて默つてゐちやあ御互御飯も頂けなくなる勘定だから、みんな氣を揃へて、せめておもて通りの店だけでも軒を並べて見せようぢやあないか、やつてみていけなかつたら、その時はその時だ、どうせ拾つた命だから、失敗したら首でもくゝらうとね、これが冗談でなく大眞面目さ。」

光井さんと呼ばれるのが一番の口きゝらしく、話を切つた。みんなは妙に寂しい心持で聽いてゐた。

二三

「そこで今日の相談では、京橋から新橋迄の兩側のあきんどは、遲くともこの月末までに、バラツクだらうが葦簾張だらうが、兎に角家の格好をしたものを建てよう。それが立ち並んだところで、復興記念賣出つてのをやらうぢやないかと、まあ斯ういつたところ迄話が進んだのだが、ど

んなものでせう。」

「そりやあ、さういかなくちやあ嘘でさ。あたしどもみたいなうちでも、やつてやれない事はないんだから、おもて通のお店が愚圖々々してる事はありませんよ。」

亭主がいゝ機嫌で相槌を打つので、片方も張合のある調子でつゞけた。

「それには、てんでんばらばらでは何彼につけて不便だし、纏まる話もまとまらないに違ひ無いから、こゝで一つの會をつくつて、役所向の事は誰と誰、會計は誰、宣傳は誰と役を振つて、みんながお互の爲に力を惜まずやらなくてはいけないと思ふんだ。」

「さうですとも。みんなが一兵卒になつた氣持でなくて、何が出來るもんか。」

「そこで、吾々の考へでは、走り使ひは一切引受るが、會長とか副會長つてところは、丸八さん、資生堂さん、山德さんといつたやうな、古い、由緒のある方々に出て貰つて、銀座復興會といふ名前でもつけようかと云ふのだが……」

「なに、山德さんですつて。惜い事をしたなあ、つい今しがた迄うちにゐらつしやつたのに。」

「山岸さんゐたんですか。そいつはしまつた。うまくつかまへれば、わざわざ出向かなくても濟んだんだ。」

「實はね、善は急げだから、明日はてわけして、重だつたところをおたづねしようと云つてゐたんですよ。」

一番若いのも、ともども殘念がつた。

「まあいゝや、明日行つて來よう、荻窪はどの邊だか知らないかい。」

「うちぢやあ知らないけど、こちらは山岸さんの御友達なんです。」

亭主は牟田の方を態度で指した。

「それはまあ。」

光井さんはあらためておじぎをした。

「山岸さんの先代は、銀座には一方ならない功勞のあつた方でしたから、今の御主人はまだ若いけれど、今度のやうな場合には矢張一役持つて頂き度いと思ひましてね……」

「あいつは駄目だよ、あいつは。」

突然、記者が大きな聲で叫んだ。いつの間にか又居睡をはじめた稻村さん以外の者は、びつくりして、病的に青ざめた記者の顏を見守つた。

「あいつはね、この先生卽ち三葉商事株式會社員牟田なにがしの竹馬の友ださうだが、なつちや

あゐません。いかに先代が銀座の草分だらうが、當代は青瓢簞の意氣地なしだ。うらなりだよ。なんだい、銀座は滅亡したといふのか、復興しないといふのか。諸君、そんな奴を相手にする事はありませんぜ。第一、地震でうちがつぶれたからつて、禁酒するとは何事です。そんなけちな根性で何が出來る。君達が相手にするといつても我輩が許さん。斷じて許さん。」

途中ですつくと立上つて、拳骨を振つて怒號した。

「もうえゝ、もうえゝ。貴公の論理は極めて明快だ。酒を飲まん奴は意氣地なしで、意氣地なしはともに語るに足らず、卽ち斷じてつきあはんと云ふのだらう。異議なし、異議なし。」

「いかんよ先生は。我輩の大演說を阻止する事はないでせう。議長橫暴だ。」

苦手の先生に手首をつかまれ、澁々腰を下した記者は、不平さうに呟いた。

あつけにとられてゐた銀座復興會の發起人達は、身の安全を氣遣ふ樣子で、俄に盃をもてあましはじめたが、互に目顏でうなづきあつて、やがて一齊に立上つた。

「ではね、いづれ又御相談に伺ひます。實際親方の發奮を見ては、吾々も默つてはゐられませんよ。」

口々に亭主の勇氣をほめ、一度消した提灯に又灯を入れて、手際よく引上げて行つた。

二四

月がかはると、銀座復興會の活動が始まつた。倒壞家屋の殘骸は、東京市と會との協力で、一日々々と取除けられて行つた。長い間、疲れた足を引擦つて通る人の靴と下駄の音の外には聞えなかつた銀座に、石や煉瓦を打つ鐵槌の音、土砂を運ぶトラックや馬力の音、人夫のかけ聲が互に響きあひ、めつきり秋めいた高い空に勇ましく流れた。昨日迄は崩れ、燒けた家屋のやくざな殘物がうづ高かつた場所に、今日は木材、石材、ブリツキが山と積まれた。

けれども、銀座第一次の復興は、牟田が想像したやうな計畫的なものでは無かつた。すぐれた土木、建築の技師と藝術家との協力によつて、便利と美觀とを兼備へた設計をたて、道路は廣く、規則正しく、家屋は耐久不燃質の材料を以て構成され、再び地震が來ようとも、びくともしないものが立並ぶ壯觀を夢想したのに、これは全く一時しのぎの假普請で、風にも吹飛ばされさうなものであつた。それでも、たとへ安つぽい、見かけ倒しのバラックとはいへ、建設の勞働には新鮮感が溢れてゐた。

牟田が、力のみちた景色を見ながら、はち卷の縁臺に腰かけて一人で飮んでゐる時、亭主は女

房と肩を並べ、葦簾の外の日あたりで、感慨深さうに話してゐた。
「どうだい、普請場つてものはいゝ氣持のもんだな。これで一軒々々出來上つて、づらりと並んでみろ、景氣が出るぜ。」
「それでもみんなバラックだから、先時分に比べればしんじやくでせうね。」
「贅澤いふない。この際の事ぢやあねえか。」
「さうねえ、さういへば、他所が出來上つたら、うちが一番しんじやくになつちやふわねえ。」
「馬鹿いふない。うちだつて今に立派になつて見せらあ。」
「ほんと、何時建てんの。」
「他所の假普請が出來上つたら、うちぢやあ本普請にとりかゝるんだ。」
「だつてさ、家つてものは大家さんが建てるんでしよ。こつちでばかり威張つたつて、大家さんがうんと云はなければ駄目ぢやありませんか。」
「心配するなよ。大家が素直に建てればよし、いやだといふなら俺が建てゝやらあ。」
「でも隨分お金がかゝるんでしよ。あんた、うちにお金あるの。」
「あるもんかい。」

「ぢやあ、駄目ぢやありませんか。」

「うるせえなあ、借金すりやあ濟むぢやあねえか。」

牟田は口に含んだ酒を吹出しさうになつた。なんといふ簡單明瞭な生活だらう。くつたくも無く、疑惑も無く、自分の商賣を信じ切つてゐて、微塵迷ひがなかつた。

「あらいやな雲が出て來たわ。」

しばらくして、又かみさんの聲が聞えた。

「なんだい、雷が鳴つてやがら。」

亭主にぴつたりかみさんが寄添つて、土間に戻つて來た。

日がかげつて、又照り、又かげつたと思ふと、ばら／＼亜鉛屋根を打つて雨が來た。ざあつと音高く、大地を打ち、しぶきをあげた。

「ひどい雨だなあ。」

牟田は思はず立上つて、夕立の景色に見入つた。遠くは煙幕のやうにかすみ、近くは海のやうに波立ち、たつた今迄働いてゐた人間はづぶ濡になつて、蟲けらのやうに逃げ散つた。

その中に、たつた一人、たしかに此方へ向いて馳けて來る男がある。物凄い豪雨に身をもつて

ぶつかるかたちで、頭から上着をかぶり、今にも前のめりにつんのめりさうな格好で、かけて來た。

「山岸だ。」

口に出して名を呼びさうになつた時、雷嫌ひの友達の青ざめた顔は、直ぐ目の前にあつた。彼は、獺のやうに水をはねかしいきなり緣臺に倒れ込んだ。全身から瀧をしたゝらせ、たゞさへ雨漏に難澁してゐるはち卷の土間は、乾いた土を殘さず、水になつた。

二五

「どうした、いつぱい飲まないか。」

いつ迄も呼吸を切つてゐる山岸に、茶碗の酒をつきつけると、思はずしらず手を出したが、鼻のさき迄持つて行つて下に置いた。

「おかみさん、御湯を下さいな。白湯の方がいゝ。」

咽喉を鳴らして飲み干た。やつと人心地のついた顔をあげて、

「ひどいめにあつたよ。何しろ雷ときちやあ苦手だから。」

意氣地の無い姿に恥入つて苦笑しながら、水を含んで重たい上着を脱いだ。
「いつぱいぐつとやつとく方が、風邪を引かないでいゝんだがなあ。」
亭主も勸めてみたけれど、山岸は手を振つて應じなかつた。
「どうも運が惡かつた。出て來なくてもいゝのに、つい出て來たんだ。さつきはいゝ天氣だつたから、まさか鳴らうとは思はなかつた。」
やつと安心したてれかくしに、山岸は自分の方から話し出した。
「いつだつたか、銀座復興會の發起人といふ連中がやつて來て、おもて通りのあきんど一同の申合せで、今月いつぱいに家を建て、十一月一日から復興大賣出をやるから、是非贊成しろと膝詰さ。こつちは何の下心も無いものだから、てんで話に乘らないでゐると、この儘銀座を見捨てる氣なら權利を讓つてくれ、銀座は一列一たいに店をあける積りだから、齒の拔けたやうに所々空地があつては見づらが惡く、一統の迷惑だといふ。しまひには段々聲が高くなるので、おふくろやうちのものも心配し、子供は泣出しさうな顏色をしてゐるので、いづれ挨拶をすると云つて歸つて貰つたが、今日はそれとなく樣子を見に來たのさ。」
「來て見て驚いたらう、此間迄は人間の力がちつとも働いてゐなかつたが、今ぢやあたいした勢

ひだ。見給へ。もう五六日たつと、あつちにもこつちにも立派な家が建つ。十一月一日の大賣出は夢では無いぜ。」

「それは家は建つだらう。しかし立派な家は建つまいよ。君の理想の、電車を地下線にし、芝生をつくり、並木を植ゑ、地震に倒れず火事に燒けずと云ふ家は建ちさうもないぜ。今の樣子では、公設市場にも劣るかもしれない。」

「その點は僕もがつかりした。しかし、これは全くの假普請だ。東京全市に及ぶ復興計畫をたててからでなければ、ほんとの銀座は生れつこない。僕はたゞ、あれだけの打擊にもめげずにたて直しにかゝらうとする人間の力を讃美したいのだ。どうだい君も率先して銀座のたて直しに參加しては。」

「僕はこんな間に合せ仕事は信用しない。もう一度ぐらつと來て見給へ、ひとたまりなくやられてしまふから。」

「そんなら君は權利を他人に讓つて、銀座を立退くつもりか。」

「さあ、そいつは一寸考へものだが……」

山岸は急に聲を落した。

さつと、あかるい日光がさして來た。
「雨はあがつたな。」
大まないたの前に腕組をして二人の話を聞いてゐた亭主は、別段何の註文も出ないので、下駄をつつかけておもてに出た。
「おい、來て見な。すつかり晴たぜ。」
雨もりのあとをせつせと拭いてゐたおかみさんも、呼ばれてあとから出て行つた。
雨は名殘なく晴れ、冷々とする迄澄んだ青空に、けろりとした太陽が又あらはれた。
「まあ、なんて綺麗な虹だらう。」
いかにも珍しいものを發見したやうなかみさんの聲に、牟田も山岸も誘はれて立上つた。
あつちこつちに出來た潦に、眞靑な空が映り、遠くの空にはくつきりと虹がかゝつた。
いつたん四方へ逃げ散つた大工、石屋、土方、仕事師は又めいめいの仕事場にたち歸り、威勢よく働き始めた。

二六

手取早い、間に合せの假普請ではあるが、銀座の兩側に、一軒々々家がたち始めた。はち卷へ集まる客の噂もきまつてゐた。

「一丁目の西側の額ぶちやが店をはじめましたぜ。」

「その筋向の汁粉やも開店しましたよ。」

と數へてゐるうちに、藥屋が出來、菓子屋が出來、煙草屋が出來、靴屋が出來た。

中には、はち卷同樣、丸太と亞鉛と葦簾で圍つただけのものもあつた。手輕な地形が濟むと、柱がたち、棟あげがすみ、板羽目と亞鉛がうちつけられて、見てゐるうちに積木細工のやうに家が出來上つた。それは實質の貧弱にも拘らず、見せかけは巧妙だつた。たゞ、薄つぺらな安普請の二階屋が並んだので、曾ては取擴げを必要とした道路も、寧ろ廣過ぎる位に見えた。

二月近く享樂を奪はれた市民は、銀座のとりかたづけがすみ、家の格好をしたものがちらほら出來始めたときくと、山の手や郊外の地震でいためつけられなかつた連中は無責任な心持で、下町の燒出され連中は他人事で無いなつかしさと、自分達も早く復歸し度い願ひから、多大の期待を持つて出かけて來た。燒出されの着のみ着のまゝの連中はいふ迄もないが、この際綺麗な着物を身につける事は憚られるといふ心から、身につかない洋服を着たものゝ方が、身についた洋服

を着たものより肩身が廣く、汚れない着物を着たものよりも、汚れた着物を着たものゝ方が大手を振つて歩いた。

たまに、地震以前の銀座を流して歩いたやうなモボ、モガの徒輩が、地震以前のはでなみなりで歩いてゐるのを見ると、大衆的正義感と嫉妬の入りまじつた義憤を發して、面罵したり、わざとぶつかつて喧嘩を賣つたり、泥だらけのからだをこすりつけたりする彌次馬もあつた。さういふ噂もはち巻の卓を賑やかにした。

「今日あたくしが用達に行つたかへりに、そりや凄いやうなハイカラが歩いてゐたんでございますよ。淡紅色の膝つきりの洋服に、眞白の靴下で、踵の高い靴を穿いて、白粉を濃く、眉毛を墨で描き、口のわきにほくろまで入れて、よくまあこの際あんな風をして燒跡を歩けたものだと思つてゐますと、向ふから來た洋服を召した紳士みたいな方が、いきなりつばきをひつかけて、賣女つて怒鳴つたんでございますよ。」

かみさんさへ、荒々しい人心の、とんだお芝居となつてあらはれるのを目撃したといふのだ。

「へえ、女はどうした。つれは無いのかい。」

「えゝ一人なんです。あんまり突然だつたもんですから、あつけにとられてぽかんとしてゐまし

たが、男の方は、おいお前は東京の半分が燒拂はれ、澤山の人死のあつた事を知らないのかつて、大きな聲で又怒鳴りつけたんでございますよ。」
「ふうん、それで。」
「それつきり、女の人は面目ないやうな風をして行つてしまつたんですけれど……」
「そいつは氣の毒だつたなあ。」
「でも此際、そんな風をして歩くんですもの。」
「さうかい、僕は女の方に同情するねえ。おかみさんの描寫する所によればあんまりいゝ趣味の女とは思へないが、それも復興の魁かもしれないぜ。やがて銀座にはさういふ無神經な奴がつたがつて歩く日が來るよ。」
牟田はいつぱい機嫌で、何事も肯定し度いやうな氣持だつた。傍若無人か、勇敢か、無智か、愚鈍か、無感覺かは知らないが、それが銀座の一面を代表する世の態だ。家が立並び、大賣出をはじめてみろ、忽ち泥まみれの洋服は姿をかくし、まがひ寶石だらうが、人造絹絲だらうがお構ひなく、むやみに光り輝くみなりの男女が横行するに違ひ無い。それがいゝ事か惡い事かは別として、その勢ひは阻止出來ない。そんな事を漠然と考へてゐると、はち巻の角を立てた亭主が大

またいたの上に上半身をつき出して、
「そりやあ、矢張阿魔の方がよくありませんよ。」
とさつきの話の結論をつけるやうに云つて、かたく口を閉ぢ、腕組をして力んだ。

二七

僅の日數のうちに、新橋から京橋へかけて兩側とも斷續して家が並んだ。一歩裏手へ足を踏入れゝば、未だ全くの燒跡の景色だが、おもて通りは各種の商店が店を開いて客を待つた。

震災以來市民の生活は、すべて實質本位だつたが、災禍を逃れて一呼吸ついた心は、早くも粉飾を求めて來た。往來を歩く人間も、段々汚い着物を脱ぎ、平生のみなりにかへらなければうつりが惡くなつて來た。女は忽ち紅粉を、大つぴらに愛用しはじめた。つい此間迄は、罵られ、嘲られ、つばきを引かけられ、石をぶつけられた洋裝の女もめつきり殖え、若い男と肩を並べて歩いても、さほど目立たなくなつた。

「どうです、銀座も人間の住家らしくなつて來ましたぜ。つい此間迄はうち一軒だつたのが、早いもんだなあ、カフヱも支那料理も洋食も揃つちやつた。うちでも此の儘やつてゐたんぢやあ、

あとに取殘されてしまふに違ひ無いや。」
猛火に燒拂はれた帝都のまん中で、誰よりも早く家を建て、商賣をはじめたほこりを持つはち卷の亭主も、不思議な焦躁の心があつた。世間はみんな自分のうしろからついて來たんだ。それなのに後から來る者程、前の者を追越して、立派な家を建て、店を飾り、復興の魁を身を以て示した自分が、今では何處と比べても一番みすぼらしいものになつた。これではいけないと氣がついて、植木鉢を買つて來て卓上に置き、柱時計を買つて來て、客の眼につくところに掛けた。日本酒だけでは滿足しない客もあるので、麥酒も置いた。その麥酒の宣傳ビラを貰つて來て、神棚の下に貼りつけた。二重瞼の目尻に微笑を浮べ、粒の揃つた齒を見せて笑ひながら、手にしてゐるコップから、白い泡がふきこぼれてゐる圖柄だ。この繪は牟田に一種の感慨を深くさせた。
「その繪の女は、僕その人に逢つたぜ。はじめて君んとこへ來た日だ。尾張町のところで山岸に出つくはし、一議論やつて別れた時、恰度目の前を牛車に乘つて通つたのさ。」
「へえ、さうですか。この繪の實物ですか。」
「モデルつていふんでしよ。」
かみさんが側から口を入れた。

「藝者には違ひないと思ふが、新橋かしら。」
「さうでせう、なんだか見たやうな顏だなあ。」
亭主はその女の顏と同じ高さにある自分の顏を近寄せて、感心して見てゐた。
「かういふのがいゝ女つていふんですかねえ。」
「いゝ女ぢやないの。目んとこがとても可愛いぢやありませんか。」
かみさんは心の底から感心した樣子で、亭主にぴつたり寄添ひ、肩を並べて仰ぎ見た。
「繪つてものはいゝもんだなあ、こいつのおかげで家の中があかるくなつた。」
亭主は發明したやうな顏をして、しばらく畫面をみつめてゐたが、突然牟田の方に振向いて、
「あつしやあねえ、牟田さん、近所が段々家を建てるのを見て、こつちも亞鉛と葦簾ぢやあどうにも爲樣が無いと思ふんだけれど、それより先に先づ樽を据ゑ度いと思ひますよ。いつ迄も罎詰の酒を賣つてゐたんぢやあ、お客樣に申譯が無いや。」
「そりやあいゝ、是非さうして貰ひ度いな。」
「實は此間菊正宗の本店に行つてかけあつて來たんだけれど、もうそろそろ荷が來るつていふ話だから、銀座復興大賣出の日に、のみぐちをつけようかと考へてるんです。」

水道は復舊したが、電氣は未だ來ない。夜になると眞暗では、折角の大賣出も景氣がつかない。復興會の世話人は電氣局にお百度をふみ、電柱が立ち、戸毎に電燈線が引込まれるのも間も無い事になつた。

「大賣出の日迄には、きつと銀座を明るくして見せるつて、世話人は一生懸命でさ。ね、こつちはその日に樽がつく。何も彼も十一月朔日からだ。惡くないでせう。」

亭主は無愛嬌の顏を崩して、嬉しさうに笑つた。

二八

> 拝啓陳者來る十一月一日は銀座復興大賣出ですからなんにもありませんけれど皆さんにいつぱい召上つて頂き度候間夕方から是非々々御光來被下度候　はち巻

牟田が葉書を受取つたのは、その朔日の朝だつた。

この日の銀座は、軒毎にお揃ひの旗を立て、紅提灯をつるし、震災以來はじめて身動きも出來ない人出だつた。だが、牟田が會社のかへりに廻つた頃は、日の暮の早い時分で、引潮時の寂し

さが、晴た空にも町筋にも漂つてゐた。
「どうしたつてんだ、復興だ賣出だと騷いだつて、あかりがつかないんぢやあ爲様が無いぢやあないか。」
「暗闇で商賣が出來るかい。」
通りすがりに、お店者風の若者が昂奮した調子で喋つて行つた。それを聞いて、牟田もはじめて電燈のつかないのを不思議に思つた。震災以來、銀座の夜は暗いものときめてゐたので、彼自身はあかりのつかないのを苦にはしてゐなかつたのだ。
はち巻の家の入口には「復興の魁は料理にあり、滋養第一の料理ははち巻にある」といふ亭主自身が考へ出したスロオガンが紙に書いて貼つてあつた。
「いよう、來たな。」
牟田が葦簾をくゞつて土間に入ると、大須賀先生と稲村さんが、今來たばかりの様子で酒の氣も無く腰かけてゐた。
「おいでなさい。」
「いらつしやいまし。」

亭主も今日はきりたての手拭で、いつもよりも一層ぴんと突立つたはち卷をしめ、かみさんも結(ゆひ)たての丸髷で、かみそりのあたつた廣い額をつやつや光らせ、何かほかに香料の匂ひもした。

「どうもゝ弱つちやつた。日が暮(くれ)たつていふのに、電氣が來ないんですよ。なつちやゐないや。」

「只今も復興會の世話人の方にきゝに行つたんですけれど、かけあひ中だといふ丈で埒(らち)があかないんでございますよ。」

夫婦の焦躁は、銀座中の人達の共通のものに違ひ無かつた。この亞鉛と葦簾で組立てられた小屋の中にも、電線は引込まれ、電燈の白い笠は夕闇の中に微光を帶(おび)てぶら下つてゐた。

「爲方が無いからもう一晩洋燈(ランプ)をつけるか。」

「さうしませうかねえ。」

かみさんはいはれるまゝに直ぐにあかりの用意をした。

「構はん、構はん。酒をのむのに、あかりはいらんよ。」

先生は大きな手を振つてとめたけれど、お馴染の洋燈は炎の舌を出して、人顏と皿小鉢をほのかに照した。

「おや、樽が來ましたね。菊の特選か。」

稲村さんはいちはやく、土間の一隅に据ゑてある酒樽を見出した。つゝんだこもに描かれた白菊の一枝が、酒客の視線をひきつけた。
「えらい奮發だなう。」
先生も實感の籠つた讃辭を惜まなかつた。
「矢張樽でなくちやあ復興の氣分が出ませんよ。」
亭主は我家の寶物を拜觀させてゐるやうな得意さで、さしみ庖丁を取上げた。
「さ、お銚子を出してくれ。」
聲の下に、かみさんは客の前に箸と盃を並べた。
とたんにぱつと電氣がついた。わあつといふ歡呼の聲が、おもて通りから聞えて來た。
「ついた、ついた。あかりがついたぞ。」
はしやいだ聲で叫びながら、經濟新聞記者がかけ込んだ。
「電氣つて、ほんとに明るいもんだわねえ。」
かみさんがしんから感嘆した樣子で、甘つたれるやうに亭主を見あげてから、洋燈の鈍いあかりを吹消した。

銀座の町ははじめて銀座らしく、大空に光を映して輝き、俄に人聲も足音も、賑やかに活氣づいた。

二九

「さ、なんにも無いけど、酒たけはいゝつもりだから、あがつてみて下さい。」

椀、さし、酢の物と定石通りにはじまつて、亭主が心づくしの數々が並んだ。

「今日はね、あんまり嬉しいから、開店の日に來て下さつた皆さんに御案内を差上たんです。かうやつて銀座が復興してみれば、うちだつて安心して商賣も出來るわけだし、これといふのも皆さんのおかげなんだと思ひましてね。」

「目出度い、目出度い。今日銀座の復興を見るのも、偏に貴公の賜物だよ。」

「全く先生のおつしやる通り、親方が先陣をうけたまはらなければ、かう早く復興はしませんでしたよ。」

招待された客らしく、稲村さんもきちんとして、控目に盃をとつた。

「自分でいつちやあをかしいけれど、今朝も復興會の役員の方が、お揃ひで挨拶に來て、皆さん

にほめられちやつた。」
亭主は喜びをかくし切れず、さりとてあんまりだらしなく相好も崩せないので、口尻を引しめて怖い顔つきをしてみせたが、はれぼつたい眼の下に、微笑の皺がちらちらした。
「どうだ、今日は貴公もこゝへ來て飲まんか。」
「贊成々々。銀座の復興を祝し、あはせてはち巻夫婦の健康の爲に乾盃しよう。」
記者は頗る上機嫌で、亭主をさし招いた。
「それぢやあ御免かうむりませうか。」
亭主は自分で盃を持つて土間に下り、みんなといつしよに卓を圍んだ。
「さ、おかみさんもおいで。みんなで乾盃するんだ。」
かみさんも手に盃を持たされ、六人の男女は立上つた。
「お目出度う。」
「おめでたうございます。」
なみなみついだ酒を、額の邊迄捧げて、氣を揃へて飲み干した。
「いゝ酒だなあ。」

亭主が一番さきに感嘆の聲を發した。

酒は氣分と共に人を醉はせ、忽ち盃はしげく、空になつた德利は見る見る中に林立した。

「愉快だねえ。實に愉快だ。どうだい、牟田君、ひとつ行かうか。」

記者はさきの日の喧嘩をおもひ出しながら、盃をさす形をして見せた。

「よさうよ。折角おめでたい復興祭だ。その功勞者たるはち巻主人の定めた掟を破るのは失禮だ。」

「失禮つてやつは無いけれど、全くよして下さいよ。何も盃をやつたりとつたりしなくたつていゝぢやないか。」

亭主はふだんから赤い顏を愈々赤くして、しきりに手酌で飮んでゐた。

「さうか、そんならいさぎよく斷念しよう。しかし、我輩牟田君にはいひぶんがあるんだ。」

「いひぶんなんかこの次にして、今日は面白く飮んで下さい。」

「いや、君だつて我輩の味方をする事柄なんだ。端的にいへばだね、今日銀座を歩いて、我輩甚だ遺憾に思つたのは、東側も西側も大凡家は並んだが、まだところどころに空地がある。その空地の、なかんづく間口が廣く、且又奥行の廣いのが山德だ。即ち牟田君の親友さ。」

「わかつた、わかつた。その件に關しては、僕もあなたと同感です。さつきもあそこを通つた時、腹だゝしい氣持さへもちましたよ。何故彼は依怙地になつて、自分の殼の中に閉ぢ籠つてゐるか。或は彼のいふ通り、銀座は致命傷を負つてゐて、お祭騒ぎ位では復活しないかもしれない。或は又もう一度ぐらつと來て、忽ちぺしやんこになつて再びたてない運命に陷るかもしれない。しかし、そんな萬一の事なんか考へずに、いゝにしろ惡いにしろ、衆と共に積極的に動かないか……」
「ひや、ひや。」
牟田が昂奮して喋るのに和して、記者は高らかに贊成した。

三〇

「あたしたちには理窟はわからないけれど、つまりなんでさあね、吾々國民てものがさ、めいめい商賣をはげめばいゝんでせう。さうすりやあ儲かる、儲かつたらうまい酒でも飮め、飮んで元氣つけて又働け、働けば働く程儲かる、それが日本中の事だとすれば、たいしたもんだ。つまり日本中が儲かるんだから天子様だつておよろこびになるだらうぢやあないか。ね、そんな理窟ぢやあないかしら。」

この饗宴の主人として、亭主は息もつかせず客に酒を勸めながら、自分も止度がなくなり、鈍重な巻舌で、ぽつりぽつりと間を置いて、固い信念を述べるのであつた。

「さうぢや、その精神を失はなければ、日本は萬歳ぢや、飲め飲め、大に飲め。」

何と思つたか、とつてつけたやうな高笑ひをした後で、先生は亭主に酌をし、島木牟田稻村と順々に盃をみたした。

「飲むよ、大に飲むが、しかしだね、こゝに牟田君の竹馬の友に山岸なるものがあつて……」

記者はいつもの癖で、しつつこくひとつ事を繰返し、折角銀座復興の氣運が醸成されたのに、土地の草分だといはれる家が、卑屈臆病な態度をとつて、これに參加しないとは何事であるかと、醉つ拂ひ特有の高調子で、醉つ拂ひ特有の大袈裟な身振で論じるのであつた。

「まあえゝ、まあえゝ。さういふ非國民は、やがて又天に罰されるのぢや。」

「又先生の天譴論か。しかし、あゝいふ奴に對して天の處罰を待つのは手ぬるい。ひとつぐわあんとくらはして……」

記者は自分の意氣と聲とに醉つて、拳骨にいきを吹きかけ、いきなり自分自身の頭に突をくれた。

みんなが顔を見合せた時、

「今晩は。」

と低い聲でいつて、葦簾の外の暗闇にためらふ人影があつた。

「どなた、ずつと入つとくんなさい。」

いゝ氣持になつて、商賣氣をはなれてしまつた亭主は、ふりむきもしずに答へたが、その聲よりも先に、かみさんはおもてに顔を出して、

「あら、山岸さんですね。」

たつた今、みんなから罵られてゐた噂の主人公が立つてゐるので、かみさん自身は何一言云はなかつたにしても、充分うしろめたかつた。

「山岸君か。」

あまりの意外に、牟田も盃を下に置いて立上つた。

「こちらにおはいり下さいまし。」

かみさんは亭主の飲んでゐる隣を指さした。

「つれがあるんですが……」

山岸は、あかりの屆く入口へずつと出て、みんなに會釋した。
「さあ、こつちへ、お入りなさい。」
その連だといふ人影にむかつて、牟田が聲をかけた。
「御免下さい。」
思ひもかけない女の聲が闇にして、山岸と並んであかりの中に來て立つたのは、つい目の前の神棚の下の羽目板に貼りつけられた麥酒の廣告其ものだつた。髮こそひつつめた束髮で、着物も羅災者らしく時候違ひの色の褪めたネルに、借物らしく年齡に似合はない地味な羽織を引かけてはゐたが、畫中の人でなくて誰であらう。はつきりした二重瞼が、人目をだまかす事を承知しなかつた。一座の者はあつけにとられて、さつきからかゝつてゐた繪の人と、たつた今來た客をいちどきに目の中に入れた。
「いや、これは……」
やつとの事で先生が、かたくならない口を切つた。
「御挨拶はぬきにする。酌人携帶とはありがたい。貴公も今夜の復活祭を大に祝はうといふ御趣向ぢやろ。わつはつはつは。」

それが今迄攻撃されてゐた當の人間だと見てとつて、先生の機智は得意の高笑ひの形をとつてあらはれた。

三一

「酌人携帶なんて、そんなわけぢやありません。つい千八重さんとは其處で偶然出あつたので……」

山岸は其場の形勢の非なる事を見てとつたが、寧ろ進んでぶつかれと云ふやうに、亭主の隣へ腰かけた。

「全くさうなんでございますよ。銀座の賣出だときゝまして、こんなお羞しいなりをしたまゝ出て參つたんですが……」

女も亭主をさしはさんで、悪びれずに腰を下した。

「いや、いひわけには及ばんです。銀座が生きるか死ぬかと云ふ、死物狂ひのていたらくを、御同列で、涼しい顔をして見物しようなんざあ、羨望に堪へませんなあ。どうです、ひとつ獻じませう。」

記者は最も露骨に反感を見せて、無理にも飮ませるぞといつた喧嘩面で、山岸に盃をさした。

「あ、盃のとりやりは、うちぢやあしない事になつてるんだ。」

あわてゝ亭主が遮つたが、山岸は既に受取つて、記者がなみなみとつぐのを、直ぐに口へ持つて行つた。

「牟田君、今日は飮むよ。」

ぐつと一息に飮むと、綺麗に記者に返した。

「失禮。おかみさん、あたしにも一本つけとくれ。」

「どうしたんだ、禁酒は。」

牟田がきくのを打消した。

「さつき迄は禁酒のつもりだつたが、やめたよ。今日が銀座の賣出だときいても、そんな安つぽい復興がなんだといふ氣でゐたが、矢張故鄕はなつかしいや。うちの者にもなんにも云はず、ぶらりと出て來て、それとなく見物して歸る筈だつたが、京橋の橋の上からずうつと見わたすと、兩側のあかりがちらちらして、見てゐるうちに變に胸が迫つて來た。みんな內實は苦しいのだらう。無理をしてゐるのだらう。それでも氣を揃へてやつてゐる。たゞ一人自分丈が繼子の姿たん

だと思つたら、ほんとに涙が出て來た。二度も三度も人波にかくれて歩いてゐるうちに、段々愛着が深くなり、自分も矢張銀座の人間なのだ、よしんば此儘失敗しても、もう一度地震が來ておしつぶされても、銀座の土になつてやらうと自分のうちの空地の暗闇で、ひとりで心をきめると、牟田君、不意と君が戀しくなつたんだよ。」

山岸は眼鏡の奧で、感傷的になつた眼をしばだたいた。稻村さんはいつの間にかゐねむつてしまつたが、牟田も先生も記者も亭主もかみさんも、山岸が連れて來た千八重さんも、しばらく盃を忘れて、じつときいてゐた。

「きつと今晩もはち卷に來てゐるだらう、あつていつしよに酒を飲まう、飲んで自分の決心を話さうと急いで來ると、擦違ふ拍子におやと云つたのがこの人さ。」

「よう、よう。」

記者が頓狂な聲をふりしぼつた。

「いゝえ、決してそんなんぢやありません。そもそもこの人は僕の友達の……」

「いやだわ、やあさん。」

「よう、よう。」

と又記者がはやしたてた。

「きいてみると、ごたぶんにもれず、着のみ着のまゝで逃げ出した組で、日暮里とかにゐるといふ、まあ來給へ、ひとやすみしようと、無理に引張つて來たところさ。」

「さうか、實はね、白狀すると今日の晩餐の卓に於ける君の不評判といふものは無かつた。島木・先生の如きは、ぐわんとくらはす外に懲罰の方法がないといつて、拳固で自分の頭をなぐりつけた位、熱烈なる正義派だつた。」

「よし、僕はバラツク普請では立遲れた。今更間に合せは斷じてやらない。借金しても、銀座最初の本建築にとりかゝるから、見てゐてくれ給へ。」

「よし來た、さう來なくちやあ噓だ。」

亭主はむつくり立上ると、ひどく勢ひ込んだ樣子で、はち卷をしめ直し、棚からコツプを人數丈持つて來た。

「おい、麥酒を拔いてくれ。シヤンパンと行くところだが、まあ我慢して貰つて、乾杯だ。」

柄にもない事を云つて、かみさんをせきたてた。

三二

「あら、あたしがお酌致しますわ。」
千八重さんが、素早くかみさんの手から麥酒罎を奪つてついだ。八つのコップの縁をあふれて、雪白の泡が盛り上つた。稲村さんも起されて、みんな眞面目な顔つきで起立した。
「さあ、おやぢ、音頭をとれ。」
「あたしはなんにも云へないから、貴方やつて下さい。」
「よし、引うけた。」
　記者はうやうやしく一禮して、
「えゝ、今夕は銀座復興大賣出につき、當はち巻の主人些か心祝とあつて吾々を招待し、心づくしの宴を張られたのは甚だ奇特の事で、一同深く感謝する所でありまする。抑々（そも）大正十二年秋九月、關東一帶を襲つた地震は、我東京繁昌の中心たる銀座を、一夜の中に燒拂ひました。其慘憺たる光景は、人をして銀座は永久に亡びたりとの感を抱かせた程であります。然るに我はち巻の主人正八位勳八等野口文吉君並びに同夫人――えゝとおかみさんの名前は何ていふんだい。」

「とくでさあ。」

亭主がぶつきらぼうに答へた。

「さうか、――えゝ令夫人とく子さんは、震災後旬日を出(いで)ずして此の燒跡に、御覽の如き家を建て、天變の暴威に對して人力の屈せざる事を身を以て示し、雄々しくも銀座復興の魁をなした功績は、筆にも言葉にも盡す事が出來ません。宜(むべ)なるかな銀座大通の商人は、はち卷夫婦の勇氣に感奮し、陸續として之に倣(なら)ひ、遂に今日復興の實を擧げるに至つたのは、偏に夫婦の賜でありまして、若し此夫婦なかりせば、銀座の復興は斯の如く速かには達成されなかつたに違ひありません。例を目前の人にとるのは多少氣の毒の感なきにしもあらずですが、山岸なにがしの如きは、銀座草分の家柄であるにも拘らず、たつた一度の震火に震へ上り、正に銀座を見捨てゝ立去らんと致しましたが、矢張はち卷夫婦の勉勵努力を見、その人格に感化されまして、昨日迄の非を悟り、今夕席末に列(つら)なるに至りましたのは、眞に目出度い事で、いさぎよく改悛したる彼の心事を、吾々は深く嘉(よみ)するものであります。終りに臨み、諸君に御異存がなければ、日本帝國の爲に、銀座の爲に、又はち卷夫婦の爲に萬歳を三唱し度いのであります。」

「贊成々々。」

うてば響くやうに、先生の太い聲が應じた。

「大日本帝國萬歳。」

銀座復興萬歳。」

「はち巻夫婦萬歳。」

八つのコップは一齊に觸れ合ひ、琥珀の酒は電燈の下に輝き、さつと分かれて、勢ひよく人々の咽喉を通つた。

「お目出度う。」

「おめで度う御座います。」

かみさんは人に遲れて飲み干したが、感極まつて兩手で顔を覆つた。

「なんでえ、泣く奴があるかい。目出てえんぢやあねえか。」

女房をたしなめる亭主の眼にも涙が光つてゐた。

「あなたも乾杯して下さい。殘つてゐちやあ縁起が悪いや。」

「でも、あたし……」

美女は恰も宣傳ビラの畫中に於けると同じ微笑で、粒の揃つた白い歯を見せたが、目をつぶつ

て飲み干した。
「美事々々。」
みんなは拍手してはやした。
「さあこれからみんなで銀座を一周して來よう。」
「贊成々々。」
「親方も來い。おかみさんも來い。」
「でも、あたくしは留守番を……」
「留守は私が引受けるよ。」
稲村さんがおかみさんの言葉をたち切つた。
「よし、その方がいゝ。但し寝てしまつてはいかんぞ。さあ諸君、列をつくつて行進しよう。」
記者はすつかり昂奮して、まつ先に土間を出た。つゞいて大須賀先生が太い洋杖をついて巨軀を運び、はち巻の夫婦を眞中に、千八重さんがつゞき、山岸がしたがつた。牟田をしんがりにして、この不思議な取合せの一行は、明るい銀座の大通をさして歩き出した。（昭和六年四月十二日完結）

停年

二瓶三造は、この頃一日の勤務が堪へ難くものうくなつた。朝から夕方迄の營業時間は、三十年間、三度の飯を喰ふのと同じに、きちんときまつた事だつたのに、馬鹿に長く、無用の勤勞のやうに思はれて來た。社用の手紙を讀む、それを夫々の係へ廻す、支拂傳票に判を押す、收納傳票に判を押す、各地の支店から、駐在員から報告して寄越す商況、入札の馳引、そんな事で暮れる一日が、昨日も今日も何の刺戟も無く、たゞ重たく、だるく身邊に堆積した。手紙を讀んでも意味が汲み取れなかつたり、判を押したのが何の科目だつたか思ひ出せなかつたり、取引先から電話でもかゝつて來ると、えゝうるさいと舌打ちし度いやうな苛立たしさに襲はれた。そればかりでは無い、それ程煩はしく思はれる仕事だが、そいつが無い時は、何時の間にか居眠をしてゐる自分を發見して、一層平靜を失つた。そんな事はついぞ無い事だつた。人一倍健康で、攝生も充分にし、商賣柄宴會のつきあひはあつても、深酒はせず、對暮で通つた今日迄に、つとめが辛いと思つた事は無かつたのだ。事務室で居眠をするとは何たる事だと、自分で自分を叱つて見ても、うつかりしてゐると頭がかくんと下つて、はつとして姿勢を正す事が度重なつた。

「どうかなさつたのではありませんか。近頃元氣が無いやうに御見受しますが……」
下役の一人にきかれた時、他人も氣がついてゐるのかとはじめて知つて、三造はぎよつとした。
「別段何處も惡いとは思はないが、顏色でも冴えませんか。少し睡眠不足かな。」
さりげなく云つたものゝ、原因が病氣なら、寧ろ結構だと思つた。病氣なら癒る見込がある、しかし――三造は自分丈が知つてゐる倦怠の原因を、誰にも見すかされ度ない一心だつた。
それから間も無く、彼は鬼塚常務にも、何と無く不元氣に見えるが、どうかしたのではないかとたづねられた。
「二瓶君、矢張細君を貰はなくてはいかんよ。男やもめは精神上にも肉體上にもよくないさうだぜ。」
冗談めかして云つたものゝ、相手が相手丈に、はらわた迄見透された氣がして、三造は赤面した。あの常務の慧眼は、自分の心に張合を失はせた眞因を知りながら、わざとあんな事を云つてゐるに違ひ無い、これは愈々警戒しなければならないぞと思つた。
もとより家庭は重荷だつたが、それは妻の生きてゐた時も矢張重荷だつたから、今更二度目の苦勞を重ねようとは思はなかつた。會社の命令で、長い間支那に駐在し、それから歐米を廻つた

爲に、自然晩婚で、妻は若く派手好きだつた。地道な勤人の、しかも年齢の違ふ夫に對して、絕えず不滿をいだいてゐた。洋行歸だといふのに、何といふ田舍者なんだらう。商賣柄にも似ない何といふ吝嗇なんだらうと、口に出して罵る事も珍しくなかつた。三造は自分と妻との間に時代の相違をはつきり見た。彼が育つた頃の女、彼が多年胸中に描いた女といふものと、凡そかけはなれた妻であつた。若く美しく、はちきれるやうな底力を內部にかくし、表面は柔軟なからだに、あく迄も魅惑されながら、どうしても心持の融合はない寂しさが、三造を惱ました。だが、自分が妻との心の距離に惱んでゐるよりも、妻は一層そのへだゝりを、強く感じてゐる事を知つてゐた。彼は何とかして自分を屈しても、妻に近づかうとつとめたが、夫婦の間の情愛は、努力で燃えたゝせる事は出來なかつた。我儘をしても、喧嘩をしても、いつかぴつたりとくつつくのが夫婦の心だ。

陰性の夫は苦い顏をして、浮世はかない心持を胸にをさめて濟ませもしたが、陽性の妻はあてつけがましく、むやみに若づくりにつくりたて、うちをよそに出て行つた。里へ行くか、友達をたづねるか、百貨店へ出かけるか、活動寫眞を見に行くか、銀座をぶらつくか、行くところは何處にでもあつた。

子供でも出來たら、どうにかをさまるだらうと、夫は家庭の寂しさからも、しきりに望んだが、妻は子供は嫌ひだと云つて拒む事もあつた。それでも、やがて女の子が生れ、一年置いて男の子が生れた。もうあとは御免だと、妻ははつきり斷つた。その癖、二人の子供は完全に自分のものにしてしまつた。田舍で育つた夫の目には、自分の幼時と比べて、あまりに都雅な我子の將來があやぶまれた。しかし、子供にとつては、そんな心配をしてくれる父親よりも、着飾らせて、おもてに連れて行く母親の方が親しみ易かつた。

「パパの馬鹿。」

何か、時たま子供のいたづらを咎めでもすると、子供は直に父の方へ顎をつき出しながら、母の懷へかけ込んだ。

「いけませんねえ。パパお馬鹿さんねえ。」

子供の可愛さよりも、夫を憎む日頃のおもひを籠めて、ひしと抱いて頰擦をする妻であつた。

何といふいやな言葉だ、お馬鹿さんとは。馬鹿なら馬鹿でいゝ、「お」だの「さん」だのつける事は無い——三造は事毎に自分と異なる妻の教養に苦り切つた。

結婚當初からの不滿足は、年を重ねてつのるばかりだつたが、妻はめつきり肥り、愈々健康だ

つた。それなのに、おもひもかけない膽石を患つて、あつけなく死んでしまつた。女學校へ通ふ娘と、中學へ入つたばかりの息子と、五十を越した夫を殘して死んだ。

再婚を勸める人が多かつた。家政といふものは男手では駄目だ、どうしても女手が必要だと、婉曲にいふ人もあつたが、それよりもあけすけに、やうやく五十そこそこで、相手無しで濟むものかといつてくれる人もあつた。

「君、男つて奴はね、細君がなくなると氣が荒くなつて始末が惡くなるさうだぜ。」

それは鬼塚常務の言葉だつた。

「でも子供が可哀さうですから……」

三造は誰に對しても同じ答へで酬いた。再婚の氣持なんか毛頭無かつた。妻の突然の死は彼をまごつかせ、悲しませもしたが、少し日が經つと、寂しさの中に靜かな心境を見出した。休息の場所へ行きついたやうな疲勞が全身をつゝんだ。彼は夫婦生活に疲れてゐたのだ。

子供が可哀さうだといふ理由は、容易に人々をうなづかせた。誰も、もう再婚を勸めなくなつて、早くも年が經つた。父親の心を少しも汲み取らない子供達は、ぐんぐん成人してしまつた。娘は若い頃の母親に似て來た。時代が違ふから、和服は洋服に、ひさしの出張つた束髮はひきし

まつたのに變りはしたが、派手好きで、おしやれで、交際づきで、出好きで、何でも新しい事には手を出し度がる性質は、母親そつくりだつた。ちひさい時から母親が、わからずやだの、田舍者だの、おぢいさんだのと云つて聞かせたのを其の儘受けついで、何から何迄父親のいふ事を古いと云つて嘲笑ふ癖がついてゐた。

男の子は母親のペットだつた。姉よりもきりやうがよく、姿にしなやかなところがあり、發育盛になつて、妙にのつぺりした、女形のやうな感じになつた。いつも母親につれられて芝居や活動寫眞を見て育つたので、ひそかに役者になり度い慾望を持つてゐた。學校は勿論嫌ひで、年中のらくら仲間と、新宿や淺草に出かけた。

常々、こども達の行末が心にかゝつて爲方が無いのだつたが、それがはつきりと形をとつてあらはれて來た。或日の食卓に息子のゐない事があつた。

「清一はどうしたんだらう。」

「又山室や五島と活動さ。あいつ此の頃いけないのよ。」

娘は洋服のまゝ横坐りに坐つて、男のやうな口をきいた。

「なんだい、ひとを呼びつけにして。」

父はむづかしい顔をして娘の態度を詰つた。
「呼びつけで澤山さ、中學生のくせにカフヱなんかに行くんだもの、生意氣つたらないのよ。」
「ふうむ、清一もそんなところへ行くのか。」
「もちコオス。」
娘はけろりとした顔つきで、三杯目の御飯を無雜作に掻き込んだ。
三造は心が樂まず、洋杖を持つておもてに出た。恰度近所の緣日の晩だつた。折角子供達と親しまうとしても、向ふがてんで相手にしてくれない寂しさから、亡き妻を戀しく思ふ心が動いた。矢張妻がゐて、暴君のやうに家庭を支配してゐた頃の方が、今の無政府狀態よりはよかつた。まだしも家庭らしかつた。さういへば此の頃になつて、急に死んだ妻のかたみの品々が目についで爲方が無いのだつた。妻が、每日長い間向きあつてゐた鏡臺に、じいつと見入つてゐるやうな事もあつた。そこには妻の地藏眉が、二重瞼が、小鼻の横のちひさいほくろが、肉づきのいゝ肩が、胸が、乳房が、はつきりと浮んで來るやうに思はれた。簞笥の中には妻の衣類も殘つてゐた。それを密かにあけて見た事もある。何かしら香料がほのかに籠つてゐて、なまあつたかく感じられた。

さういふ心の狀態から、初夏の夜の緣日を步く女の姿には、思はず振返つて見る氣持もあつた。ふいに、若い娘があわたゞしく、逃るやうな足取で擦れ違つて行つた。珍しく桃われの町娘だつた。

「あら、ちよいと、今晚は。」

電柱のかげから、わざと黃色い聲でからかつた奴がある。中學生らしいのが、娘の後姿を見送つてゐた。

「何をッ。畜生、背負つてやがら。」

一人にどしんと背中を叩かれて、龜の子のやうに首を縮めたのは、まぎれも無い伜だつた。親子は同時に氣がついて、互に氣まづくなつて、反對の方向に別れて去つた。

同じやうな不快な景色を、娘の場合にも見せつけられた。それは娘をつれて墓參に行つた歸途だつた。市內電車の向側と此方側に、少し離れて座席が空いてゐた。父と娘は別々に腰かけた。或る停留場で勢よく乘つた學生が、いきなり娘に馴々しく口をきゝはじめた。娘は父親の方に警戒の視線をくれて、たしなめるやうに相手を睨んだ。學生は三造の方を見てから、肩をすくめて、舌を出した。

電車を下りると直ぐに、父は娘にきいた。
「今の學生知つてるのかい。」
「えゝ、中條さんのお兄さんよ。」
「中條さん？　中條さんて誰だ。」
「學校の人。パパの知らない人。」
うるさいなあといひ度さうな返事をして、娘は急に步度を早めた。
二瓶三造は完全に、家庭に於る邪魔者となつた。尤も、妻のゐる頃から、彼はたゞ忠實なる稼手に過ぎず、消費生活享樂生活の分前にはあづからなかつた。恰度蜜蜂の國の狀態だ。女王蜂は巢の中にゐて贅を盡し、勞働蜂は一生働きづめに働かなければならないのだつた。それでも三造には、働く事は樂みだつた。とんとん拍子に出世し、會社も大きくなり、やがて自分が拔擢されて重役になる事は、他人も疑はなかつた。新聞や雜誌にも、重役候補として月旦にのつた。
それなのに此の頃は、會社へ出るのもものうくなり、仕事には張合が無くなり、希望は不安に變つた。家庭の面白くないのはまだしも忍べる。しかし、三造にとつて唯一の生甲斐を感じる道だつたつとめが、前途に光明を失つたのは致命的の大事だ。人の目にもあやしまれる程元氣のな

くなつた原因はこゝにあるのだ。
うちつゞく不景氣で、會社の事業はすつかり活氣を失つた。そこへもつて來て、多年社員達が指を折つて待つてゐた創業五拾周年が目の前に迫つて來た。增資が行はれ、永年勤續の社員に功勞株が與へられ、誰彼は重役に昇格し、一同に記念賞與がたんまり出ると、十年も前から期待をかけて噂しあつたが、この數年の不況では、果して利益の出る決算が行はれるかどうかも疑はしくなつた。
元來日東商事株式會社は、立志傳中の人物だつた前の社長が、日東組の名で陸軍御用達をつとめ、日清戰爭でしこたま儲け、北淸事件で又儲け、日露戰爭で更に儲け、歐洲戰爭では誰一人豫期しない大發展を遂げ、それを機會に組織を改め、社長は隱退して相談役となり、その息子が二代目の社長となつた。二代目は若い時から亞米利加で教育をうけ、永年かゝつて大學を卒業したが、學問よりも外の事に精を出し、自轉車が流行れば曲乘や競走に凝つて怪我をしたり、洋琴を彈く、舞踏が上手、ゴルフは半玄人の域に達し、その外勝負事ならば、碁將棋骨牌花合何でも來いといふ器用人だつた。老社長の齡が傾き、後繼者を確立しなければならないので、歸つて來いと云つてやつても、何だ彼だと云つて歸つて來ないのは、向ふの女に子供まで出來た

爲で、遂に評議の結果、その頃は未だ貿易部の平社員だつた二瓶三造が、選ばれてお迎の役を承つた。永らく上海や漢口に駐在し、商賣上の必要から勉強した英語の力を買はれたのと、人一倍の仕事熱心で、賴母しい人物と認められた爲だつた。ハドソンの河岸のさゝやかなアパアトメントの一室に、社長の息子は金に困つて弱つてゐた。歸れと云つても歸らないので、水の手をたち切られ、もともと自力で働く氣力は無いので、半分自棄になつてゐた。餘程閉口してゐたと見えて、案外素直に女と別れる事に同意した。相當の一時金と、今後二十年間母子の生活費を送るといふ約束で、けりをつけた。容易に使命を果した三造は胸を撫下して、早速日本へ歸る事を勸めたが、社長の息子は身輕になり、金の蔓をつかんだとなると、又氣が強くなつて、直ぐには歸朝しないといひ出した。いつたん歸つたら、二度と海外の土を踏む事はむづかしいに違ひ無い、そんなら若いうちに歐羅巴を廻り度いと云ふ。二度三度日本へ電報で照會したあげく、本人の主張が通つて、三造はその儘隨行して倫敦へ渡つた。何處へ行つても何かしら新しい興味を見出す社長の息子は、商業視察の名を藉りて其處に居据つてしまつた。同じやうに、巴里伯林にもゆつくりと腰を据ゑて、足かけ三年の月日が過ぎた。其間に三造は、各地へ支店を設置する計畫を立て、腹案を整へて歸朝した。三造の器量は老社長に十二分に認められ、信任が厚く、進路が開けた。

社長の息子は間も無く或る大名華族の娘と結婚し、すつかりをさまつてしまつた。三造はその祕書役兼目附役を命ぜられ、上役の橋渡しで、知名の實業家の娘を妻とした。海外に設置された支店は、歐洲戰爭に際して、素晴しい業績を擧げた。

やがて老社長は隱退し、二代目の世の中となつたのだが、同時に三造は同輩先輩を抜いて支配人の椅子を與へられたのだ。その社長の隱退を機として、創業以來身命を賭して働いて來た鬼塚支配人は重役となり、その他の古手の連中は、新規に制定された停年制によつて、多分の退職手當を貰つて職を辭した。その時、一般社員にも臨時賞與が出るものと期待されたのであつたが、やがて半世紀の祝ひでも催す時には何とかしようといふ老社長の言葉を楯にして、期待は裏切られた。爾來、創業五拾周年の祝賀は、全社員の實現を疑はない夢となつた。

二瓶三造は二代目の社長を補佐して、時勢と共に膨脹した事業を總攬した。だが、戰爭のおかげでやつて來た未曾有の好景氣は、がつたり下坂になり、それから長い不景氣が襲來した。調子に乘つて擴張した部門は、みんな赤字だつた。每期の利益率は段々減少した。緊縮は會社內部の組織一般に行はれなければならなくなつた。每年一度昇給するのが多年の例だつたのに、或年突然沙汰止みとなつて、それ以來隔年の事になつた。賞與が減つた。居宅補助料が廢止になつた。

殊に社員を脅かしたのは、動かす可らざるものだと思つてゐた退職手當金額を、たゞ一回の取締役會の決議で、半分に近く減額された事だつた。現在の不平と將來の不安は大きな力となつて、社員の希望に陰影を投げた。早くも結束して、反抗の氣勢をあげようと、よりより協議する者も出て來た。

さういふ不平に對して、會社の幹部は、來る可き五拾周年の祝賀の際には、みんなもうるほふに違ひ無いから、こゝのところ暫くは我慢しろ、と云つてなだめるのがおきまりだつた。二代目の社長の如きは、曾て社員を集めて訓示を與へた後で、今にいゝ事があるから懸命に努力せよと言明して一同を喜ばせた。それはみんなを幸福にし、樂しい希望を持たせ、二人前の働きをする事を誓はせた。中で、氣の早いのは幾年か後に來るお祝をすつかり豫算に組んで、借金をして地面を買ひ、家を建てた者さへある。だが、その後の數年間には、樂しい夢をはぐくむやうな材料はひとつも無く、思ひもかけない打擊が、次から次と湧いて來た。關東一帶の大地震があつた。銀行破綻の痛手も受けた。金解禁の影響も免れなかつた。おとくいさきの支那では、猛烈な日貨排斥を度々喰つた。會社の創立者である前社長も死んだ。五拾周年の祝賀には、疑惑の陰影が濃くなつた。

「五拾年々々々も久しいものだが、ほんとにうまい事があるのかしら。」

「あるともさ、社長が新年會の時に明言したからなあ。」
「隨分むかしの話だぜ。もう時效にかゝつてらあ。おまけにその新年會なるものも、この頃は斷然緊縮しちやつたぢやあないか。」
「馬鹿いへ、新年會はおやめになつたつて、五拾年は公約だ。今更取消すわけにもいかんだらうぢやあないか。」
「だけど、取消すも取消さないも重役の權能にあるんだからなあ。」
「そんな橫暴な事は現代では許されんよ。」
「あてになるもんかい。昇給をとめたのは誰だ。ボオナスを減らしたのは誰だ。退職手當を削つたのは誰だ。みんな重役の一存で勝手にやつた事ぢやあないか。」
「しかしだね、佛の顏も三度だ。今度下手な眞似をやつてみろ、吾々だつて默つてゐないつて事は奴等にもわかつてゐるさ。ストライキを敢行するんだね。驚きやあがるだらうなあ。サラリイ・マンなんてものは、何をしたつてへいこらへいこらしてゐるものと多寡をくつてゐやあがるんだから、一泡吹かせてやらうぢやあないか。」
「存外驚かないかもしれないぞ。この不景氣だ、俺達の方はいつたん失業したら、永久的ルンペ

ンになり下りさうだが、さきさまはいくらでも代りはある。なまじつか勤續して高い給料を貰つてる奴よりも、安くて、いくらこき使つても喜んで働く若い奴の方が使ひよくていいだらうぢやあないか。」

二人よれば、この會社が原始形態で仕事をはじめてから、恰度滿五拾年になる次の總會に、いかにして豫ての嬉しがらせを實現するか、或は之を裏切るかを、言葉は冗談めかしても、腹の中では眞劍に、論じあひ、噂しあふのであつた。

この問題は二瓶三造にとつても、何より重大な事であつた。彼の耳は、社内の人の噂を捉へる爲に異常の鋭さを增した。他の者からは、支配人といふ地位と、昔から社長の身邊に最も近くゐたといふ關係で、最高幹部の間に議せられる重要事項は、何でも知つてゐるものと見られてゐたが、實は彼も此の問題については、大きな期待と、其の反對の疑惑に惱まされてゐる一人に過ぎなかつた。

「どうでせう二瓶さん、五拾周年祝賀の形勢は。」

さう云つて訊くものが絕えなかつた。

「さあ、私にもわからない。何分雲の上の事だから。」

平生は、あらゆる樞機に參劃してゐると他人に思はれてゐる事を利用して、自分の地位の重要さを確認させようとするのが、この事になると全く反對で、かりそめの言葉の上にも責任を持つ事を避け度がつた。

「知らない事は無いでせう。あなたなんか今度は重役なんだから。」

「冗談いつちやあいけない。」

「冗談なもんですか。鬼塚常務が隱退して、あなたが昇格するといふ噂が專らですよ。」

「困るなあ、そんな噂を立てられては……」

口ではさう云ひながら、心の中を見透されたやうな、どきんとした波を胸に感じた。

これこそは二瓶三造を、憂鬱にし、ものうくし、ゐねむりをさせる最大の原因だつた。彼自身、それはよく知つてゐた。知つてゐて、自分が無氣力になる事を、寧ろ止むを得ないと思つてゐた。自分に對して多分の同情を感じてゐた。彼は會社に入つて旣に三十年になり、支配人になつてからも、十數年經つた。そして、何時の間にか五十五歲になつてしまつた。五十五歲は、彼が四十代になつて間も無く、力說して定めた停年制の規定年齡だ。此の制度を定める時、五十五歲で隱退を餘儀なくするのは餘りに早い、まだまだ活動出來る年齡ではないかといふ反對が、不平が喧

しかつた。それを押切つたのは、彼を支持する當時血氣の二代目だつた。幾人かの先輩が、不滿と怨恨をのこして隱退し、中には停年制を目して、その起案者の二瓶三造が、目の上の瘤を追拂ふ爲の腹黒い陰謀だと、あからさまに攻擊したものさへあつた。三造は心外だつた。彼は全く會社の爲を思つて提議したのであつた。人間の働き盛は三十代から四十代だ。五十を越して、たゞ安きを偸む者のある事は、後から來る者の進路を塞ぐ弊害の外には何も無い。尤も多年の勤勞に對して一生安樂に老を養ふに足る丈の手當はしてやらなければならない。それが多くの人間を使ひ、各自の能率を充分發揮させる途であると考へたのだ。

　それが何時か他人事では無く、我身の運命となつて來た。しかも甚だよくないのは、その後の引續く不景氣の爲に、退職手當の額の著しく減らされた事だ。晩婚で、子供達は未だこれからも金を喰ふといふのに、今若し隱退しなければならないとなると、先づ第一に生活を縮少しなければならない。派手好の妻のおかげで、貯蓄は乏しい。おまけに、彼自身も人々のいふやうに、やがては重役になる事を豫想し、停年制に引かゝつて隱退する身の上とは考へなかつたから、すべての計畫がその肚で立てられた。妻が死ぬ前に、地面を買ひ、家を建てたのも馬鹿らしかつた。それは妻の虛榮心を滿足させる爲の久しい前からの提案だつた。遂に彼も同意して、銀行から金

を借りて斷行したのだが、それは、やがて重役になるものと豫想しての仕事だつた。不景氣は、地面や家屋の値うちを半分に引下げてしまつた。

何としても、五拾周年の祝賀を機會に重役に昇格させて貰ふ外には、自分は救はれる途が無い。今になつてみると、五十五歳は隱居するには早過る。しかも新規に活動の途を開いて、別の方面に頭を突込むには、既に遲過る年齡だ。そんなら重役になる見込はあるか。元來此の會社の重役で、使用人から拔擢されたのは鬼塚常務たゞ一人だ。他の人は、すべて前社長の血統のものか、社長の娘を貰つたものばかりだつた。それにも拘らず三造が、夙に一般から重役候補と見做され、自分でもその幸運を信じてゐたのは、今の社長との特別の關係からだ。遙々亞米利加迄迎ひに行き、手を切らせた女へ約束の仕送は、つい近頃迄、三造がとりしきつて完全に果した。會社の仕事よりも、外の遊び事に忙しく、不相變長唄に凝つたり、歌澤に凝つたり、競馬に凝つたり、ブル・ドッグに凝つたりしてゐる社長は、公用一切三造任せだつた。日常の仕事はいふ迄も無く、時たま社員に訓示したり、重役會に提案したりする時も、草案はすべて三造が作り、それを朗讀する位のものだつた。恰度前社長の身邊を離れず、手足となつて働いた鬼塚善次郎が、拔擢されて重役となつたやうに、今の社長の頭腦となつて働く二瓶三造は、當然同じ寵遇を受く可きだと、

他人も三造自身もきめてゐたのだ。
それなのに、近年の不況つゞきで會社の經營が苦しくなつて來ると、並び大名のやうな重役の中から、先づその罪を三造にきせようとする低氣壓があらはれて來た。著しい發展の坂を上つてゐる頃、擴張に擴張を重ねた施設は、充分利益をあげ、會社を富ませ、株主の懷を肥したのに、今になつてそれを非難する聲さへ聞えるのであつた。三造のひがみかもしれないが、社長の信任さへ、めつきり薄くなつたやうにも思へるのだ。殊に三造を悲觀させたのは、前社長の弟で、一門の長老格で威を振つてゐる老人は、使用人級から重役を出す事の非を屢々公言するのであつた。それは我利々々の資本家根性のあらはれで、會社の經營に最も熱心なのは、一番多く出資してゐる人間で、一文も出してゐない人間は、個人の功名富貴の爲に地位をのぞむので、會社百年の計をたてるには不適當だといふのである。此の說に對して、一門の人々はいふ迄も無く、使用人級から經上つた鬼塚常務も敢て異論は唱へないのであつた。三造は今日に及んで、月給取の無力な地位を、しみじみ思ひ知つたのである。
さういふ屈託を持つて歸る我家は、まるで娘や息子の友達の倶樂部のやうなていたらくだ。いくら注意を與へても、訓戒しても、父親のいふ事は、時世遲れの世迷言に過ぎないと多寡をくゝ

つて、身にしみては聽かないのだ。

「おい、お前達もちつとは考へて貰ひ度いな。お父さんも來年は停年で、會社をひかなければならない。さうなると今迄のやうに呑氣には暮らしてゐられなくなる。此の家も手放さなければなるまい。もつとちひさい借家に越して、儉約しなければ喰へなくなる。」

「あら、パパ重役になるんぢやないの。もうせん新聞に出てゐたわ。今度重役になるのはパパの外無いつて。」

娘は少じも父親の心狀は察しないで、朗な聲で云つた。

「それは新聞辭令さ。兎に角會社では、五十五になると引く事になつてゐるのだから、お前達も覺悟してゐなくてはいけないよ。」

「いゝ事よ。さうなつたら、瑠璃子自分で働くから平氣だ。」

「僕も學校なんかよしちまふよ。僕はママの血統で頭は惡いんだから、學問なんかいくらしたつて無駄なんだ。」

男の子も平氣な顏つきで、父親のおどかしなんかきくものかと云ひ度さうだつた。

「馬鹿な事をいふな。學校をやめてどうするんだ。」

「僕も自分で働くよ。ぢやんぢやん稼いでやらあ。」
「學校も卒業しないで、いつたい何になれると思ふんだ。」
「活動の役者にならあ。」
「あたしだつて、カフヱの女給かマネキン・ガアルならつとまるわ。」
二人ともしやあしやあとして答へた。息子も娘も、現在の父親の地位を、父が思ふ程には買つてゐなかつた。自分達のくらしむきを、もつともつと贅澤な連中のと比べて、不平にさへ思つてゐた。同時に又、父が一大事だと考へる程、世の波に揉まれて自活の道を求める事を苦痛だとは想像してゐなかつた。そんな事を心配してゐる父の心根の古めかしさを嘲笑つてゐた。映畫俳優になる、女給になる、マネキンになる事は、自分達の持つて生れた才能を發揮する好機會のやうに考へた。學校や、父親や、世間をはゞかつて、思ひのまゝに振舞ひにくい今の境遇よりも、もつと明るく、廣く、自由な生活が待つてゐるやうにも空想されるのであつた。子供達の態度は、二瓶三造を一層苦しめる種となつた。
そんな事には頓着なく、創業五拾周年の日は近づいて來た。營業成績の振はない當節として、多分の事は出來ないが、株主にも使用人にも何とか色をつけようと、重役會の內議がきまつた。

愈々待ちに待つた臨時賞與が實現するといふ噂は、忽ち社内を活氣づけた。しかし三造の氣は浮立たない。却つて人々とは反對に、益々面白くなくなつた。臨時賞與は結構だ。だが、自分の問題はどうなるのだらう。いつそ社長にぶつかつて訊いて見ようか、常務の自宅を訪問して見ようか、自分の今後の身の處置を考へなければならないから、あらかじめ御内意を承り度いと云ふのなら筋は通つてゐるだらう――とも思つたが、それが極端な事こはしのやうにも反省された。まだ脈のあるものを、先方に旋毛を曲げられて、そんな事をいふならはつきりやめさせてやるぞと意地惡く出られたら大變だ。いかなる場合にも雇主は絶對の權力を持ち、使はれる人は運を天に任せるより外に途の無いのが月給取の定法である。三造の惱みは增すばかりだつた。

うちは妻と子供に占領されても、外へ出れば、會社へ行けば自分の天地はあると永年考へて來た三造が、今は何處にも行くところが無くなつた。うちには、事毎に意見の違ふ父親を苦めて痛快がる天の邪鬼がゐる。會社には、自分が停年で退職したら、その後にとつて代らうと待構へてゐる後輩がゐる。安住の地は何處にもなくなつた。

夕方、會社がひけると、會社關係の宴會の無い限りは、眞直にうちへ歸つた三造だ。それが此の頃は、どんな宴會でもいゝ、そんな席に出る事で氣がまぎれた。

「おい、二瓶さんは奧さんがなくなつて一人なんだぜ。誰かうでのある奴は無いか。」

など、酒機嫌でからかふきまり文句を、何を下らない事を云つてるのだと苦々しく思つてゐたのに、今はそんな光澤の無い言葉にさへ取縋り度いやうな氣持が動いた。

「あら、こちらまだ空いてらつしやるの。」

これもきまりきつた文句で受ける藝者に、何か期待する心があつた。それは別段妻に死別した孤閨の寂しさとは考へられなかつた。慾情の惱みは殆んど知らなかつた。年齡だなあ――と自分自身寂寞を感じた位だ。それよりも今日迄の、自分の生活の無味單調が、果して人生の事であつたかを疑ふやうな、漠然とした不滿が湧いて來た。自分が強て眼を閉ぢ、耳をふさいで來たところに、人の世の面白さがあるのではないか、眞面目に謹直に、會社大事を專一とし、立身出世を目安にして他の一切を犧牲にした生活が、甚しく無意味に思はれる事があつた。

三造は、會社の歸りに、ふいと銀座裏のバアなどへ寄つて見る氣になりもした。

「お兄さん、なんかあがらない？」

あらゆる化粧法を勇敢に採用し、何より先にからだを接觸させて來る女、呼びもしないのにあつちからもこつちからも集つて來て、心づけにありつかうとする女達は、藝者のやうなおもはせ

ぶりや、しなや、所作を抜きにして、ひたおしにおして來る賣笑婦であつた。昔の矢場や銘酒屋の女よりも、もつと大膽な、露骨な、厚顔な壓力を以て迫つて來る。しかし三造には、彼等と向あつて話をする主題さへつかめなかつた。

「あんた課長さん?」

「まあそんなものだね。」

「嘘よ、重役でしよ。」

「さう見えるかね。」

三造はぐつとつまつて、ひとりでに顔が赤くなつた。自分はもう停年制に引かゝつて、まさに隱退しなければならない使用人なのだ。うすく割つたウヰスキイ曹達をぐつと飲んで、彼はそゝくさとおもてへ出た。

それからも二三度、家をかへて行つて見たが、何處も同じやうなもので、取つくしまも無かつた。三造は憮然として銀座を歩いた。よく新聞に出てゐるステツキ・ガアルといふやうなものが、ほんとに出現するだらうか――といふ風な獵奇的な心が動いた。實際の慾情よりも、想像の悩ましさに引入れられる事があつた。若い娘が大膽に、夜の街路を一人で歩くのを見て、それがそれ

かと思ふのだが、ウインクもしなければ笑ひもしずに、さつさと行過ぎてしまふのだつた。
その日は一日々々と容赦なく迫つて來た。鬼塚常務の擔任の決算案は、幾度となくつくりかへ、物の評價を出來る丈都合よくあんばいして、剰餘金の捻出に苦んだ。いつもならば、三造にも相談をかける筈なのが、帳簿方を自室に呼込んで、常務は一人で工夫を凝らし、どうにか斯うにかやりあげてしまつた。それが重役會に持出されて通過すれば、總會の議案となつて提出される。株主は臨時配當を、使用人は臨時賞與を貰ふ。それ迄は確定した。だが、それから先の自分はどうなるのだ――三造は長い裁判にあきて、一日も早い宣告を待つ罪人のやうに、どうともなれと肚を据ゑた。
時候は恰度春だ。暖房熱が不用になつて、あたり近所のビルディングの窓は一齊にあけ放たれ、春光は事務室の中にも流れ込んだ。道路を距てた向側の窓に、二人宛むきあつてタイプライタアを打つてゐる若い女の、お揃の淡紅色の仕事着が、いかにも季節の色彩だつた。
或朝、三造は省線電車の中で、おもひもかけない災難にあつた。途中の驛で若い女が、あわただしく馳込むのと、自動式の扉のしまるのといつしよだつた。がたんと一つ大きく揺れて、動き出す拍子に、釣革へ手を延ばして、まだしつかりつかまへなかつたのが、おもはず倒れかゝつて、

三造の足をいやといふ程踏つけた。成熟した女のおもみの全部が下駄の齒にのしかゝり、彼の靴のつまさきを蹂躙つた。三造は本能的に、踏まれた足を二度三度上げたり下げたりして、床を踏まうとしたが、痛さは骨を挫いたやうに、づきんづきん響くのだつた。

「どうかなさいまして。」

「いや。」

女があかくなつて詫るのを、儀禮的に打消しはしたものゝ、その痛みは彼の顔面にもあらはれてゐた。あたりの人の視線は、みんな彼に集つた。

「すみません。おいたみになりますの。」

釣革につかまつて、てれた顔を窓外の風景に向けてゐた女が、三造を下からのぞくやうに身をかゞめて訊いた。

「いゝえ、大した事はありません。」

何といふ馬鹿々々しい事だ。――三造はむやみに腹がたつて、ぶつきら棒に答へた。

それつきり、女はあらぬ方を向いてしまつた。二のうでの奥の方迄見えるのを氣にして、片方の手で袖口を押へ、釣革の揺れる儘に身を任せてゐた。肉づきのいゝ、顎のくゝれた、もみあげ

の長い横顔は、白粉を濃く、眉毛を細く長く描き、綺麗にこしらへあげてあつた。自分の失策にすつかり參つてゐる樣子を、他人には平靜に見せかけようと努めてゐる爲か、からだの置所に困つてゐるやうな姿だつた。

電車を降りる時、三造はおもはず立ちすくんだ。立上つた體の重みがもろに加はると、つまさきは又はげしく痛み出した。プラットフオームを、いくら平氣で步かうとしても跛になつた。

「ほんとに、すみませんでした。」

うしろから、女が氣づかはしさうにぴつたりくつついて來た。それが三造を一層弱らせた。改札口を出て、會社へ行く道々、矢張或間隔を置いて、女の氣配が感じられた。彼は振返つて見る事を恥ぢて、そのまゝビルデイングの口に吸込まれた。二階へ上る一段々々には、一層痛みがひどかつた。自分の室に入ると直に、靴をとつて見た。五本の指ははれあがり、爪はみんな血がにじんでゐた。何となく氣分がすぐれず、机の上の仕事にも手を出さず、ぼんやり椅子に倚りかゝつてゐた。ふいと、向側のビルデイングの窓を見ると、たつた今彼に災厄を與へた女が、淡紅色の仕事着をきて、同僚の娘といつしよに、こつちの窓を見てゐるのであつた。なあんだ、あそこ

に勤めてゐるのか――三造は俄に机上の書類に、せつせと盲目判を押しはじめた。
翌日は靴がはけなかつた。繃帯をして、和服で出た。
「どうなさいました。昨日も跛を引いていらつしやつたやうですが。」
「いや、電車の中で足を踏まれてね、はずみといふものはひどいものだ、まるつきり爪先がいふ事をきかなくなりましたよ。」
あふ人あふ人に見舞をいはれ、いちいち昨日の出來事を話したが、それがあの向側の窓の內にゐる若い女だといふ事は、何となく祕しかくし度かつた。しかもその窓は絕えず氣になつた。今日も四人のタイピストが、白いしなやかな手をのべつに忙しく動かしてゐる。顎のくくれた、もみあげの長い、白粉の濃い横顏が、窓わくを額緣にして、近代風の畫面になつてゐる。
間も無く、給仕が一鉢の草花をうやうやしく捧げて入つて來た。それは曾て事務所には見かけない色彩だつた。
「どうしたんだい、それは。」
「階下の花屋が持つて參りました。」
免狀を貰ふ優等生のかたちで、支配人の机の上にチュウリップの鉢を置いて、一歩下つておじ

ぎをした。

「花屋が會社にくれたのか。」

「いゝえ、多分こちらだらうといひますので。今朝お客さまが來て、このビルディングの二階の角から三番目の窓の所にゐる方に御届してくれと云つたさうです。そこに書いたものがついて居ります。」

給仕は廣い葉のかげの紙片を指さした。

お見舞——と厚紙に下手な女文字が書いてあつた。

「よろしい、わかつた。」

三造は耳の根迄赤くなつたかと思つた。そして、給仕の目につくやうに、繃帶した足をわざと横に投出した。給仕は見て見ないふりをして、叮嚀に頭を下げて去つた。その後姿が扉の外に消えると、三造の首は自然に窓の方へ向いた。向ふの窓には四つの女の顔が、電線の上の燕のやうに並んで、こちらの様子を見てゐた。三造の顔を見ると、眞中の一人が笑顔で挨拶した。三造もおもはず誘はれて挨拶を返した。外の三人が眞中のゝ背中を叩いて、四人がいちどきに、さも面白さうに笑つた。

支配人室の机の上のチュウリップは大らかに咲きつゞけ、小使が毎日日向に出して水をやつた。三造は向側の窓に眼を引かれて困つた。向ふでは、視線が合ふ度に、輕い挨拶を形に示して送つて寄越した。三造には、それだけの事さへ大變な冒險のやうに思はれ、人しれず樂しさを感じた。今日迄全く知らなかつた別の世界が、この世の中にはあるのだと思つた。

しかし、三造の身の上には、たうとう最後の審判が來た。

「社長さんが御呼びで御座います。」

給仕が迎ひに來た時、三造ははつきりと運命を感知した。

社長は心のひけめを葉卷の烟のかげにかくして、

「まあ、かけ給へ。」

「どうもいひにくい事なんだが、何分近年の不景氣でね。」

座談は頗るうまいのだが、筋の立つた話の出來ない質なので、一語々々につまづき、つまづく度に尙更いひにくさを增して、なかなか埒があかなかつたが、社長のいはうとする事は、最初の一言でのこらずわかつた。多年功勞があり、殊に自分は大變世話になつたので、何とかして今度の機會に重役に引上げようと努力したが、何分時節が惡く、かういふ際に重役の數をふやす事に

は一同反對する、まことに氣の毒だが、總會が濟むと同時に、停年制によつて隱退して貰はなければならなくなつた、どうか惡からず思つてくれ――といふのに盡きた。

「實際僕としては殘念なんだけれど、微力如何とも致方無いのさ。」

「どう致しまして、私の如き不敏不才のものを長年御引立て下さいましてありがたう御座いました。未だ御恩の萬分の一も御返し致しませんで、私こそ申譯なく存じます。」

三造はすつかり固くなつて切口上を使ひながら、さも嚴肅さうに云つてのけた。

まだ繃帶のとれない足を引擦つて室へ戻ると、永年の勤勞の疲が一時に出たやうに、無氣力になつて、長い間身を托した椅子に深々と腰を下した。もう此の室にも、この机にも、この椅子にもお別れだ。人間の一番活動力に富む時期を、いろいろの餌で釣つて働かせ、働きの鈍つたところで、たゞ一言でかたをつけてしまふ――これが自分達の一生だ。今になつて、如何に無意味なものであつたかゞ、はつきりわかつた。それは寧ろ笑ふ可き程をかしな一生だ。彼はじつと机の上に目を落して動かなかつた。其處には、無意味な生涯の終に近く、ほんの僅かな色彩を加へた草花が、春の日をうらゝかに浴びてゐた。そのチュウリツプの大きな蕾が、はらりと第一の花瓣を開き、つゞいて靜かに第二の花瓣を開いた。(昭和六年九月五日)

二代目

印東賢太郎(いんどうけんたらう)は、日本橋通に聞えた洋品店、千代田屋の一人息子に生れた。一人は缺けたけれど、女の兒ばかり續けて三人生れた後、數年間その事がなく、もう子供は出來ないものときめ込んでゐたところへ、願つても叶はない筈の男の兒を授かつたのだから、印東家の喜びは大したものだつた。多年商賣にばかり勵んでゐたのが、そんな事は二の次になり、どうしたら此の子供を丈夫に立派に育てる事が出來るかといふ、希望と心配に心を攫はれてしまつた。

印東彌平は最も早く洋品店を開いた一人だ。小藩の輕輩の出が、明治初年に大官に隨伴して歐米を廻つて來てから、役人をやめて商人になり、その頃の言葉でいへば唐物屋を始めたのである。時勢を見る事も早く、商才もあつたが、少年時代の儒教の感化、青年時代の經歷から、士魂は根ざし深く、人に乞はれると商賣報國の四字を書いて贈つた。安物を薄利で多く賣るよりも、高級品を輸入紹介する事にほこりを感じ、千代田屋は贅澤やだといふ折紙をつけられ、それが日本の文明開化に貢獻するものと確信してゐた。上等舶來といふ言葉が素晴しい魅力をもつて流行(はや)つた時代に、ロンドン、パリスに憧れる人々が、千代田屋に深く信頼を寄せたのも無理は無い。長い

年月の間には、幾多の波瀾があつたけれど、國運の伸長に伴ふ東京の發達と歐風の浸透は、その道の先驅をなした千代田屋の堅い地盤を築き、印東彌平は一代にして產を積んだ。

賢太郎の記憶がはじまつてからの彌平の日常の行狀は、二十年間一日も變らず、自分でたてた規律を守り、掟に從ふ事で貫いた。その頃は未だ店と住居はいつしよだつた。店の者よりも先に主人夫婦が起き、夜はみんなを寢かした後で床に就いた。彌平は朝の食事が濟むと新聞を讀み、洋服に着換へて店に出た。洋品店のあるじとして生活を少しでも洋風にしようといふ爲ではなかつた。士族あがりの根性が、一般の商人のやうな角帶に前かけの姿を嫌つたのだ。彼にとつては、それがひとつの見識だつた。官員が大もてにもて、威張ちらした當時、自分から進んで商人になりはしたものの、あんまり低く頭を下げるのをいさぎよしとせず、獨立自尊の精神を形に示さうとしたのである。さういへば商品の並んでゐる店も椅子卓子にし、應接間があり、事務室があり、すべて其の時代の洋式だつた。彌平はその事務室で帳簿を見、時には自身店頭に出て客にも接した。共稼を理想として、妻は現金方を擔當した。でつぷり肥つたおかみさんに見てゐられると、小僧達は無駄口もきけなかつた。彌平は店に出ても、軒並の商人のやうに、揉手をしたり、頭をかいたり、膝の下迄手をさげておじぎをしたりする事はなかつた。客を捉へて歐米の風俗習慣を

教へたり、文明開化の實況を說いたりした。彼の外遊の日が十年たち、二十年たち、三十年たち、向ふの風俗習慣が夙に變つてゐるにも拘らず、昨日今日の事のやうに自分の眼で見た事を信頼しつゞけた。

彌平が洋服を着たり髯を蓄へたりしたのは全く自分の格式を保つ爲で、洋風崇拜の爲ではなかつた。だから番頭や小僧は昔のまゝの御店風で、客に對する挨拶も極端にへりくだつた式で訓練してあつた。

晩の食事の時も彌平はまだ洋服を脫がなかつた。窮屈な膝を正しく坐り、子供達に行儀の範を示した。夜、店がしまり、店の者が表二階に引上げ、子供達が寢かされてから、湯を浴び、はじめてくつろいだ姿になつて、葡萄酒を飲むのが唯一の樂みのやうに見えた。日本酒はよくないが洋酒は藥だといふ迷信を持つてゐた。つひぞ家をあけた事もなく、宴會などに行つても早めに引上て來て、醉つたところは誰も見た事が無かつた。

その彌平に、他所に圍つた妾があり、子供が二人あるとわかつたのは、彼の死期が迫つてからの事だつた。さういへば一週間に一度、きまつて水曜日の晩は、家の者といつしよに食事をしない習慣だつた。倶樂部の晩餐會に出席する爲だと子供達はきかされてゐたが、その水曜日こそは

彌平が築地の妾宅で、そつちの家の者と食卓を圍む日だつたのである。

賢太郎は幼少の時から體が丈夫でなかつた。おとなし過ぎるといふのが兩親の心配の種だつた。小學校では、好きな學科と嫌ひな學科がはつきりきまつて、讀方や綴方や書方や圖畫はいつも滿點だつたが、算術はまるつきり出來なかつた。中學では代數幾何物理化學といふやうな苦手があらはれた。家庭教師をつけたり、學校の先生の家へ通はせたりして、親は一生懸命だつたが、本人の頭には少しも入らなかつた。一方、好きな事には夢中になり、友達と廻覽雜誌を作つたり、水彩畫の寫生に出かけたりしはじめた。學藝會の催のある時には、彼の出品が校中第一の折紙をつけられた。さうなると段々本格的にやつてみたくなり、水彩では物の實體感を適確に表現する事が不可能だから、油繪に移らなければ滿足出來なくなつた。少年の手すさびが、將來をかけての野心に變りかけた。彼は油繪に必要な材料を購ふ事と、或畫會の研究所へ通ふ事を父にせがんだ。その當時の賢太郎にとつて、繪を描く事以上に此の人生を生甲斐ありと感じさせるものは無かつた。

彌平は斷じて許さなかつた。

「お前はゑかきにでもなる氣なのか。」

もつてのほかだといふやうに、廣い額に不機嫌の皺を刻んで、我子の顏を見据ゑた。その日の事を賢太郎は後々迄はつきり覺えてゐた。父のむづかしい顏、心配と狼狽と憤と入りまじつた顏、せき込んで震を帶びた聲、それよりも其の時父の指の間に紫の烟を吐いてゐた葉卷の香迄忘れる事が出來なかつた。

「なれるものならなつてもいゝと思つてゐます。」

「馬鹿なッ、そんなものになつてどうする。」

いつもと違つた權幕に、つひぞ叱られた事のない賢太郎はびつくりして、何故さう怒るのか父の眞意はわからなかつたが、平素學校の成績の惡いうしろめたさにもひけめを感じて、自然に頭が下つてしまつた。來るなと思ふと果して父はそこを突込んで來た。

「お前はこの間の試驗にも成績は不良ぢやあないか。この前の時はおなさけで及第させてやつたが、今度は嚴重に採點すると主任の先生が云つてゐたぞ。平生の心がけがよくなくて、繪なんか描いてゐるからいけないのだ。」

父の言葉のうらには明かに、ゑかきなんかは道樂商賣で、そんな事では飯は喰へないぞ、うちには立派な家業がある、そのあとを繼ぐ者が間違つた方向へ氣をそらすなどとは飛んだ事だと云

ふ意味が含まれてゐた。
賢太郎は自分自身の學業の出來ない腑甲斐なさを恥ぢ、泣き度くなつてゐたが、父の言葉には何等の權威を認めなかつた。自分にとつては何にもまして立派な仕事だと思はれるゑかきが、何故それ程いやしめられるのか、シヤツだの股引だの靴下だのを商ふ洋品店の方が遙かに下らない商賣に思はれた。
この問題は賢太郎よりも彌平にとつて一層重大だつた。自分の築きあげた店のあとをとらせ家業を勵ませるといふ事は、慾でも利己心でもなく、それが我子の一生を一番幸福にするものだと思ふからだ。うまく行くか行かないかわからない外の事に進まれては、あぶなつかしくて見てゐられない心持だ。賢太郎の方では、必ずしもゑかきになり度いのではなく、たゞ油繪を描き度いのであつたが、それから深入りされる事が怖くて、彌平は繪の具を購ふ事さへ許さなかつた。折角の申出を阻まれて悄氣(しよげ)てゐる樣子を見るのは苦しかつたが、父親のひたむきな愛情から出た警戒は、その子の希望にうち勝つてしまつた。
それでも賢太郎はあきらめ切れず、研究所へ通ふ事は差控へたが、ひそかに小遣をためて油繪の具を買ひ、自己流で畫布を汚して心を慰めた。彌平もうすうす知つてはゐたが、それを捨てろ

と迄は云はなかつた。

その次には、同級の文學好の少年が寄集つて作つた廻覽雜誌を、うつかり机の上に置忘れて彌平の眼にとまり、はげしく叱責された。中學生の感傷過剩の文章は、極めて不健全なものに思はれた。殊に賢太郎の筆になる、一人の中學生が途中ですれ違ふ小學女生徒の美しさを讃美し、その少女こそ生ひ立つて自分の妻となる運命を持つてゐるのだと心にきめて、はかない思慕の情を寄せる小說風の文章は、彌平の心配の種になつた。三人稱で書いてはあつたけれど、父親は讀んでぎくんとした。こどもだこどもだと思つてゐたのが、何時の間にか戀だの愛だのといふ文字を綴つてゐるのだ。見馴(なれ)ない文字は彌平の顏をあかくさせた。

その晚、寢酒の葡萄酒を飮みながら、父は息子を呼びつけた。もう寢てゐるから明日にしてはといふ妻のとりなしもきかなかつた。

「繪をかいたり、小說をかいたり、ろくな眞似はしない。勉強中のものが、あんな事を書いて羞しくないのか。」

小說家だとか詩人だとかいふものは、すべて國家の爲にならない遊惰の徒であると信じてゐる父の言葉は、叱られながら默つて輕蔑してゐる息子の頭の上を、何の手ごたへもなく通り越した。

「今からそんな横道へそれてゐては、高等學校の試驗はうけられないぞ。お父さんのいつた事はわかつたか。わかつたらあつちへ行つてよろしい。」

最後のいましめを聞いて、ぴよこんと頭を下げ、自分の部屋へ引取つてゆく廊下の途中で、賢太郎はわざとあくびをした。繰返して同じ事を云ふ父の言葉は身に沁みなかつたが、その場の景色は何時迄も昨日の事のやうにはつきり殘つた。酒であかくなつた父の顏、その父に團扇の風を送る母のわざとつれなく無表情にした顏、食卓の上のグラスの底に眞紅に透き通つた葡萄酒の光輝いてゐたのまで忘れなかつた。

さういふ風な或る時々の特殊の場景や、色彩の記憶を賢太郎は澤山持つてゐた。三歳の年に熱海へつれて行かれ、宿屋の軒先に橙の黃色く鈴なりになつてゐたのをまざまざと覺えてゐる。そんなちひさい時の記憶があるわけがないと家人は否定したけれど、其後その宿屋に行つて、幼兒の記憶その儘の位置に橙の實のたわゝなのを見た。

幾歳の頃か知らないが、はじめて動物園に行つた時の、同行の姉の着物やリボンの色もありありと眼に浮べる事が出來る。學業に自信の無い賢太郎は、そんな賴りにならない事迄も數へて、自分には藝術家として何か惠まれたものがあるのではないかと思ふ心持になづみ勝だつた。

賢太郎は、學校では至つて特色の無い生徒だつた。學業は出來ないけれども、外の出來の惡い生徒のやうにずる休みをしたり、先生をてこずらせるやうな事はしなかつた。スポオツには一切手を出さなかつた。やつたところがうまくなれる見込はないと、自分にわかつてゐた。曾て友達と喧嘩した事が無い。誰からも尊敬される事も無いかはりに、誰にも嫌はれなかつた。先生達も彼の出來の惡いのには弱つてゐたが、教員會議にかゝると皆の同情が集つて、結局びりに近い席順があやふく及第して行つた。

彌平は、役人をやめて商人になつた程の精神を持ちながら、明治中期の官學崇拜心を振捨る事が出來なかつた。長女は法學士に次女は工學士にかたづけ、賢太郎にも高等學校の試驗を受けるやうに希望した。本人にとつては、どうせ駄目とわかつてゐる事に努力するのは馬鹿らしく、そんな學校には入れても入りたいとは思はなかつた。つゞけて學校に通ふのなら、美術學校に行きたかつたが、それは許されないときまつてゐた。いやいや受けた高等學校の試驗は二度とも失敗し、結局無試驗で入れるミツション・スクールの大學部に籍を置いた。中學時代と同じやうに、學業は出來ないがおとなしく、誰からも尊敬されないが、誰にも憎まれない、平凡な學生々活を續け、あと一年で卒業といふ時に、突然父の彌平が死んだ。

他家の結婚披露に招かれ、いゝ機嫌で歸つて來たのが、モオニング・コオトを脱ぎながら意識を失つてしまつた。腦溢血で、その儘自宅に寢かされ、醫者は最初から匙を投げた。年齢も年齢だし、家の者も覺悟をきめたが、一時小康を得て、これならばと素人賴みをかけた事もあつた。しかし病人自身が死期を知つて、それ迄は妻と番頭の中塚の外誰にも知れてゐなかつた妾とそのこどもを、呼んで貰ひ度いといひ出した。母親の口からそれを聞いた時、賢太郎は思ひもかけない人間の出現に吃驚し、二十年間も自分達をあざむいてゐた父に對して憤慨した。

しめ切つた病室の、病室特有の匂ひの中で、鉢の梅が眞白に咲いてゐた。病氣になつてから、急に老を加へた父の顔に、うつすりあぶら汗が浮んだ。不思議に緊張した心持で、母と長姉と次姉と賢太郎と看護婦が坐つてゐるところへ、その人達が靜に入つて來た。賢太郎は一目見て、はつとした。あまりの驚きに呼吸が詰まり、ひそかにいだいてゐた敵意を忘れてしまつた。母親の後に金釦の學生服の青年と、その妹がしたがひ、病人をはゞかつて無言で一同に挨拶した。その母と娘こそ、豫て賢太郎が世にも稀なる美しい親子だと思ひ、往來で、劇場で、見る度に讚美のおもひを増した人だつた。殊にその娘は、中學時代から行末の美しさを想像し、初戀に似た感傷をいだいて小說風に書いた事もあつた。さうだ、いつだつたか廻覽雜誌に寄せたのを父に見咎め

られ、叱責された事があつたつけ——萬感胸に至り、あやふく涙を感じた位だ。
親子はかはるがはる病床の父の顔の上に顔を持つて行つて、無言の見舞を寄せた。病人の顔面に著しい感動があらはれ、大粒の涙があからさまに頬を傳つた。よね——妾の名——は半巾でそれを押へて、更にその半巾を輕く自分の瞼にあてた。
印東一家の者の異樣に鋭い注視の中で、親子の起居振舞は少しも惡びれずに立派だつた。賢太郎は胸の轟く喜びを味つた。この美しい娘が自分と血を分けた兄妹なのだといふほこりをさへ感じた。それにしても、あの小説風の文章を讀んだ父は、自分がこの義妹の幼い姿に思慕の情を寄せたとわかつたのだらうか——まさか——と彼はすぐさま打消したが、打消しても打消しても、消し難い感情は苦しく胸に殘つたのである。
その日から母子のものは毎日看病に來る事になつた。それは賢太郎が母親を說いて許した事だつた。どうせ彌平の壽命も長くはないとわかつてゐるので、母親も異存をいふところは無かつた。
賢太郎は近々と義妹——美禰子の端麗な顏の何處かに自分に似たところ、父に似たところは無いかと思つて見たが、それは大きい耳朶の外に何も發見する事が出來なかつた。しかしその耳朶の相似を見る度に、今死んで行く父といふものが、この美しい娘の體の中に、いのちを殘して行

くのだといふ感慨が深かつた。
そのくせ彼は、同じ親しい感情を、義弟の愼一に對して持つ事は出來なかつた。好意を持つどころではなく、彼は憎惡と嫉妬に惱んだ。金釦の學生服は着てゐるが、愼一は學校を半途でやめ、今は或大家のアトリエに通つて油繪を習つてゐるといふのだ。それを聞いた時賢太郎は瀕死の父に對してはげしい憤を新しくした。自分には許さなかつた事を、この男には何故許したのか――恐らく父はあととりの自分にあやまちのないやうにと考へたのではあらうが、矢張依怙偏頗のさばきの底に、愛情の厚薄があつたのではなからうか。妹よりももつと生地の白い、額におかつぱの前髮を垂らし、ちひさい唇が異常に紅く、男が見てもなまめかしい容貌のくせに、脊も肩幅も自分に比べて高く廣い體つき迄、賢太郎は忌々しく思ふのであつた。それでも、學生服の胸や袖口に、コバルトやレモン・イエロオの繪の具の汚點のついてゐるのを見ると、昔の夢がなつかしく、彼の先生の事や、畫室の有様や、最近の畫風や、いろんな事を聞いてみるのであつた。
「今度、君の描いた繪を見せてくれませんか。」
「駄目です。他人に見せるやうなものぢやあないんです。」
「風景ですか、靜物ですか。」

「この頃は裸婦をやつてゐます。僕には人體が一番面白いんです。今年の秋は上野の展覽會に出してやらうかと思つてゐるんですけれど、いゝモデルがありませんでね。妹のやつに裸になれつていふんだけれど、承知しないし……」

他人に見せる程のうでではないといふそばから、自信のある口をきいたが、賢太郎は美禰子を眞實の妹に持ち、冗談にもしろ裸になれといふやうな親しい口のきける相手に益々嫉妬を感じた。

もういけない、もういけないと云はれながら、彌平は春のなかば迄もつて、やがて空氣の抜けるやうに死んだ。賢太郎は父の死を悼む心の底に、それよりも強く、父が死んでしまつては、もう美禰子達も此の家に足踏みしなくなるのではないかといふ事を惧れた。それには、多年父に妾のある事を承認してゐた母が、今となつては一番彼等を憎む人であつたから。

自分が死んだら開いてみろといつた彌平の手箱の中の遺言は、母と賢太郎と姉達夫婦と番頭の中塚とが、列座で封を切つた。

余は獨立獨行何人の助力をも仰がず今日に及び、天下の富豪とはもとより稱し難きも、刻苦勉勵の賜は老舗の暖簾と遺族の者將來衣食住に窮する事なく安樂に世を送るに足る資財を積む事を得たり、これ偏に聖代の御代の恩澤に外ならざる事今更いふを俟たざれど、又余が長

き生涯の間に不義不正を爲さず、榮達を求めず、自ら信じて行ひたる家業專一に努め勵みし成果と知るべし。

冒頭の文章は序論に等しく、自分が率先してはじめた洋品店を末代迄の家の業と思ひ、他のいろんな事に手を出してはいけないといましめ、

つらつらおもんみるに相續人賢太郎に商才ありや否や疑はしく余が築きたる商業の地盤を守り愈々繁榮に赴くや否や心許なき限りなれば衆智を集めて事を行ふ方法に則るこそ萬全の策ならんと信ず、よつて余の死後は組織を改めて株式會社となすべし。

長姉の夫で長く役人生活をし、今は職にはなれてあせつてゐるのが、妙におごそかに讀上げるのを聞きながら、賢太郎はむらむらと反感を催した。何故商才の無い者に商賣なんかさせるのだ。自分はもともと商賣人になんかなりたくはないのに、それをつかまへてはつきりと、才能の乏しいものだと親戚に迄知らせるとは何たる事だ。慈愛深い親ならば我子の才能の向く方に自由に赴かせるのが當然だらう。それを、この男では家をつぶす心配があるから、株式會社にして手足を縛れといふのか——彼はその遺言の中に亡父の愛情を感じないで、その得手勝手と利己主義を認めた。

商號、資本金額、一株の金額、役員の顏ぶれ、各人への割當株數迄細々と定めてあるかと思ふと、接客の態度や雇人の待遇に迄注意が及び、明かにこの遺言は相當の年月の間に、時々の思ひつきを書加へて行つたものと思はれた。長々と文章體で書いたところがあるかと思ふと、突然箇條書になつてゐるところもあつた。その箇條書の中に、

一、賢太郎學校卒業結婚の曉は二代目彌平襲名の事

但同人の人格素行等親戚一統の眼鏡に適はざる間は之を延期する事

冗談ぢやあない――賢太郎は讀上げる姉の夫の方へ苦笑して見せたが、讀み手は一生懸命讀んでゐるし、聽く者も行儀よく膝に手を置いたり、考へ深さうに腕を組んだりして、恰も故人の口づからいましめを聽かされてゐるやうに堅くなつてゐて、振向いてくれる者はなかつた。

長女にも次女にも財産が分與され、永年彌平を助けて店を繁昌に導いた番頭の中塚にも株の割當の外に形見の功勞金が與へられたが、最後に妾の大津よね親子の者には、前以て生計に差支ない丈のものが分けてあるから、その點心配無用であるが、よねは無教育の者、愼一美禰子は若年未經驗の者であるから、萬事相談に乘つて誤の無いやうに指導してやつて貰ひ度いと書いてあつた。

右思ひつく儘を我が亡き後の爲に書き記すものなり

妻子らに幸多かれとかきのこす

深き心を忘るゝなゆめ

・讀み終つた長女の夫は、一同に叮重なおじぎをして卷紙を元の通り卷き込み、首席の母の手へ返した。母はそれを押頂いてからうやうやしく佛前に置いた。

「わたくしもはじめて拜見したのですよ。」

母はもう一度繰返して讀み度い衝動を押へつけて、一座の者に聲をかけた。

「わたくしは女の事で、よくわかりませんから、いづれあらためて御相談の上、何事もお父さんの思召の通りにし度いと思ひますが、只今のおかきのこしの事については、どなたも御異存はありませんでせうね。」

一同は言葉にならない、吐息のやうな聲を發して、頭を下げた。

「賢太郎もよくわかりましたね。」

これがあととりの一番大切な人間だといふやうに、隣に坐つてゐる息子の顔をのぞき込んだ。

「僕、彌平なんて名前を繼がされるんですか。ひどい事になるもんだなあ。」

眞實そんな事は御免かうむり度いのだが、むきになつて云ふのも馬鹿らしく、冗談めかして云つてみた。

「いゝわよ、賢ちやん。ちつとはもつともらしくなつてさ。」

長女がからかひ面で横合から口を出すのを、母親は眞面目にたしなめて、

「何といふことです、そんなふざけた口をきいて。印東彌平といへばどなたも知つてゐる立派な名前です。それを賢太郎に繼がせようとおつしやるのは、お父さんの深い思召なんですよ。」

何か先祖代々傳はる尊い物のやうにいふ母の言葉に賢太郎は愈々氣が腐つた。

「そんな立派な名前では、僕みたいな者は名負(なまけ)してしまひますよ。尤も人格素行が親戚の眼鏡に適はなければ拜領しないで濟むらしいけれど……」

母親は我子の不謹愼な言葉を打消すやうに、

「だからあなたはしつかりしなければいけないのです。あなたが一人前になつて二代目を名告(なの)る迄は、お父さんの御名前はあたしがお預りして置きます。」

異存も何もあるわけのものではないといふやうに、母親は話をたち切つて、佛前に行つて燒香し、口の中で何事かを念じた。

時分どきになつたので、別室で食事が出たが、佛前とは違つて誰しもくつろいだ氣持になつた。自然、話も遠慮がなくなつた。

「お父さん矢張あつちの人達には前以て財產をやつて御置きになつたのね。」

長女は一寸皮肉な口吻で、誰にともなく云つた。

「その方がいゝんですよ。後々の面倒がなくて。」

母は內心はどうあらうとも、妾の事などで心をみだす事はないといふ一段高い態度を見せる事に自分を馴らしてあつた。

「でもあたし、ほんとに知らなかつたわ、あゝいふ人達があつたつてこと。」

次女も女らしい反感を見せて、口にはいはないでも姉と共通の心持で居る事を示した。

「あたしだつて全く驚いちやつた。お父さんその方は隨分眞面目らしかつたんですもの。」

「お母さんはもう先から知つてゐらつしやつたんですつてねえ。それをよく誰にも話さずに來られたものねえ。」

「それはあなた、いつてみたつて爲方の無いことだもの。」

娘達にきかれるのをうるさがる樣子をしながら、母は自分のとつた態度を手柄話のやうに、次

々と話したいのだつた。よねは新橋の藝者で、美貌で名高かつたが、長く商賣をしてゐたわけではなく、彌平に落籍されて圍はれた。最初は母親も知らなかつたが、出入の者の告口で彌平を問詰め、白状させた時には、もう男の兒が生れてゐた。

「さうまでになつたものを、無態に見捨てる事はあたしの氣持としてもいやだしね、うちの子供や店の人達に知れてはしめしがつかないから一切この事は誰にもいひますまいと心に誓つて、今日迄おくびにも出した事はないのさ。」

「それ以來毎週水曜日は倶樂部で晩餐といふことになつたのか。」

賢太郎は其の場の話題に不快を感じて、刺を含んだことを云つた。この儘默つて聽いてゐると、あの親子が辱められるやうな話に落て行きはしないかと惧れたのである。父のやうな年寄が、あゝいふ綺麗な人を金づくで縛つてゐたのかと思ふと、義憤を感じるのであつた。

「倶樂部の晩餐はよかつたなあ。はつはつはつは。」

長女の夫が濃い髯で覆はれた口を大きくあけて笑ふと、次女の夫も共々に、愉快さうに笑つた。

彌平の遺言にしたがつて、日本橋の千代田屋は、株式會社千代田屋となつた。賢太郎が學校を卒業し、二代目彌平となる迄は母親を社長にする事になり、一族の男女に番頭の中塚を加へた株

主の中から、遺言に指定されたものが役員となつた。賢太郎はよねと美禰子に對して親切を見せたいのが本心で、築地の一家から愼一を加へてはどうかと主張したが、そんな事は遺言に書いてないといふ理由で一蹴された。株式組織になつたからといつて、店のしきたりには何の變りも無かつた。社長の母は終日店に出て現金出納を扱ひ、取締役の中塚は朝早く通つて來て店のしまる迄勤め、常務取締役の賢太郎はつゞけて學校に通ひ、店の仕事を見る事などは一度も無かつた。重役會といつても、一族のものが集つて共に食事をする外には相談する程の事項も無かつた。

その年の九月朔日が地震だつた。賢太郎は夏休で、いつもなら海か山へ出かけるところだが、父の死んだ今年だけは遠慮した方がいゝといふ母の意見で、家に寢ころんで好きな小說本を讀んで暮らした。それが、きびしい暑さに骨の髓迄疲れ、無氣力になり、食事もすゝまず、げんなりしてゐるのを見て、母親が第一に狼狽(あわ)てゝ、八月の末から東北の溫泉場へ出してやつた。久しく手にしなかつた寫生帖や水彩畫の道具を携帶し、山峽の風光をスケッチしたが、暫く遠ざかつた繪筆は思ふ半分も自由にならず、構圖をまとめる力も乏しかつた。此の秋の展覽會には出品するといふ愼一に刺戟されて、自分も亦繪を描かう、出來る事なら師匠について本式に油繪を學んでみたいと、ひそかに考へてゐたのだが、そんな自信はなくなつた。彼としては、自分にも天分が

無かつたのではない、あるにはあつたのだが、父親の爲に押へつけられ、踏躙られてしまつたのだと思ひ度かつた。彼はたゞ湯にひたり、寢ころんで無爲に惱んでゐる折柄だつた。

東京は全滅したといふ報道に驚いて宿をたつた。荷物のやうに積み込まれた汽車の中で、我家の事、母の事、店の者の事は勿論心にかゝつたけれど、それよりも氣にかゝるのは、築地の一家の事だつた。つい旅へ出る前のこと、夜涼にかこつけて、その家を探してみた。小ぢんまりした二階家で、格子づくりの入口に大津とだけ書いてある表札が、たしかに父の手跡だつた。正式に稽古したのではないが、字を書く事は父の自慢だつた。二度三度往つたり來たりしてみたが人の聲も聞えなかつた。塀越に枝を延ばした百日紅が、夜目にも眞盛りだつた。

さぞかし人死も多かつたであらう。車中の噂では、本所深川の住民は全部燒死んだ、暴徒が爆彈で生殘つた市民の命をねらつたと、最大級の言葉で無慙な光景ばかりを描出するのであつた。老いたる母も死んだらうか、築地は元々地盤の惡いところへ、海嘯もあつたといふ、美禰子の死體。――半分肉體の露出したのが、河岸の崩れにひつかゝつて、水びたしになつてゐる――いつかみた昔の大地震の繪草紙が、現實のものになつて眼の前へ來た。

東京へ着くとすぐ、上野の山から全市を見下した。眞晝の太陽に照らされながら、一面に餘燼

をあげてゐるところだつた。彼はその煙の間を、とぼ／＼歩き出した。あまりの事に何も考へる力が無かつた。家が焼けようと、誰が死なうと、そんな事は構はなかつた。たゞ美禰子だけが生殘つてゐたら――ノアの洪水のやうに、たゞ一組づゝの生物が此の世に殘されるとして、自分と美禰子だけが選ばれたら――頭から顔から背中へ胸へ流れる汗の中で、顔が火のやうに紅くなつた。

こゝいらが我家だと思ふあたりには、一軒も殘つてゐなかつた。煉瓦や瓦、土藏の骸、もとと木造の家屋は、あとかたもなく焼けてしまつた。賢太郎は焼土の眞中に立つて、何も考へずに、たゞ直射する日光と、土のほてりを感じるばかりだつた。

「若旦那ぢやありませんか。」

突然聲をかけられて、出入の鳶の者の煤けた顔を見た時、彼ははじめて母を思ひ出した位だつた。

「大變な事だつたねえ。」

「大變も何もあつたもんぢやありませんや。東京はいつたいどうなるんだか。」

中年の仕事師は手にした鳶口を自棄に振つて、悲壯な顔つきをした。

「それでもまあ、御宅なんか皆さん御無事だから御目出度い方でさ。」
「あゝ、みんな無事だつたかい。」
賢太郎が自分の留守だつた事を云はうとするのを、先方は感で受けて、
「なあんだ、まだ皆さんたあ對面なしですかい。」
「今上野に着いたばかりだ。いつたいうちの者は何處にゐるんだらう。」
「はゝゝゝ、うちの者は何處にゐるか、全くね。御存じないんだ。」
捨鉢な、泣出しさうな笑だつた。店は地震では別段の被害もなかつたが、火に追はれて逃げ、二重橋の前に野宿したが、今は牛込に空家を見つけて入つたと、町所迄聞かされた。
「まあ早く行つておあげなさい。ふだんは偉い方だけれど、おかみさんも此の際若旦那がゐなくては心細いや。」
さういひ送られて、賢太郎は我家の燒跡を離れたが、彼は一寸歩き出してから、反對の方角へ向をかへた。鳶の者が不思議がつて何時迄も見送つて居るのを知りながら。
又とぼとぼと燒野原を歩いて行つたが、築地は勿論全滅で、大津一家のものが、無事だつたか何處に落て行つたか皆目わからなかつた。

日の暮に、牛込の奥の立退先へ辿り着いた。探しあてた家は武家屋敷の門構で廣々としたものだつたが、家屋はたち腐れ同然で、山の手とはいひながら、これがよく地震で倒れなかつたものだと思はれる位だつた。玄關の式臺で、念の爲に聲をかけると、一番先にかけ出して來たのは、意外にも美禰子だつた。

「まあ、お兄さま。」

さういつてぺつたり膝をついたと思ふと、又あわてゝ立上つて、

「お兄さまが御歸りになりましたよう。」

と叫びながら奥へかけて行つた。この家の人になり切つたやうな振舞が、非常時のけしきをはつきりさせた。店の若い者が先を爭つてかけ出して來る。中塚夫婦が、愼一が、よねが、そして一番後から美禰子に手を引かれた母親が出て來た。流石強氣の母親も、萬感に胸がふさがつて我子の腕の中で泣いた。

東京がどうなるか、この儘亡びてしまふのではないか、親子顏を集めても、ちつとも見當はつかなかつた。永年住み馴れた日本橋に再び戻る事は出來ないのでは無いかと、滅入込んでしまふ事もあつた。兎に角頭數を減らす必要から、店の者は各々の親許へ歸つて貰ひ、切詰めた生活を

しながら様子を見ようといふ事になつた。ゆがんだ家は戸障子もしまらず、少しでも雨が降ると盥やばけつを部屋々々へ持込んで、雨漏を受けなければならなかつた。それでも賢太郎は樂しかつた。ひとつ屋根の下に美禰子達と住む事が、今迄にないいろどりの多い生活だつた。美禰子は市場へ買出しにも行き、臺所でも働き、賢太郎を兄として信頼した。だが、愼一の振舞には賢太郎も母親も屡々眉をひそませた。

「あゝあ、これで展覽會もおじやんだ。」

はりきつてゐた制作も焼けてしまつた自棄も手傳つて、愼一は無遠慮に寢そべつてあくびばかりしてゐた。朝は誰よりも遲く夜は友達をたづねると云つて出て、遲くなつて歸つて來て戸を叩いた。酒氣を帶びてゐる事も珍しくなかつた。事毎に行儀の惡さが、嚴格な規律好の母親の癪にさはつた。

「あの人にはほんとに困つてしまふ。いはゞ人のうちの居候なのに、あたし達よりも樂をして、贅澤を並べてゐるんだから。」

それがよねのしつけの惡さだといふやうに母親は毒を含んだかげ口をきくのだつた。

「藝術家は普通の人間とは違ひますよ。」

内心自分も不愉快なのだが、母親の前では賢太郎はかばふ役に廻つた。いつしよになつてけなすのは、自分をけちくさくするものだと思ふ心と、うつかりするとよねや美禰子も共々に罵られさうな不安から、寛容な態度を示す事に努めた。もともと先方が此方をたよつてついて來たのではなく、母親が優越感の滿足の爲に、人をやつて苦樂を共にしようと申込だのではあつたが、不自然な氣持は長つゞきしないのだつた。

「あの人達も惡い人ではないだらうけれど、もとがもとだから……」

時々子供をつれて見舞に來る長女や次女を相手に、こぼす事も度重なつた。その氣配は大津親子の方でも夙に感づいてゐた。地震で傾いた家の中で、段々迫つて來る火の手に脅えてゐる折柄、かけつけてくれた印東家の出入の者に助けられて、いつしよに逃げて來たのだが、少しおちつくと窮屈になり、何彼につけてそりがあはないので、一日も早く別れたいのだが、水臭いと非難されさうなので、どうしたものかと迷ひながら、氣弱くずるずるになつてゐた。

何時になつたら人の住む町になるのかと思はれた銀座や日本橋通にも、ちらほらバラックが建ちはじめると、店をどうするかといふ問題が起つた。賢太郎にしてみれば、自分はまだ學校へ通ふ身分だし、もともと商賣には向かない性質だし、自分のうちのやうな贅澤屋が果して今後立ゆ

くものか、下手な眞似をして家の名を汚すよりも、いつそ小ぢんまりとしもたやぐらしをした方が利口ではないかと思はれた。

母親にしても、良人に先立たれて間もない今日、思ひもかけない震災に出あつては、多年の尊い經驗も何の役にもたゝなくなり、どうなる行末かと惱んでゐる折柄、賴りにならない息子を強て商賣をさせるのも心配だし、さうかと云つて此儘店をたゝんでしまふのももつたいなく、亡夫に對してもすまないし、兎角の思案に迷ふのであつた。相談相手の中塚はどんな事があつても千代田屋の暖簾をしまふのは冥利の盡きた話で、萬々一そんな事があつては、一生御世話をかうむつた大旦那に申譯がないといひ張るのであつた。結局この立退先の古屋敷へ、娘婿が召集されて、株式會社千代田屋の重役會が開かれる事になつた。

娘婿はいづれも山の手住居で、ひどい災害をうけなかつたから、下町の人達のやうに東京の行末を悲觀してはゐなかつた。その上、もともと自分達の懐から出資したのではなく、分けて貰つた株式なので、利害關係も薄かつた。母親がくどくどと、商賣の話をし、賢太郎や自分や中塚の夫々違ふ考へを述べ立てるのを、いかにも考へ深さうに眼をつぶり、腕組をして聽いてゐた法學士は、自分が意見を求められる順番になると、何の苦もなく答へた。

「それは賢太郎君が、自分で自分の才能を疑ふものを、無理にやらせるといふのもをかしたものだが、商賣の事ならお母さんがゐらつしやるし、中塚さんといふ創業以來の大經驗家も居られる事だから、別段心配する事はあるまいと思ふ。第一、先代の遺言にも、洋品店を以て永世印東家の業とせよとあつたのだから、それを無視するのは穩當を缺く事で賛成出來ない。」

「全く義兄さんの仰る通りです。賢太郎君としても今から何もしずにひつこんで暮らさうなどゝ考へるのは面白くないですよ。人間あまり暇過ると兎角間違が起り易いものだ。」

工學士も、技術家らしい無人情なものゝ見方で賛成した。

「全く皆樣の御說の通りでして、大旦那がおかくれになつて未だ半年とたゝないのに、お店をたゝむやうな事があつては、佛さまも御浮ばれになりますまい。商賣の方の事なら、口はゞつたいやうですが、こどもの時から大旦那にみつちり仕込まれた手前が、立派にやつておめにかけますんです。」

番頭は、すつかり力を得て、膝を乘出し、結局、みんなが賢太郎一人を取圍んで、意見をするやうな形に展開して行つた。

「ありがたう御座いました。皆さんの御意見もよくわかりましたから、來年學校がすみましたら

賢太郎にも商賣の方に精を出して貰ひまして、佛の心にそむかないやうに致しませう。」

母親は佛前にでも坐つてゐるやうな樣子で云つて、叮嚀に頭を下げた。

どつちつかずで心配してゐた時とは違つて、愈々假普請をして店をはじめると決心がつくと、大津一家が一層邪魔者になつて來た。自分達はのるかそるか命がけで商賣をしようといふのに、あの人達は何といふ呑氣な人達なんだらう、いつ迄も他所の世話になつて、よくも平氣でゐられるものだ、矢張他人の世話になんかなつた人達は違ふわねえ——とけなす時は、きつと複數のあの人達にして、それが妾だつたといふ事迄はつきり、うたはなければ承知しなかつた。さういふ感情を勝手に起して、勝手にじりじりしてゐるところへ、どうしても許せない出來事が起つた。

「愼一さんも毎日遊んでゐるよりは、何か仕事のある方がいゝと思ひますが、幸ひ繪かきにならうと仰るのだから、どうでせう、なくなつたお父さんの肖像でも描いて貰ひませうか。寫眞よりも油繪は、色があるだけ又ひとしほよく似るものですからねえ。」

母親の本心は、ぶらぶらしてゐる愼一を非難するのが第一で、不圖した思ひつきから勸めてみた。

「さあ、そんなひとさまの御顏なんか描けるやうなのでは無いんで御座いますよ。なんですかわ

たくし共にはこれが繪かと思はれるやうなので、とてもお父さまの御顏を描く丈のうでは御座いませんでせう。」

よねはそれが眞實でもあるし、萬一しくじつては困ると思つて、斷らう一心だつた。

「いゝえ油繪といふのは一寸見には似てゐないやうでも、離れて見ると生きてるやうで、いゝものですよ。愼一さんだつて今年は展覽會に出す繪も出來かゝつてゐたといふぢやありませんか。澤山の人に見て貰ふ位のうでがあるのなら、肖像位描けない事はありませんやね。それに自分の親の顏なんですもの、一本々々皺のあるところも承知してゐるし、又お父さんにしても、あかの他人に描いて貰ふよりは我子に描いて貰ひ度いだらうぢやありませんか。」

先方には意地惡く響く言葉で、じつくりと押へてしまつた。その上、出先から愼一が歸つて來ると、同じことを繰返して、

「出來上つたらあたしがどつさり御禮をしますよ。あなたの初商賣なんだから、しつかりやつて頂戴。」

と商人の妻らしい冗談を云つた。

「さあ、それは御斷(おことわり)した方がよかあないかな。僕の繪なんて、とても御氣に入りつこないんだか

ら。」

「いゝえ、あなたが描いてくれゝば、佛さまにとつても、これ程嬉しい事はありませんよ。」

此の一言はよねに對しても再び口を開かせない程手ごたへがあつたので、母親はこれでもかと云ふやうに重ねて云つて見たのである。果して手きびしい手ごたへがあつて、愼一は一寸顏色を變へたが、

「うまく描ければ佛さまも喜ぶでせうけれど、まづいとかへつて御機嫌が惡くなりやしないかな。」

ひとりごとのやうに云つて、それつきり堅く口を閉ぢてしまつた。

愼一は自分達にあてがはれた奥の間で、初代印東彌平の寫眞と睨めつこで描きはじめた。

「お父さんの顏、いざ描かうとなると割合に特徴が無いな。」

そんな事をいつてよねに叱られたが、間もなく仕上げが出來て、一家の者が食事時に、集まる茶の間へかつぎ出した。

「ちよいと、みんな來てごらん、先の旦那の繪が出來たさうだから。」

母親は中塚夫婦や女中達を呼び集めた。床の間に置かれた繪の前に並んで坐り、母親はふだん

は用ゐない眼鏡をかけた。

「へえ、これがお父さんですの。」

不滿足といふよりも憎惡の色が露骨だつた。

「あたしどもにはわからないけれど、これは漫畫といふんですか。」

「漫畫は弱つたなあ。」

愼一はしんそこから愉快さうに笑つた。

「お母さん、愼ちやんのはつまり新派なんですよ。寫眞みたいにすべつこく描かないで、特徴を誇張して感じを強く出さうといふ……」

賢太郎は母に呑込める言葉が見出せないで、辯護の立場に窮した。

「特徴だか、感じだか知らないけれど、お父さんの鼻こんなに曲つてゐたかしら。頰骨だつて隨分高いには高かつたけれど、まさかこれ程では無かつたよ。これぢやあ、まるで顏中地震だよ。」

不快をこらへて、自分の警句で笑つてみせたが、腹の蟲は納まらなかつた。

「ねえ、およねさん、どうでせう。」

「さあ、わたくしにはなんですかちつともわからないんで御座いますよ。ですから愼一なんかに

御描かせになるのは御よしになつた方がいゝと思ひまして……」
「いゝえ、あたしのいふのはさうぢやあないの。あなた方にはお父さんの顔が、かう見えたのかつていふんですよ。」
平生、何事にも動じないといふのがたてまへの母親も、聲の調子を變へて、すつかりあがつてしまつた。
「お母さん、僕は面白いと思ひますよ。よく見て御覧なさい、お父さんの特徴が鋭くつかんでありますから。」
賢太郎は母をなだめるよりも、よねや美禰子の前をとりなす心持が強かつた。
「お前さんにも面白いのかい。そりやあ面白いには面白いだらう、をかしい位のもんだからね。だけど永年つれ添つたあたしには、お父さんがこんな顔だつたとは思へないんだよ。」
母親はきつぱりいひ切つて、よね親子の顔を見据ゑた。長い間おしかくしてゐた敵意が、止度もなく熱した。
「こいつはしくじつたなあ。だから僕は駄目だと云つたんだけれど……」
愼一はこの出來事を、いかにも一場の喜劇のやうに享樂してゐる様子だつたが、いきなり肖像

畫をひつさげると、さつさと自分達の部屋へ引上げてしまつた。
「どうもまことに相濟みませんでした。」
よねは手をついてあやまつたが、母親は何とも答へなかつた。
それから間もなく、大津一家のものは印東の假宅を去つて、本郷の方へ越して行つた。世間も少しはおちついたし、いつ迄も御厄介になつてもゐられないし、殊には愼一の勉強の爲にも、先生の畫室が田端にあるので、少しでも近い方が都合がいゝといふいひわけを、よねは許を乞ふ態度で述べた。
賢太郎は引とめ度くても引とめる理由が見出せないで憂鬱になつた。
「どうして其の家にきめたかつていふと、築地の家にあつたのとそつくりの百日紅があるんですよ。あたし達こどもの時分よく昇つては叱られた事なんかおもひ出して……」
美禰子は今度の借家の家構や室數を賢太郎に話してきかせた。
「築地の家なら僕知つてる。恰度その百日紅が咲いてゐるのも見たよ。」
「あら、お兄さんどうして知つてらつしやるの。」
「君達の家どんな家だらうと思つて、わざわざ見に行つたんだ。」

「まあ、いつですの。お父さまの御たつしやの時分？」
「いゝえ、其頃は君達の事知らなかつた。お母さんの外は誰も知らなかつたんたからね。愈々お父さんの病氣が惡いときまつてから、はじめてきかされたのさ。」
「ほんとに。隨分お驚きになつたでせう。」
美禰子は一寸疑はしい表情で賢太郎の顏を見守つたが、義兄とはいへ若い男が、眞劍に眞面目な顏つきをして居るので、ふいとあかくなつて話をそらした。
「あたし達はよく御店の前を知らないふりして通つたものよ。お父さんが御店に出てゐらつしやるのも見たし、それから何時だつたか、兄さんはお父さんがうちへ來てゐらつしやる時、御店に行つて靴下を買つて來た事があるんですよ。あとでお母さんに叱られたけれど……」
まだ幼氣のぬけない頃の、日蔭者のきやうだいの無邪氣ないたづらが、賢太郎を微笑ませた。
「僕は美禰ちやんが小學校へ通つてる頃から知つてるよ。自分のきやうだいだなんて夢にも思はなかつた。」
彼も警戒を解いて輕い冒險を樂んだ。
「あら、ほんとに。あたしちつとも知らなかつた。」

とし頃の女の本能で、耳朶まで紅くなつた。賢太郎はもう一歩進んで、よねと美禰子を世にもたぐひなき美しい母娘だと思つた事、中學の頃美禰子をおもふ小説風の文章を書いて父に叱られた事まで話し度かつたが、それ丈の勇氣は無かつた。

「君達が行つてしまふのはほんとに寂しいなあ。僕には姉があるばかりで、しかも年齡が違ふものだから、ほんとのきやうだいの味を知らないんだ。だからこれからも美禰ちやん達に時々遊びに來て貰ひたいし、何か他人の力を借りたい事があつたら、どんな相談でも持つて來ておくれ。」

賢太郎は涙ぐましい程親しい心持で話したが、相手には何の感動を與へたとも思へなかつた。

株式會社千代田屋の假普請も、年内には出來上つた。一度親許へ歸つた店の者も戻つて來てそつちに住み、賢太郎親子は郊外に家を探して住居にした。母は多年住み馴れた日本橋の方に寢起しなくては店の監督もおろそかになり、亡夫にすまないといひ張つたが、賢太郎は何時又來るかわからない地震の危險を力說して、やうやく納得させた。店の方は中塚夫婦に一任し、母親は毎朝氣に入りの小僧を伴にして通勤する事になつた。さういふ風に、主人は山の手か郊外から通ふのが、震災直後のひとつの下町風景でもあつた。

心配した程の事もなく、品物は亞米利加からも來た。もう一度原始生活からやり直すのではな

いかと思つてゐたのとは反對に、生命を脅かされた人間はかへつて華美好みになり、贅澤になつた。建物と共に服裝も急激に歐化したおかげで、千代田屋の營業成績は悪くなかつた。
「あゝ、これであたしもお父さんに自慢が出來る。あとは賢太郎が卒業して、嫁を貰ひ、自分で店の商賣を見てくれさへすれば、あたしは直ぐさまお父さんの御側へ行つてしまつてもいゝ。」
氣丈の母親もしみじみさう云ふ時があつた。震災後めつきり白髪が殖え、何彼につけてせつかちになつた。
翌年、賢太郎はどうにかかうにか學校を卒業した。それ迄にも千代田屋のあととり息子として、方々から縁談のあつたのが、俄に數を增し、熱度を加へて來た。學問こそ出來なかつたが性質はおとなしく、つひぞ悪い噂もない、酒も飲まない、夜遊びもしない、家にはどつさり金がある、二人の姉は夙にかたづき、母親はゐるにはゐるがよく物のわかつた人だ――世話好の人間が數へ立てる事每が、娘を持つ親の心をそゝつた。母親は一日も早く嫁を迎へ、孫の顔を見度く、間違の無いうちに息子の身をかため度かつたが、あつちからこつちから持つて來るおさだまりの盛裝した令孃達の寫眞に、賢太郎は少しも興味を感じない風だつた。まだ早い、少しは店の事も覺えて一家のあるじらしくなつてからでいゝといひ張るのであつた。そんな呑氣な事を云つてゐては

困る、亡夫の遺言にも、卒業して結婚したら二代目彌平を名告らせてくれとあるのだから、一日も早い方がいゝといふと、今度は候補者の令嬢の鼻が大き過るとか、目つきが陰険だとか、胸が厚過るとか、かういふ化粧は自分の趣味でないとか難癖をつけ、その上に先方のおやぢが氣に喰はないとか、家柄がうるさ型でいけないとか、ふだんのおとなしい賢太郎に似ない口をきいて手こずらせた。

「ほんとに賢太郎にはあたしも困つてゐるのだよ。」

母親は相談相手の長女や次女にこぼすのであつた。

「賢ちやん誰か好きな人でもあるんぢやあないかしら。」

「そんな事があるものかね。お茶屋に行くんでもなし、カフヱとかにも足ぶみしないし、うちで本ばかり讀んでる變人さんなんだもの。」

母親は一笑に附し、我兒に限つてそんな事があるものかと云ふのが自慢だつた。それでも、はじめのうちこそ諸方からの話を斷るのがひとつのほこりらしい氣持を伴つたが、あまり度々なので母親はすつかりじれてしまつた。自分の眼で見て、何處にも非のうちどこの無い娘に、少しも心を引かれずに一蹴してしまふのが腑に落ちなくなつた。

「お前さんはあれもいやこれもいやで、てんで乗氣になつてくれないけれど、何時迄一人でゐる氣なんだい。大きい姉さんなんかは誰か好きな人でもあるのではないかと云つてるよ。」
賢太郎はふいと顔を紅くしてそつぽを向いた。母親の直感が、何かあるのかなと疑つた位、不思議に憂鬱な息子の横顔だつた。
或日も賢太郎を傍に置いて、折柄遊びに來た次女に、母は同じ愚痴をこぼした。
「さあ、賢ちやんの事だから好きな人なんて無いかもしれないけれど、かういふ人がいゝとか、あゝいふ人が好きだとか、お好みがあるんぢやないの。つまり理想のタイプがさ。」
「へえ、そんなものがあるのかい。」
母親にはよく飲込めなかつたが、何か手強い味方があらはれたやうに膝を乘出した。
「ありやあしませんよ。」
賢太郎はうるさゝうに答へた。
「賢ちやんはあゝいふたちの人が好きなんぢやあないの。あの美禰子さんさ。」
「馬鹿な事をいふもんぢやないよ。」
「いゝえ、美禰子さんが好きだつていふのでは無いのよ。あゝいふ顔だちの人が好きぢやあない

かと思ふの。だつて、あの人のお母さんはうちのお父さんの御氣に入つたんでしよ。さうすれば血筋だから、賢ちやんも同じ御好みぢやあないかと思ふのよ。」
「何をいつてるんだねえ、馬鹿々々しい。」
母親は突拍子もない娘の冗談と聞きは聞いたが、內心頗る不愉快で、それつきり話をうち切つてしまつた。
賢太郎は自分の顏色の變るのを惧れた。姉の口から聞かうとは豫期しなかつた事を聞いて、若しも聲を出したら聲が震へるだらうと思つた。
賢太郎の緣談が少しも進行しないうちに、本鄉の大津の方では、美禰子が懇望されてゐた。その相談によねがたづねて來た。
「まあ、それは御目出度い。さきさまはどういふ方ですの。」
「あちらさまは御醫者さまなんで御座いますよ。病院の院長さんのあととりで、矢張醫學士でゐらつしやるのです。突然あちらから人が見えまして……」
よねの話では、有名な病院の副院長で、病院へ通ふ途すがら、御花の稽古に通ふ美禰子を見初め、あとをつけて住居をつきとめ、性急に話を持つて來たといふのである。

「まあまあ、結構な御話ですこと。杏仁堂といへば大したものですよ。その御子息で、おまけに醫學士さんなら申分ないぢやありませんか。」

「はあ、こちらでは願つてもない事と存じますのですが、なんですかわたくし共ではちつと不釣合な氣も致しますし、御うけしたものかどうか、一度こちらさまの御意見も伺ひ度いと存じまして。」

わざとらしく見える程行儀の正しいのが切口上で、いかにもその結構な縁談に恐縮してゐる様子だつた。

「御話を伺つたところでは大層結構な御縁のやうですがねえ。」

母親はそつちの事なんかどうでもいゝので、ちつとも氣乘がせず、簡單に息子の合意を求めた。

「さあ、病院長の息子で、醫學士で、行々病院のあとをとる人なら、聞いた丈では結構ですが、そのお婿さんになる人の人物はどうなんです。その邊もよく調べたんでせうね。」

賢太郎はせきこんで、自分の縁談には見せない熱心を示した。

「はあ、わたくし共ではどうしていゝのかわかりませんし、あちらさまは有名な御家柄で御座いますから、別段どうといふ事も致しませんのですが、あちらさまでは興信所とかに充分調べさせ

てこちらさまの事も萬事御承知の上で……」
「いゝえ、あつちの事ぢやあないんですよ。向ふは往來で見初めたといふんだから、調べようと調べまいと勝手でせうが、こつちはまるで見ず知らずの人間なんだから、よく調べて見る必要はないでせうか。」
「はあ、さう仰ればですが、何しろあちらさまは立派な病院で、わたくし共もよくあの前は通つて存じて居りますし……」
賢太郎は豫々折目正しい物腰から、昔の面影の殘つて艶めかしく、美しい此の人に嘆稱に等しい、好意を持つてゐたのだが、いくら云つてもこつちの眞意を汲取らないわかりの惡さと、さきさまばかりをうやまつて、不必要にへりくだつてゐる態度に腹が立つた。
「何もこつちから賴んで貰つて貰ふわけではなし、ちつとも卑下する事なんかありませんよ。親が偉くても息子は馬鹿だといふのもあるし、學士なんてものも今時珍しい事はなし、それよりも本人がいゝ人かいやな奴か、品行がいゝか惡いか、よく調べてかゝらないと、取かへしのつかない事になりますよ。美禰ちやん自身は此の緣談を何と云つてゐるんです。」
「あれには未だはつきりとは話してないので御座います。先づこちらさまの御意見を承りました

上で、よからうといふ思召でしたら、今晩にも申聞かせますつもりで伺ひましたのですが、わたくし共には過分の御話で御座いますから、決して異存なぞは御座いません。」

「そんた馬鹿なこと。何よりも本人の意思ですよ。」

賢太郎は苛々した表情をかくしきれないで、自然に聲も高くなつたが、それつきりふつと口をつぐんだ。この人達は日蔭者だと自分できめてゐるんだな――と思ふと、誰を咎めていゝのかわからない不快な氣持が、つうんと鼻孔をついて來た。

賢太郎は忿懣のこゝろを止める事が出來なかつた。自分も曾て美禰子の通學姿に、胸をときめかした事もあつたが、醫學士とかに往來で見初められたといふのが、輕蔑されたやうな不愉快を伴つた。彼は自分の心持を非難し、反省しながら、この縁談を纏めたくない心持が強く、ひそかに祕密探偵社に依頼して、先方のひとゝなりを調べさせた。その報告では、先方の家系や資産には申分なく、醫學士の學績も悪くなかつたが、病院附の看護婦との面白くない噂が再々傳へられ、先年一人の看護婦は妊娠したのを振捨てられ、服毒自殺をはかつた事があり、胎兒は流産したが母體は助かり、親許へ引とられた事件があるのだつた。それを母親や大津一家の者、殊に美禰子に知らせたかつたが、自分が進んで祕密探偵をつかつたといふ事は知られたくなかつた。そこへ

再びよねが來て、本人にも異存はないから、先方へ承諾の返事をしたいと云つて來た。

「實はね、さるところで聞いた事ですけれど、あの醫學士は身持がよくないといふ事ですよ。なんでも看護婦に手を出す癖があつて、妊娠して自殺しようとしたものもあつたといふ噂ですが……」

賢太郎は、斯うも云つたら相手もあわてるに違ひないときめてかゝつたところ、よねはいつもの通り冷靜な態度を失はず、

「さういふ事も御座いましたさうですが、只今ではすつかり手も切れて、何のいざこざも御座いませんさうです。先日伺ひました時の御話も御座いましたので、その邊の事もよく調べて貰ひましたのです。」

ちつとも動じないで答へるのであつた。

「それでは美禰ちやんも一切承知の上で……」

賢太郎は驚いて、言葉も中途できれてしまつた。彼はふいと、勝手にしやがれと云ふ氣持で、憤慨のあまり涙が眼と鼻の間にあたゝかく熱を持つた。あやしまれてはと思つてぷいと立つて座をはづし、かへつて一層あやしまれた。

美禰子の結婚はすらすら纏つて、その年の秋には式も濟んだ。大津の方では印東一族に親戚として式に列して貰ひ度いと申出たが、母親は遠慮するといふ言葉で斷り、何事も親類と思つて相談してくれと云つてゐた賢太郎も、母親の斷りをいゝ事にして顏を出さなかつた。

賢太郎は一時氣の張を失ひ、心が暗くなつた。中學生の頃、誰といふあてもなく女の人が戀しく、とりとめのない思慕の情に惱んだ折柄、學校通ひの美禰子の姿は、少年の夢を白日の下に描き出した。その明眸を歌にし、詩にし、小說にもしてはかながつたが、やがて年頃になると、あまりの美しさに壓倒されるやうなおもひだつた。機會があつたら、それははつきりと戀愛の形をとつたであらうが、意外にも相手は義妹として身邊に近寄つて來た。賢太郎が極度の讚美は、兄と妹の情愛を理想化した。親しみ、可愛がり、力になつてやつて、世にもめでたい人にしてやり度いと思つてゐたのに、素行の惡い醫學士づれをありがたがつて、喜んで行つてしまふとは何といふ世俗的な身の處置だ。滿開の花をむしりとられた口惜さが、彼の女性觀を一變した位だ。新夫婦が披露の日にうつした寫眞を見た時、賢太郎は自分の笑のひきつるのを感じながら、脊のひよろ長い、馬面の、ちよび髭をはやした醫學士が、モオニング姿で白い手袋を握つてゐるのに寄添ふ美禰子の希臘型の顏が、相手の胸の邊にあるのを指摘していつ迄も笑つてゐた。

こどもの頃からいだいてゐた女をひどく神聖なものとする觀念は崩れて來た。賢太郎は寧ろ醜い現實に接して、どうともなれと思ふところへ、又母親が持つて來た寫眞の人を、その寫眞をよく見もしないで承知してしまつた。

「まあ、お前さんが氣に入つてくれてよかつたよ。ほんとにあたしも安心しましたよ。」

母親は內心、もつといゝのが前にもあつたのにと思ひながら、我兒はかういふたちの顏が好きなのかとひそかに合點した。先方は美禰子の通つてゐた女學校の校長の娘で、美禰子とは同級だつた。それが賢太郎の心を多少は引いた。形式を尊んで見合ひがあり、色白の、眼も鼻も口も耳も細づくりの、おとなしい一方の娘が賢太郎の妻と定まつた。

賢太郎の卒業した學校の教授を仲人に賴み、その年の暮に式を擧げ、同時に彼は二代目印東彌平となつた。披露の席には大津一家のもの、美禰子夫婦も招かれた。向ふの時には出なかつたけれど、こつちの時に呼ばないわけにもゆくまいといふ、格式を考慮した母親の意見だつた。式場の入口に仲人や親達と並んで立つてゐる新郎新婦の前に、美禰子夫妻もうやうやしく頭を下げた。

「ほんとに不思議な御緣で。」

と美禰子はすつかり先輩ぶつた優越感を示して新婦に挨拶した。胴長の、ひよろ長い、ちよび

髭の醫學士はこれが初對面だつたが、賢太郎は何かの勝負で打負かされた上、更に辱められたやうな氣持で、丸髷の美禰子と仲よく肩を並べて式場へ入つて行く後姿に、はげしい憎悪の視線を送つた。

仲人の挨拶は長々と兩家の親達の事から說き起し、新郎新婦を型通り秀才と才媛にし、更につけ加へて、

承りますれば先代彌平氏には、夙に泰西の文物に親しみ、當時士族は尊敬せられ、商人は不當にいやしめられた餘勢未だ消えない時代に率先して實業に從事せられ、今日の株式會社千代田屋の大をなされたのは、時世に先んじた卓見の然らしむるところで、まことに敬服に堪へませぬが、先代には此の志を子孫にも傳へ度い思召から、洋品商を我家萬代の業とせよ、又この家のあるじたるべき者は、父祖の遺業を忘却せざるやう、代々彌平を名告るべしと申し遺されたさうであります。卽ち當夜の新郎には、學成り、伉儷を得て名實共に一家の長となり、株式會社千代田屋の社長の重任に就かるゝに及び、許されて二代目彌平を襲名されましたが、想ふに先代の尊き遺志をそのまゝ、將來その名を辱めず、名譽ある家の爲、又大にしては邦家の爲に、愈々益々盡瘁せらるゝ事は私の確信するところであります云々。

と聲をはげまして、滿場の拍手を浴びた。

美彌子が新婦百合枝と不思議な御緣を感じた時、百合枝の方は一層驚いた。學校一の美人とうたはれた美彌子が、新橋の妓を母とし、その母は誰かの圍物だと聞いてゐたが、それが自分の良人になる人の義妹にあたらうとは、あんまり意外の事だつた。

賢太郎は百合枝にあやしまれる程、學校時代の美彌子の事をきゝたがつた。はじめのうちこそ、校內一の美人だとか評判の人だつたとか、あたりさはりのない事を云つてゐたが、賢太郎の追及はどこ迄も逃さず、遂々學校時代に兄の友達の某校の音樂部員と特別の交際があつたといふ噂まで白狀させられてしまつた。

「あの方の御兄さま不良なんですつてね。」

百合枝はきゝての心も知らず、良人の胸の中で話したのである。賢太郎の世の中は急速に色彩を失つて行つた。

學校を卒業してからは、母に促されて店に通つてゐたが、愈々二代目彌平を名告ると同時に、母親は平取締役となつて、息子に社長の椅子を讓つた。いやだいやだと思つてゐた商賣も、自分に責任をしよはされると、おのづからうつちやつては置けない氣持にもなつた。地震で燒拂はれ

た東京は、物資の需要が多く、復興事業の爲に金が動くので、却つて景氣がいゝ位だつた。店は繁昌し、こんな事なら商賣なんて大した事はないと二代目はたかをくゝつた。

しかし先代彌平が生涯を托し、番頭の中塚が外には何の道樂もなく、朝早くから夜遲く迄、一心不亂になつてゐるやうな熱情は、彼には縁遠いものだつた。自分の意思で新しい道をひらき、進んでやらうと決心したものと、生れた時から好き嫌ひをいはせず、どうでも跡を繼がなければならない者とは、違ふのがあたりまへだ。二代目彌平は、何の苦勞もないしあはせ者だといはれる身の張合のなさをはかなむ事が多かつた。店の仕事は一切合切取締役兼支配人の中塚が取しきつてやつてゐて、相談をする事も無かつた。中塚にしてみれば、子供の時から商賣は嫌ひだといひいひして來た二代目に、うるさい話を持かけないで、自分の裁量で處置した方が喜ばれるものと思つてゐた。商賣の事が少しづゝわかつて來ると、二代目は全くのロボツトである身の上にあき足りなさを深く感じて來た。何か自分の創意になる改革を實行して店の若い者にも存在を認めさせ度かつた。

二代目が最初に提案したのは店員の待遇改善だつた。おもひやりは豊かに育つた者の方が深い。年中無休で、十四五時間も働かされ、薄給で、粗衣粗食を供され、行末の希望も乏しい小店員に、

休息の時間と、教養と、給與の改善をしてやつたら、どんなに喜ぶだらう。その方がはげみをつけ、能率もあがるに違ひ無いと、中塚に相談してみた。少なくとも月に二日や三日は店を休むか、それがいけなければ交代で休み度い、夜は何時迄もだらだらと店をあけてゐないで早目に戸を下し、本を讀む時間位は與へ度い、日常のあつかひもよくしてやり、半期々々の決算で營業利益があがつたら、ボオナスもやり度い、その上に出來る事なら退職手當を積んで置いて、獨立して商賣をする者の資本とし、永年勤めて引退する者の老を養ふ貯へにしたい――と二代目彌平は熱心だつたが、中塚はてんで耳を傾けず、若い社長の言葉が切れると、言下に反對の意見を述べた。店を休んだり、早じまひにするのはそれだけ儲を薄くする事でもつての外である、粗衣粗食といふけれど、それはあなた方の眼から見ての事で、彼等は親許にゐるよりも結構な待遇を受けてゐる、給與をよくすれば、喜ぶに違ひ無いが、なまじつか若い者に金を持たせるとろくな事は覺えないで、結局本人の爲にならない、退職手當も結構だが彼等は商賣を覺えさせて貰つてゐるのだから、この上何も餘分の事をする必要はない、昔は年期があけると御禮奉公までしたものだと、常になく苦り切つて、中塚の語氣は荒かつた。

「店の若い者はありがたがつてこそ居れ、決して不平がましい事は申して居ませんよ。」

自分が御店第一に心配してやつて居るのだから何の手落もない、素人のくせに餘計な口を出すなといはんばかりの様子だつた。
二代目は頗る心樂まなかつたが、なほ其上に、中塚は目つけ役の義務を感じて、若い社長の提案を母親の前に報告した。
「お前さんの御意見といふものを、中塚からきゝましたがね、商賣は學校で教へるやうにはいかないものだよ。」
と皮肉まじりに意見されて、二代目彌平は自分が二代目である事を又更におもひ知らされた。
毎朝同じ時間に家を出て、同じ道を省線で通ひ、日の暮には後を中塚や店の者に任せて、又同じ道を同じ乘物で郊外の家に歸る生活が、二代目彌平の一生を貫く事は疑も無かつた。無事ではあるがはりあひのない其の日其の日を、本人は物足りなく思つてゐたけれど、身邊の者は、すつかり安心し、母親はめつきり年をとつた。
尤も、二代目彌平が店の仕事に口の出せるのがひとつあつた。それはショオ・ウインドオの陳列がへの時である。先代彌平の時代から引つゞき、たゞいたづらに品物を積んだり、並べたりする外には、少しも頭を使はなかつたのが、色彩と形態の效果を考へて、季節々々の新鮮な感覺を

そゝるやうな飾つけになつたのは、二代目の繪心が役に立つたのである。中塚は、いゝ品物さへ並べて置けば客は來る、ショオ・ウインドオなんかに金をかけるのは馬鹿々々しいと云つたが、若い店員は一齊に若い社長の提案に贊成し、實行の結果も惡くなかつたので、自說を信じる事のあつい取締役兼支配人もシャツポを脫いだ。

「どうも店の飾つけは、若旦那でなくてはいけないつて事になりました。」

とそれが御世辭で、誰にむかつてもいふのであつた。いつ迄も若旦那と呼ぶ事を改めない此の老人は、子供をあやす心持で、その若旦那にもひとつ丈藝があるといふやうにいひはやした。

結婚の翌々年、二代目彌平は父親となつた。やがて成人して三代目を名告る孫が生れたので、母親の安心は愈々深かつた。二代目彌平は溫良貞淑な妻と愛兒にかしづかれ慕はれて、一層善良な良人であり、父であつた。

震災直後の線香花火のやうな景氣は忽ち消えて、世界的不景氣の本流に卷込まれる日が來たが、株式會社千代田屋は堅い顧客を持つてゐて、繁昌をつゞけた。百貨店が暴威を振つて小賣店は立ちゆかないと世をあげて呪ふ聲がかまびすしくなつても、さしたる影響も受けなかつた。しかし油斷をしてはいけないといふので、若い社長は老支配人の思ひもつかない宣傳に心を用ゐはじめ

た。これがショオ・ウインドオの飾つけ同様、二代目彌平のひとつの樂みとなつた。
今迄にも、季節々々の新荷が着くと、新聞に廣告を出してはゐたが、それは何の意匠もない御義理いつぺんのものだつた。二代目彌平の縮ごゝろは、こゝにも役に立つて、圖案も文案も當節向の氣の利いたものになつた。新聞の廣告面の中で、藝術的效果を擧げた我が意匠に、二代目彌平は展覽會へ制作を出品した畫家の喜びと同じよろこびを味はふのであつた。
知名の人へ郵便でその時々の流行を知らせるのも、二代目の斷行した事だつた。そんな費用をかけては引合はないと中塚は反對したけれど、他所でもやつてゐる事なので、やうやく同意した。ネオン・サインもやつてみたかつた。綺麗な燐寸をつくつて配つてもみたかつた。小冊子もつくつてみたかつた。
「そんな費用のかゝる事はいけませんよ。」
その度毎に中塚は、又かといつた顏つきを露骨に見せて反對した。
しかし、どんなに反對されても、これだけは是非やつてみたいと思ふのは氣球廣告だつた。輕氣球を利用して大空に文字を描く新手が、二代目彌平の藝術的宣傳衝動を鋭く刺戟した。
「いけませんよ、あんな子供だましみたいなものは。」

中塚は苦々しげに手を振つた。
「日本橋の千代田屋といへば誰だつて知つてます。今更そんな廣告をする必要はないぢやありませんか。」
「それがいけないんだ。そんな事をいつて自惚てゐるうちに、デパアトやほかの新店に客をとられてしまふ。競爭者の少なかつた昔とは違つて、絶えず工夫して新しい客を引張らなくてはならないと思ふんだが……」
二代目は一度でいゝから實行してみたく、直ぐにはあきらめ兼たのである。
「駄目ですよ、第一安い金ぢやあ出來ますまい。」
「いや存外たいした事はないらしい。一日二三十圓だといふ話だ。それも一ケ月も特約したら、隨分割引いてくれるだらう。」
「冗談ぢやありませんよ。二十圓も三十圓もする廣告を、いくら割引くからつて一月もやられては、いくら稼いだつて追つきませんぜ。」
あきれて物もいへないといふやうに、中塚はつつぱねた。
「そんならいゝよ、店の會計から出して貰はないで、僕の小遣でやつてみせるから。」

二代目彌平ははじめて中塚のいましめに從はず、おもひのまゝに振舞つてやらうと思つた。それ程氣球廣告は、彼の興味をそゝつたのである。

折柄花時の一週間掲揚の申込をして、彌平は空に描く文字を懸賞で店の者に考へさせた。この新式の廣告は若い者の心に何か朗かな刺戟を與へ、てんでんに頭を捻つて、紙きれにかいたのを持寄つた。「日本橋の千代田屋」「東京一の千代田屋」「洋品店の先驅千代田屋」「新荷到着千代田屋」などゝ常識的な智恵のないのが多く二代目彌平は失望した。

「矢張あの連中は駄目だね、全く頭が働かないよ。」

彼は家に歸つて、自分の宣傳計畫を妻に話し、店の者の氣の利かなさを歎じたが、さりとて自分にも名案は浮ばなかつた。

「春の帽子は千代田屋へ——つていふのいけません。」

妻は自分のさしでがましさが羞しく、頰ぺたの薄皮に血の色を見せて、どうせ駄目なのよといふ風に笑つた。

「そいつはいゝ、それはいゝよ。」

二代目彌平はすつかり恐悅して、ほめられて一層あかくなつた鶴の子餅のやうな妻の頰を指で

突いた。
はじめて氣球廣告が空にあがる日の朝は、二代目彌平はいつもよりも早く起きて、自分で雨戸をあけて、晴天をたしかめた。雲もなく風も無い、光みなぎる春の空が、彼の子供のやうなよろこびを完全に抱擁してくれた。
「お母さんも是非見て下さい。それは氣持のいゝものですから。」
たとへ自分の小遣銭でやるのだとはいへ、中塚の喜ばない事をするのはよくないといつた母も、あんまり息子が得意なのと、嫁も孫もいつしよに行くといふ、あたりの賑かさに誘はれて、あくまでも不承不承を裝ひながら、たうとうつれ出されてしまつた。
數へ年三歳になる男の兒は、父親から母親から、今にいゝものを見せてあげる、この窓の向ふの空に、大きい大きい風船が見え、それがおうちの風船なのだと聞かされて、省線電車に乗ると直ぐ、窓枠につかまつて、まだかまだかと催促した。車中の人の耳が自分達の對話を聞き、その眼が自分達に集つてゐるのも、今日の二代目彌平には惡くなかつた。
山の手の岡や、土堤(どて)には草の緑が萌え、朝の風はかみそりのやうに涼しく横顔を撫で、電車がお茶の水の斷崖の腹をゆるい曲線を描いて廻ると、ひと眼に見える東京の街の上の何處迄も晴れ

た青空に、まんまるいバルーンがぽつかりと浮んだ。その下に、赤と青と黄と紫で

　春の帽子は千代田屋へ

と美事(みごと)に空に文字を描いた。

「あれよ、あれよ、あれがおうちの風ちえんよ。」

一生懸命になつて窓から首を出す子供に頬擦をするやうに、妻も立上つて遠くの空を指さした。こどもは待佗びた氣球をやつと認めて、大きくうなづいたが、くるりと向直ると、祖母と父親の顔をかはりばんこに見ながら、兩手をあげて、ばんぢやあい――と叫んだ。（昭和七年九月三十日）

樹齢

一

おしげは、良人がきたならしく長火鉢の灰につきさした煙草の吸殻の中から、まだ吸へば吸へるのを火箸ではさみあげては、目の前に肱枕で寝てゐる顔に、いたづらの烟をふきつけてやつた。烟は、めつきり薄くなつた頭の地肌にまつはり、未練らしく離れて消えてゆくと、一瞬間烟でかくされたあとの顔は、一層はつきりと、老けて見える。若い頃は痩せた方だつたのが、年と共に無駄な脂肪が首の廻りにふとくかたまり、頬から顎へかけてはだぶだぶのたるみが來たし、眼蓋も重く、額の横皺も際立つて深くなつた。それよりも、みんなが、男には惜いと月並な言葉でほめた美しい皮膚が、いつとはなしにまんべんなくしみが出て、光澤も彈力もなくなつてしまつたのは、まるで不思議のやうだつた。どこかに、昔のいゝ男の名殘を探し出さうとつとめて見ても、それは自分の記憶の外には何も殘つてゐなかつた。こんな男に一生つれ添つてゐる自分を憐れむおもひで、何か口惜い氣もするのだが、特殊の商賣をしてゐた女の考へ方で、斯う迄おちぶれさ

せたのも、もとはといへば自分の爲なのだといつた風な氣もするのである。さういへば、何時の事といふのではないが、自分の膝を枕にしてゐる、額の白い、濃過る髮を綺麗にわけた男の寢顔に、うつとり見とれた古い記憶が、はかなくおもひ出されるのである。おしげはもう一度、吸殼の煙草の烟を、やけに良人の顔へ吹きつけてやつた。

「よせやい。」

眠つてゐるものと思つてゐたのが、半分からだを起してたしなめた。

「あら、起きてたの。」

「あたり前よ、生あつたかい烟を吹きつけられて、眠つてられるかつてんだ。」

「なあんだ、知つてたのか。」

いたづらのばれたのが、かへつて面白かつた樣子で、他愛なく笑つた。

「おい、袴と羽織を出してくれ。殿樣はお出かけだ。」

いひながらむつくり起上ると、眠氣を追拂ふやうに、兩手で顔中をこすつた。

「どこへ行くの。」

「う、一寸浮んだ趣向があるんだ。うまく行けばまる儲さ。」

「おきまりいつてら。あてになるもんか。」

いつも、いつも、出かけには、儲話だといひながら、夕方になるとぐつたり疲れ、不機嫌で歸つて來るのがおちだつた。たまに懷に金が入ると、のんだくれて歸つて來た。勝手にしやがれといつた氣持で、手早く羽織と袴を出してやつたが、着せかけてやる氣にはならなかつた。

「きもの、それでいゝんですか。」

「別段御新調のものもないだらう。」

ふゝんと鼻で笑つて、

「衣裳は汚ない方が哀れつぽくていゝんだ。」

ひとから貰つた袴を無雜作にはき、死んだ父親のかたみだといふ鐵無地の、擦れてぴかぴか光る羽織をひつかけると、壁にかゝつてゐる中折を目深にかぶつて、あわたゞしく格子の外に姿を消した。たらしがなくて、づうづうしくて、そのくせどこかおひとよしで、ほんとに困つてしまふ――おしげは良人がゐなくなると、かへつて何かいとしいやうな、氣の弱い、甘つたるい心持か、白紙に水の滲むやうにいつぱいになつて來た。

五人組だとか七人組だとかいはれた中の一人だつた昔が、ふいと、星の入つたフィルムのやう

に展開される。華族さまの坊ちやんだとか、若様だとか、あととりだとかいふ事よりも、いゝ男で金ばなれがよくて、そのくせ女にはちつとも甘くない態度に、向ふはつい通りの浮氣と承知の上で、こつちは心底から惚れぬき、くつゝいたら離れない覺悟を定めた事などが、悲しい立女形の姿になつて、自分自身の目に浮んで來る。ねいさん株の誰彼との噂も、嘘でないと知りながら、怨まれても、憎まれても、おもひを通して見せる氣持だつた。泣いたり怒つたり笑つたり、あゝあの頃は……

おしげの追想は、たつた一間とはなれない竹垣の外で、ざあつと流した水の音に中斷された。垣根には朝顔が貧しくからみついてゐた。夏が過ぎて段々ちひさくなつた花はぐつたりと日にしぼみ、のび過ぎて枯色になつた蔓や葉は、もう何の希望もない哀れさで風に震へて居たが、その垣根の上に、きらきらと日に輝く雫をしたゝらしながら、干竿に並んだ襁褓が音もなく高く上つた。

二

しつとりとしめつた土の肌は、箒のさきに重く、抵抗し、吸盤のやうに吸ひつけた早い落葉を容

易に手放さず、思はず力が入つて、常吉の日に燒けた額から汗の玉が流れて來た。雨と埃で變色したかんかん帽子をとり、腰の手拭で顏中撫で廻したが、氣力がなくなつて、芝生に腰を落した。肉體勞働の中休みの樂しさは、一筋の煙になつて煙管から咽喉へ、咽喉から鼻孔を通つて空に上つた。

松、樫、椎にまじつて、それよりも高く〱拔んでた栃、槐、柏、欅の梢に風が渡り、かすかに小枝の擦れる音にまじつて、さゝやくやうな小鳥の聲がする。慾のない常吉の心は樂しかつた。何といつても、この廣い邸内の木や石は、自分のてしほにかけたものだ。前の主人が藪を開き、崖を切崩して、家を建てた時、常吉は植竹の若い者として、木を移し、石を置いた。それからざつと四十年、生々しかつた土の色も寂び、樹木は老い、石には苔がつき、隅々迄年代が感じられた。その庭の木の一本々々について、何時植ゑたか、何處から持つて來たか、今は常吉の外に知る者もない。長い間には枯れて行く木もあつた。花の盛には、我身の譽のやうに自慢したしだれ櫻が、赤蟻の巣になつて、年々花が少なくなり、遂には空洞になつて立枯れた時の口惜さは、いつ迄も忘れる事が出來なかつた。樹齡が盡きたのでなく〱、さういふ不祥のあつたのは、何かの前兆に違ひ無かつた。枯れたものをその儘にして置いたところで爲方が無いと承知してはゐても、常吉に

は其の枝を切り、根を掘る氣にはなれなかつた。何かの拍子で氣絶したので、今に又葉がしげり、花の咲く日がありさうで、毎朝梢を仰いで待つたが、そんな奇蹟はある筈が無かつた。何故切らぬか、いつ迄待つても枯れたものは枯れたのだと主人に笑はれて、やうやく手傳を雇つて來て切倒したが、その年の秋、主人は庭を散歩しながら、恰度その櫻のあつたところで、突然大地に膝を突いて倒れ、再び病牀を離れる事なく、逝いた。常吉のあたまの中には、この邸内で起つた事以外に何も無かつた。主人は變つたけれど、自分の丹精した庭には變りが無く、年毎に馴染は深く我がものゝおもひが切になつた。今も今、小やすみの煙草のうまさに、掃清めた庭のすがすがしさをひつくるめて、何も不足の無い心持だつた。

不意に、ぽつかりと人の姿が眼に入つて來た。常吉はそこそこに煙管をしまつて、急いで立上ると、又箒を持つて、せつせと掃き出した。何か、人目のある限りは、長々と休んでゐられないのが、過去の經歷から來た習慣だつた。客は幾度も足をとめて邸内を見廻し、玉川砂利のしきつめてある坂道を、歩きにくさうに上つて來た。

「ぢいやぢやあないか。」

たしかに聞馴れた聲で呼びかけられた。常吉は不吉なものを感じながら、どなたで――きゝか

へす氣は無かつたが、口を塞がれたやうに氣で壓されて、まぶかにかぶつた帽子の下の、相手の顔をのぞき込んだ。

「わからないかい、俺だよ。」

大きな聲で笑ひ出しさうな樣子で、無雜作に帽子をとつて見せた。廣い額が白く、長い髪が垂下つてゐた。

常吉はあわてゝ帽子をとつて膝つ子まで、手をさげて、二度三度頭を下げた。

「久しぶりだつたなあ。」

口邊に微笑を見せたが、なつかしさの笑か、苦笑かわからなかつた。常吉は無闇に恐縮し、自分の手の甲で額の汗をこすつた。

「ぢいやは不相變達者で何よりだねえ。」

「へい、おかげさまで。」

それつきり言葉がみつからなかつた。

この邸を賣拂つて、行つてしまつた舊主人が、年をとり、よくないみなりで、あらはれたので何か不吉な事の起りさうな豫感で、彼の心は顚倒してしまつた。

「こゝの家には、旦那はゐないんだらう。御隱居さんばかりなんだらう。」
常吉は、へえといふ聲もうまく出ないで、たゞ頭を下るばかりだつた。
「一寸御隱居さんに話があつてね。」
いひ捨てゝ、舊主人は、張合のない常吉に愛想をつかしたやうに歩き出したが、二三歩行くと顏だけふりかへつて、
「さよはどうしたい。達者かい。」
じつと常吉を見てゐたが、返事がないのを輕蔑するやうに、怒つた顏をして向ふをむいた。肩幅の廣い、背中の肉の盛上つた後姿が、陸軍の將軍だつた先代の其の頃にそつくりだつた。常吉はほつとして、玄關前へかゝつてゆくのを、見ては惡いものゝ氣がしながら、見ないではゐられなかつた。

三

「奥さま、かういふ方が御見えになりました。」
取次に出た執事が、名刺受にうけた名刺を差出した。老夫人は亡夫の寫眞の飾つてある佛壇の

前で、花をいけてゐたが、その名刺の子爵小岩井清彦とあるのを見ると、ふつと顏が曇つた。
「ゐるといひましたか。」
おもはず叱責するやうな調子になつた。
「はあ、たしか、いぜんこちらに御住居の方と存じまして……」
執事は、子爵といふ肩書に對して、斷つては後で叱られる相手だと思つてゐたので、かへつて不興なのが意外だつた。
「御斷り致しますのでせうか。」
「居ると申上げたのなら逢ひませう。御通しなさい。」
きつぱりいはれて、一層恐縮し、へどもどして引下らうと腰を持上げたところを、追かけて、
「どんなみなりをしてゐらつしやつた？」
「はあ、和服でお袴で。」
「いゝえ、ちやんとしたなりをしてゐらつしやつたかい。」
「あまり、御立派とはみうけられませんでしたが……」
毛のない頭に手をやつて、みすぼらしいのは自分自身のやうに參つてしまつた。

老夫人はおちつき拂つて、花をいけ、小間使を呼んであとをかたづけさせ、手を清め、やうやく應接間へあらはれた。客はあわてゝ立上つて、

「私、小岩井。どうも暫で御座いました。御記憶がないかもしれませんが、私の方ではよく存じ上げて居ります。」

愛想笑をして、久々の對面をなつかしむやうに、若者が年寄をいたはるやうに、へりくだつた態度を見せた。

「私も存じ上げて居ります。こちらの家をお讓願ふ時、なくなりました主人といつしよに拜見に伺つた事が御座いました。その頃はお母さまもごいつしよに……」

「はあ、その時の小僧で。」

年寄のやうに、小刻に肩をゆすつて笑つた。

對座してゐる二人には、互に異なる感慨があつた。日清戰役に武勳のあつた父親が脳溢血で倒れてしまふと、元來が武人の事で、金には緣の遠い方だつたから、遺產といつては廣い邸宅だけだつた。わからぬなりに何時となく夥しい數になつてゐた書畫骨董は、どれもこれも僞物で、束にしても値にならなかつた。相續人の淸彥は、おもてむきは正妻の子にしてあつたが、實は婢女

にうませた子供だつた。年とつてからはじめての子供なので、將軍は溺愛し、夫人は內心良人の無責任な愛情に眉をひそめたが、武家教育で鍛へられた自制心から、嫉妬と思はれたり、繼母根性と思はれるのを惧れ、かへつて甘やかす結果に落ちて行つた。中學だけは、どうにか濟ませたもの丶、無試驗で入れるやうな大學を幾年たつても卒業せず、その上早くから遊びを覺えて家をあける事が多く、時々その遊びの拂は、邸の方へ強請に來た。さういふあととりに、廣い邸宅を維持して行く事は出來ないとわかつてゐるので、夫人は親類と相談の上で賣渡し、小ぢんまりした家に引移つたが、非運は遂に免れる事が出來なかつた。邸宅を賣つて得た金の利息で衣食する筈だつたが、清彥は忽ち藝者を落籍してうちに引入れ、歐洲戰爭の好況時代には、かつがれて新會社の重役になつたり、株を持たせられたりしたが、それは完全に零になつた。苦しまぎれに贋物の書畫を、自分で持廻つて金にしたり、詐欺に等しい所業もあり、親類にも迷惑をかけ、父親の知人からも相手にされなくなり、段々浮世の狹くなつて行く中で、夫人は永らく患つて死んだ。それからの長い年月は、後悔と、自棄と、絶望で、彼の根性を何處迄もゆがませた。自責の念よりも、世間の狡猾、無情に對する怨恨が、頭の中で渦を卷いた。

　だから、この家の老夫人と對座してゐても、世が世ならばこの大きな邸宅は自分のものなのだ

と思つて腹立たしかつたり、骨と皮ばかりの老婆が、洋風の應接間に主人面をしてすましてゐるのさへ、馬鹿々々しい浮世の姿に見えて嘲笑したくなるのであつた。しかし彼は、つとめて此の老夫人の心證をよくして置かなければならなかつた。それで、自分の今日の悲運を話すにも、すべてを運の惡さに持つて行つて、感傷に訴へようとつとめた。

「全く運の惡い時は惡いもので……」

そんな氣やすめに過ぎない言葉を、二度も三度も繰返した。

「母の亡くなりました時も、病院へ入れる事も出來ませんやうな次第で、裏長屋で見送つてしまひました。」

不孝の罪のあやまり場所を見出したやうな殊勝な姿で、堅く膝に手を置いてうつむいた。

老夫人は、相手の心の中をはかり棄て、なぐさめる言葉も差控へ、じつと見守つた。古い記憶を辿ればゞこの人はふつくりと血色のいゝ顏をし、濃い髮を綺麗に分け、寒暑を知らずに育つたやうな品位を持つてゐた筈だ。邸宅を賣渡す話の際にも、何か權高く、目下の者に物を與へるやうな態度を見せた。あの人が、今の此の人か。額ばかり妙に白く、むくみの來たやうな顏には蒼黑い隈があり、不精つたらしく延ばした髮は、うつむくとてつぺんの地が薄赤く透いて見える。

着物も羽織も、襟や胸や袖口が汚れて光り、借物に見える袴は折目もなく、足袋は鼻緒擦がして穴があいてゐた。氣の毒とか、可哀さうとかいふ氣持よりも、さげすみ、非難したい心持の方が強かつた。何事も、すべてあなたの不幸は心がけが悪かつたのですよ、意氣地が無いからですよ、身性が悪いからですよと、はつきり云ひきかせてやりたかつた。一代で産を成した、時代の波に乘つた企業家を良人とし、良人の事業の成功と共に大家の夫人としての修養を積み、貫祿を加へて來た夫人には、沒落の途を辿るものは、身から出た錆としか考へられなかつた。働けば、努力すれば、世の中は必ず酬ゆるものと信じてゐた。

それでも、いつ迄もうなだれてゐる相手に對し、默つてもゐられなくなり、

「ほんとに御氣の毒に存じます。全く御運が悪いのですよ。」

と、先方の幾度も繰返した言葉をその儘借用して、なぐさめた。

「全く私も頼りになる親戚も兄弟もなく、途方にくれて居りますのです。お羞しい話でございますが、家賃も滯り、病氣に罹つても藥禮も出來ず、昨今は頂くものも滿足には頂けないやうな次第で、どんな仕事でもみつかれば、働いてみたいと思ふのですが、御承知の通りの世の中で、失職者は幾人ゐるかわからず、私共の年齡になりましては、たゞでも雇つてはくれません。それに

先年來腎臟の氣味があり、勞働するわけにも行きませんし、家内もあまり丈夫といふ方でも御座いませんので、お金のかゝる事が多く……」

いつの間にか鼻をつまらせ、愈々頭を低く垂れ、自分の膝にいひ聞かせるやうに、一家の不幸をかこつのだつた。

老夫人は、話の筋を追つて行つて、どうしてもこれは無心に違ひ無いと、愈々苦々しく思つた。互に無言で、相手の心を忖度しあつたが、突然小岩井は兩手で顔を覆つて嗚咽した。働いた事の無い、ぶくぶくした手の指の股から、涙は膝に落ちた。

それを芝居とは考へないまでも、いゝ年をした男が、何の見榮も無く泣いてゐる姿には好感が持てなかつた。自分に慰めの言葉を期待してゐるのだとはわかつてゐるが、老夫人は強情に、表情も動かさず、相手の平靜にかへるのを待つた。長い沈默の間に、マントルピイスの上の置時計が、英吉利の寺院の鐘の音を傳へて、悠々と時を打つた。

「こちらさまへも、のめ〳〵とうかゞへたわけではございませんが。」

いつ迄も相手が乘つて來ないので、その時計をきつかけに又口を切つた。

「亡父の建てた家やしきを引取つて頂いたのも何かの御縁と存じまして、面をかぶつた氣で推參

しました。」
意を決して、長く伏せてゐた顔をあげると、老夫人の冷かな、眼にぶつかつて、互に敵意を感じた。
「御話を伺ひませんとわかりませんが、つまり手前どもに、何かおくらし向の御用立でも致しますやうな……」
「いゝえ、そんな、決してそんな金錢をたゞおねだりするやうな根性は持合せませんです。」
誤解されては迷惑だといふ風で、あわたゞしく打消した。
老夫人は、その外の事で訪問をうける場合は想像出來なかつたが、何かしらほつとして、危難を逃れた氣持がした。
「では何か別の御用で。」
「私も小岩井です。いかにおちぶれましても、こちらさまに理由もなく金錢をねだるやうな事は致しません。」
とんでもないといふ樣子で、強く否定した。
「實は、多少先代からうけつぎました書畫骨董の類もございましたが、それもいつか賣拂ひ、先

刻から申上たやうなおちぶれ果てた生活をして居りますので、只今のところ私の持つて居りますのは、爵位だけでございます。」

みづから嘲るやうに、聲を立てゝ笑つた。

「その爵位を買つて頂くわけには行かないかと、苦しまぎれに斯う思ひつきまして。」

「まあ、あなた、そんな事が。」

「いゝえ、先年やしきを御引取願つたよしみで、たつたひとつ家に傳はる爵位も、ついでに引取つて頂けたらと思ひまして。」

「そんなもつたいない事が……」

老夫人はあまりの意外に、逆に氣壓された形で、心からの驚をかくす事が出來なかつた。

「もつたいない。全くもつたいないといへばもつたいないのですが、これが自分に勳功のあつた私ではございませんし、斯う迄おちぶれた今日となつては、かへつて邪魔になりまして、たとへば就職の際にも、先方で尻込みするとか、つまらぬ事にも人の口の端にかゝりやすく、荷厄介と申す外はありませんのです。」

「でもあなた、おかみで下さつたものを、むざ〳〵他人に讓るなどゝ申す事は、出來るわけが無

いではございませんか。」

「しかし一面から考へますと、私共がいつ迄も子爵で候といふのでは、かへつておかみの思召にもそむくわけで、寧ろ立派な方にお譲して、家名をあげて頂くのが道ではないかと思ひます。ついては、こちらさまの御孫さんの御一人を私共の養子に來て頂いて、この私が隱居をすればよろしいかと思ふのです。」

さうする事で、國家に勳功のあつた小岩井の跡を立て、家名を盛返すのが、今の自分としては亡き父母に對する唯一の孝行で、それには自分達も多少體面の保てるやうにしなければならないから、代償といつてはをかしいが、生活を保證するだけの事をして貰ひたいといふのであつた。

老夫人は、自分などの想像もつかない、悲壯な決心に胸を打たれ、はじめて暗然として人生の數奇におもひを走せた。

「いかゞでせう、私共の家を斷絕させないやうに、お助け下さるわけには參りませんでせうか。」

家、祖先、爵位に對する尊敬から、老夫人の顏面にも感動の色の浮んだのを見て、大膽に膝をすゝめた。

「私も隱居の事ではございますし、伜は逗子の方に別に住んで居りますので、一應御話は傳へま

すが、一寸世間に例の無い事でございますから、何と申しますか。」

うみの子とはいひながら、事毎に意見の違ふ息子の顏が、ふと眼の前をかすめて過ぎたので、迂濶な口はきけないぞと自省し、再び木彫のやうに整つた顏を引しめて、冷かな表情を取戻した。

相手が堅固に身構へてしまつたので、無益とは知りながら、もう一度繰返して身の不運、一家の危急をかこち、由緒ある小岩井の家を存續させるのも、つぶすのも、偏にお考によるのだと、一切の責任をしよはせるやうな口迄きいて、

「では御當主とも是非御相談下さいますやう、いづれ又あらためて伺ひますから。」

と座を立つた。

老夫人は玄關迄見送つた。恰度我子と同じ年配の、それでゐて、西洋好でいつもきちんとしたみなりをしてゐる我子とは似ても似つかない、おちめの人の姿を見てゐるうちに、何のきつかけもなく、自分の壽命のこの末ながくない事が、不圖胸に迫つて感じられた。自分の死んだ後の、子供達の事、孫の事が、こみ上るやうに胸に來た。

四

此の頃の季節のならひで、夕方は急に風がつめたく、ごみごみたてこんだ近所の家から、脂肪の強い魚を燒く匂が、往來を這ふやうに流れて來た。懷中の錢をはたいて、酒屋の店先でコップ酒をあふつた小岩井は、醉が廻ると酒機嫌の樂天氣分から、今日の三好未亡人との會見が、ひどく好調に運んだやうに思はれて來た。あの婆さん、俺が突然たづねて行つたものだから、てつきり金をねだりに來たのだと思ひ込んで、いやに冷酷な面をしてゐやあがつたが、案に相違して、爵位を讓るといふ話をすると、俄に態度をあらためやあがつた。自分の孫の一人が子爵さまになれるとは、思ひも及ばない事だつたらう、ざまあみやがれ、成上者め――金持の面を張飛ばしてやつたやうな愉快を感じた。山の手の、谷底みたやうな町の中の、袋地の奥の二軒長屋に歸つて行く自分を、ひとかどの英雄のやうに感じるのであつた。

「これ、これ、只今御歸館だぞ。」

格子をあけたとたんに下駄を踏返したが、足袋の泥をはたくのも面倒臭く、つんのめるやうに家へ上ると、座蒲團を枕に、亭主のどてらを下半身にかけ、壁に顏を向けて、女房は眠つてゐた。ちえつ、父寢てゐやあがる――瘦せこけた首筋に嫌惡の念がむらむらして、いきなり座蒲團の枕を蹴飛ばした。びつくりして半身起し、忌々しさうに良人を見上げたが、いかにも大儀らしくあ

くびをして、
「おかへりなさい。」
とあくびまじりに云つた。その佛頂面が愈々癇に障つた。
「おい、飯はどうした。支度してあるのか。こつちは一日歩き廻つたんで、腹が減つてるんだ。」
「おなかが空いてるつて。へえ、いゝ御機嫌ぢやあないの。」
おしげはやうやく起上ると、電燈をつけ、どてらを片隅へ押やつて、長火鉢にもたれるやうに坐つたが、又しても灰につきさしてある吸殼をつまみあげ、火の氣もないので、ふてくされた形で燐寸を擦つた。
「馬鹿、飯を喰ふ金がありやあ、今時分うちに歸つてなんか來るものか。」
「ふゝん、金の無い奴がよく飮めるわねえ。こつちは起きてればおなかが空くから、お晝もぬきで寢てゐたんですよ。うまい儲口があるつていふから、我慢して待つてたのさ。お金は出來たんでせうね。」
「出來ないよ。金がありやあ今時分歸つては來ないつて云つたぢやないか。」
「いやだ、いやだ。面白くもない。大の男が一日中何處をほつつき歩いてゐたのさ。」

いひあひになると、あたり近所を構はずに甲高い聲を張上る相手にはかなはないので、たつた今女房が横になつてゐた疊の上に手枕で足を投出し、片手をのばして、おしげの手の吸殻をひつたくつて、最後の烟を天井に吹いた。空腹にひつかけた酒が、全身を重くした。

おしげは、幅の廣い肉の厚い體を憎々しげに眺めてゐたが、舌うちしながら立上つた。坐り皺の爲につんつるてんになつた裾からむき出しの細い足で、荒々しく臺所へ引込んでゆくのを、小岩井は薄目をあけて見送つて、にたにたしながら眼を閉ぢた。

「あなた、風邪を引きますよ、そんなとこで寢ちまつちやあ。」

つつけんどんな聲で、はつとして眼をあくと、おしげはちやぶ臺を出し、飯の支度をしてゐるのだつた。

「今朝のお殘が少しあるの、あるつたつてたかだか一ぜんづゝだから、ふかす程のことはないでしよ。お茶漬で我慢して下さい。」

「珍しかあないや。毎度の事さ。」

自分の體をもてあまし、不精つたらしく半身起してのぞき込んだが、

「なんだい、お茶らしい物も無いぢやあないか。」

「贅澤いつてら。いやならおよしなさいな。」

おしげはさつさと御櫃の底の冷飯を、二人の茶碗によそつて、ニュウムの藥罐の湯をかけると、小皿の中に少しばかりかたまつてゐる雜魚の佃煮で、さらさら、音をさせて喰べはじめた。小岩井は物も言はず、又元の姿勢で、身を倒して眼をつぶつた。

「たべないの。そんなら私が頂いちやふわ。」

一寸氣配をうかゞつたが、何の返事も無いので、良人の茶碗のも自分のに移し、二杯目の湯漬を流し込んだ。

その儘食臺をかたづけもしずに、良人の傍へゐざり寄つて、袂の中から朝日の袋を探し出した。たが、中味は一本も殘つてゐないので、その袋をまるめると、良人の寢顏をねらつて投げたが、僅に鼻の頭をかすめて、壁に當つた。それでもおしげは氣が晴れて、快心の笑をもらし、今度は火鉢の抽出を探つて、鹽せんべいを見つけ出した。八重齒に特徴のある口で、ぼりぼり喰べはじめた。小岩井はそれを見てゐたのか、先刻吸殼をひつたくつたのと同じ形で、女房の手の喰べかけを奪ひとり、急いで口の中へ頰張つた。二人はその他愛の無い所作に、初めて顏を見合せて笑つた。

「今日は何處へ行つたの。」
「三好のうちへ行つて來たよ。」
「三好つて。」
「元のやしきを買つた奴さ。強突張のぢゞいは死んでしまつたが、婆さんが生殘つてゐてね、金はうんとある筈だから、子爵を賣つてやらうと思つたのさ。」
「へえ、それで話はどうついたの。」
「どうつて、さう簡單にはいかないよ。倅つて奴が西洋かぶれで、別に洋風の家を建てゝ住んでるといふんだが、そいつと相談して、あらためて返事をするといふところ迄漕ぎつけたんだ。まあ十分手ごたへはあつたと思ふね。」
諸方を歩き廻り、しつこく金をせびつても、近頃はさつぱり收入がなく、女房には益々信用を失つて來た折柄、何か大きな儲口が目の前にあるやうな風をしなければ、幅がきかないのである。一時の氣やすめの爲にも、今日の三好家訪問は、多大の效果のあつた事にして話したかつた。彼は金持の實業家が、いかに爵位をほしがるかといふ事を誇張して話し、最初自分の訪問を喜ばなかつた老婦が、自分の身の上話に次第に同情し、最後に肝心の話を持出すと、膝を乘出して來た

と、たつぷりおまけをつけ、廣い邸宅を背景に描いてはなして聞かせた。

「へえ、世間てそんなものかしら。あたし達は荷厄介にしてゐるけれど、子爵なんてものを欲しがつてゐるのかなあ。」

「そりやあ、こんな長屋住居をしてゐるから厄介ものなんだ。大きなやしきに住み、金がうなつてゐるとくれば、誰だつて欲しがるさ。」

「それで、あんたいくら位で賣るつていつて來たの。」

「そこ迄はまだ話さないよ。のつけからそんな事を云つちやあ話がいやしくなる。愈々となららなければ本音は吐かないよ。」

「だつてそれが肝心なんぢやありませんか。少なくともこつちの肚だけはきめて置かなくちやあ。」

「そりやあ肚はきまつてゐるさ。」

「ぢやあいくら位で賣るの。千圓位出すかしら。」

「馬鹿、そんなけちな事をいふない。」

「ぢやあ二千圓。」

「育ちの惡い奴は爲様がねえな。俺は最低壹萬圓ときめてゐるんだ。」
「壹萬圓。」
おしげは半信半疑で、良人の顏を眞正面から見直した。
小岩井は、すつかりいゝ氣持になつて、意味深さうに笑つてゐた。

五

常吉は、おちぶれ果てた舊主人の、二十年振の出現に、すつかり脅えてしまつた。何か不吉な事、忌はしい事が、このやしきうちに持込まれ、自分達の小家庭の平和が、滅茶々々に蹂躙されるのではないか、心配で堪らなかつた。妙に額のあだ白いのは、幼少の頃からの特徴だつたが、その上に深く刻まれた横皺も意地惡く見え、みなりのひどさ迄、ひとをいやがらせるものゝやうに思はれた。一人兒で、我儘いつぱいに育てられ、女中や下男を打つたり叩いたり虐げ、氣隨氣儘の限りをつくした小暴君は、年頃になると小間使の肉體に爪をのばした。主從の鐵則の嚴然と守られてゐた時代だから、事があらはれると罪はすべて小娘に背負はされ、無雜作に追拂はれてけりがついた。さうした處置を恨む親許も無かつた。よしんば恨んでも、口に出して爭ふ者は無

かつた。「おい、さよはどうしたい。達者かい。」といつた太い聲を、常吉は耳の底から消す事が出來なかつた。そのさよは身近にゐる。伜の長太の嫁として、三人の子供の母親として、まめ〳〵しく働いてゐる。一家の生計に餘裕は無いけれど、みんな達者で仲よく暮らしてゐる。さばきをなさつた先の奥さまがおかくれになり、女房の死んでしまつた今、昔の事を知つてゐるのはさよと自分だけで、それもさよの方では、自分が知つてゐるとは思つてゐないかもしれないのに、今頃になつて事こはしがあらはれるとは、世の中の意地の惡さに、常吉は腹が立つて堪らなかつた。はじめのうちこそ、何も知らない伜に申譯がなく、自分の意氣地なしに愛想をつかし、何彼につけてさよの立居が氣になつたが、もと〳〵氣だてがやさしく、一生懸命につとめてくれる可愛さに、いつとなく不平も不滿も消えてなくなり、昔の事は思ひ出しもしなくなつたのに、突然かきみだしに來たのが、あの舊主人だ。鐵無地の、うす汚れた羽織の後姿は、いくら努めても消えてなくならない。常吉は、彼に脅かされる夢を、一夜のうちに幾度も見た。

常吉は心が晴れず、ひとつ家に住むさよの姿に惱まされた。つひぞ思ひ出した事も無かつた昔の事が忌々しく、死んでしまつた女房の事迄ついでにおもひ出すのであつた。今でこそ年增女の、無駄な肉が肩や腰を醜く太くしてしまつたけれど、さよは髮にこそ癖はあつたが、姿のいゝ娘だ

つた。氣性のはげしい職人の娘に似ない、おつとりした氣だてゞ、奥さまにも可愛がられ、朋輩のうけもよかつた。夏の蒸暑い晩だつた。晝間、夫人から、應接間の鉢の山百合が、あまり強烈に香り過るから、庭へ下してくれといひつけられたのを思ひ出し、疊廊下を奥へ行くと、その應接間からあわただしく出て來て、ぶつかるやうに通り過ぎたのが若主人だつた。呼吸をはずませ、平靜を失ひ、背後の扉をしめるおちつきも無く、追はれる者の足どりで行つてしまつたのに、不吉を感じながら、そつとのぞいて見ると、あかりのついてゐない薄闇の床の上に、ちひさくつゝ伏して泣いてゐる女がゐた。その女の顔よりも大きい山百合の、むうつと押迫る香に面をうたれ、彼は相手に氣づかれないうちに、足音を忍んで引かへしてしまつた。

それから幾月かたつて、奥方の居間に呼ばれ、その頃鐵道の驛に勤めるやうになつたばかりの長太の嫁に、さよを世話しようといふ話をもちかけられた。常吉は窮屈な膝をきちんと揃へ、全身に汗を流して堪へたが、からだの震へを止める事が出來なかつた。夫人は、何か悲壯な決心を示し、是が非でも否とはいはせない主人の威光をもつて臨んだ。さよは心がけのよい者である事、氣だてが優しく、親孝行で、主人おもひで、常吉夫婦にも、長太にも、この上も無い嫁であると、靜な言葉ではあるが、打消難い力を含めて斷定した。常吉は、その頃臺所働をしてゐた女房にも

云はないでゐた事だが、この間の夜目撃した場面を、夫人の前にさらけ出す外には、のがれる途がなく思はれた。すみません、相すみません、心の中で、誰にも彼にも申譯の無いやうな理由の無い氣持に惱まされ、むやみに堅くなつて頭を下げた。相すみません、おさよさんはいゝ娘に違ひありませんが、まだ伜には早過ぎます、自分達のやうなしがないくらしの者は、もつと先に行つてからどうにか考へます、御恩を忘れたわけでは御座いません。思召はよくわかつて居ります、相すみません――しどろもどろの辭退を繰返したが、夫人は餌食の苦みもがくのを見守る猛禽の姿勢で、じいつと見下してゐるばかりだ。常吉、お前何も彼も知つておいでだね　さういはれた時、はじめて救はれた氣がしたが、夫人は決してその儘には許さなかつた。淸彥は自分の生んだ子で無いだけ自分は苦しい立場にある事、これが將軍の耳に入つた場合の心配、又さよの父親の一徹短慮な氣性、小岩井家の名譽の爲に、自分達を救つてくれと、言葉の數を盡し、そのかはり常吉一家の將來の生活には、何の心配もないやうにしてやるといふのだつた。常吉は、その數々の言葉を聞いてゐるうちに、おそろしく得手勝手な、おしつけがましい無理を感じ、どうにも蟲のをさまらない氣持だつたが、さりとてそれをいひ立てゝ、はつきりとしりぞける勇氣もなかつた。悲しい事に、彼はこの邸に住みついて間もなく、臺所働の今の女房と出來合ひ、奥方のは

からひで事無く夫婦になつた弱味をもつてゐたし、常にかぼそく寄食する傭人根性が、完全に魂を卑屈にしてゐた。兎に角女房とも相談して、その上で返事をしたいといふと、夫人はもう一度繰返して、この家を、自分達を救ふのは常吉の外にないと、最後の釘をさし、私が手をついてお願ひしますと、決して手は膝から下へ下げなかつたが、心持頭を下げて見せた。その晩女房が奥から下つて來るのを待ち、力をつけて貰ひ、これだけはどうしても斷らなければならないと思つてゐると、意外にも女房の方から、お前さん今日奥さまから折入つてのお話があつたらうと先手を打たれ、しかも女房は奥方の頼の筋を、承知するものにきめてゐるのだつた。もと〳〵、自分達二人がいつしよになれたのも、今日の御飯に事をかゝないのも、すべておやしきのおかげではないか、これから先も御世話にならなければならないし、伜の後の爲にも悪くないに違ひない、主人の頼をむげにしりぞける不利と不心得を、女房は口を極めて口說き、二言とは否といはせなかつた。

さよは器量よしだつたから、何も知らない長太には異存もなく、夫人の心いれで、新夫婦は親達とは別に一戸を構へる事も出來た。一年たゝないうちにさよは男の子をうみ、長太は喜んで一太郎と名づけた。さよの妊娠を知つてから、常吉夫婦は不快な疑に惱んだが、子供は誰よりもさ

よに似て、まつげの長い二重瞼や、くゝつたやうな厚くちひさい唇が可愛らしく、長太にも、その外の誰にも似たところは見出せなかつた。つゞいて女の子が生れ、それから何の波瀾も無く、二十餘年の歳月が過ぎた。その間に、將軍は死に、邸宅は人手に渡つたが、常吉は家やしきと共に新しい主人に引繼がれ、このやしきのある限り、こゝに住む運命に安んじてゐた。たつたひとつの不幸は、頑丈な體質で、つひぞ病氣をした事の無かつた女房が、流感で脆くとられてしまつた事で、それがきつかけになつて、若い夫婦と孫は、同居して常吉の面倒を見る事になつた。常吉には不平がなく、滿足があつた。孫の一太郎も今では一人前の職工になり、近所の機械工場に通つてゐるし、その妹は主人の關係の會社の交換手をつとめてゐて、夫々給金を稼ぐやうになつた。それなのに、おもひもかけない舊主人の出現から、常吉の心は平衡を失つた。夕方、工場から歸つて來る孫の一太郎の、この頃伸ばしはじめた髮の、長く額に垂れてゐるのを見て、ぎよつとした。それはあの舊主人のあだ白い額に垂れ下つた髮の毛を想ひ出させた。自分の迷かしらないが、歩き癖に迄そつくりその儘のところがあらはれて來たやうに思はれた。この儘無事には濟まないといふ豫感が胸につかへ、飯を喰つてもうまくないし、時々は火の消えた煙管を、それと知らずにくはへてゐる事もあつた。

なるべく舊主人と自分との間に距離を置き度いと願ひながら、一方には默つてゐられない氣持が強く働いた。
「おきみさん、この間この邸の御主人だつた人が來たゞらう、小岩井子爵つていふ。あの人何の用で來たんだらう、その後は見えないやうだが。」
「あたし、お茶を運んで行つただけで何も知らないのよ。でも、あたし驚いちやつた、あの方が華族さんなんだつて。」
奥さまづきの健康な小間使は、正直に眼をまるくして、驚いた表情をして見せた。
「先の旦那が偉かつたのさ。閣下々々つて、たいしたものだつたからなあ。」
「今はおちぶれておしまひになつたんだつて。」
「みんな心がけが悪いからの事さ。」
段々深入りして來る相手を避けるやうに、常吉はぷつゝり話を切つてしまつた。愚圖々々してゐると、肚の底を見透されはしないかと思つたのである。
この上は奥さまに伺つてみる外は無いと思ふのだが、さよの事については何も知らない老夫人に、疑をうけるきつかけにでもなつてはつまらないと考へ直して、口を切る事は出來なかつた。

ところが先方から、話をもちかけて來てくれた。
「常や、こないだ小岩井さんがいらつしやつたのを知つてるかい。」
常吉は返事がうまく聲になつて出ないで、ひよこ〳〵頭を下げた。
「あの方もふしあはせらしいね。御自分の心掛が惡かつたのだらうけれど。」
老夫人は、近頃膝元に子も孫もゐない寂しさから、他家の子孫の事迄深く心にかゝるのであつた。
「大層おちぶれておしまひになつたとは聞いて居りましたが、どんな御話で御出になりましたので。」
きいてはならぬ事、觸れてはいけないといふ警戒もあつたけれど、確めたい心持は忽ち強くなつてゐた。
「なあにね、親類緣者にも見放され、何處にも賴るところが無いものだから……」
「お金でも頂きに見えましたので。」
「いゝえ、爵位を讓りたいといつてね。」
けゞんな顏をしてゐる相手をじらすやうに、老夫人は機嫌のいゝ聲を立てゝ笑つた。この儘愚

圖々々してゐては家名も斷絶するから、當家の孫の一人を養子にし、やがて自分は隱居して跡目を讓るといふ話を、老夫人としては自分一人知つてゐるだけでは氣が濟まなかつた。
「へえゝ、そんな事が出來るもので御座いますかねえ。」
「さあ、出來るか出來ないか、私にもわからないけれども。」
この事について相手はどう思ふか、探りを入れるつもりもあつたが、常吉には皆目見當がつかなかつた。何か惡智惠を働かせ、人をたぶらかす魂膽があるのではないかと疑つたが、兎に角自分達にはかゝはりの無い事柄と知つて、少しは安心した。
「ではお斷になりましたので。」
「兎に角克己にも話をしてみない事には、女の私にはわからないから。」
常吉は不服だつた。話のけりがついてゐないとすると、又近いうちにやつて來るに違ひ無い。どんなきつかけから、自分達一家に不幸が飛込んで來るかわからない。何も彼も忘れて、しあはせにくらしてゐるさよ、何も知らずに妻の眞實に滿足してゐる長太達に迄、むごい憂目を見せるやうな事が起るのではないか — これといふ脈絡は無いのだけれど、胸がわく／＼して、不安心で不安心で堪らなくなつた。

六

庭の草をむしり、落葉を掃き、次第に秋に移つて行く風物を、いつもならば我物として樂む筈なのに、その事があつて以來、常吉は掃除三昧に入る事が出來なくなつた。今日は來やあしないか、明日は來るのではないかと、絕えず苦痛を伴ふ豫感があつて、氣を疲らせた。奥さまの仰つたやうに、爵位を賣るなどゝいふ事が許されるものか、いくらおちぶれたからといつて、そんな不屆な事をしては、お家は二度とは立つまい、なくなつた旦那さまも奥さまもさぞかし浮ばれまい――零落した舊主人を憐むよりも、憤り憎む心の方が強かつた。常吉は、自分のやうな微力者の一生を、努力し向上させる事におもひを走せた事は一度も無いが、立派な家に生れいゝ身分だつたものゝおちめになつた腑甲斐なさに對し、公憤に近い氣持があつた。いつそいさぎよく縛られてしまへと、面罵してやり度い氣持だつた。けれども、それと同時に、元々殘酷な、意地悪の無法者が、あゝ迄身を落したからは、どんな事をしでかすかわかつたものではないといふ怖が、消しても消しても消し切れなかつた。この儘二度と此の邸にやつて來なければいゝがと念じてゐたが、その甲斐は無かつた。

同じ洗ひさらした時候はづれの浴衣に、鐵無地の羽織、裾長に袴をつけたのが、色の褪せた中折を目深にかぶつて、門内に入つて來るのを見た時、常吉は身をかくす場所の無いのに當惑した。

「ぢいや、又來たよ。」

相手はこつちの心持を讀取つたやうな、皮肉な微笑を浮べて、たちどまつた。常吉は、門長屋の裏の洗場で洗濯をしてゐるさよが、人聲を聞きつけてあらはれはしないか、そればかりが心配で、無闇に頭を下げるばかりだつた。

「ぢいや、お前にも久しぶりで逢へてなつかしいよ。かへりにお前んとこに寄つて昔話でもするかな。」

又しても、肩幅の廣い、贅肉の盛上つた後姿に、あらん限りの憎惡をこめて見送つたが、ゐてもゐられない不安から、その後姿に引かれるやうに、或る間隔を置いてついて行つた。取次の執事が一度引込み、又出て來て、客の姿が家の内へ吸ひ込まれる迄、立木のかげに佇んで見てゐた。

應接間の内部では、此間と同じ姿勢で、老夫人が客と對座してゐた。

「あまり性急だと御叱をうけるかもしれませんが、先日御耳に入れました事について、今日は御返事を頂きに參りました。」

叮嚀な言葉づかひで、相手の自尊心に媚る笑顏を忘れなかつた。

「それはそれは、私どもでは先日の御話を、決して御冗談とは伺ひませんでしたけれど、何分世間で聞きません事でも御座いますし、若し又一時の御考違ひで、後でおもひかへしでも遊ばしたのではないか、斯ういふ事はうくわつに他人には話さない方がよいなどゝ、年寄は年寄で、いろ〳〵考へましてね……」

老夫人は瘦せ細つた咽喉から、かれがれの笑聲をたてた。一代で身上を築いた亡夫が、實業家として國運の隆昌に盡し、國家非常時には度々少なからぬ獻金をしたにも拘らず、他の同格の人々が授爵の恩命に接した場合にも、その選にもれたのを口惜く思つてゐた。殊に死去の際には、氣の早い新聞が、まさしくその事があるやうに書きたてた事もあつて、少なからぬ未練を持つてゐた。赤十字社や愛國婦人會の集會に出る場合などの肩身の廣狹を思ふと、孫の一人にしろ、一族の中に、さういふ身分の者を出したいといふ望がなくも無かつた。けれども、子供の頃から學者肌で、文學や美術に心を傾け、亡父の關係事業に携はる事を好まなかつた息子の事を思ふと、到底相談にならないばかりでなく、そんな事迄して爵位を欲しがる母親かと、輕蔑されさうな氣もして、老夫人は此の話が、小岩井の一時の氣まぐれである事を願ふ心持も持つてゐた。

一とんだ事で、私の方では善は急げで、一日も早く御承諾を頂き度いと思ひまして、今日迄伺ふのを差控へて居ましたので。」

「でもあなた、これは私共にとつてはどうでもよい事かと存じますが、御宅さまにとつては並々の事では御座いませんから、御親戚や何かの思召も、とつくりと御聞きになつた上でなくては……。」

「いゝえ、そんな相談にのつてくれる親類なんかあるものですか。元々私が惡いには惡いのですが、こちらが榮えてゐる時分は、隨分面倒も見てやつたのが、今ではたづねて行つても門前拂ひです。」

父方にも母方にも、れつきとした親戚はあるが、それらは自分の既往の非行を咎めるばかりで、折角悔いあらためようとする者を救ふ親切はなく、四苦八苦の自分を冷酷に突放して顧みない、結局今日に到つては、昔家やしきを讓つた御縁に縋つて、無理な願を申出る外に途が無い、こゝで助けて貰へなければ、自分達は飢餓の爲に死恥を曝す事になるであらう——と、次第に聲が低くなつて、今日も亦泣出しさうな雲行になつた。老夫人は何と相槌を打つ術もなく、何とかして、早く歸つて貰はうと思つても、押しても突いても凹むだけで、とりのぞけない物體のやうに、う

なだれた儘動かない相手に、すつかりてこずつてしまつたのである。
老夫人はつく〴〵愛想をつかしたやうに、わざと嘆息してみせた。この眼の前のやくざ者は、爵位を譲りたいなどゝいふのは本心ではなく、實はいくらかでもねだりに來たのではないだらうか、それならばいつそ少しの金を包んでやつて、早く歸してしまつた方が、あとくされがなくていゝかもしれない、果して此の男のいふやうな方法で、爵位の譲渡が出來るかどうかも疑はしいし、そんなかゝりあひをつけた後で、どんな煩はしい要求を持出されるかもわからない、仲に話をしてみる迄もなく、はつきり斷つてしまふのが上分別かと考へもした。突然意外な人間があはれ、突然意外な話を聞かされた驚きに、一時平靜を失つてゐた心持が、段々平素のおちつきを取戻して來た。
「ちよつと。」
失禮しますといふのを口の中でいつて、老夫人は立つて、室外へ去つた。
その後姿を、うなだれたまゝ上目をつかつて見送り、小岩井はほつとして、目の前の接待煙草に手を延ばしたが、待て、不謹愼とゝられてはいけないと思ひ返して、引込ませた。せめては窮屈に腰かけてゐた體を樂にしようと、立上り、窓の側へ行つて硝子に近々と顏を寄せて見た。昔、

自分の住んでゐた頃よりも、樹木は成長繁茂し、庭いちめんに年代の深さが著しくなつたが、なつかしい思出はたやすく胸にのぼつて來た。その苔の深い庭の一點に、常吉は茫然と石に腰を下し、火の消えた煙管をくはへてゐた。老年の爲に肉が落ち、背中の曲つたのが、いかにもちひさく、哀れなものに見えた。彼は一瞬間に、亡き父を、亡き母を、幼年の日に何の苦勞も知らず我儘氣儘に育つた頃の自分を、おもひ出した。同時に自分達を取圍む幾人かの顏も浮び上つて來た。癖毛ではあつたけれど、栗鼠のやうなからだつきのさよも、勿論その一人だつた。あの女はどうしたらう。不始末を母に知られ、因果を含められて常吉の伜に嫁したが、今はどんなになつてゐるだらう。絶えて久しい感傷が、彼の心に滲んで來た。

靜にあく扉の音に、忽ち吾にかへると、老夫人は意味の無い微笑を送つて來た。

「お庭を見てゐましたら、つい昔なつかしくなりました。先日も逢ひましたが、常吉はまだ達者で御厄介になつて居りますのですねえ。」

「あれはよく働いてくれます。家內の方はなくなりましたけれど。」

「あゝあの元氣のいゝ、肥つた女ですか。あれは死にさうもない頑丈ものでしたが。」

椅子に戻つて、頂きますと斷つてから煙草に手を出した。話が何の利害をも伴はない噂に移つ

て行つた氣安さで、遠慮のとれたきつかけを逃さなかつた。
「さうしますと、常吉は一人でくらして居りますのですか。たしか息子が居りましたが。」
此の老夫人は、さよの事なんか知るまいと多寡をくゝつて探りを入れてみた。
「家内をなくしてからは、その伜夫婦といつしよに住んで居ります。」
全く、何事も知らぬ老夫人は、少しの疑も持たずに答へた。小岩井は、こがれて居た煙草を深く吸つて、煙の色と味を樂んだ。
「これはほんの少々で、かへつて失禮かとも存じましたが、御話を承つてみますと、隨分御困の御樣子ですし、たしか奥さまも御丈夫でないとか伺ひましたし……」
いひながら、帶の間にちひさくしまつた紙包を取出して、小岩井の前に置いた。
「いゝえ、そんな事をして頂いては申譯ありません、かういふ御迷惑をかけるのは私の本意でありませんので、決して金錢を頂くやうな……」
あわてゝ煙草を灰皿に捨て、その包金を老夫人の方に押返した。
「私も此頃は、三度の食事さへ頂き兼る事も御座いますし、家内に寢つかれても醫者を呼ぶわけにも參りませず、正直のところお金は欲いので御座います。欲い事は欲いので御座いますが、私

も今日迄の自墮落な、ひとさまにばかり頼つてゐる生活を清算して、新生涯に入り度いと願つて居りますので、たゞ御恵にあづかるのは心苦しいので御座います。どうかこれは御返し致しますから、不惡。」

この金はいらないが、自分の新生活の出立を助ける爲に、是非とも爵位を譲受けて貰ひ度いといふのであつた。

「いゝえ、その御話はその御話として、これは私のお小遣の中から、奥さまへ御見舞を差上げたい――といふ位の、ほんのこゝろざしで御座います。」

老夫人は再び紙包を彼の目の前に押して寄越した。

「あなたさまもさうまで立派な御決心がつけば、まだ御若いのですから、これからの御奮發で、又御家の榮える事も御座いませう。さう御心がきまつた丈でも、さぞかし泉下の御兩親さまは御喜びになる事と存じます。」

泉下の人とあまり距りを感じない老夫人は、他人の事とのみは考へられず、眞實こめていふのであつた。結局小岩井は、懐の中へ押込まれたやうな餘儀なさを見せて、包金を受取ると、うや／＼しく押頂いて懐中に納め、又しても爵位を譲りたいといふ話に戻つて、老夫人の深い思慮に

縋る外には途がないから、よろしく御取計を願ひ度いと繰返し、やうやく引とる事になつた。
老夫人は、此の放埒を極めた男が、遲ればせながらも性根を入替て、眞人間になるといふ改悛に、自分の道義感をすつかり滿足させ、自分が意見をして心を改めさせたやうな氣さへするのであつた。
小岩井は懷の紙包が氣になつて、早く開いてみたい衝動に驅られ、おちつきを失つて急ぎ足になつてゐた。ほんのこゝろざしに過ぎないとは云つたが、まさか二圓や三圓ではあるまい、少なくとも十圓か――いやしい想像は彼を樂しませた。
「若旦那。」
一刻も早く門外へ出て、なかみを確めようと思ふ後から、常吉があわてゝ追かけて來た。とんだ危險人物が邸内にゐる爲に、庭の掃除も手につかず、それとなく應接間を離れずに見張つてゐた。歸りに寄るよなど、云つてはゐたが、ほんとにそんな事をされて、若しもさよにでも逢はれては大變だと、その事ばかりがさまざまの忌はしい事といつしよになつて、懸念された。不圖、門の方へ急ぐ後姿に氣がついて、老人の足の思ふに任せないのも忘れ、息を切つて追かけたのだ。
呼び止められた方は、いかにもうるさいやうに、顏をしかめて振返つた。

「若旦那さま、近頃度々御見えになりますが、どんな御用でいらつしやるので。」
常吉は一生懸命だつた。
「こちらの奥さまの御話では、爵位を御譲になるとかいふ事で御座いますが、それはほんとの事で御座いますか。」
「ほんとだとも、外に賣るものはなし、金の入るあてはなし、お前達のやうに此の邸にでも置いて貰へりやあ結構だが、こつちは喰ふものも喰へないんだ。」
懐手(ふところで)をして、その懐の中で紙包を指さきでいじりながら、彼は老爺の眞劍を嘲笑(あざ)ふやうな微笑で答へた。
「ほんとにそんな事が出來るものかどうか存じませんが、そんな事をなさつては、おかくれになつた親御さまに申譯が御座いませんよ。とんでもない。」
常吉は憤に堪へないものゝやうに、聲が震へ、凹んだ眼には異常な光を帶びて、今にも頬邊に涙がつたはり落ちさうなけしきだつた。
「御意見は恐入つたね。それよりもぢいや、さよはお前といつしよにゐるさうだね。一度逢はせてくれないか。」

相手が一生懸命なだけ、かへつて嘲り罵つてやり度い反抗心が、此の人生落伍者の胸をはげしく打つた。なんだい、下らない事をさも大仰にもつたいをつけ、忠義ぶりやあがつて、俺をおちぶれ果てたやくざ者と見下げ、家名だとか兩親だとか、夙になくなつてゐるものばかりありがたがつてゐやあがる……

「え、どうだい、さよだつて滿更なつかしくない事も無いだらう。御隱居さんよりもお前達の方が古い馴染だ。折角こゝ迄來たんだから、お前のうちも訪問して行かう。」

「それはいけません。そんな事をなさつては。」

つかつか行かうとするのを、追ひ縋つて、常吉はほんとに聲が出なくなり、たゞ幾度となく頭を下げ、あわたゞしく手を振つた。

「はゝゝゝ心配するな。何も御前達に迷惑をかけようといふんぢやあないよ。」

「それだけは、おやめなすつて。」

「わかつた、わかつた。大丈夫だ。」

思つたよりも相手が手痛く參つてしまつたのに滿足し、無氣力な降服者をさげすみながら、愉快さうな笑聲を殘して、さつさと行つてしまつた。昔からの我儘で、無抵抗の者をいぢめる嗜虐

性が、この落魄の今日も尙彼の血の中に殘つてゐた。常吉は昔の腕白小僧を其處に見出して、忍従に馴れた心にも、かすかに憤と恨とを刻み込んだ。

七

常吉の心配は、からだにもこたへて來た。あの舊主人が、いつ三度目の訪問に來るか、それが氣がかりで、夜も安眠出來なかつた。胸を重たくおされてうなされ、隣に寢てゐる二人の孫に搖り起される事さへあつた。

「おぢいさん、どうしたの。又夢を見たの。」

「さういへば、何處か體が惡いんぢやありませんか。」

やさしく孫や嫁にきかれると、常吉は無理に元氣な聲を出して打消した。けれども、あれ程樂みにして、何か昨日と變つた事はないか、何も變つた事は無い、無事に草も樹も成長してゐるのを確める嬉しさから、朝飯の支度の出來るのも待たず、ひと廻りして來ないではゐられなかつたのが、食事が濟んで、勤に行く者は夫々出て行つても、常吉は腰を上るのが億劫になつた。さように怪しまれるのがいやで、無理にも氣を取直して庭に出て見るが、何時あの肩幅の廣い、あだ白

い額に長髮の垂下つた舊主人があらはれるかと思ふと、心は少しもおちつかなかつた。いつもならば、木立の上の秋の空の深く澄んで動かないのを見るだけでも、常吉の心は滿足する筈なのに、つやぶきんをかけるやうに綺麗に掃き清める樂みを失ひ、一日々々としげくなる落葉は、篩に重く堪へるやうになつた。直ぐに手足が疲れ、首筋や肩が凝り、腰が痛んだ。

或日、氣の進まないのを無理に働き、晝飯時に戻つて來て、緣側から上らうとする瞬間に、目の前が暗くなつて、前のめりに突伏した。臺所からかけ出して來たさよに扶けられ、顏面に水を吹かけられると、直ぐに氣はついたが、それから暫時は床についた。珍しい事だつた。何年にも患つた事の無いのが自慢だつたが、年齡には勝てないと思ふと、俄に氣の張が弛んだ。伜の事や孫の行末が氣にかゝるばかりでなく、軒につるした鳥籠の目白にさへ今迄知らなかつた特別のいとしさが加はり、邸内の一木一草にも別れともない愛着が深くなつた。ふとした疑から、額に垂下る長髮を憎み、歩き癖をも非難したい氣持になつた孫の一太郎が、萬々一長太の子でなかつたとしても、かへつてさういふ運命をしよはされて來たものとして一層可哀さうに思ひ、いたはつてやり度い心だつた。さうした事におもひ疲れてゐる間にも、今日こそ其處の格子をあけて、ぢいやといふ太い聲を聞くのではないかと、絶えず心を配つてゐた。日の暮に邸内の木立の向ふに

夕陽の赤く沈むのを見送ると、あゝ今日は無事だつたと一息つくのだつた。

小岩井の三度目の訪問は、常吉がやうやく元氣を囘復し、そろそろふだんの仕事にとりかゝらうと思つてゐる頃だつた。世間の人はもう袷になつてゐるのに、相變らずの白地の浴衣に鐵無地の羽織、裾の長い袴をつけた姿は、取次の執事の眉をひそませた。

「先日はとんだ御心配をかけまして、おかげで家内にも藥を飮ませる事が出來ました。」

老夫人の姿を見ると、うやうやしく頭を下げて先日の禮を云つた。その時往來で開いた紙包の中に、意外にも拾圓札二枚を發見した時の事を思ひ出すと、今でも微笑が浮んで來る。患つてゐる事にしてしまつた女房も其晩は大はしやぎで、いつしよに酒を飮んだが、今日は又米櫃の事から喧嘩となり、横面を張飛ばして出て來たところだつた。あん畜生、例の手でふてくされ、寢てゐやあがるだらうと想像すると、ふしだらな女の寢姿が、妙になまめかしく目にちらついて來た。しかし、目の前の老夫人は、何となく不機嫌なやうな、沈んだ樣子をしてゐるので、彼も亦嚴肅な顏つきにかへつて、爵位讓渡の事を此の家の今の主人に話してくれたかどうかを訊ねた。

「それがあなた、伜に話しましたところが、もつての外だと申しましてね、私は何も存じませんでしたが、當家も主人が亡くなりましてから、段々面白くない事が續いて、いぜんのやうには參

りませんのださうです。それと申しますのも、伜に意氣地が無いからの事で御座いますが、それならさうと早く話をしてくれゝばいゝものを、年とつた私に心配をかけたくないといふつもりで、何事も私の亡くなりました後で整理するといふ伜の考で……」

心に鬱積してゐた不平と心配を、相手のみさかひなく訴へて、同情を求め度い弱氣が、冷々と大家の夫人らしく取澄ましてゐた昨日とはうつて變つて、聲をしめらせ、しまひには半巾を出して屢々目に押當てた。

先の主人の死んだ時、克己は直ぐにも此の馬鹿々々しく大きい邸宅を賣拂つて、金にかへてしまひ度いと主張したが、それは經濟問題の爲よりも、彼の好みの問題といふ可きだつた。しかし、老夫人としては、主人が死んだからといつて忽ち家やしきを人手に渡すのは外聞が悪いばかりでなく、永年の追憶が隅々までまつはりつき、その上主人の臨終の床でもあつた家を手放す事は、故人の靈の喜ばない事だと信じてゐた。せめては自分の一生だけでも、亡夫の最後の室に佛壇をしつらへ、朝夕香華を絶やし度ないといふ執着が強かつた。何につけても、消極的には根強い性格でありながら、積極的には強ゐて主張をしない克己は、母親の希望に逆らはず、しかも自分は自分の氣持の儘に、父の生存中と同じく別居を續け、母は今迄通り本邸に大がゝりなくらしをし、

息子は逗子の別莊の方に氣輕な生活をする事にきめた。克己は別段の物慾もなく、父の口きゝで入れて貰つた特殊銀行の平書記に甘んじてゐたが、跡目を相續してみると、自然諸會社の大株主となり、その結果それらの會社の取締役や監査役の椅子が廻つて來るのもあつた。月給取の窮屈を嫌つてゐたので、いゝ幸にして銀行をやめ、月に一度か二度づゝ關係會社に顏を出し、あとは好きな文學美術の享樂者として、靜かな生活を送つて來た。主人が努力の一生と、はなばなしい企業精神に觸れて來た老夫人には、息子の退嬰的な態度はあきたらなかつたが、その性格を考へると、無事で健康であつてくれゝばよいとしなければならなかつた。その息子に、この邸宅の前の持主小岩井子爵の窮狀から、爵位讓渡の申入に接した一部始終を話し、決して自分は爵位が欲しいのではない、あれ程の名家のむざむざつぶれる事の氣の毒さ、邸の賣買をしたのも何かの因緣だらうから、出來る事ならば相談にのつてやつてもいゝのではないか――と他人が聞けば尤もだとは思へない事を、いかにも自分では筋の立つた事と信じて話した。それなのに、その時の息子の、人を馬鹿にしたやうな態度と、さげすむやうな言葉つきは、少なからず老夫人の自尊心を傷つけた。その不滿といつしよに、はじめて聞かされた我家の資產狀態と、一刻も早く此の邸宅を處分してしまひ度いのだといふ藪蛇の返事には、つきせぬ悲みを心の中に刻み込まれた。老夫人

はその時の問答を、今も忘れる事が出來ないのである。

「駄目ですよ、お母さん。こんな大きな家に住んでゐるものだから、爵位なんか賣りつけに來るんですよ。」

おとなしい癖にしんねりした息子は、老齢の母親の世間知らずを嘲笑ふやうに、眼鏡の底に眠つてゐる重たい眼の、眼尻に深い皺を寄せた。

「いゝ機會だから申上げますが、うちの身上もお父さんのいらつしやつた時とは大分變つてしまつたんですよ。お母さんも御存じと思ふけれど、いつだつたか銀行のばたばたつぶれた時があつたでせう。あの時株と預金と兩方で、かなり手痛い打撃をうけたのです。それから、お父さんは電力好きで、これからは電氣の時代だといつて無闇に株を買ひ、自分でも重役になつていらつしやつたが、無謀な擴張の爲の借金の重荷に堪へられなくなり、株の値段は半減するし、無配當が幾年もつゞき、その外お父さんのいゝと信じてゐた會社も時勢の移るに從つて内容が變り、そんなこんなでうちの資産も收入も減る一方には、子供は殖える、大きくなる、逗子の家も手狹になり、建増をしなければならない狀態になつたのですから、お母さんさへ同意して下さるなら、この家を賣つて金に替へ、お母さんには離室でも作つて、いつしよに住んで頂き度いのですが……」

「さういふ話は私にはわからないけれど、いくらなんでも今日のくらしに困るやうな事はないのでせう。」

「それは、御飯が頂けないなんて事はありませんよ。けれども、いぜんのやうな大げさな生活をしてゐては、將來が心配なんです。第一こんな大きな家といふものは、近頃は流行(はやり)ませんよ。今直(すぐ)に賣らうといつても、個人で買ふ人はないでせう。信託會社にでも賴んで、分讓する外に途は無いでせうよ。」

　息子は他人の家の事のやうに平然たる態度で、我家の經濟が時勢の波のあふりをくひ、收入の減つた事、支出はかへつて增加した事、相續稅その他の負擔の重い事を、まるで世間話と同じに話すのだつた。母親は聞く事每に面白くなく、殊に伜の態度が氣に入らなかつた。

「いくら聞かされても私には腑に落ちないが、かりにお前のいふ通りなら爲方がありません。けれども、矢張お父さんが生きていらつしやつたら、そんな事にはならなかつたのだらうねえ。」

　亡夫の人物と手腕とに尊敬と信賴を置き、つとめが嫌ひで、油繪を買つたり、古本をあさつたりする息子を意氣地なしと思つてゐるので、何か大きな不始末をしたやうに腹が立つた。

「それはさうかもしれません。しかし考へやうによつては、お父さんが生きていらつしやつたら、

もつと大きな破綻があつたかもしれませんよ。」
たとへば銀行との多年の關係にも頓着なく、一寸でも忙しいと思つたら預金を引出してしまふとか、自分が重役をしてゐる會社でも、遠慮なく株を賣逃げてしまふとか、氣強く出る手もあるであらうが、同時に父の旺盛な事業慾から各方面に手を伸ばし過ぎ、何かの仕事と共倒れになる事も想像出來るといふのだ。父親をさへ客觀的に見てゐる倅の言葉は、母親には大變意地惡く、親を親とも思はないものに響いた。
「だつてお父さんは、隨分苦勞はなさつたけれど、立派に成功した方です。そんな失敗はなさりはしませんよ。」
「さあ、どうかなあ。日清戰爭の後ですか、泡沫會社と運命を共にして、破產同樣になつたのは。あの時若しお父さんが死んだとしたら、お父さんは成功者とはうたはれないで、失敗者の筆頭に數へられなければならなかつたのですからね。」
母親はあまりの事に言葉も無く、憤の涙を眼底に光らせたが、息子は一向平氣で、父親を批判するばかりでなく、今度は自分自身を解剖しはじめた。自分のやうな企業心の無い者の生れたのは、家に相當の資產が出來、豐かに育つた結果なので、裏日本の貧村に生れた父が、一生金儲に

齷齪（あくせく）したのと同じ程度に自然であると自嘲し、

「小岩井子爵だつて、生れた時から子爵のあととりなんだから、あまり爵位なんかありがたがらなかつたに違ひありませんよ。」

　と母親を諷する言葉さへ口に出した。放蕩無頼に身を持崩し、その日の暮らしにも困つて、他人に合力を求めなければならない人間に、いかにも理解同情のあるやうな口吻も、母親の機嫌を益々惡くした。結局自分のやうな金儲の興味もなく、勇氣も無く、手腕も無いものが親ののこした財産を減らさない唯一の道は、生活を簡素にし、利息丈で喰べて行く計畫を樹立する外はないのだから、將來の心配を少なくする爲にも、此の邸宅を賣拂ひ度いのだと、理論を持合せない母親を、じりじりと押詰めて行つた。

「それがあなた方や孫達の爲だといふのなら、いゝやうにして貰ひませう。私だけはお父さんと同じ此の家で死にたいと思つてゐたのだけれど……」

　母親は涙をかくす事が出來なくなつて泣入つた。伜のいふ事にも一理はある。あるにはあるけれど、理詰にされただけ口惜（くやし）かつた。その時の口惜さ、なさけなさを、老夫人は今もまざまざ思ひ出し、やがては此の邸宅も人手に渡す我身かと考へると、目前の小岩井にさへ親みを感じるの

であつた。

「お羞しい話で御座いますけれど、伜の申す事にも尤もな節も御座いますし、これからは出來るだけ切詰めてやつて行かなければなりませんので、折角の御話では御座いますが、御斷する外に致方御座いません。」

急激に移つて行く時勢の波に漂ふ寄邊なさをはつきり知つて、自分と小岩井との間に著しい優劣を感じてゐたのが、いつかは同じ運命を免れないといふやうな感情が胸に迫つて來た。

小岩井はつとめて神妙に聽いてゐたが、多大の期待をかけてゐたゞけに、不首尾の結末に近づいて落膽した。どんな伜か知らないが、折角の自分の計畫を邪魔する奴として小面憎く思はれた。この婆さん一人なら、泣落しでも攻落して見せるものを、そんなちやつかりした伜がくつゝいてゐては、出來る話も出來なくなるんだと、見當違ひの憤を感じ、その伜といふ奴に、仇をしてやり度い氣持さへ起した。

「それはどうも困りましたなあ。實は私の方では屹度御承諾願へるものと思つて、いろいろ計畫を立てゝゐましたのです。それが御引受下さらないとなると、私共にとつては死活問題です。承つてみますと、こちらさまにもいろいろ御事情はあるやうですが、別段今日明日に御困りといふ

のではありませんし、たとへば此のやしきを御手放しになるとしても、それと爵位の事とは別問題ですから、何とかもう一度御相談願へないでせうか。場合によつては私が、直接御當主に御目にかゝつてみては。」

「いゝえ、伜といふのが他人さまの仰有る事をきくやうな男では御座いません。」

小岩井は、まるで堅い約束を反故にされたやうな氣持で、忌々しく沈默した。長い無言の後で、彼はすつかりあきらめをつけた。今迄、一言一句をも注意深く愼んでゐたのが無駄になつた事をはつきり知つた。もう、今日限り此の家に來る事もあるまい、どうともなれと思つて、遠慮なく煙草を吹かした。

「全く弱りましたよ。家賃は溜つてゐるし、米屋も八百屋も現金でなくては相手にしないし、小岩井子爵の干乾は賣物になりませんからなあ。」

はつはつはつはと肩と腹をゆすつて笑つたが、相手の老夫人は少しも調子を合せなかつたばかりでなく、その笑を咎めるやうに屹となつたのに反撥し、かへつてはつきりと度胸が据つた。

「では、それはあきらめる事に致しまして、最後の御願に、私に少しばかりお金を融通しては頂けませんでせうか。これはきつと返却します。決して御迷惑はかけません。放つて置けば死ぬ奴

を、救つてやるといふ思召で、どうか此の際商賣のもとでを貸してやつて下さいませんか。」

どうせ駄目だと思つてゐるので、すら〳〵と口がきけた。老夫人の眼には明かに憎しみの光が加つた。

「それは御無理で御座いますよ。私共の方では、たゞ御話を承つたゞけで、決して御引受すると申上げなかつた筈で御座います。それをあなた……」

「いゝえ、それを兎や角いふのではありません。私を救つて下さる思召で。」

「さう仰有られても隱居の私では、何とも致方ありませんです。御商賣のもとでなどゝいふ大金が……」

「なあに、ほんの少々で結構なんで。」

「少々と申しましても御商賣をはじめるとなれば。」

「いゝえ、五百圓もあれば結構です。」

「五百圓。それで、なんの御商賣を。」

「さあ、女房に麻雀屋でもやらせますか。」

はつはつはつはと、肩と腹をゆすつて笑つた。老夫人はいやな顔をして、決心を骨だつた細面

にはつきりと見せた。
「私も御同情は致します。けれども、御救ひするなどゝいふ力は御座いません。大變失禮で御座いますけれど、度々御運び下さつた事でも御座いますから、これは電車賃に……」
今日の訪問の最初から用意して置いた紙包を、相手の眼の前に、押つけるやうに置いた。
もういけない、から肚をきめてゐられては爲方が無いと思つた。この前が二十圓だから、愈々これで話が打切となれば、それ以上色をつけるのは當前(あたりまへ)だらう――その金額をいろ／＼に想像しながら、それを手にとると、あつさり立上つた。
「どうもとんだ御心配をかけました。」
もう口をきくのも面倒だと思ふと、それつきり何もいふ事は無かつた。老夫人も敵意に滿ちた顏つきで、堅く口を結んだ儘玄關へ送出した。
小岩井は胸がむしやくしやして、ひとあばれあばれてやり度い氣持だつた。ふりかへつてみて、うしろの玄關の扉がしまり、誰の姿も見えないのを確めると、懷中の紙包を出して開いて見た。十圓札が一枚、四つに折つて入つてゐた。ちえつ、ほんとに唾をして、足下の砂利を蹴飛ばした。自分の事は一切顧みず、老夫人が冷酷無情吝嗇嘘つきに思はれ、その背後にゐる息子なるものは、

奸譎邪智私利私慾のみをはかる怪しからぬ奴だと考へられた。老夫人の話の通り、この邸宅が信託會社の手にゆだねられ、鬱蒼たる木立も、石や土の苔に寂びた庭も、切開かれ、骨をさらし、赤土の原つぱとなつて昔の面影を失ひ盡す事が、天譴のやうに思はれ、痛快だつた。何も彼もなくなれ、亡びてしまへ――持堪へやうのない捨鉢から、小岩井は眞直に門の外の往來へ出ないで、その內側につゝましく古びてゐる、昔ながらの常吉の家の格子戶をあけて入つた。

「ぢいや、ゐるかい。」

あけ放した障子の向ふに、緣側に近くごろ寢してゐる姿を見て聲をかけた。

「おゝ。」

驚いて常吉が體を起したのと、人聲をきゝつけて臺所から、さよの出て來たのと同時だつた。

「まあ。」

といふのが口の中で消えて、さよは其處に膝をついてしまつた。動悸の高く打つ胸のはたけたのをかくし、うつろになつた眼で、招かざる客を見守つた。

「わかるかい。お互に年をとつたなあ。」

あがりがまちに腰をかけ、上半身を捩つて、憚りもなく話しかけた。返事も出來ず、立去る事

も出來ないさよをかばつて、常吉は前に出た。
「どうした、加減でも悪いのかい。」
「年齢で御座いますよ。こゝんとこ暫く氣分がすぐれませんで、休ませて頂いて居ります。」
どうしたら此の人を歸す事が出來るか、そればかり氣になつて、常吉は堅く坐つた膝の上の手の震へるのを、一生懸命に堪へた。
「そいつあいけないね、氣をつけないと。」
「一週間も十日も寢込むなんて、つひぞ無い事なんで。お庭の掃除もしないものだから、そいつも氣になりますが、人間いくら丈夫だといつても、いつ迄も續きはしませんです。」
是が非でも話を自分との間につないで置かう、そのひまにさよは引込んでくれるだらうと思ふのだが、あまりの意外に呆然とし、又逃げ出すと思はれてはよくないと考へてゐるさよは、舅の後に伏目になつて、苦しい無言をつゞけてゐる。
「病氣なら爲方が無いさ。何のすまない事があるものか。この邸だつて、近いうちに賣物に出る
さうだぜ。」
「このおやしきが。」

小岩井は常吉の驚愕の尋常一樣でないのを心地よく見ながら、

「たつた今隱居さんに聞いて來たんだ。それも信託會社に賴んで分讓するんださうだから、お前達も何處かへ引越さなくてはならないんだらう。もう掃除なんかする事はないやれ。」

常吉は全く聲が出なかつた。さういふ事になるのなら、こんな人間に話をするより先に、何故自分に聞かせて下さらないのだらう、自分はこの邸の出來たそもそもからゐる人間だ、今の主人よりも古くから住みついてゐる人間だ、それなのに自分には何の話もない――彼は主人といふものゝつれないしうちをうらめしく思つた。嘘だ、嘘だらう、この意地惡が又自分をいやがらせ、歎かせる爲に出鱈目をいつてゐるに違ひ無い、奧さまは一生此の家で佛につかへ、この家で息を引とるのだといつていらつしやる、どうか常吉も一生こゝに置いて頂かせて下さい、どうぞこのおやしきで目をつぶらせて下さいとお願した時、奧さまは喜んでそれを聽いて下さつた、そんな事があつてたまるものか。

「御冗談で御座いませう。今更こちらでやしきを御賣になるなんて。」

「ほんとの事さ。こゝの家も見かけ程樂ではないさうだ。おかげで俺の爵位も賣れそこなつたよ。」

やけた笑方をして、常吉の頭を越した向ふのさよの方に聞かせた。誰もうけ答はしなかつた。陶磁器のやうに冷めたく身をかたくして、さよは疊の一點を凝視してゐるばかりだつた。

「おい、お茶でも差上ないか。」

そのさよの苦しい立場を察し、常吉は一時のがれでもいゝから、この場を立たせてやり度かつた。

「いらない、いらない。お茶なんかいらないよ。茶腹もいつときといふが、俺はそれよりもおまんまが喰ひたいんだ。子爵さま當時御逼迫でね、遙々こゝ迄やつて來て、談判不調となつたものだから、晝抜きの腹が一層ひもじくなつちまつた。」

「御飯といつても、どうも。」

常吉は當惑して、泣き度いやうな表情になつた。

「なあに、お前んとこで喰べさせて貰はなくたつていゝんだ。そばでもうどんでも喰ふから、何とかしてくれ。實は電車賃も持合せてゐないんだ。」

まさかそんな事がとは思つたが、早く歸つてくれるならそれでもいゝと考へて、簞笥の中にしまつて置いた財布を取出し、むき出しの五圓札を小岩井の手許に差出した。それは正月になつた

ら孫にやらうと思つてゐた大事の貯金だつた。
「お羞しい事ですが、ぢいやのやうな者にはこれがせいぜいで。」
「なあにお羞しいのはこつちの事さ。」
はつはつはつはと笑ひながら、無雜作にその札を袂に入れ、
「又いつ逢へるかわからないが、みんな達者でおくらし。」
さういふと、幅の廣い後姿になつて、格子の外へ出て行つた。小柄な、敏捷な感じの小娘が、ひととびに胴廻りや腰に無用な肉のついた、がつしりした世話女房としてあらはれたのが、彼の興味をふきとばしてしまつた。
常吉はさよを顧みて、何かいはうと思つたが、何もいふ事は出來なかつた。心配するな、心配するな、知つてるのは俺だけだ——さういふ心持をいたはるやうに、彼は又緣側近くにからだを運び、ごろりと横になつた。

八

常吉の惱みは續いた。舊主人の意外な出現に脅かされて以來、さよの一擧一動が、あたりまへ

には見えなくなつた。自分をはゞかつてゐる、自分と眼を合せまいとしてゐる、自分の眼を逃げようとしてゐる、自分に親切にしてくれる、その爲方迄、他人行儀になつた。そればかりではない、自分の眼の前でだけかもしれないが、長太に對する態度にも、遠慮か躊躇が伴ふ。一太郎に對しても同じだ。それがみんな、自分をはゞかる心からだ。長い間、さよは自分自身の外には祕密を知つてゐる者は無いと思つてゐたかもしれない。けれども、若しも祕密を知つてゐる者があるとすれば、この俺だけだと思ふに違ひ無い。この俺といふものが、今のさよには一番いやな人間かもしれないのだ。この口から、長太に何か喋られはしないかといふ心配を、あの女は持つてゐるに違ひ無い。いつそさよに、俺はみんな知つてゐる、知つてはゐるけれど、誰にも話しはしないから安心しろ、心配するなよと云つてやつた方がいゝかもしれないとも思つたが、さよのばつの惡さをおもひやると、口を切る事は出來なかつた。

その悩みは大きかつた。けれども、それよりも深く常吉を悩ましたのは、やしきが分譲地になるといふ事だつた。その事を舊主人の口から聞かされた日、その眞僞をたしかめないではゐられなくなつて、病氣でしばらく休んだいひわけと、その間に度々見舞をうけた御禮にことづけて、直接老夫人に逢ひに行つた。老夫人は常吉の元氣になつたのを喜び、何も氣にかけないで、なほ

一層養生をするやうに、やさしい言葉をかけてくれたが、そんな事は常吉の耳に入らなかつた。ただただ前へ乘出して行くやうなせき心で、小岩井から聞いた話が眞實であるかどうかを訊ねた。さういふ事はきいてはいけないのだ、奥さまはお喜びにならない――と自分を戒める氣持もあつたけれど、差控へてはゐられなかつた。

「私も一度お前にも話をして、末始終の事も考へて置いて貰はうとは思つてゐましたがね、此間克己が來ての突然の話で、私には寢耳に水だつたのだよ。別段うちのくらしがどうの斯うのといふのではないけれど、あの人は最初から、お父さん程の人間でないものが、こんな大きな家に住むのはいやだと云つてゐたし、考へてみれば、私のやうな隱居が、たつた一人住むには贅澤過るといはれても一言もないのだから、私も若い者のいふ通りにさせてやらうと思つてね。」

老夫人の言葉の中には、明かに眞實でないいひ廻しが感じられたけれど、そんな事よりも何よりも、この邸宅が賣物になるといふ事が嘘でなかつたのを知つて、常吉は悄氣てしまつた。

「では、このおやしきは分譲とかになりますので。さうしますとお家は申す迄もなく、お庭でもなんでも、もう一度さら地にしてしまふので御座いますか。」

そんな分譲地なんかにしないでも、どうせ賣渡すにしても、曾て小岩井子爵家から買ひとつた

時のやうに、そつくりその儘讓受ける人を探したらどんなものだらう、二代の主人につかへ、自分の一生をかけて手がけた庭だ、成程持主は自分ではない、けれどもこの庭を誰よりもいつくしみ育てたものは自分だ、崖地を切開いた赤肌の地面が、やがて黒味を帶び、緑の苔のいちめんにつくやうに丹精したのは自分だ、その努力が何のあとかたもなく消えてしまふのか——常吉はしがない自分とは知りながら、あまりにも無力な自分に腹が立つた。

「奥さま、このおやしきがいくつかに區切られ、あんなに立派になつたいろんな木が引つこぬかれて、もとの原つぱになつてしまふなんて、そんなもつたいない事が出來るもので御座いませうか。何とか若旦那さまに御願して、思ひとまつて頂くわけには參りませんでせうか。常吉は一生飼殺しにして頂いて、このおやしきで息を引きとらせて頂く御約束だつたので御座います。」

涙と水洟とがいつしよになり、言葉もしどろもどろだつた。この邸宅を賣物に出すといひ出した若主人が怨めしかつた。そんな息子の言ふ事に同意した老夫人も怨めしかつた。

「全く私もさう思ふのだよ。私にとつても此の家は、忘れられない家なんだからね。けれども考へてみると、小岩井さんがこちらをお賣りになる時だつて、奥さんの御心持は今日の私と同じだつたに違ひ無いのだからね。何も彼も時勢ですよ。親は親、子は子で、親は偉くても子供はどん

なものが生れるか、親は子供の爲に財産を殘しても、子供の代にはどうなるか、考へれば考へる程心細いものだねえ。私もこゝの家で死にたいと思つてゐたのだけれど……」
老夫人は段々常吉の歎きに誘はれて、愚痴に落ちて行つた。武勳の譽高かつた小岩井家が、僅かの間に沒落すると誰が考へたか、それは此の廣大な邸宅が分讓されようとは彼も想像しなかつたのと同じだ。克己にいはせると、當節こんな大きなやしきを個人で買ふものは無いとの事だが、いつそんな世の中になつたのだらう。老夫人は常吉をなぐさめ、我身にもいひきかせるやうに、涙ぐんだ聲になつてしまつた。怨言をつらねたかつた常吉も何といふ言葉もなく、次第に氣力は拔けて、たゞ水洟をすゝりあげるばかりだつた。
十一月の末の或日、愈々信託會社から下見に來ると傳へられた。それを聞くと、常吉は引つゞき氣分がすぐれず、ぶらぶらしてゐたが、會社の人達に手入の行屆かない庭は見せられないといつて、家人のとめるのもきかずに箒を持つて土を踏んだ。
「矢張働かせて貰つた方が、からだの爲にもいゝやうだ。」
夕方、ぐつたり疲れた體を我家に運ぶと、わざと元氣よく云つて見せたが、疲勞の色はかくせなかつた。次の日も、次の日も、朝早くから庭に出た。一生の仕事だつた庭を眺め、さまざまの

回顧に耽つた。つとめて持つ筈を忘れて、茫然と草の上に腰を下して、半日を費す事さへあつた。
信託會社から人の來る日は、克己もその妻も本邸に來て待つてゐた。薄日のさした庭にちらちら霰が落ち、落葉は風に降しきつて、狂ふやうにかけ廻つた。背廣の事務員風の者や、詰襟の技師らしいのや、大工か植木屋か職人風の者もまじつて來て、直ぐに邸内の隅々迄見て廻つたが、西北の雜木林の中で、彼等は栗の大樹の枝にぶらさがつてゐる常吉を發見した。
「奥さま、常さんが死んでゐました。」
小間使が青くなつてかけつけた時、老夫人は佛壇の前で經をあげてゐたが、驚いて立上らうとした膝がいふ事をきかないで、ぺつたり坐つてしまつた。何も彼も、自分達の住んだ時代は完全に過去つて、それとは緣も由緣(ゆかり)も無い新しい時代の中に、たつた一人取殘された自分を見出した。
(昭和九年八月二十日)

世繼

起伏の多い東京の山の手の、中でも樹木の鬱蒼と茂る高臺の一角に、青空に乘出すやうな地形を占めた邸宅が、椎木屋敷の新關家である。椎の大木の黑々と葉を重ねて覆ひかぶさるコンクリイト塀は、三千坪を圍んで坂下の町迄つゞき、風の向きで、邸内のピアノが芝生の斜面をすべつて下の町へ聞える事もあり、塀の外の裏長屋の子供の泣きわめく聲や夫婦喧嘩の騷ぎが、椎の木の梢をとほして、邸内へ聞える事もある。石柱の門は坂の下に大きく口を開き、門を入つた所に自動車庫と運轉手の住居が並び、玉石を敷詰めた坂の上の洋風の玄關と、最も近い一線で結ばれてゐる。

準平は、車庫の前に引出した自動車を淸掃し終つて、額にも襟首にも、まくりあげた兩腕にも汗をかきながら、つやつやと深海の水の色に光る車體に見入つて滿足した。量と質との一致、豐かなまるみ、なだらかな線、人體のやうに柔かく、あたゝかく、親しみ深く思はれる。夥しく街に氾濫する自動車のゆききの中を、靜に滑に上品に快走する時の事を想ふと我物といふ感じが強く、無數の視線を一身に浴びるほこらしさに胸が躍る。一臺を追ひ越す。又追ひ越す。追ひ越さ

れた車の容も運轉手も、恍惚として後姿を見送るであらう。準平は車體にうつる自分の顔が、かすかに笑つてゐるのを見て、更ににつこりした。殊に車内の人が、さち子夫人の場合を想像すると、緊張感に固くなつて、眞正面を向いたまゝわきみもしない自分なのを知つてゐる。何といふ上品な、しとやかな優しい、美しい方であらう。その外出の時、扉をあけて待つところへ、爽かな香料を漂はせながら、夫人が玄關にあらはれる。思はず知らず頭が下つて、不覺にも顏があかくなる。この夫人と、かくれんぼをしたり鬼ごつこをしたりした、遠いこどもの時の記憶がいつ迄も根深く、彼の心から消えない。そんな事は忘れなくてはいけないといひきかせても、昨日の事のやうに忘れられない。準平は心苦しく、樂しく、又してもあやしく心を震はせながら思ひ出す。

準平は此の邸内で生れて邸内で育つた。自分達の階級の子供達とは遊ぶ事も許されず、主人の一子の御相手として、町の子のつきあひを知らずに過ぎた。雨親のしつけも、すべて御主人の子の御相手としての自覺を促す事ばかりだつた。彼は屋敷の外の世界を少しも知らずに成人した。

父親の整作は、先代の車を曳いて一生を終つた。明治興隆期の波に乘つて、一代で產を成した新關太右衛門は、數十の會社の重役の肩書をしよつたまゝ死んだが、息子の一太は、おかげで地

位と金には惠まれたものゝ、父親の性格はうけつがなかつた。新關家には長く子供が授からず、養子をする外はあるまいとあきらめてゐた晩年に、生れたのが男の子で、ひよわい體質だつたから、丈夫に育つてくれさへすればいゝといふ念願に取卷かれて成長した。乳母がつく、かゝりきりの女中がつく、書生がつく、おない年の準平がお相手に見出される。ひとり子の寂しさをまぎらすといふのも理由のひとつに數へて、太右衛門が終生の恩人として忘れない大河原家の末女を、後々一太の嫁にする心組で、迎へて養つた。明治政府の功臣として聞えた大河原家は、息子の代になつて完全に沒落した。豪放なところだけが父に似て、大がかりな計畫の夢を追ひながら、少しも數字のわからないのが、金山に手をつけたり、南洋開拓をおもひ立つたり、持込まれゝばどんなぼろ會社の重役にもかつがれたりして、身動きの出來ない借金をしよひ、妾と共に落魄の身を滿洲にひそめた。公卿華族出の正夫人は、子女を抱へて途方にくれてゐたが、先代に引立てられた太右衛門が跡仕末をつけ、月々の生活費もみつぎ、一女を引取つたのである。

一太と準平は同じ小學校に通つた。幼いながらも準平は、主人の子の守役である事を知らされてゐた。かけつこをしても、相撲をとつても負けないのが、忍從階級の血と、兩親の絶間の無いいましめから、勝を讓る事も知つてゐた。たゞ學業成績だけは、讓る事が出來なかつた。一太は

何時も全級の中位どころにまごついてゐたが、準平は押通して首席をつゞけ、級長に選ばれてゐた。

出來のよい子は高等小學だけで學業を捨て、太右衛門が人力車を廢して自動車に乘るやうになると、見習助手を仰せつかり、出來が惡いばかりでなく、學業に興味を持たない者は中學に入り、大學を卒業し、洋行して外國の大學にも籍を置いた。準平は一人前の運轉手となり、親の代から定まつた運命のまゝ主人を乘せて走る事に何の疑も持たなかつた。彼は自分の仕事に忠實で、愼重で、たつた一度しか間違を起した事が無い。その一度の間違を、彼は常にかへりみて恥ぢ、罪を感じ、一層忠實になり、愼重になつた。

それは一太とさち子の結婚當夜の出來事だつた。準平は氣分がすぐれず、ぼんやりして何か不吉な事を起しはしないかと、自分でも氣が氣でなかつた。彼は一太の行狀を悉く知つてゐた。宴會から二次會へ送つて行き、午前一時二時迄待合の塀の外に待つてゐるのは、自分達の仲間の誰でも、嘲り、罵り、馬鹿々々しがり、自棄になり勝な事だが、彼は職務とあれば忍べない事は無かつた。だが、その一太の歸りを家に待つ人の事を想ふと、義憤に堪へなかつた。準平はこどもの時から、お伽噺や繪草紙で見る天使や女神、昔から畫家や彫刻家がつくりあげた理想の美しさ、

けだかさを、さち子の一身に負はせて憧憬し、滿足してゐた。自分の自惚かもしれないが、幼少の頃、癇癖の強い一太よりも、その相手役の自分に親しみを持つてゐてくれたやうに思はれる。あれ程の美しい、純潔な人が、いづれは一太の妻になるのかと思ふと、豫々、はかないおもひを抱いてゐた。まだ先代の存生中で、若夫婦はひとまづ鎌倉の別莊に住む事になつてゐた。ホテルの披露宴が終り、ぎつしりつまつたやうに並んでゐた自動車も、順々に主人を乘せて走り去り、殘り少なくなつて來ると、準平の胸騷ぎは一層ひどくなつた。突然、人々に取圍まれた新郎新婦の姿が、大うつしで玄關にあらはれると、準平は精魂つきた感じで、呆然と頭が空になつた。不吉な豫感に惱み、注意に緊張を加へれば加へる程、ハンドルを握る手が固くなり、不自由になつた。やつとのおもひで驛迄送り、世の中の希望を一切奪はれてしまつたやうな、無限の寂しさの中にもほつと安心したが、その儘素直に邸へ歸る氣にはなれなかつた。彼は西へ向つて行く東海道線の汽車道と並行して、自動車を走らせた。家々の切目々々に來る毎に、海手の線路を走る汽車を感じた。彼には忘れられない、童女の肉體の一部が、ふと幻になつて眼の前に浮ぶ。

　ちひさい時の事、一太が鬼で準平とさち子は裏庭の物置にかくれた事がある。古莫蓙の捲いたのだの、盥や桶やばけつや、空箱が、亂雜に積重ねてあり、羽目板の隙間からさし入る外光で、

うすぼんやりど照らし出された。乾いた埃の匂が、むうつと鼻を突く。二人は物の上に並んで腰かけ、呼吸を殺してひそんだ。それは非常に長い時間に思はれた。準平はさち子の白い首筋を横に見て、いつ迄も見つからない事を祈つてゐた。俄に日の暮が來たやうに、物置の中が暗くなつたと思ふと、遠く雷鳴が聞え、思ひもかけない驟雨がはげしく屋根をうち、大地を水の流れる音がし、ぽたりぽたり雨漏がしはじめた。雷鳴と稻妻の度毎に、さち子は準平にしがみつき、こんな所にかくれた事を悔る色があつた。準平は自分の責任を感じ、賴られてゐる事に滿足し、さち子のお河童の頭を抱いて、何が來ようとも身を以て防がうとする心構を持つてゐた。氣まぐれな夕立は間も無く過ぎて再び日の光がもれて來た。一太はかくれんぼに見切をつけたに違ひ無いので準平は立つて戸をあけた。雨に洗はれた大地を、強い日光がまばゆく照らし出した。準平は、失心したやうに動かないさち子を、ふりかへつて見た。幼い童女は、うつとりと戸外の景色に見とれた姿だつたが、腰かけた裾が開いて眞白い淸らかな、股とお腹が見えた。何といふ、綺麗なつやゝかな白さだつたらう。後々迄、その白い肌の色程美しいものを見た事が無い。

準平はその記憶を打消す事が出來なかつた。その日の事を思ひ出す度に顏があかくなつた。その遠い、夢のやうな幻が、又しても硝子にうつつたと思ふ瞬間、彼の頭の中は眞空だつた。づう

んと地の底から突上げて來た感じで、はげしく他の自動車と衝突した。前のめりに硝子に頭をぶつけ、額に血の臭を感じて氣の遠くなつた耳の側を、轟然と汽車が通過したやうに思つた。その窓に、白い女の顏が見えて……。

彼は主家の車を破損した恐縮の中で、運よくも新郎新婦を乘せてゐなくてよかつたと思ひ、人々も繰返してそれを口にしたが、準平の心のもうひとつ奥には、その時新夫婦を乘せてゐて、その儘何か大きな突發事にぶつかつてもよかつたやうな、不屆なささやきがあつた。準平の額には、その時の疵痕が殘つてゐる。

「準平さん。」

家の中から、とよの甘つたれた聲が呼んだ。

「ちよつと。今日もお歸り、遲くなんの。」

又準平さんなんて呼んでゐる——ちよつと舌打ちして、わざと返事をしなかつた。

傾きかけた日ざしの中を、蜻蛉が翅を光らせて飛びかひ、中には磨きあげた自動車の胴體に、吸ひつくやうに來てとまるのもあつた。

「準平さん、そこにゐるんぢやないの。」

格子を開けて、亭主の下駄をつつかけたとよが、縋りつくやうに寄つて來た。
「ねえ、今日も旦那さま、他所へ御廻りになるのかしら。」
「よせよ、準平さんなんて。」
他人が聞いてゞもゐるやうに、てれた樣子で、ぶつきら棒におさへつけた。
「だつてさ。又他所へ廻るやうだつたら、一度うちへ歸つて來る。ごはん、どうしたらいゝかわかんないぢやないの。」
「支度しなくてもいゝよ。」
「どうしてさ。」
「何處でゞも食へらあ。」
不機嫌な顏つきで、見向もしずに答へたが、いきなり運轉臺に飛乘つて、車を背進させはじめた。土と小石を力強く蹂躪つて、一點のくもりも無い自動車は、するすると車庫に納まつた。準平は又暫く眺めてゐたが、聲をかけられるのを避けるやうに、水道を捻つてざあざあ手を洗ふと、さつさと家の中へ入つてしまつた。
「變な人。どうしたのさ。」

とよは一風變つた亭主である事にほこりを感じ後からついてゆくと、準平は緣に近いところにひつくりかへつて寢てゐた。

「ねえ、ほんとにごはん支度しないでいゝの。」

ぺつたり寄添つて坐つて、相手の體をゆすぶつた。うすく目をつぶつて何か考へてゐるやうに、口を堅く結んで答へない亭主の生れつきは色の白いのが、日に燒けて健康なあかみを帶びてゐる頰や、首筋や、腕を、好ましく見守つた。うつちやつて置くと、その儘眠つてしまひさうに見えた。

やつとのおもひでいつしよになれた日の喜びを、とよは未だ少しも失つてゐなかつた。多勢(おほぜい)の朋輩の眼を盜んで、洗濯物を引受けてやつたり、お茶うけを運んでやつたり、スウヱタアを編んでやつたり、出來る丈の親切を盡しても、一向喜んでくれない相手が、かへつて道心堅固の賴母しい人に思はれ、愈々おもひはつのるばかりだつた。何時ともなく邸內の者に感づかれ、からかはれ、出入の御用聞にも人氣のあつたゞけやつかまれ、噂を廣められた。女中頭の年寄から、御隱居の耳に入り、かへつて御隱居の言葉添で、いつしよになる事が出來た。

とよは邸うちでもきりやうよしで、きさくで、御隱居の御氣に入りだつた。準平にしても、愛

嬌のいゝ、惡氣の無いとよの心づくしは、嬉しくない事はなかつたが、可憐とか、無邪氣とか、いぢらしいとかいふものよりも、氣高い上品な美しさを慕ふ心持が強く、おもはれ、いつしよになる事に、氣の進まないおひめを感じ、まだ早いとか、くらしが苦しくなるとかいつても見たが、第一年とつた兩親が、長年扶持されてゐる御隱居の思召にいちぎもなく、のつぴきならぬ事となつた。今では庭の掃除や、近所の使ひ走りをつとめてゐる老夫婦が、邸の外に出る事になつて、とよは準平のところへ飛込んで來た。それはつい前年の事だつたが、年内には父となり母となる二人だつた。

「ねえ、あたし今日聞いたんだけど、奥さまも御目出度なんだつて。」

えゝ——といひさうな目をあけた準平の顏の側で、とよはお腹を抱へるやうな形をして見せた。

「やうやく御出來になつたらしいんだつて。」

「誰がさういつた。」

準平はむつくり半身を起した。

「みんなさういつて居たわ、あんた、此間病院におともしたでしよ。あの時みておもらひになつたんだつて。」

とよは我身にひきくらべ、夫人の喜びをおもひやり、自分自身の幸ひを一層深く感じた。準平さんに似た、男らしい男の子が生れてくれるといゝなあ――とよは頰を上氣させ、亭主の手を求めて、強く握りしめた。

準平は詰襟の服に學生帽をかぶり、見送りに出てゐるとよを後に殘し、大きなカアブを威勢よく描いて、邸の門を出た。丸の內の事務所へ主人を迎ひに行く、いつものならはしだが、それから先どこへ行くかは、その日その日の一太の出まかせだつた。眞直ぐ家に歸るのは月に一度か二度で、倶樂部で碁を打つ、球を撞く。その仲間を誘つて飯を喰ひに行く。きまつて二次會になる。日曜はゴルフで、ゴルフの歸りも何處かに誘ひ誘はれて行く。事業と女の外には何の趣味も道樂もなかつた先代とはうつて變つて、一太には企業慾も金錢慾も無いが、器用で多趣味だつた。物心ついた時には家は旣に富んでゐたので、彼にとつて金錢の價値は低いのがあたりまへだつた。默つてゐても、各種の事業に携はる事が出來た。だから、仕事に對する慾望も、強くないのが自然だつた。彼には競爭意識が乏しかつた。鬪爭精神を缺いてゐた。誰に習ふといふのでもなく、油繪も描いた。歌や俳句も作つた。セロの稽古に通つた事もある。長唄もきゝ覺えた。ダンスも

やる。碁は素人初段の強さを持ち、寫眞は競技會の審査員格だつた。自動車の操縦もやり、ヨットにも自信があり、スカアルも漕ぎ、ゴルフにも凝る。一太は自分自身を客觀的に見て、物の理解のよさを認めると同時に、一事に熱中する意力の乏しさと體力の不足をなげく事が多かつた。全く彼は、將來の希望や計畫を樂み考へる事が無い。その日の事さへ出たとこ勝負だつた。朝、家人に見送られて玄關を出る時、その晩の豫定をきかれるのを非常にいやがる。誘はれると拒めない性質から、豫定が無意味な事を自分で承知してゐた。

準平は、さういふ性格の主人の迎ひにゆく事を好まなかつた。たまに、今日は眞直ぐうちに歸るよといはれる時の嬉しさも、此の頃は愈々稀になつた。待合の塀の下に幾臺も並ぶ自動車の一臺として、幾時間でもあてなしに待つ苦痛と馬鹿々々しさには馴れてしまつた。さういふ場所で落合ふ仲間は大概顏がきまつてゐて、退屈しのぎに主人の惡口をいひ合ふのであるが、口の重い準平は、こゝでも變人扱ひされてゐた。世間には、自分のところばかりでなく、毎夜々々宴會をつゞけ、午前さまと呼ばれる人間の澤山あるのには驚いた。他家の運轉手の話を聞いてみても、一晩に二つも三つも座敷を廻るのが珍しくなかつた。さういふ主人達の生活を羨み、ねたむのが普通だつた。準平には馬鹿々々しいばかりで、一向羨しくなかつた。彼が何よりも心苦しく思ふ

のは、夜更に山の手の邸へ歸ると、それが午前二時だらうが三時だらうが、坂を上る自動車の音を聞いて、玄關に迎へるのはさち子夫人だつた。おもひやりの深い夫人は、用人や女中達を先に寢かせて、自分丈が起きて待つてゐた。深酒に疲れた主人を出迎へる夫人の白い顏を見ると、おともをしてゐる自分の責任のやうに感じて、なさけなくなる。何といふもつたいない事かと、腹立たしくもなる。

自動車は丸の内の坦々たる大道を風を切つて走つた。夏に向ふ夕空はあかるく、爽かに、プラタナスの並木に風が動く。どのビルディングからも、仕事を終つた男女が絶間なく吐出され、四方に散つてゆく。一太は大ビルのてつぺんにちひさい事務所を構へ、祕書兼受附の若者を雇つてゐたが、別段仕事らしい仕事を見るのでは無かつた。家にゐるよりも氣が變るといふだけで、其處はゴルフ仲間の集會所のかたちだつた。そのビルの入口に、葉卷を銜へた主人の姿を見ると、準平は素早く車から下りて、扉をあけて待つ。

「倶樂部。」

行先を口にしただけで、又葉卷を口にした。強い香が、窓から流れ出た。銀座裏の倶樂部の前でとめると、

「待つてゐて。」

といひ殘して、一太はさつさと姿を消してしまつた。子供の時こそいつしよに遊んだが、成人の後は互に用事以外の口をきかなくなつた。準平は父親からうけついだ強い義務感から、自分のつとめを當然のものと思つてゐたが、一太は曾て友達のやうにたはむれた準平に、主人としてのぞむのは心苦しく、いつも人しれず惱んでゐた。

準平は今日も亦、いつ歸るのかわからない主人を待つ身となつた。いつもの事には違ひ無いが、つひになく氣持がおちつかず、馬鹿々々しく思はれて來た。倶樂部の二階で何をしてゐるのか、曾てのぞいた事もないのだが、どうせ碁か、撞球か、麻雀か、ろくでもない友達と無駄口を叩きながら、ひまをつぶしてゐるに違ひ無い。年中よくもあきないものだと思ふ。どうせ今夜も亦、いつもの連中で、どこかへ出かけるに違ひ無い。十二時、一時迄あてもなく待つてゐなければならないのだらう。彼は不意に、それが昨日や今日といふ短い時間に限られた事でなく、遂に一生變らない自分の生活なのだと思つて、吃驚した。それればかりでは無く、とよの云つたのが本當の事とすれば、それは自分一代の事ではなく、或は自分の息子の代迄、その又次の孫の代迄、いつ迄も變らない運命なのではないか。彼は年とつて腰の曲つたおやぢの生涯迄考へてみた。人力車

と自動車の違ひこそあれ、おやぢも先代の主人を乘せて、會社から會社へ、倶樂部から待合へ、妾宅へおともして、自分は路上で歸りを待つてゐたに違ひ無い。準平はさういふ疑を持つ自分をたしなめようと努めたが、不思議にしつつこく、意地惡く、念頭から消えてなくならなかつた。それに絡んで、さち子夫人の妊娠の噂が、一層頭を混亂させた。自分達とは違つて、生活の心配のない大家のあととりの結婚は早かつたが、二年たつても三年たつても、子供は生れなかつた。一太の素行の爲だといふ者もあつたが、準平は、あまりに美しく、上品な人には、子供をうむ事は似つかはしくないやうに思はれた。子供の出來ないといふ事は、御隱居をはじめ一門のなげきとは聞かされたが、準平にはそれが愈々美しく、純潔に考へられた。

「あのさち子さまが御妊娠か。」

彼は夫人の喜びを想像しながら、何故かあさましくさへ感じて歎息した。

たつた去年いつしよになつたばかりのとよが、もう身持になつたと聞いた時、あまりの早さにやれやれと思ひ、

「もう出來たのか。」

と、つい非難めいた言葉をもらして、せつかく喜んで貰へるものと信じてゐたとよを、しくし

く泣かせてしまつたが、日のたつにつれて、彼にも父親の喜びが感じられて來た。車の進行の邪魔になる往來の子供等には、いつも腹立たしく思つてゐたが、やがて自分も親になるのだと自覺してから、いたはしく、大切なものに思はれて來た。えゝあぶない、ひいてしまふぞと怒鳴つけたかつたのが、怪我をさせまいとする細かい注意が、一段と深くなつた。兎に角、とよの妊娠を知つてからは、今迄とは別の情愛、別の心づかひを持つやうになつたのだが、さち子夫人に對しては、妊娠といふ事がとつてつけたやうに思はれて、彼の讃仰の念にくもりをかけられたおもひがした。

主人の子供と自分達の子供が、偶然にも時を同じくして生れる――準平は長い間の一太と自分の姿を、一瞬間のうちにまざまざと想ひ描く事が出來た。いつしよに學校へ通ふ。自分の子供はよく出來る。全甲で、優等で、級長だ。主人の子供はひよわくて出來が惡い。それでも主人の子は中學に行き、大學にゆく。そして美しい令孃を迎へて妻とし、會社の重役となり、倶樂部で碁を打つ、球を撞き、ゴルフをやり、待合に行く。自分の子はその命のままに自動車を運轉し、夜の更ける迄往來で待つてゐなければならない。彼は心が白々と寒くなつた。自分はいゝ、自分はそれでいゝ、しかし自分の子供はそれではいけない、自分の子も中學に入れてやる、大學にも入

れてやる――だが、大學を優等で卒業しても、主人の子供のやうに直ぐに重い役目につく事は出來まい、主人の子供のやうに、美しい令孃を貰ふ事は出來まい。準平は熱を病むやうな心持で、まだ生れない子供の將來を思ひ迷つた。

「おい、築地の蝶々だ。」

一太の友達の伊能男爵の顏が、硝子にうつつた。その後には葉卷を銜へた一太の顏が笑つてゐた。

自動車は、銀座の人の出さかりをつつきつて、眞直に走つた。高い塀で圍つた待合の中に、二人が消えると、準平はその塀の下に車をつけた。若い貴族院議員は金が無い。彼は每日誰かをつかまへて、遊びの場所へ行く。其處から方々へ電話をかけ、仲間を呼び集める。誰が主人だか客だかわからない座敷で、男爵議員は一番愉快にはしやいだ。おともさんは御支度料を貰つて、夜の更けるのを待たなければならない。準平は飯を食ふ事などは少しも考へず、運轉臺で元氣なくあくびをしながら、不潔な掘割のどぶ泥の臭を持つて來る夜風に吹かれてゐた。

一太は妻の妊娠を、別段喜んではゐなかつた。子供なんか出來なくてもいゝ、自分に似たろく

でなしなんか生れなくていゝ、どうせおやぢ一代で作つた富なら、自分一代でなくなしたつて構は無い、自分の死ぬ間際にでもなつて何か有益な事に費ひ果してやつてもいゝ、美術館を建てゝもいゝ、學校に寄附してもいゝ、市民の爲の大運動場をつくつてやつてもいゝ、萬一子供が生れない場合、無理に養子をして、財產をうけつがせ、守らせるのは愚のこつちやうだと思つてゐた。裏日本の貧村から、金儲といふ絕對無二の目的貫徹の爲に東京へ出て來て、幾波瀾の後にそれを成就した父の一生のやうな、張合のある生活は自分には無い。命がけで海の漁に出るか、忍苦して土を耕すか、二つにひとつの生計しか無い貧村の貧家に生れてこそ、いちかばちか一生をかけた賽ころもふれるのだ。生れた時から不自由を知らず食ふ事も着る事も樂に出來れば、そんな事に努力するこゝろざしは持たないのがあたりまへだ。曲りなりにも學校を出さへすれば、自分の坐る椅子はいくらでもある。それればかりでは無い、靑春の心を燃やす異性さへ、ちやんと與へられ、戀愛よりも先に配偶者はきまつてゐた。

そのさち子は、一太の目にもすぐれて美しく、やさしく、上品で世の常の女性の缺點として數へられる何ものをも持つてゐない事は、正にその通りだ。だが、それが一太には、堪へ難い缺點だつた。さち子は生家の悲運を心から悲しむと同時に、新鬪家に受けた恩誼と、自分の身の上を、

覺悟よく感得してゐた。怜悧で、柔順で、貞淑な妻は、一太にはとりつくすべも無く思はれた。彼は、何處からも非のうちどころの無い妻に反撥して、藝者でも、女給でも、ダンサアでも、映畫女優でも、その中でも浮氣な、淫蕩な、粗野な、下品な女と、祕密を持つ事で心を慰めた。お凸の美、やぶ睨の魅力、目尻の下つた親しみ深さ、受口の性感、縮毛の不潔な聯想——さういふ相手とたはむれつゝ、ざまあみろと叫び度い快感に陶醉した。彼は自然に上流夫人令孃の姿態に反抗する審美眼を養ひ、深窓の女に何の感情も起らず、百貨店、銀行、會社、時には乘合自動車に働く若い職業婦人に、いきいきとした美しさを發見し、心と肉と共にそゝられる自分であると認めてゐた。年中出かける花街の遊びさへ、とつくに興味を失つてゐた。藝者の身についてゐる型、待合の定式が、すつかり鼻についてしまつた。他人が誘ふから行くだけの事で、外に時間を消す場所があれば、その方がいゝと思つてゐる。つまりは、禮儀正しい、貞淑な妻のゐる我家に歸るのが氣ぶつせいなのだ。

さういふ氣持から、往來でみつけて、かくし女をこしらへた。銀座通に辻君が出るとか、ステツキガアルがあらはれるとかいふ噂を聞いて、新しい刺戟にがつがつしてゐる一太は、倶樂部の歸りに、準平を追拂つて、一人で散歩して見た。夜店に吸ひつく人ごみの中に、葉卷の香をまき

ちらし、何の目的も無いやうな、不用意な身の構へを見せながら、實は一人歩きの女とみれば、その方に鋭い視線を向けてゐた。つばの廣い夏帽子を思ひ切り横ちよにかぶつて、額の高い半面の效果をくつきりと見せた女が、別段商賣人らしいけばけばしい化粧はしてゐないが、腕のあらはな洋裝で、身のこなしにいたづらつこらしい、浮氣らしいものがあり、不圖彼の六感に觸れた。一太は何氣なく引返し、少しばかりの間隔を置いて、つけてみた。女はふりむきもしず、妙に片一方のお尻ばかり大きく搖れるやうな歩き癖で、人ごみを歩きつけてゐるらしくさつさと行つたが、多勢人のたかつてゐる夜店の前で、人の肩と肩の間へ分けて入るやうに首を延ばして立止つた。その機會をはづさず、近寄つて肩を並べてのぞいて見た。汗か人いきれか、むうつと鼻をつく中に、明かにその女の身につけてゐる香料が、ほのかに頰に觸れた。玩具の店で、おもちや屋は、かなりの人を集めた得意さで、口上は何も述べず、たゞにやにや笑ひながら、粗末な木製の三段に折疊めるすべり臺の上に、起上小法師の達磨のやうなのをころがしてゐた。セルロイド製の達磨は、尻にしかけた重味でくるくると廻轉し、坂道を下りて行く。

醉拂つた、會社員風の二人連のひとりが、値段をきいて買つた。

「はゝゝゝ。子供の土産だ。」

大の男がこんなものを買ふのは羞しい、なあに酒の上なんだと云ひ度い様子で、つれにいふ風で、實はあたりの人にいひわけをし、わざと足取をあぶなくして立去つた。

「あたしにも。」

女はさういひながら、ばつの悪さうな顔を一太にむけて、一寸笑つて見せた。それは今の醉拂ひが、あたりの人に氣を兼たのと少しも違はない微笑に過ぎなかつたが、一太は半分は誘はれ、半分は意識して笑をかへした。

女が歩き出すと、一太も直ぐ後からついて行つた。

「をかしいでしよ。」

達磨の姿がをかしいといふのか、そんなものを買ふ自分がをかしいといふのか、意外にも先方から口をきいた。

「矢張お子さんの御土産ですか。」

一太はすかさず肩を並べた。

「いやあだ、お子さんだなんて、お隣の子にやりますの。とつても可愛い子供なんですもの。」

少し大き過る口をにつと笑つて、白い歯を見せたが、それつきりで、無頓着に、ぐんぐん人を

分けて行つてしまつた。どうも見た事のある女だ、馴々しい様子だつたが――一太は記憶の中から呼出さうとつとめたが、わからなかつた。

「なあんだ、あの女か。」

その晩、うちへ歸つて服を脱いでゐる時、何のきつかけもなく思ひ出した。倶樂部の建物の一部で、女ばかりで贅澤な洋物品を賣つてゐる店の賣子だつた。一度か二度、半巾（ハンケチ）か襟飾（ネクタイ）か、買つた事がある。なあんだ――先方でも自分を知つてゐる筈だと思ふと、好奇心は俄に下降したが、同時に親しさを倍加した。

翌日、一太は倶樂部へ行く時、買物にかこつけて、その店に寄つて見た。帽子をかぶらない女は、廣い額に豐かな白さを見せ、西洋梨の形の顔に、心安い柔かさがあふれてゐた。すまして相手になり、買物をすませておもてへ出るのを送つて出て、そこではじめて、

「昨晩はとんだところを御目にかけちやひましたわ。」

と體をふたつに、折るやうなしなをして笑つた。

「あれ、こどもさんの御氣に入つた。」

「あら、ほんとにお隣の子供なんですよ。あたしママさんなんかぢやありませんわ。」

くくくくくとうちに引くやうな笑を殘して、その儘店のなかへかけ込んでしまつた。

一太がその女、玉乃のアパアトへ、ひそかに忍んで行くやうになつたのは、それから間もなかつた。親類の喫茶店の手傳をしてゐるうちに親しくなつた會社員と、二三年夫婦みたやうな生活をしてゐたが、その男に死なれてから、洋品店の賣子になつたので、男の身につけた保險金の外には殘つた物は何もなく、その金さへ段々減つて行くばかりの生活だつた。

「いゝのよ、どうせいんちきアパアトなんですもの、ダンサアだの女給だの、そんな人が多いんだから、誰も何とも云やあしないわ。」

一太は、さういふ亂脈なアパアトの風景に、新しい世界を發見した。玉乃はお隣の子供といふのを借りて來ては、きやつきやつといつて騷いだ。四歳になる男の子で、頭でつかちのきよとんとした顏つきの、こどもだつた。隣室の若い夫婦は、病院の助手をしてゐるといふ男と、ダンサア上りの細君だつた。

「君はそんなに子供が好きなのかい。」

「大好き。あたし先に流產した事あるの、あれがゐれば三歳なんですもの、でも、ゐないでよかつたかしら。」

目を細くして、流れた子供の事か、それとも誰といふ事なく子供といふものを想ふのか、うつとりとしてみせた。

「ほしい、ほしい、あたしに子供生ませてよ。」

一太の膝の上に乘ると、ねばねばした腕をからんで、いつ迄もしつつこくゆすぶつた。

新しい女には洋品店のつとめをやめさせ、晝日中事務所を拔け出して、アパアトへ通ふのが面白かつた。忠義面をしながら、何から何迄意地惡く見張つてゐる、準平も知らない――それだけでも、祕密の樂しさで胸がいつぱいになる。

放蕩無賴の良人にいためつけられて萎縮し、人の噂にのぼつた美しさを若くして失つてしまひ、不平も不滿もうらみもねたみも、すべておしかくし、世間へ顏出しもせず、家にゐても口數もすくなく、日陰の苔のやうな境涯に落ちた母親の一生から、さち子は或階級の男達に對して、少しも尊敬の念を持たなかつた。新關家に引取られ、一太とは兄妹のやうに育ち、年頃になると、やがて夫となり妻となる身だとさとりもしたが、特別の親しさも持たなかつた。一太は幼少の時から、虛弱で、我儘で、根氣がなくて、むら氣だつた。幼いさち子は、自分をうやまひかばひ、親

切を盡す準平の方が好きだつた。時々のぞく準平一家の、貧しいながらも夫婦親子が、むつまじく暮らしてゐる樣子を見ると、ちひさい時から家庭悲劇に泣かされたさち子は、羨しさに涙ぐむ事さへあつた。さういふ樂しい一家といふものは、自分達にはあり得ない事のやうに考へられた。さち子は自分の將來に輝かしい希望を持つ事もなく、戀愛のあこがれも、結婚の期待も知らずに、定められた軌道をずるずると、一太の妻になつたに過ぎない。幼少の時からいつしよに育ち、互の性情も知り盡してゐる夫婦には、新婚の喜びも淡い。夫婦になつてからの新しい發見は何も無く、昨日迄は他人だつた二つの心が、とびつき抱きつく歡喜も感じる事が出來なかつた。

一太にしてみても、行儀よく、義務感で良人につかへる妻の態度が、あきたりなかつた。典型的の上流婦人の美しさだと、誰しもいふ妻の美しさには、一太も異存は無い。しかし、その美しさは、他人から見て尊ぶべき美しさかも知れないが、愛撫すべき美しさでは無かつた。一太は、おもちやにし、いたづらをし、おもちやにされ、いたづらされる相手の面白さを求め、缺けた美しさを好んだ。我家で、折目正しい妻と差向ひでゐる事は、心の壓迫だつた。彼は、準平がとよといつしよになると聞いた時、嫉妬に堪へられなかつた。學校の教場でも、運動場でも、かなはなかつた準平に、こゝでも亦負かされ、幸を奪ひとられたやうな氣持だつた。

とよは眠つてゐる時でも笑つてゐるやうな顔たちの娘だつた。もぎたての果物の艶を肌に持ち、健康な肉體の喜びが笑となり、いつもはれやかな、うたふやうな聲をばら撒いてゐた。一太はそのぷりぷりした腰のまるみや、ふくれあがつた胸の豊かさに、眼を引かれて困る事が度々だつた。

こんな失敗もある。洋風の書齋の長椅子で晝寢から覺め、呼鈴を鳴らして水を求めた。とよは、氷の水をコツプにみたし、盆にのせてうやうやしく捧げた。一太は半身起し、一息に干したコツプを、盆の上にはかへさず、傍の小卓の上に置いた。それをとらうとするとよの手は、いきなり兩手でつかまれ、引寄せられた。片手には盆を持ち、片手は主人につかまれて、とよは身の處置に當惑し、するすると床の上に膝が崩れて坐つてしまつた。一太は兩手をとよの頬にかけて、上をむかせ、葉巻の香のする顔を寄せて來たが、その時とよは大きくみひらいた眼に、涙をいつぱいためて體を堅くした儘身動きも出來なかつた。そこへ扉が開いて、さち子が入つて來た。一太は素早く手を放し、長椅子に倒れて眼をつぶつた。とよは呆心の姿で立上り、室の外へ去つた。

一太はその後機會を持たず、準平の女房となつてからのとよに、すこやかな美しさの愈々豊富になつたのを見て悩まされた。

さち子がたゞの體でないときまつた時、一太は他人の話のやうに氣の無い受方をした。

「ふうん、子供が出來たつて。嬉しいかい。」
眞劍に、覺悟を定めたやうな、凛とした顏で報告したさち子は、俄に緊張を失つて、
「生れてみませんとわかりませんわ。」
何の媚もなく、冷かに答へた。
「準平のところでもお目出度ださうです。」
良人が別段乘出して聞きもしないので、さち子は話の量をふやして、迫つてみた。何かの動搖があらはれはしないかと、ひそかな敵意を持つてゐた。
「不思議だなあ。主從三世が三代つゞくのか。」
一太は自嘲するやうに歎息した。自分がいつも準平に對して抱いてゐる煙つたい感じ、それが鋭く頭に浮んだ。どうせ親の體質をうけつぐとすれば、自分達の子供よりも準平の子供の方が丈夫であらう。體ばかりではない、學校の出來もいゝのか、相撲をとつても、かけつこをしても、かなはないのか……
とよの腹部は美事に膨脹し、誰が見てもたゞならぬ體とわかつたが、さち子は脊丈の高い爲か、

知らない者は氣のつかない位目立たなかつた。もう外出はしないやうに、榮養を十分とり、適度の運動をするやうに、醫者は大事をとつて繰返し、さち子は初産の恐怖からそれを守つた。時折、つとめて庭内を散歩し、裏道を靜に下りて、それとなくとよの樣子を見にゆく事もあつた。あからさまな家のなかを見られるのは、いやがる事かもしれないと思ひもするのだが、同じ女の一生の大事にぶつかつて、せつない程の同情が、抑へてもおさへ切れなかつた。とよは大きなお腹をかゝへて、ふだんと少しも變らず、洗濯をしたり、張物をしたり、甲斐々々しく働いてゐた。襷をかけた肩から背中の肉づきのよさ、血の色の透いて見えるむき出しの腕、お産にともなふ恐怖などは、とよの體の何處からも感じられない。

「とよ、準平もさぞかし喜んでゐるでせうね。」

聲をかけられると、とよは眞赤になり、なつかしさうに寄添つて、

「嬉しいんで御座いませうか、別段何も申しませんが。」

とよにしても、これ迄とは違つて、同じ身重の身だと思ふと、夫人に馴れ易く、親しみやすかつた。

「奥さまも御變り御座いませんで結構で。旦那さまも御喜びで御座いませう。」

「さあ、嬉しいんでせうか。」

とよは其の答が、自分の眞似のやうに聞え、生娘らしくをかしがり、體を揉んで笑ふのであつた。その朗かな笑の中に、夫婦の者の信頼し切つた、樂しさ、くんでもつきない喜びを、その儘見せつけるものを感じ、さち子は突然胸が迫つた。一歩一歩拾つて、なだらかな坂道を丘の上へ戻る自分が、寂しい、なさけないものに思はれるのであつた。

夏も過ぎ、秋も深くなつて、とよの產月（うみづき）は目の前に迫つて來た。丘の上の欅や椋の大木に小鳥が騒ぎ、風の度毎に梢を離れる落葉は、準平達の住居の屋根にも障子にも降りかゝる。さち子の彈くピアノも久しく聞えず、その人が裏道からおとづれる事もなくなつた。とよははちきれさうなお腹の爲に反身（そりみ）になつて歩く姿になつたが、それでも水仕事もし、拭掃除もした。はあはあ息をしながら、坂を上つて邸の臺所へ顔を出し、元の朋輩達と冗談をいつたり、からかはれたり、それが氣散じになつた。時には奧の御隱居や、さち子のところへも顔を出した。

「お前が上手に產んで見せてくれると、さち子も安心しますからね、氣をつけておくれよ。」

初孫の生れる喜びで、御隱居は大層氣がよくなつてゐた。とよは、未だ生れない赤坊の爲に、度々頂き物をして引下つた。

―あゝいふ連中は、赤坊の生れるその日迄、平氣でゐるんだらうなあ。よくもあのみつともないざまで、人前に出られたものだ。」

一太はその姿を醜態だと罵りながら、何か慾情をそゝられる、なまあつたかいものを感じた。二箇月位後だといふのに、さち子の方は額に冷汗をかいてゐるやうな青ざめた顔をし、手足を動かすのさへ一々氣を配り、良人の肉體の一部にさへ觸れられる事を厭ふありさまで、そんなに迄して生む必要は無いと、怒鳴り度い心持がうづいた。

何といふつまらなさ――彼はアパアトの女の技巧と比べて、さち子の靜的な態度があきたりなく、あまりに淑かな立居が、自分を輕蔑してゐるものゝやうにさへ感じられた。

彼は或日、突然さち子の首に手をまいて、接吻しようとしたところ、さち子はあわてゝ拒んだ。

「どうしたんだ。」

「そんな事、胎教に悪いわ。」

冗談と思つて笑ひかけた一太は、眞劍に自分をたしなめ、睨んでゐる妻の様子に笑を抑へつけ、何をいつてやあがるんだと思ひながら室外に去つた。

早い霙が東京の一部に降つた日の暮であつた。準平はいつもの通り、事務所へ車を持つて迎ひに行くと、祕書兼受附の若者が、あわてた樣子で出て來て、いつも晝食に外出し遲くも二三時間で戻つて來るのが、今日はどうしたのか未だに歸つて來ないといふ。長い事待つて見たが一太は歸らず、諸方へ電話をかけて見てもわからないので、邸の指圖をうけ、空しく歸邸して御隱居やさち子の心配顏に、いろいろ問ひたゞされたけれど、元々準平には何と答へる術も無かつた。何か間違ひがあつたのでは無いか、白晝大道で罪も無い老事業家を射殺したり、……………………暗殺したりする世並だから、どんな非道な事が行はれるかわからない、いつそ警察へ屆けた方がよからうと、おろおろ評議してゐるところへ電話がかゝつて、一太の代理の者だが、奧さまに直接申上げるやうにいひつけられてゐるから、出て貰つてくれといふ。

「こちらは御主人の代理の者で御座いますが、奧さまですね。」

はきはきした女の聲が、さち子の耳に鋭く聞えた。

「御主人があたくしどもで、急に御氣分が惡くおなりになつてやすんでゐらつしやいます。大變御熱がおありになるものですから、今晚はこちらに御泊になりますから――いゝえ、別段大した事はおありになりません。御醫者さまも御出になつて、流感だらうとおつしやいます。それから、

御隱居さまには御心配をかけないやうに、そこんところをうまくいつて頂き度いとおつしやつてゞす。」

さち子は、はあはあ受答へしながら、心配で心配でたまらなくなり、電話の側へ來てゐる隱居をはゞかり、愈々自分の方からは口がきけなかつた。待合か、料理屋かそんなところに違ひ無いと思つた。

「なんですか。どこからかゝつて來ました。」

御隱居はわれを忘れてさち子に引添ひ、早くたしかめろと促すのであつた。

「はあ、よくわかりまして御座います、で、只今そちらに御厄介になつて居りますので。そちらは、どちらで御座いませうか。」

「こちら、あのう旦那さまのおつしやるには、心配する事はない、誰も寄越さないやうにと、斯うおつしやりますので……」

「でも、何かこちらから用事の出來ました時、存じて居りませんと困りますから。」

「でも、一度旦那さまに伺つてみませんと………」

たしかに相談に行つたに違ひ無いが、それつきりで、いつ迄待つても聲は聞えて來なかつた。

「をかしな人だねえ。」

御隱居は何か不吉を豫想して、浮かない顏をしてゐたが、さち子は果して良人が病氣なのか疑はしく、又昔の遊びがはじまつたのかと思ふのだつた。

次の日、もう歸るかもう歸るかと待ちあきた午後、又電話がかゝつて來て、どうも熱が下らないから、××博士に來て貰つてくれ、場所はアパアトだと、はじめて町所をあかした。思ひもかけない事だつたので、さち子も驚き、何か忌はしい事が起つたのではないかと胸を打つた。

「あたくし、先生とごいつしよに參つてみませう。」

さち子はそれが自分の義務だと思つた。

「いゝえ、あなたはたゞの體でないから……」

御隱居は、一應はとめてみたが、強ゐて引止めようとはしなかつた。

さち子は自分で博士に電話し、主人の身の廻の物を包にして支度した。おともをつれて行けといふ御隱居の言葉には、一生懸命になつて反對した。どんな所で、どんなていたらくで良人がゐるのか、召使には見られ度くない場面が、次々に想像された。

準平は久々でさち子を乘せた自動車を、注意深く徐行させた。大切なおからだと思へば思ふ

程、何かしくじりさうな豫感にとらはれた。あの結婚式の夜の失敗が、まざまざと思ひ出され、あの時の不快な豫感に負かされた恐怖が再現して來るのに惱まされた。

途中で、

「あなたは、其のアパアトには、おともした事無いの。」

さち子は心せくもの丶やうに訊いた。

「存じません。」

「ほんと。」

「はあ。」

準平は自分が疑はれてゐるなと思ふと、不平だつた。全く私は存じませんと、もう一度重ねて返事をしたかつた。高名な料理屋待合は、新橋でも赤坂でも柳橋でも葭町でも日本橋でも下谷でも、大概主人を送つた事があるが、曾てアパアトへ車をつけた事は無い。全く私は存じません、私はあなたさまの御味方です、どんな事があつても裏切者にはなりませんと、心の中で繰返した。

博士の宅へ廻り、博士を迎へて、又自動車は走つた。

「どこか御出先で御病氣に。」

博士はたゞならぬ事に思つて、聲をひそめた。
「はあ、アパアトとかに居りますさうです。」
きつぱりと、もうその上は訊いてくれるなといふ答へだつた。
アパアトといふと、直に大きな近代式のビルディングを想像するのがあたりまへだが、それを裏切つてごみごみした町の中にぽつかりと暗い口を開いた、みすぼらしい建物で、準平は其の附近で、幾度もきいて、やうやく探しあてた。立派な自動車がとまつたので、近所の店先や路地口に立話をしてゐたおかみさんや、往來をかけ廻つてゐた子供達は一齊に眼を光らせ、寄つて來て取卷く者もあつた。それよりも、そのアパアトの三階の窓をあけて、顏を突出し、恰度仰向いて視線の合つた準平に、眼で挨拶をした女があつた。さち子も直ぐに氣がついた。準平が風呂敷包をかゝへて先に立ち、夫人と博士がついいて、足場の惡い凸凹の階段を上つてゆくと、今の女は室の外の廊下で待つてゐた。
「どうぞ。」
別段名告もしず、誰であるかを確めもしず、馴々しく室の扉をあけた。內部は疊敷で、紅や紫のはでな色どりの夜着の中に、一太は氷袋を額にして寢てゐた。

「それを。」

風呂敷包を自分で受取つて、さち子は準平を目顔で立去らせた。壁には一太の洋服がかゝつてゐて、彼は男物のパヂヤマで寝てゐるのを、流石にさち子も見逃さなかつた。

「どうなさいました。」

子供の時から一太を知つてゐる博士は、此の室の様子から察して、自分が萬事とりしきつて切廻さなければ、ばつが悪いだらうと思つた。

「やられましたよ、流感らしいさうで。」

元氣よく答へる積りなのが、熱で弱つてゐて力が無かつた。

「誰か伺ひましたか。」

早速一太の脈をとりながら、博士は枕頭の薬罎に目をやつた。

「えゝ、お隣の室に若い御醫者さんがゐらつしやるもんですから……」

玉乃が引とつて答へ、博士に手傳つて、夜具をはねのけ、いかにも其の體を扱ひつけてゐるやうな親しさで、病人の世話をした。さち子は、自分丈が他人のやうな立場にされ、安心してその女の世話になつてゐる良人の顔、呼吸音をはかられてゐる薄い胸、弱々しい白い腕、その肌にう

ねる青い靜脈を、自分には觸れた事もない無縁の人のもの丶やうに見守つてゐたが、不意に自分の立場のなさに思ひ當ると、口惜し涙が浮んで來た。はしたない態を見せまいと、目をそらすと、室の一隅の、やけに大きい鏡臺に、硬直した自分の顔がうつり、今にも醜く崩れさうなので、その弱氣を振拂ふやうに鏡の中から逃げ、反對の側に顔を向けると、恰度病人の足の方の壁に、エッチングの男女閨房之圖がかかつてゐた。それは、いつか一太が自分達の寢室に揭げたのを、さち子が拒んで取はづしたものだつた。はげしい恥辱をはつきり意識した。

「いや、全く流感です。この儘熱が下つてくれゝば心配はないが、さあどうしますかなあ、此處では萬事御不便だらうし……

世馴れた博士は、單に病氣の事ばかりでなく、おもひめぐらして、邸へつれて歸つた方がいゝか、どうか、なるべく自然に、穩かに、誰の氣持も害さずに取運び度いと考へた。

「でも、まだお熱があるやうですし、つめたい風におあたりになつていゝでせうか。」

玉乃は眞直ぐに、さち子の方を向いて、首を傾けた。何かそれは、挑戰するやうな底意地の惡さを含んでゐた。さち子の育ちは、その挑戰に應じる事を恥ぢ、抑へる力を持つてゐた。一太を見ると、靜に目をつぶり、この室で寢てゐる事を望む姿をとつてゐた。

「それでは、看護婦でも……」
さち子は玉乃には答へずに、博士のおもはくに訊いてみた。
「それでは、私の方から一人寄越しませう。明日又うかゞつて、ちつとでもいゝ方だつたら、又その時の事にして……」
この場の様子を見て、長くかゝりあふのはよくないとみきりをつけ、博士は自分の役目は濟んだといふ態度を見せた。
「では、早速看護婦を寄越して頂く事にしまして、どうぞあの車で御歸り下さいまし。」
その時一太はぽつかり眼をあいて、
「君も歸つた方がいゝよ。風邪がうつつたら大變だ。」
たゞの體ではないのだからといふ意味は十分汲めたが、さち子はそれ以上に、自分は邪魔にされてゐるのだ、風邪がうつつて惡ければ、あの人だつて同じだと思つた。
「はあ、準平が先生を御送りして戻りましたら、あたくしも歸らせて頂きます。」
はつきりと、切口上で答へた。
博士は、又明日來る事を約束し、醫者に特有の忙しさうな足つきで、室の外へ出た。さち子も

階段のところ迄送つて出たが、博士に止められて、準平へのことづてを賴んで引返した。
「とんた御世話になりまして。」
そこではじめて二人の女は、初對面の挨拶をした。しらじらしい口上を取替はしながら、觸れてはならない事が互の心にわだかまり、氣まづい不愉快は狭い室内にいつぱいになつた。
いつたい何時から斯ういふかくれ家があつたのか、最近の事だらうか、餘程以前からの事だらうか、準平さへ知らなかつたらしいから、隨分上手にかくしてゐたに違ひ無い、それにしても此の女は何ものだらう、藝者ではないしダンサアらしくもなし、女給といふものかしら。何にしても、自分といふものゝ眼の前で、よくも平氣でよその男の世話が出來るものだ。良人も良人でつひぞ自分には見せた事もない甘えた氣安さで、用事をいひつけたり、返事をしたりしてゐる、まるで自分よりも深い馴染のやうにさへ見えるではないか――さち子はうつとりと、夢の心地で見てゐると、とことこ扉を叩く音がしたので、はつとした。
「お入り。」
玉乃がいふかいはないに、扉があいて、その隙間から、大きな頭の男の子がのぞいた。
「なあんだ、賢坊だつたの。」

玉乃の聲に、赤いスウェタアを深々と着込んだ賢坊は、手に喰ひかけの煎餅を持つたまゝかけこんで來たが、知らぬ大人が居ると見ると、まんまるい眼を据ゑて見守つた。さち子はぐつと胸につかへる感情で、血の氣が頭から逃げてゆくやうに思つた。

「お子さまですか。」

辛うじて震へをおしとゞめた聲だつた。何か云はないでは、身の處置に困るやうな危機を感じた。鋭く、その子供の顏に、姿に、一太を探し出さうとした。

「いゝえ、そんならいゝんですけれど、お隣のなんですの。をぢさんとお馴染になつたものですから……」

眼をあいて、子供の方を見て一太は笑つて見せた。

「いけないよ、賢坊にでもうつつたら恨まれるぞ。賢坊、をぢさんきいきが惡いんだから、今日は來ちやあいけないよ。賢坊を病氣にすると、パパとママに叱られるから、恐い恐い。」

さういつて、夜着を引上ると、かくれん坊のやうにもぐつた。病氣を忘れた御機嫌だつた。

「ほんとに賢坊はお利口だから、おんもで遊んでおいで。ね、をばさんがいゝ物あげるから。」

玉乃は、茶だんすの中から、銀紙に包んだチョコレエトを出して、子供の手に持たせ、押出す

やうに扉の外へつれて行つた。
さち子は、未だ知らない世界の、隣も向隣も他人でない生活が、こんなアパアトの中に營まれてゐるのかと思ふと、又してもつうんと鼻をついて涙が浮んで來るのだつた。
自分達もかういふ氣樂な生活をしてゐたら、もつともつとしあはせなのでは無いだらうか、だから一太も、斯ういふかくれ家をこしらへてゐたのかしら――相手が病人で、無抵抗の姿で寢てゐるのを見ると、心弱く同情する氣さへ起るのだつた。
「雪が降つて參りましたわ。」
さういひながら、玉乃は室に戻つて來た。坐つたまゝのび上つて見ると、窓の外の灰色の空にちらちら降るのが見え、風になぐれて硝子窓に貼りつくのもあつた。
「ほんとに御心配になりませんやうに、あたくし何でも致しますから。」
玉乃はさち子との間に一太をさしはさんで、ばつの惡さから逃れ度い様子だつた。
「近々に御子さまが御出來になるさうですし、お障りになるといけませんわ。」
「ありがたう、自動車が戻りましたら失禮させて頂きます。」
さち子にしても、何時迄も此處にはゐられないと思つた。それにしても、西洋梨のやうな女の

顏か、想像した程美しくなく、とぼけたをかしさを持つてゐるのを見極めて、多少心持も輕くなつた。藝者のやうに權高くなく、世帶じみてゐるのも、敵意を柔らげた。

準平の車は、看護婦を乘せて戾つて來た。頑丈な、世馴れた風の看護婦は、異樣な室内の對照に、一寸不審を抱いたらしかつたが、直ぐに悟つて、何も顏色には出さず、病人の氷袋をかへたり、體溫をはかつたり、脈を見た。

「それでは何分よろしく。」

さち子は玉乃と看護婦に挨拶し、たまたま病人の眠つてゐるのをいゝ機會に立上つた。よせといふのにきかないで、玉乃は階段の下迄送つて來た。

暮方の町には早い燈火がつき、雪は自動車の前の硝子に音もなく吸ひついて、行手をかくした。さち子は深い毛皮に頸を埋め、何か考に沈んでゐた。良人はあの狹い汚いアパアトの一室に、あのお凸の女といつしよにゐるのが、邸で自分とくらすよりも幸福なのであらう　それは、いかにも尤ものやうに思はれた。けれども、邸へ歸つて、姑に今日の一日の報告をする辛さ、準平にはしたない良人の所爲を知られた辛さ、自分達夫婦の仲の楔のゆるみを他人に知られた恥辱は、行ひ正しく過して來たさち子の心をいためつけた。良人にはあゝいふ女がある、それなのに自分

はその良人の子供を生まなければならない、何といふ淺ましい事か、あの女に子供が出來て、自分は一生石女だつた方がしあはせだ……

準平も胸が晴れなかつた。日頃の主人の不身持は知つてゐるが、あゝしたアパアトで營まれてゐる現實に、夫人を直面させた事に義憤を感じた。これ程の奥さまを持ちながら、何といふ罰當りだらう、あんなアパアトなんかで病氣になる、天罰だ。尊いものが尊まれず、うやまふべきものがうやまはれず、美しいものが汚されたやうな、胸の晴れないおもひがあつた。病氣になれ、もつと重い病氣になれ。それはいゝ、それはどうなつても構はないが、今の奥さまの御心のうちは……

彼は間違の無いやうに、無いやうにと注意しながら、つい考が他所に向いて、はつと驚く自分に氣がついた。俄の雪に、圓タクは客にありついて四方に飛ぶ。注意しないと危ないぞと思ふそばから、一太の事、さち子の事が頭の全體を占めてしまふ。子供の時分からのいろいろの事が、前後の脈絡もなくおもひ浮ぶ中に、又してもあの夕立の日のかくれんぼが、幻となつて眼にうつる。凡そ淸らかな童女の肉體、それは微塵の曇もない、つやつやと白く滑かな、その方は今車の中にゐる、自分とたつた二人――いけないと思つた瞬間に、急いでハンドルを廻したが、逃げき

れず、胴中へ激突をうけた。溝のふちで、車は危く止まつたが、硝子は破れ、車體にも異變を感じた。さち子は座席から滑り落ち、兩手で顔を覆つて動かなかつた。

「奥さま。」

といふ聲が少しも出なかつた。大變だと思ふ以外には、何も思ひ浮ばなかつた。かけ下りて、扉をあけた時、さち子は夢から覺めたやうに顔をあげた。透き通る程蒼白な美しさ――それよりも、座席から落ちて膝をついた裾が割れて、衣服の間にあらはな膝つこの白さ……

準平は、あゝ御無事たつたと思ふと、雪で濡れた路面に折敷いて、拜むやうに眼をつぶつた。

雪の日の自動車事故は、直接さち子の肉體を傷つけなかつたが、思ひもかけない激動は胎兒に影響して、出産の時期を早めた。

あわてゝ入院し、滯（とゞこほり）無く生みは生んだが、八月兒で、發育は十分で無かつた。

「男の御子さまで御座います。」

耳もとで、誰かのさゝやくのを聞いた時から、さち子は女として、母としての喜びの外に、とりとめもなく新しい不安の、身邊に迫るおもひがあつた。誰も彼も、男の子でよかつたといふ。

ほんとに男の子でよかつたかしら――幸に丈夫に育ち、新關家の跡目をつぐ、そして……

さち子の妙に冴えた頭に、忌はしい心配が直ぐにはびこるのである。里の血統をひいても、良人の血を受けても、我儘な、つれない、あさましい男となるのではないだらうか、藝者遊びもするし、妾も圍ふし――あのアパアトの額の廣く高い女の顏が、不覺にも目に浮ぶのである。其處に良人はあの日の儘、引つゞき寢てゐる。追々熱もとれ、いゝ方だとは聞いたけれど、良人は寧ろ病氣がなほつても、いつ迄もあのアパアトにゐたいのでは無いだらうか、それが良人の身にとつて、何よりの幸な事かも知れないと、疑つてもみた。男といふものは、みんなさうしたものなのではないかと思ふと、我子の行末さへ、暗く、憂はしく考へられた。

そんなら子供が、女であつてくれたらよかつたかしら――さち子は微かに首を振つて否定した。暴虐な恥知らずの男性に虐げられる女となり、妻となる事はけがらはしく、なさけない事に思はれ、我子にはそんなおもひはさせられないと思つた。さち子は女といふものゝはかなさにつまされて、鼻がつまつて來た。

子供は母の乳が足りないので、はじめからミルクで育つた。かぼそい聲で飢を訴へるのをきくと、我身を削つてもやり度い衝動に襲はれるが、髮の毛の薄い、血の氣の足りない寢顏を見ると、

心弱く涙ぐむ。
間も無く準平の家にも男の子が生れた。たぶん此の二三日のうちたと豫期されてゐたが、その日迄とよは立働き、夫婦さしむかひで夕飯も食べた。主人がアパアトから歸らないので、準平は病院へ御隱居を乘せて行くか、屆物を持つて行くだけで、幾日かつゞいて我家で足を延ばしてゐる事が出來た。とよにとつては心強く、嬉しい事だつたが、準平は此の頃すつかりふさぎ込んで、口もろくろくきいてくれない。
準平は、さち子の早産の責任を感じて、申譯なさに飯もうまくなかつた。先に生れる筈だつた自分達の方が後になつたが、この儘無事に産が濟んでは、愈々申譯無いやうな氣持さへした。片輪者が生れるか、いつそ生れないのが一番いゝと思ふ事もあつた。
その晩もむつつりとおし默つて、いつ迄も新聞を讀んでゐる風の準平を殘して、とよは先に寢床に入つた。つめたく冴えた月光が、雨戸の外にひしひしと迫る氣配の、冬の夜だつた。
「あたし、なんだか變だ。生れるんぢやないかしら。」
突然とよが脅えた聲でいひ出した時は、もう陣痛がはじまつてゐた。準平はあわてゝ下駄をつつかけ、近所の母親に應援を頼み、その足で産婆を呼びに行つた。

歸つて來ると、格子をあける前に、もう赤ん坊の聲が聞え、
「男の子だよ、男の子だよ。」
と母親は念佛のやうに口にしてゐた。産婆の手をかりずに濟む安産だつた。
邸の人達には手數をかけたくないと思ひ、準平は知らせに行かなかつたが、忽ち知れて、かはるがはるのぞきに來た。
「まあ大きな赤ちやんだこと。御隱居さまも見度いとおつしやつてますよ。」
「おとよさん、嬉しいでしよ。準平さんそつくりだわ。」
産婦を喜ばせる愛想言葉の後では、きつと主人の子と比較して、丈夫さうだとか聲に力があるとか、いふのであつた。とよは安らかな微笑で答へ、嬉しさに飛上り度いやうだつた。
「奥さまもさぞかし御嬉しかつたらう。」
輕い競爭意識をもつて、我子と主人の子とを比べて見度くて堪らなかつた。
一太は、誰にも知られたくないと思つてゐたアパアトの樂みを、ふとした事から知らせてしまつたので、手品の種をみつけられたやうな興ざめた氣持になつたが、一方には、それがかへつて

大つぴらに、氣儘に振舞へるきつかけとなつたやうにも思はれた。熱も下り、咳も出なくなり、起きても差支ない體になつたが、その儘其處に、何時迄もくらしてゐる方がいゝやうにさへ考へられた。さつぱりした氣性の看護婦で、柄になく聲が美しく、玉乃とも氣が合つて、彼がうつらうつら寢てゐる枕もとで、古めかしい唱歌をうたふ感傷的な聲が、次第に高くなるのも忘れ、玉乃も誘はれて合唱してゐるやうな時、一太は病上りの氣の衰へか、何か悔恨を伴ふ思ひ出に耽つたり、恍惚とした心境をいつしよに味ふ事もあつた。

子供の生れた事を知らせて來た時は、流石に心が動いたが、未だ本當でない自分の體をいひわけにして、聞捨てしまつた。行つたつて爲方が無いと、自分にいひきかせた。何不自由なく、人手の多い、きちんとした我家よりも、狹い一室に三人不秩序に、亂雜に、不足勝にくらしてゐる今の方が、人生の樂みが深いやうに思ふのだつた。

「ねえ、はじめてパパになつた氣持どんな。嬉しくてたまんないでしよ。」

「子供の顏でも見たら可愛くなるかもしれないが、たゞ生れたと聞いたゞけでは、嬉しいも何もありやあしないさ。」

「嘘、嘘つき。嬉しいつておつしやい。」

京乃はたはむれて、本音をはかせようと迫つた。
身分があり、金があるか、それでなければ働のある男なら、妾宅を構へる位はあたりまへと思つてゐる御隱居は、我子がアパアトとやらで病氣になつてゐる事こそ心配でたまらなかつたが、他所に女のある事なぞは、少しも不思議に思はなかつた。一度見舞旁々樣子を見に行つて見度いと思ふのを、はしたないと自分でおさへつけてゐたが、たうとう我慢が出來なくなつて、病院へ孫の顏を見に行つた歸りに、自動車を廻させた。準平に案內され、危ない足つきで暗い階段を上つてゆくと、その室の中から、歌をうたふ女の聲がもれて來た。
一太は丹前を着て、床の上で雜誌を見てゐた。想像よりも一段と粗末な室內の模樣にも驚いたが、粹な女を空想してゐた御隱居の眼に、少しも美しくうつらない女を見出したのは意外だつた。
「どうも一太がとんだ御厄介をかけまして。」
御隱居は相手をてれさせずに、口をきかせる丈の世の中は渡つてゐた。その上老巧に、二人の女のゐる前で、一日も早く邸へ歸らなければいけないと、息子を說得した。
「今度初孫が出來ましてね、それが月足らずでひよわいものですから、私も心配で心配で……」
ほんとに心配で堪らない樣子を表情に見せて、二人の女の同感を得た。

結局一太もあらがへず、歸邸の日を約束して、母親に歸つて貰つた。御隱居は歸り際に、看護婦に心附をし、廊下迄送つて出た玉乃にも、土產がはりだといつて、紙に包んだ金子を與へた。

子供はひよわいながらも、一日々々と顏つきもとゝのひ、誰に似てゐる彼に似てゐると、きまりきつたお世辭が、寢臺を取卷いた。

「矢張お父さま似でゐらつしやいますわ。」

さういはれると、さち子は愛想笑をして答へながら、心からは樂めないものがあつた。病氣は、多分もうなほつたのであらうが、未だに我子の顏を見にも來ず、あのアパアトの一室で、あのお凸の女とくらしてゐるといふ事が、いやらしく、不潔に思はれた。產後の衰へた體の儘、いつ迄も囘復したくない、囘復して、又夫婦の生活にかへり、いつか第二の子供でもうまなくてはならないのか――良人の肉體を嫌忌するおもひが、夜具のやうに重たく胸を壓した。

「一太もすつかりよくなつて、明日は邸へ歸りますよ。さうしたら直ぐにこちらへも來ますからね。あれもさぞかし赤ちやんの顏が見たいでせうよ。」

御隱居の口からさうきかされても、ほんとに我子を見度いと思つてゐる良人を、過去の良人の

中から、實感をもつて考へる事は出來なかつた。

約束通り、一太は病院へやつて來た。

「やあ、お手柄お手柄。」

多分に持ち惱んでゐるてれくささをまぎらす爲に、さち子の手に手を差出して握手を求めた。

「よかつたねえ、無事に濟んで。」

「あなたも御なほりになつて結構でしたわ。」

看護婦の見る眼も羞しく、握手に應じる事などは思ひも及ばなかつた。そればかりでなく、誰しも薄々かんづいてゐる、良人が自邸以外の場所で病氣になり、寢てゐたといふ事が、自分の恥辱に思はれて、さち子は逃るやうに手を引込めた。それでも夫婦は肩を並べ、赤坊の寢顔をのぞき込んだ。

「へえゝ、これが僕にいきうつしだといふのかい、さうですかしら、おやぢ些かをさまらないが。」

看護婦の方へ愛想よく話をむけた。

「皆さんさうおつしやつてゞすわ。」

「さうですかねえ、なんだか此の子、馬鹿にちひさいやうだが、これでいゝものかしら。」
「それは少々早く御生れになりましたからで、爲方が御座いませんわ。でも、ちひさく生んで大きく育てろとか申しますから、今に立派にして御目にかけますわ。」
看護婦を相手に、面白さうに話をしてゐる良人の態度が容々しく、その會話は遠方のものを、機械を通して聞くやうなたよりなさを含み、さち子は耳を覆ひたかつた。此の子はあたし一人のものだ　と心の中で叫びながら寢臺にのしかゝつて、柔かい赤坊の頰に頰擦りした。
さち子が退院して、子供ともども邸へ歸る日は、日あたりのいゝ丘の上の新關家は、家にも庭にも日光があふれ、冬らしい白い光が漲つてゐた。靜まりかへつた景色の中で、人々は朝からそはそはし、緊張して待構へてゐた。
とよは我子を抱きかゝへ、玄關廻の日だまりをうろうろしてゐた。主人の子と自分の子を比べて見度い欒みが、時々彼女をほゝ笑ませた。お迎ひに行つた準平が、たくみに自動車を操縦し、すうつと坂道を上つて來る、奥さまがお坊ちやまを抱いてお下りになるところへ、自分は耕太を抱いて御目にかける、お坊ちやまは月足らずだから、耕太よりもちひさい、弱いときいたが、どんなに違ふのだらう　とよは我子の滿足で胸がいつぱいになつた。幾度も頰擦りし、乳をふくま

せ、何もわからない赤坊にむかつて、言葉數多く話しかけた。
やがて、坂の下の門の外で、耳に馴染んでゐる警笛が聞え、なつかしい自動車は、深海の水の色の姿をあらはし、眞直に坂を上つて來た。その音をきゝつけて、邸の人々も玄關にかけ出して來た。用人も女中達も總出の中に、御隱居は一太を促し、人々をかき分けて出て來た。
自動車は大きく半圓を描いてとまつた。準平が素早く下りて開ける扉の中から、やつれたさち子があらはれ、つゞいて看護婦の白衣が光つて、その手の中にふかぶかとおくるみにくるまつた赤坊が、日光に目をしばしばさせながら出て來た。人々は待切れないで、取圍み、のぞきこみ、抱きとらうとする者もある。ざはざはした人の氣配に、不安を感じたのか、突然赤坊は顏をしかめたと思ふと、くすんくすん泣き出した。
「おゝよしよし、どうなさいました。いけませんねえ。」
看護婦は輕くゆすぶり、だまさうとしたが機嫌が惡く、細い聲を張上げて泣き止まない。一大事でも起つたやうにそれを取卷いたまゝ、御隱居と一太とさち子と、家の中へ消え、女中達は興ざめた顏を見合せたが、俄に忙しさを增す空氣にせき立てられ、あたふた後を追つてかけ込んだ。
とよは深々と眠り覺めない我子に頰擦りし、十分比べて見る暇のなかつた物足りなさはあつた

が、おとなしく眠つてゐる我子の方が立ちまさり、勝つたやうな氣持で、止度なく嬉しかつた。
「ねえ、坊ちやまとつてもちひさいぢやないの。あれぢやあ奥さま御心配だらうねえ。」
準平にも抱いてみろといふやうに、子供を押つけると準平はあたりに誰もゐないのだが、ゐるやうな羞しさを感じ、
「馬鹿、つまらない事をいふな。」
とたしなめた。坊ちやまのちひさいのは八月兒だからで、それは自分の不注意がもとなのだと、いひ度い心で不機嫌だつた。それでも母親の乳に滿腹し、日だまりの日にあたゝかく、赤い顔をしてすやすや眠る我子を見ると、こらへてもこらへてもこらへ切れない微笑が、肉體をゆすぶつて湧上つて來る。
彼はとよに意味もなく顎で合圖をし、自動車に飛乘ると、靜に車庫をめざして坂道を下りはじめた。とよは其の車に寄添ふやうに、後から追かけ、途中で幾度も我子に頰擦りしながら、我家へ急いだ。（昭和十年八月二十二日）

後記

本卷には、昭和二年作「順風」から、最後の小說、昭和十年八月作の「世繼」に至るまで、制作の年代順に計九篇を收錄した。「順風」の第一回は昭和二年一月號の「三田文學」誌上に掲載されたものであるから、起稿されたのは前年末、卽ち昭和元年の十二月である。從つてこの一卷は、長篇の「都塵」を除いては、昭和年代にはひつてから晩年までの、先生の全小說を網羅したもので、丁度四十歲から四十九歲までに當るわけである。

「順風」

昭和二年一月號「三田文學」(第二卷第一號)に「一」「二」「三」が第一回として發表され、以下八回に亙つて每月分載されて、同年八月號で完結した。當時私が同誌の編輯を擔當してゐた關係で、この作品と次ぎの「晝布」とが創作集「月光集」(昭和四年十一月五日大岡山書店刊行)に收められた際にも校正に當つたが、私は送假名その他に不遜にも改删を加へた記憶がある。今回の校訂に當つては、底本は前記「月光集」に採つたが、作者の書入ある掲載誌を原據として、能ふ限り嚴密に原形の再現につとめ、前述の誤りを是正した。

「畫布」

昭和三年三月號同四月號「三田文學」(第三卷第三號及び第四號)に前後二回に亙つて分載されたものである。創作集「月光集」に收めらる。校訂は「月光集」を底本とし、原稿を原據として掲載誌を參照した。

「遺產」

昭和五年一月號「三田文學」(第五卷第一號)に發表。創作集「遺產」(昭和十一年十二月二十五日中央公論社發行)に收錄。校訂は前記「遺產」を底本とし、原稿を原據として、且つ作者の補訂ある掲載誌を參照した。

「夏期實習」

昭和五年十一月號「中央公論」(第四十五年第十一號)に發表。創作集「遺產」に收めらる。校訂は前記「遺產」を底本とし、掲載誌を原據とした。

「銀座復興」

昭和六年三月十五日から同年四月十六日まで、三十二回に亙つて「都新聞」の朝刊紙上に掲載されたもので、このうち、四月四日は新聞紙の休刊で一回休んでゐる。創作集「遺產」に收めらる。紙上掲載當時の挿繪は、岡田三郎助氏の推輓により作者の知遇を得た富澤有爲男氏が當時は佛蘭西歸りの新進畫家として擔當し、そのため、同年三月十一日同紙上に掲載された豫告の作者の言葉「いひわけ」の中でも、極力この畫家の紹介につとめてゐられる。この「いひわけ」は、直接作品の前書といふよりはむしろ獨立した文章と見做され得るた

め、編纂實行委員間で相談の結果、「貝殼追放三」に改めて採錄することにした。
本篇の校訂は「遺產」を底本とし、掲載紙を原據とした。
「停年」
昭和六年十月號「三田文學」(第六卷第十號)に發表。「遺產」に收錄。校訂は「遺產」を底本とし、原稿を原據として、掲載誌を參照した。
「二代目」
昭和七年十一月號「中央公論」(第四十七年第十二號臨時特大號)に發表。「遺產」に收錄。校訂は「遺產」を底本とし、作者の補正ある掲載誌を原據とした。
「樹齡」
昭和九年十月號「中央公論」(第四十九年十一號)に發表。「遺產」の中に收めらる。
この前年昭和八年に作品がないのは、前述の長篇「都塵」(「倫敦の宿」第二部として全集六卷に收錄)が丁度昭和七年一月から昭和八年四月まで「三田文學」に連載されてゐるのと、この頃から勤務先の要職がいよいよ多忙を極められたためと解される。(昭和八年二月、明治生命保險株式會社取締役兼總務主事となる。)しかし、この事情が一方にまた「出張日記」(全集十二卷)の一卷を殘される機緣ともなつたわけである。
本篇の校訂は、底本を「遺產」に採り、作者の補正ある掲載誌を原據とした。

「世繼」

昭和十年十一月號「中央公論」(第五十年十一號續五十周年記念號)に發表。「遺産」に收錄さる。

「貝殼追放」の諸作は別として、この作品を最後に、先生は筐底深く幾多の創作メモを殘されたまゝ、つひに創作の筆を執られる機會を失つてしまはれた。この年の二月、常務取締役となつて社務の第一線に立たれてからは、殆んど旅行に旅行を重ねて席の暖まる暇を持たれなかつたのである。このことは、「出張日記」を徵すれば自ら明かであらう。創作メモを見るにつけ、われ等の痛恨に堪へざるところである。

本篇の校訂は、底本を「遺産」に採り、作者の補正ある掲載誌を原據とした。

なほ本卷の校合校正に當つては、前述の如く、只管原形の忠實な再現を念として、措辭、送假名等の不統一もすべてその儘にし、濫りに加筆することは努めて避けて、止むを得ざる場合に限りルビを活用して「原」を附す代りとした。「過ぎる」「過る」の如き、「直に」「直ぐに」「直ちに」の如きはこの例である。

本卷の校合には、荻野忠治郎氏の助力を得た。(平松幹夫)

東京府規格外許可　□資紙規第一五四號

昭和十六年八月　五　日印刷
昭和十六年八月十一日發行

水上瀧太郎全集　七卷

著者　阿部章藏
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行者　岩波茂雄
東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷者　白井赫太郎

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波書店
電話九段(33)一八七番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

精興社印刷　板倉製本